
ぽーかーふえいす

きら☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぽーかーふえいす

【Nコード】

N0076B

【作者名】

きら☆

【あらすじ】

人間の限界を超えた特殊な能力『楽器という名の物ならなんでも操れる能力』を持つ少年がいた。高校生になった少年は波瀾万丈生活！ちよびつと恋愛コメディー！

ブログ 葉月編（前書き）

色々修正しました。内容は一切変わっていませんので安心してくだ
さい。

修正点は

“ ” ↓ 『 or 』 に変えました。

・ ・ ・ ↓ ∴ （三点リーダー）に変えました。

みなさんに読みやすく改行の仕方を変えました。
誤字を修正しました。

プロローグ 葉月編

昔の話だ。俺が幼稚園だった頃、ある女の子がイジメをくらっていた。イジメの方法は至ってシンプル。仲間外れや無視など。イジメの理由は「だってアイツ生意気なんだもん」「かわいければなんでもいいってわけじゃない」など、どこにでもありそうな理由だった。その女の子は確かに俺が見る限りでもかなり生意気だった。だけどいいところだってあるはずだ。

あの頃の俺にはイジメを止めさせる勇気がなかった。止めさせられないならばせめて：女の子に元気を出して欲しかった。女の子はいつも一人でタイヤの遊具の場所に佇んでいた。他の遊具の場所是他の子が使っており、その女の子にとって近寄り難いところなのだろう。その点タイヤの遊具は人気が無く人があることは滅多ない。それに女の子がタイヤの遊具を使うようになってから、ただでさえ人気がなかったタイヤの遊具に誰も来なくなった。それからタイヤの遊具の場所は女の子のテリトリーになった。

「なによ。アンタ」

当時の俺はいじめられていた女の子と仲が良いわけでもなく、むしろ初対面に近かった。女の子の名字も名前もわからなかった。

「ねえ、僕と遊ぼうよ」

自分でもなんでこんなことをしたのか不思議だ。

女の子はクスクス笑い俺を見た。女の子は笑っていたが目は笑ってなかった。

「アタシと一緒にいたらアンタまでイジメられるわよ」

どうせアンタも裏切るんでしょ。女の子の心の声が聞こえたような気がした。

当時の俺は友だちがいないわけでもなく、幼稚園の中でもなかなかの高い地位が約束されていた。しかしそんなことはどうでもよかった。

「それでもいいよ。遊ぼうよ」

俺の答は女の子にとって予想外だったらしく、呆気をとられている。

「しょ、しょうがないわね。特別よ」

女の子と遊ぶようになってから一週間もしない内に俺にもイジメが襲ってきた。今まで遊んでいた友達からも無視されるようになっていた。予想通りと言えば予想通りなので驚きはしなかった。

「：ごめん。アタシのせいで：」

ある日、女の子は泣きそうな顔で謝ってきた。

「なんで謝るの？」

「だってアタシのせいで：！」

女の子はとうとう泣き出してしまった。

「僕は全然後悔してないよ。だから笑ってよ」

「でも：」

「しょうがないなー。特別だよ」

俺はポケットから『あるもの』を取り出した。

「：なにそれ？」

「魔法のアイテムだよ」

そう、それはハーモニカ。なんの変哲もないハーモニカ。俺はハーモニカを口に付けて演奏し始めた。どんな楽器でも俺の手にかかれば『世界一』上手く演奏できる。ハーモニカから和らげなメロディを流れる。女の子の顔に少しずつ笑顔が表れてきた。

「やっと笑ってくれたね」

「：すごい良かった」

女の子はさっきまで泣いてたとは思えないほど満面の笑みだった。俺は言った

「『音楽は人を救う魔法だよ』だよ」と。

次の日。女の子はハーモニカを持ってきていた。

「えへへ…お、教えてほしいなー。なんちゃって…」

これはハニカミか？ と突っ込みたくなるような仕草を女の子はした。今の俺なら確実に言ってたな。

「うん。いいよ」

教えることに深い意味などまったくなくただ単に頼まれたという理由からハーモニカを教えて上げた。この判断が俺の運命が大きく変わることなるなんてこの時は思いもしなかった。

女の子がハーモニカを持つようになってから一ヶ月ほどが過ぎた。女の子は飲み込みが物凄く速く、ハーモニカを自由自在に使い熟していた。

「むう。仁井哉は上手過ぎるのよ」

ある日、俺が演奏している時に女の子が言ってきた。

「葉月だって充分上手いよ。それに僕は音楽の申し子だから…しよ
うがないんだよ…」

たった今思い出したが女の子の名前は『葉月』だ。名字は…思い
出せない。

「『もうしご』ってなによー？」

「なんだろうね」

葉月がハーモニカを吹くようになってから少しずつイジメが無くなっていた。それから一年が過ぎたころにはイジメの面影すら無くなっており、今では葉月は人気者だ。ハーモニカを演奏できる美少女。聞いただけで人気者の資格は充分にある。葉月のイジメが無くなったことで俺に対するイジメも自然消滅したみたいだ。めでたしめでたし…のはずなのだが、イジメが無くなったというのにもか
かわらず葉月は不機嫌そうな顔をしていた。

「最近アンタと話す時間が短くなってるような気がするわ」

それもそうだ。最近ではいつも葉月の周りには必ず誰かがいる。

葉月はその取り巻きを追い払ってわざわざ俺のところまで来ている。

「葉月は人気者だからしょうがないよ」

「都合がいい人ばかりよね。あんな奴ら友達でもなんでもないわ。一時はやりたい放題やってたのに、今更仲良くしようって？ はい、そうですか…ってアタシはできないわ。最初からアタシを見てくれてたのは仁井哉だけ。だから友達なんて仁井哉だけでいいわ」

「そんなのダメだよ」

「なに？ アイツらのこと許せていうの？ アンタだってアイツらにイジメられてたのよ！　なんでそんななにも無かったように振る舞えるの！？」

葉月の口調が強くなってきた。俺はそれに怯むことなく言い返した。

「憎んだってその先はなにもないよ。僕は仲間を信じたいと思う」

「…信じたってまた裏切られるかも知れないのよ。そんなのイヤよ…」

葉月の目に涙が浮かぶ。俺は黙ってハーモニカを演奏し始めた。

当時の俺の中で一番自信があった曲だ。そして俺はこの時ほど真面目に全力で演奏したことはないだろう。心の底から込み上げてくるものを全てハーモニカに込めた。葉月にはどう聞こえているかはわからないが、これは俺から送る…最後になるかも知れない『メッセーじ』のつもりだった。

「それでも…僕はみんなを人間を信じたい」

葉月は泣きっ面を無理矢理振り払い、笑ってみせた。俺も精一杯の笑顔をみせた。

「まったく…アンタには敵わないわ」

それから数日が過ぎた。葉月は俺と多く話をするものの他の人たちとも話してたり、楽しそうに遊んでたりしていた。それを見ていた俺は安心した。これでなにも心配することなく『消えられる』と。「アタシたちもそろそろ小学生だわね」

いつも通り俺は葉月とたわいない話をしていた。そんな日も…今日までだ…

「ねえ、葉月…」

「なーに？」

俺は一呼吸置いた。

「僕は…引越すんだ…」

葉月は黙り込んでしまった。気まずい空気に耐えられず、俺は北風が葉っぱを舞い上げている光景を見ていた。俺もあの葉っぱと一緒に飛んで行きたかった。

「あははっ、おもしろい冗談だわね」

葉月は気まずい空気を吹き飛ばすように明るく言った。

「冗談で…こんなこと言わないよ」

再び重い空気が流れる。

「本当なんだ…。遠いところ…かな？」

葉月はいつになく女の子らしく、葉月らしからぬ喋り方だった。

「…うん。すごく遠いんだ。もう会えないかも知れない」

「いつ…いなくなっちゃうの…かな？」

「今日…幼稚園が終わったあとに、すぐに出発するって…」

「ちよっと！ 話が急すぎるわよ！ そういうことはもっと早く話しなさいよ！」

葉月は元の喋り方に戻った。おかげで少し気が楽になった。

「葉月と始めて話したときにはもう決まっていたんだよ。だから話すタイミングがわからなくてさ…ごめん」

「今日でお別れ…ね。あはは…急展開すぎてなにがなんだかわからないや」

「本当に…ごめん」

それから葉月は一言も話さなくなり、あっという間に幼稚園の終わりの時間が迫ってきた。俺は男友達と粘土をいじって楽しんでた。ここでの最後の時間が粘土工作で終わるのかと思っていたその時、葉月が近づいてきた。

「付いてきて」

俺はなにも言わずに葉月に付いていった。外に出てタイヤの遊具のところまで行くと葉月は立ち止まった。

「アタシが仁井哉と始めて話した時もここだったよね」

「そうだね」

葉月はタイヤに座り込みなにやら手招きをしている。

「と、隣いいわよ」

言われた通りに葉月の隣に座った。一つのタイヤに二人は中々きついものだった。

「もう行っちゃうのよね……」

「うん」

「じゃあさ、一つだけお願いしていいかな？」

「なんでも聞くよ」

葉月はポケットからハーモニカを取り出し俺に差し出した。

「アタシが今こうしていられるのは仁井哉が『これ』を教えてくれたから。正直に言うとも最初は全然仁井哉のことなんて信じてなかった。けどね仁井哉が『これ』を聴かしてくれてからはアタシは仁井哉に心を許すようになった……本当に心から……。上手く言えないけど、こう：仁井哉の演奏はなにか感じるものがあったの。『アタシも仁井哉みたいにな手くなりたい』って：ハーモニカを買って仁井哉に追いつこうってね。けど気付いたの、このままじゃ一生仁井哉に勝てない……当たり前だよ。アタシは自分のことしか考えてないのに、仁井哉はみんなのことを考えている。技術で負けているのに気持ちでも負けているなんてね……。実際このことに気付いたのは昨日仁井哉が聴かしてくれた時なんだけどね。しっかりアタシには届いたわよ『メッセージ』が。『仁井哉みたいに上手くなる』それじゃあダメなんだわ。アタシも『仁井哉みたいに人の幸せを願って演奏』するわ。次に会えるのなんて何年後になるかはわからない……だけどもつか会いたい。アタシは仁井哉に会いたい！ だから……次会う時までハーモニカを交換……していいかな？」

「…うん」

俺もハーモニカを取り出した。

「失くしたら殺すわよ」

葉月はブラツクなジョークをマジ顔で言ってきた。

「葉月も失くさないでね」

葉月は右手でハーモニカを差し出してた。俺も右手でハーモニカを差し出し、お互い左手で相手のハーモニカを掴んだ。俺と葉月は目を合わせた。

「いくわよ。いっせーのー…：せ！」

お互いに右手を放した。自分の左手には葉月のハーモニカがある。葉月の左手には俺のハーモニカがある。

「大切にしてよね。アタシも大切にするから」

葉月は胸に俺の…俺のだったハーモニカを押し付けた。

「うん」

正門の近くで先生が手を振っているのが見えた。

「仁井哉くーん。葉月ちゃん。お迎えのバスが来てるわよー」

「葉月。行こうよ」

葉月は俺の手を握ってきた。俺もそれを握り返した。

「そうね…」

葉月が先にバスに乗り込んだ。それに続き乗り込もうとすると先生がドアの前に立ち塞がった。先生はしゃがみ込み、俺の耳元で呟いてきた。

「ふふっ。彼女とのお別れはすみませんでした？」

なにを勘違いしているんだこの人は。

「葉月は…そんなんじゃないやありません」

「先生はね、葉月ちゃんがイジメられてたのを救えなかったの。けど仁井哉くんはダメな先生の代わりに葉月ちゃんを救ってくれた。先生を代表して言うね。ありがとう」

「そんな…僕は…ただ誰かが悲しんでいるのなんて見たくないんです」

「うふふっ。仁井哉くん、将来絶対かつこよくなるよ。仁井哉くんがあと20年ぐらい早く産まれてば私が貰ったのにい。葉月ちゃんが羨ましいよ」

「…からかわないで下さい。早くしないとみんなに文句言われますよ」

「赤くなっちゃってかあわいいー」

先生は俺のおでこを人差し指でツンっとつつつき、にっこり笑った。

「今日の仁井哉くんのバスの席は特別に葉月ちゃんの隣です」

「え？」

俺は状況を理解できないまま、先生にほらほらと背中を押された。バスの中に入った瞬間に葉月が目に入った。それもそうだ、葉月は運転手の後ろの席に座っていたからだ。先生が後ろで急かしてくるので、大人しく葉月の隣に座った。先生もドア側の先頭席に座った。「まったく…先生もお節介よね。アタシが仁井哉と付き合ってるでも思っているのかしら？」

葉月は第一声でズバリ当てやがった。しかもわざと先生に聞こえるように言っているとしたか考えられないほど、はつきり言った。俺はちらっと先生を見ると、先生は苦笑いしていた。

「まあ…仁井哉の隣にしてくれて感謝はしてるけどね…」

今度は俺に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で言ってきた。今の俺なら確実にこう言ってるだろう。

『なに？ お前ツンデレキャラか？』

当時の俺はそんな用語など知らず（言葉自体存在しているか怪しい）なおかつ純粹だったので、たとえ知っていたとしても絶対言わないだろう。葉月は俺の手の甲に手を置いてきた。

「ねえ、仁井哉…なんでもいいからハーモニカ…聴かして…」

「わかった…」

さっきまで葉月の物だった、ハーモニカをポケットから取り出し、口に付けた。音をだすと、どこからか静かに！ という声が聞こえ

た。家に着くまでの数分間、なぜかバス内の誰一人物音立てずに聴いていた。バスはあっという間に家の前に着き、葉月とのお別れの時間がきた。

「じゃあね…葉月」

「…さよなら」

葉月の視線を感じながら俺はバスから降りた。先生も見送りとして俺と一緒にバスを降りた。見送りと言っても俺が家の中に入るまでのことだ。

「仁井哉くん。気を付けてね」

「先生…これを葉月に渡しといてください」

俺は先生に『なにか』を渡した。なにを渡したかは記憶にはない…が確かになにかを渡した。

「いいけど…直接渡さなくていいの？」

「いいんです。お願いします」

先生は俺の頭をなでてきた。

「ふふ。あっちでもがんばってね」

「…はい。さようなら」

「元気でね」

先生はバスに戻っていった。バスがブルルと音を立てて動き出す。はつきりとは見えなかったが、葉月は泣いていたように見えた。

プロローグ 葉月編（後書き）

初投稿です。

少しでもこの小説が「おもしろいなー」って思ってくれるだけで嬉しいです。

ご意見などがありましたらどうぞご自由に。
ということでは！ よろしくお願いします。

ブログ2 未梨編（前書き）

修正しました。10／13

一部の「∴」が「・・・」だったので「∴」にしました。

プロローグ2 未梨編

あなたの特技はなんですか？ 人生一度は聞かれると思われる台詞だ。俺が初めてそれを聞かれた：ではなく、書いたのは小学校一年生に配られた自己紹介カードだった。

『あなたの特技はなんですか？』

EX 俺はなんて書いたでしょう？

A 『人助け』

次にそれを聞かれた改め書いたのは中学校一年生で配られた自己紹介カードだ。

EX 俺は（以下略）

A 『空中に飛んでいる蚊を素手で捕まえられる』

そして今、またしても俺は特技について書かなくてはならない。しかし今度はふざけていられない。なぜならば今回は自己紹介カードなどというレベルではない。貴重な昼休みを使っているというところでだけでレベルが3桁ほど違う。俺が今書いている物は高校の志望理由書である。特技は人助けです、なんて書いてみる。面接で具体的な内容聞かれても俺はなんにも答えられないぞ。それはまだしも、

特技は空中で飛んでいる蚊を捕まえます：これなど問題外だ。たとえ成績が中学トップであろうと門前払いだろう。ましてや成績が中の下俺なんて殺されてもおかしくない。

「なあ、俺の特技ってなんだと思う？」

前の席に座っているクラスメイト、荒木に聞いてみた。

「ん？ お前の特技？ 腕立て伏せ？」

「俺はお前の前で一度たりとも腕立て伏せをした覚えはない」

「冗談だ冗談だ。そう目頭たてるな」

「……」

「おい。目頭のそこ突っ込めよ。マジで俺が間違えたみたいだろう」
言い直して良かったな。俺の評価が落ちなくてすんだぞ。

「そんなお前のボケはどうでもいい。真面目に答えろ」

「まあまあ。それよりお前どこの高校だよ？」

「緑山高校だ」

緑山、緑山：と荒木は呟いている。

「あれ：。緑山ってかなりレベル高いよな？」

そうなのだ。俺が行こうとしている高校はかなりレベルが高いのだ。何故そこを選んだという：。近いからだ。ぶっちゃけ高校選びの基準なんて家からの距離だろ。しかし志望理由書にはそんな適当なことは書けないので、そこはうまく誤魔化してある。

「高いな」

「ふーん。がんばってるんだな。まあがんばれや」

「応援の言葉より、俺の特技を教えてほしい」

「俺に聞くよりあそこにいる彼女さんに聞けよ。きっといい答えが返ってくるぜ」

荒木は指を窓際最高方の席で静かに読書をしている女の子に向けた。

「あのなあ：アイツは……」

荒木は俺の肩をポンポンと叩いた。

「言わなくてもわかってる：付き合ってるんだろう？ そうだよな」

？　そうなのか？　この野郎！」

なぜそうなる。なぜ少しキレ気味。なぜ顔を近づける。

「断じて違う」

そして顔を離せ。気色悪い。

「嘘つけえ！　俺は知ってるんだ！　お前が彼女と…椿さんといつも一緒に登校してきてるのを！　この幸せ者！」

荒木は微妙に半泣き状態だ。

「その情報はみんな知ってるって」

「それだけじゃねえよお！　帰りだって二人仲良くラヴラヴなオーラだしながら帰っているのを！」

そんな危ないオーラなど出さない。ていうか出せない。出したくない。

「単に家が近いだけだ」

「くうー！　羨ましいね！　家の近くにあんな美少女が居て…それでそれでいつも一緒に登下校…それでそれで…」

荒木は放送禁止用語をペラペラと喋りだした。

「勝手な妄想をするな。大体あんな無口な女のどこがいいんだ？」

「…こういう奴いるよな。どこがいいって！　全部だよ！　全部！

顔だけでもランクAAAだ！　それに最近つけた眼鏡！　あれい

いよなあ。俺さあ…眼鏡っ娘って…まじで好きなんだよお。なんか

萌えるよなあ」

いきなりなに危ないこと語りだしているんだ。バカだ。こいつは救いようのないバカだ。

「俺は…椿さんが…お前以外に…まともに話してるのを…見たことが…ない…」

荒木は何かの歌のようで歌じゃない、わけのわからない呪文を唱えるように言いながら、ゆっくりと教室を出て行った。…結局まともな答は返ってきてないな。と思い悩んだところ、やはりアイツしか聞く奴がいなかった。俺は窓際最後方席に一人佇んでいる女の子のところに行き、その前の席に座った。

「なあ、未梨」

この根暗美少女の名前は「椿 未梨」。確かに顔だけならいいかも知れないが、性格はいいとは言えん。一番の問題はコイツの家柄だ。詳しくはまた後で話そう。

未梨は本を閉じ、こちらを見てきた。

「なに」

なにひとつ声に感情がこもっていない。こんな無感情少女のどこがいいのか俺に教えてくれ。荒木。それにコイツと関わるということとは命懸けだぞ。まじで。

「俺の特技ってなんだと思う？」

未梨に初めて出会ったのは十年前。こっちに引っ越してからだ。

俺はこっちに引っ越してきてからは毎日が退屈だった。なぜならハーモニカが吹けなかったからだ。小学校にハーモニカを持っていたときのこと、先生に没収されかけた。理由は『そういう決まりなの』だった。くそ喰らえだ。

俺の家の周辺は住宅街、目の前には高級マンションまである。なので家でハーモニカを吹くとオフクロに近所迷惑だから辞めろと言われてた。

最終手段は公園だった。しかし公園までは歩いて1時間というかなりの距離があった。いや、距離自体はそこまでないのだろうが、公園がある場所は山であり、家からの道のりは7割ほど坂道である。そんな立地条件の公園でも人はかなりいるものだ。なぜならその公園から見える景色は俺の住んでいる街を見渡せた。俺はその公園に行きハーモニカを演奏していた。最初は子どもよりも子どもと一緒に来ているオバさんに人気があった。「小さいのにすごいわね」

「ウチの息子にもなにか楽器やらせようかしら？」　なーんて言っていたのは最初だけ、しばらくするとオバさんの態度は180度変わっていた。「あの子ったらいつももうるさいわね」「いい加減にしてくれないかしら」わざと俺に聞こえるような声で話していた。なんともわかりやすい嫌がらせだ。それだけならまだしも公園で遊んでいる子どもたちは俺にちょっかい出してくるようになってきた。最終的にはハーモニカを吹くと石が飛んでくるようにまでなった。流石に石が飛んでくる中でハーモニカをやるほど俺はバカではない。それならみんながいない時間帯に行けばいい。俺はそれから毎日学校が終わったあとに公園に向かい、人がいない時間帯を探した。

月×、火×、水×、木×、金△、土×、日×

毎週金曜日。いつも公園で遊んでいる主力メンバーがいない。飽くまで俺の予想だが恐らく主力メンバーのリーダー格が毎週金曜になにか用事があり、自然に他のメンバーも集まらなくなったのだろう。それでもちらほらと数人はいた。しかしそいつらも5時過ぎにはいなくなる。親が厳しいのだろう。ウチは放置家庭だから行き先さえ伝えて警察に捕まらない程度なら何時になってもいいと言われる。なので毎週金曜日の5時以降は俺の独壇場だ・・・と思っていたが一人だけイレギュラーの存在がいた。その人は女の子で歳は・・・恐らく俺と同じ年だろう。髪は長く、ノースリーブのワンピースを着ていた。それが未梨だった。

未梨は毎週金曜、みんなが消えたあとにやってくる。その女の子はいつもタイヤの遊具の場所に座りながら本を読んでいた。そして今日もタイヤの場所で一人寂しく（そういう風に見えた）佇んでいた。

一人ぐらい平気だろうと思いつつも、タイヤから大分離れたベンチに座りで、ハーモニカを吹き始めた。音を出してみても俺は驚いた。誰もいないだけあって音の響きがハンパなく大きかった。その音に

驚いたのかどうかはわからないが、未梨は読んでいた本を閉じてこちらをじーっと見ている。未梨はタイヤから立ち上がり長い髪をなびかせながらこちらに向かってきた。未梨は無表情なのでなにを考えているかわからなかった。

「聴かして」

かなり小さい声だったがはっきり聞こえた。聴かしてって…

「吹いてもいいの？」

未梨は黙って頷き、俺の隣に座った。女の子はまるでライオンが獲物を狙いを定めているようにじーっとこちらを見ている。そこまで見られると緊張するものが有ったが、俺は気にしないことにした。

「じゃ、吹くね」

こうしてハーモニカを演奏するのは、こちらに来てから初めてだった。やはり音がかなり響く…がその分いつもより上手く出来ているような気がする。まあそれは気のせいだろ。俺はいつでもどこでも同じようにしか演奏できないからな。

一通り演奏すると女の子はパチパチと小さく拍手してくれた。

「じょうず」

今思うと、この時演奏した曲は偶然にも初めて葉月に聞かした曲と同じだった。これを運命というには少し押しが足りない。

「ありがと…」

「もっと聴かして」

この時、初めて未梨を不思議な女の子だと思った。アンコールをしている割りには顔は無表情、発する声は感情が含まれてなく全部棒読みだ。しかし未梨の瞳は真っ直ぐこちらを見ている。聴きたいと思う気持ちは本当っばかった。アンコールに答えないわけにはいかない。俺はハーモニカに口を付けた。

どのぐらい吹いただろうか…？ あれからアンコール責めで、もうぶっ通しで2時間は過ぎたと思う。ていうか過ぎてた。公園にあ

る大時計を見たら7時過ぎだ。もう…酸欠状態だ…。

「もう一回」

既に公園は闇に包まれていた。外灯の光が無ければなんにも見えないだろう。

「ごめん…ちょっと…休憩させて…」

「うん」

未梨はまだこちらをじーっと見ていた。俺を見たってなにもでないぞ。それにしても…ここまで熱心に聴いてくれる人は初めてだ。

「聴いてくれるのは嬉しいけど、家の人とか心配してるかもよ？」

「平気」

平気と言うんだから平気なんだろう。それ以上は無理に聞くものじゃない。しかしこの頃の俺はおかまいなしだった。

「ここら辺に住んでるの？」

未梨は首を右、左とゆっくり動かしした。

「家、遠い」

「わざわざここじゃなくても、もっと近い公園とかないの？」

「ない」

「毎週金曜の5時過ぎぐらいに来ているよね？ 誰もいないのに…なにしにきてるの？」

「読書」

「読書なら家でできると思うけど、ここじゃないとダメなの？」

「ここ静か、景色、綺麗」

喋り方がまるでなにかの詩みたいだ。

「僕のハーモニカはうるさいけど…」

「私、好き」

ハーモニカって、ちゃんと主語を言わないと変な奴は勘違いするな。

大時計を見ると8時を過ぎていた。お腹も空いたことだし帰るところにした。

「ごめん…そろそろ僕は帰るね」

未梨は俺をじーっと見ることをやめ、閉じていた本を開け読み始めた。

「さよなら」

俺はベンチから立ち上がり、帰ろうと公園を出ようとしたが…未梨のことが心配になり再びベンチに戻った。なぜ心配になったって？ さあ？ 当時の俺に聞いてみないとわからないな。夜の公園に幼女一人、ロリ○ンがいたら襲われるから？ しかしベンチには未梨の姿はなかった。帰ったのだろうと思い、俺も帰ろうとすると…『くしゅん』というなんともかわいらしい『くしゃみ？』が聞こえた。『くしゃみ？』が聞こえた方向に振り向くと、未梨は片手で鼻を摩り、タイヤに座りこみながら空いてるもう片方の手で本を読んでいた。近づくとも未梨は俺の足音に気付いたのか、一瞬こちらを見たがすぐに視線を本に戻した。俺は未梨が座っている隣のタイヤに腰を掛けた。

「何時までここにいろの？」

「適当」

未梨は視線を本から1ミリたりとも動かさなかつた答えた。

「なら…キミが帰るまで僕もいるよ。迷惑かな？」

「別に」

未梨が本を読んでいる間、俺はなにをしていたかというところ…ただ空を眺めていた。星空が綺麗だったけど正直つまらなかった記憶しかない。ハーモニカを吹こうとも考えたが、夜の8時過ぎにプーピー音を出すのは流石に近所迷惑だろう。静かなので、ページをめくる音がはっきりと聞こえた。ぺら…ぺら…と、大体30秒に1ページってところか？ 暇のあまりについ数えてしまった。

空を眺め、星の数を数えていると…未梨の顔がぬうっと現れた。

「私、帰宅。あなた、帰宅？」

未梨の長い髪が顔に当たってくすぐったかった。俺は空を見るのを止め、タイヤから立ち上がった。未梨は身長に合っていない大きい微妙なセンスのリュックサックをしょっていた。恐らく本やらないやら入ってるのだろう。

「うん。僕も帰るよ」

「そう」

未梨は出入り口とは逆の方向に歩き出した。その理由はすぐにはわかった。しばらくすると未梨は自転車に乗って戻ってきた。駐輪場に留めといたのを取りに行ってたのだ。俺の目の前で自転車から降りた。

「乗って」

未梨は自転車の後ろ側に指をさした。後ろに乗れということなんだろうが、座るところなどなかった。それ以前に自転車に俺を乗せたところでどうするとかいうのか。

「乗ってって…」

「あなたの言いたいことはわかる。平気。あなたの家、私の家、近い。平気。方向、一緒」

俺は頭をフル回転させて未梨の言葉を理解しようとした。

「キミの家と僕の家が近いの？」

5秒後に理解。

「うん」

誰かと勘違いしているんじゃないか？　なんていう考えはなかった…？　と言ったら嘘だ。

「誰かと勘違いしてない？」

「私の家、あなたの家の前にあるマンション」

確かに…家の前にはマンションがある。しかも超高級マンション。もし本当なら…お嬢様だ。

未梨は自転車に乗り、目でなにかを訴えてきた。乗れと言うことかな？

「どこに乗ればいいの？」

「そこ、足掛けて。私に捕まって」

今度はとてもわかりやすい説明だった。指示通りに自転車の後輪の出っ張り部分に足を掛け、未梨の肩に捕まったら：なんとも厳しい体勢になった。

「出発」

もし違う方向に行ったら降りればいいことだ。安心して行こう。

一度自転車が走りだせば厳しい体制も苦じゃなくなり、なかなかいいものだった。夜風がかなり気持ちよかったり、なんて言ったらって速い。見たことのある景色が凄いスピードで流れていく。ちなみに俺はこの時初めて自転車というものに乗った。なので今まで歩いて、公園まで来ていた自分がバカらしく思えていった。

「自転車って速いね！」

俺の問いに未梨が口を動かしたのは見えたが、風の音がうるさいためになにも聞こえなかった。自転車で走っている間は会話が成立しないという方程式が確立した：と思ったが、後に未梨以外の奴なら会話が成立することが発覚した。声が小さいんだよ。

「到着」

きつちりと俺の家の前で自転車を留めてくれた。俺は自転車から降り、未梨にお礼をした。

「ありがとう。おかげで速く家についたよ」

「別に」

「あのマンションに住んでるの？」

俺は家の前にある楽に20階は越えているマンションに指を指した。未梨はコクンと頷いた。はい、お嬢様確定。

「っていうことは：僕と学校一緒だね？ 良かったら来週から一緒に行かない？」

なんでこんなこと言ってしまったのだろうか。どうせ女の子が美少女で家も近いし：友達になってもまあ：悪いことはないだろう、とでも思ったのだろう。その考えが甘かった。時が戻るのであれば、この時の俺を殴って気絶させ、なんにもなかったことにしたいぐらいいだ。

「わかった。さよなら」

本当にわかっているのかと言いたくなるような表情で未梨は高級マンションに向かった。

未梨と一緒に学校に行く約束をしたのはいいものの、詳しい事柄をまったく決めずに分かれてしまったということに気付いたのは当日の朝である。どうしようと考えつつも、まあ大したことじゃないな、みたいなことも思ったりしてるけど、やっぱり気になるみたいな気持ちだった。そうだ！ 迷うことはない。マンションに直接行けばいいんだ、けどああいう高級マンションは入るのだけでカードとが必要そうだなあ…。結局もやもやした気持ちのまま玄関を開けた。開けてビックリ：はしなかったが、そこには未梨がいた。未梨は昨日と同じような本を読んでいた。

「：おはよう」

未梨のファッションは昨日と違ってラフな格好だった。大人が着るようなキャミソールにショートパンツ。そこまではいいんだがリュックサックは昨日と同じ、身長に合っていない大きいリュックサックだった。正直似合っていないぞ。

「：あ」

まるで、たった今俺の存在に気付いたような反応だった。

「じゃ、行こうか」

俺たちの出会いはこんな感じに始まった。
神よ。いまからでも遅くはない。時間を巻き戻してくれ。と毎日
祈る俺がいた。

十年経った今も未梨は相変わらず無口で根暗な奴だ。そして、今
こうして無事に生活できている俺は意外とすごいかもしれない。
そして今、俺は未梨が俺の特技について答えてくれるのを待ってい
た。

「ハーモニカ」

未梨は1分後ぐらいに答えてくれた。

「ハーモニカ：ね。わかった。ありがとな」

俺は自分の席にスタスタ戻り、志望理由書にミミズ文字でサツと
特技を書いた。

特技 腕立て伏せ、と

ブログ2 未梨編（後書き）

今回はちょっと縦書き用っぽく書いてみました。良かったら縦書きで見てみてください。

1―1 ツインテール少女（前書き）

ちよつと修正。11／05

「1―2」から「一年二組」

「我が高」から「我が校」

1-1 ツインターール少女

冬の名残りも消え、春がやってきた。毎朝布団から出るのが辛い季節とはおさらばだ。といいつつも未だ布団から出れない俺である。一分一秒でも、この暖かい空間に留まっていたい。

もうちょーっと寝ていたいところだがそうもいかない。俺は起きなければならぬ。なぜならば今日は俺の高校デビューの日だからである……

人間は死ぬ気になればできないことはないと言うが、本当にその通りだと思う。俺は無事に第一志望の緑山高校に入学でき、晴れて高校生になろうとしてた……が、俺は一つの悩みを抱えこんでいた。それは……俺が選んだ高校に『アイツ』がいた。

合格発表の日、俺は期待と不安を胸に高校へ行き、掲示板に俺の指定番号があることを確認して、さあ帰ろう！　というときに『アイツ』と出会った。

俺は背後から誰かに背中をトントンと叩かれた。後ろを振り向けば、合格の喜びを分かち合いたいが知り合いがいないという人がいるに違いない。そしてそれが男だったら「お前も一人？　まじ？　一人？　じゃあこの喜びを分かち合おうじゃないか」という展開が待っているに違いない。そんなムサイ展開はお断りだ。しかし、これがもし女の子だったら振り向かないわけにはいかない。「あ……お一人ですか？　そうなんですか。良かったら合格祝いにお茶でもどうですか？」　っていうのは無理があるが、そんな展開を俺は希望する。

そして、後者の展開を期待しながら……後ろに振り向いた。

「……………」

そこには黒いストレートロングヘアーで、膝まで届く長いコートにマフラー、紺色のボトムスをうまく身に着けている、そしてなんともかわいいう赤い縁の眼鏡をつけた……………未梨がいた。

今の気分を野球に例えたと、9回裏2アウト、10点の点差でこちらの優勢、ノーランナー、バッターは今日いいところ無し、2ストライクでこちらが圧倒的に追い詰めている……………ところから逆転負けされた気分だ。

「ていうかなんでいるんだ？」

「私もここ」

「……………まじ？」

頷く。

沈黙。

なーんてことが春休み前にあったからな。うんうん。もうなるようになれ。

ということで、食事を済ました俺は新しい学校の制服に着替え、お袋に渡された弁当をカバンに突っ込み、もう既に外で待っていると思われる未梨の為に急いだ。

全ての準備が終わり玄関を開けると予想通り未梨が……………いない。その代わり……………と言っては失礼だが、いつも未梨の positioning には見知らぬ少女がいた。見知らぬ少女はこちらをじーっと見ている。

「あー、えーと、どちらさまですか？」

少女の特徴は、未梨とはまるで違う。綺麗な金髪に髪型は……………短めの……………ウルフカットって言うのかな？ 服装は俺と同じっぽいブレザーに紺色のスカート。首にはなにやら青いリボンらしきものを着けている。そして赤い縁の眼鏡が良く似合っている眼鏡っ娘である。

「椿 未梨」

少女は一言言った。

「未梨がどうかしました？」

「私が椿　未梨」

「……………まじ？」

頷く。

沈黙。

なにやらデジャヴのようなものが見えたのは気のせいではないだろう。

そして今、俺の心には震度12という関西大震災など比べ物にならないぐらいの大地震が起きている。あの（根暗、無口、意味不明、あんぱん好き、etc）未梨が、こんなふうになっていることが誰が予想できただろうか。これは断言できる。たとえノストラダムスでも予言できなかっただろう。これは……噂の高校デビューと言う奴か？

「迎え、来た」

この喋り方は未梨なんだろうな…と確信。見た目が変わっても中身は変わってなさそうだ。

「…ああ、行くか」

俺らは今日から高校生。ちなみに制服は男子はブレザーに紺のズボンにネクタイ。女子は今知ったのだが、ブレザーに紺のスカート、それに青いリボンなのかな？ 制服には文句はないが、女子の体育着がブルマーじゃないことに一言文句を言いたい。

ブルマーは男の浪漫だバカ野郎！

学び場はウチから歩いて15分つてところだ。本当なら後20分ほど家でのんびりしてられるのだが、未梨が無駄に早く行こうとするからそうもできない。ちなみに未梨を一人で行かせるという選択肢はない。なぜなら未梨はマイホームの鍵を所持しており、時間

通りに俺が来ないと、俺の部屋まで未梨が来るからである。しかも部屋まで来たからといって何かしてくるわけじゃなく、ただ俺が起きるのを待っているだけである。最初にみたときは本気でびびった。想像してみろ。朝起きたら自分の部屋に無表情の女が本を読んでいるんだぞ。うわ……鳥肌たってきた。

そもそも何で未梨が家の鍵を持っているかと言うと、オフクロが原因である。俺があまりにも未梨を待たせていたのにオフクロが同情し未梨に合い鍵を渡してしまったのだ。オフクロ……それは余計なお世話って奴だ。

俺は歩きながら『前の未梨の姿』と『今の未梨の姿』を脳内でbefore、afterと切り替えていた。共通点は眼鏡だけ。どうみても別人じゃないか？

「なんで髪切ったんだ？」

当たり前な疑問を聞いてみる。今まで髪が長かった未梨がこうも短くするということは、俺にとっては違和感ありありであって、なんとなく別人と一緒に歩いているみたいで落ち着かない。

「髪、長いと死角、増える」

お前が言うオシャレにならない台詞だな。

「似合ってるぞ」

と一言褒めてみる。これは正直な感想であって前のに比べればかなり俺的にはいいと思うし、どうせなら眼鏡を外したところも見てみたいと思う。別に前のが悪いと思っっているわけではなく、あれはあれで氣にいる奴がいるだろう……荒木とかな……

「ありがと」

ちなみにコイツから『ありがと』という言葉聞いたのは10年間の中でこれで2回目だ。平然を装っているように見える未梨も実は少し嬉しかったのだろう……多分。

などとたわいもない話をしていたら、学校についてしまった。校門のところにはクラスが書いてある掲示板はあちらですという別になくてもいいんじゃない的な掲示板があった。早めに家を出たというのにもかかわらず、掲示板周囲にはかなりの人盛りができており、視力1、0の俺ではここからじゃマイクラスを確認することができない。俺は遠くから目を細め自分の名前を探した。えーと……俺の名前は……

「一緒」

未梨が不吉なことを言ってきた。一緒？ 何が？ クラス？ そんなことはノストラダムスの大予言並に決して合ってはならない。俺は目を細めて掲示板をよく見た。一年二組に俺の名前が合った。その一個下には……椿 未梨。いやいや、最近ちょっと勉強のしすぎで視力が低下気味だからな。

「これが現実」

まるで未梨は俺の心を見透かしているように言ってきた。何で前は眼鏡っ娘なのにここから見えるんだ、と突っ込みを言うだけ無駄だな。なぜなら未梨の眼鏡は伊達ちゃんだからな。なぜ伊達かっていう疑問についてはまた後に説明しよう。あー、後で説明することばっかだな。

掲示板を見た生徒がどんどんどこかへ移動していく。なにになに……新入生は自分のクラスを確認したら体育館に移動すること……

「体育館だとさ」

「うん」

未梨は我関せずという感じで閉じていた分厚い本を読み始めた。

「楽しいか？」

「うん」

今更のことだが未梨が俺に対する大体の返事は『うん』である。

体育館の場所はわからなかったが、複数の生徒が同じ方向に向か

っている。その波に乗っていった。だから好きだと言って天使になつて♪……いや…なんでもない。

未梨は本を読みながら歩いているというのに、何故人と一切接触しないのか、という謎を分析している内に体育館についてしまった。正直分析する気はなかったがね。

クラスで名前順で並べという先生様からのご指令があり、適当にそれっぽいところに並び、座った。

しらばくすると俺の前にツインテールの女の子が座ってきた。人生初ツインテールの目撃に感無量。後ろ姿なので顔が確認できない。これで顔が悪かったら……自殺もんだな。

予想通りに式は始まり順調と進んだ。我が校のハゲ校長が最近の経済について話しているときにおもしろいことが起こった。

「ねえ、君名前なんていうの？」

俺の後ろで黙々と本をひたすら読んでいる未梨に隣のクラスの男子が話し掛けてきた。

「……」

ちらっと見てみるが未梨は男にまったく無関心な様子で本を読み続けている。

「その本楽しい？」

「……」

「僕の名前は田村。よろしくね」

田村とやら、いくらがんばっても未梨はお前と話そうとはしないぞ。

「君、どこ中から来たの？」

「……」

田村は式の最中ずっと未梨に話し掛けていたが、未梨は何一つ返事をしなかった。それはさすがにひどいと思うぞ。未梨。

式も終わり各自教室に行きホームルームが始まった。担任はガタイがよい男で、そのガタイは明らかに体育教師だということ物語っていた。どうやら名前は永田というらしく、俺の予想通り体育教師だった。自分の歳はキムタクと一緒だ、みたいなことを言っていたが比べる相手が悪いと思っっているのは周りの様子から察すると俺だけではないらしい。

そしてありきたりな自己紹介が始まった。一人また一人自己紹介をしていく。笑いを誘う奴。彼氏募集中です、と言っている奴もいたが、お前じゃ一生彼氏できないよ、と思っていたのも周りの様子から判断してどうやら俺だけじゃないらしい。まあ俺は無難かつ普通に済ますけどね。

自己紹介はどんどん進み……俺の前まで進んだ。

例のツインテール少女だ。

「瀬尾です。特技は……そうね、ギターとハーモニカなら演奏になら負ける気がしないわ」

「ほお」

と反射的に声に出してしまった。

瀬尾は後ろに振り向き、百獣の王もびっくりな眼光で俺を睨んだ。

「なによ」

正直に言おう。かなりの美人だ。

ていうか待て。俺は『なによ』と言われるほどのことは何もしていない。

「なんでもない」

周りがざわざわしてきたのが原因だろう。瀬尾は俺を睨みつけたまま席についた。さて、次は俺の番だ。

「青中から来ました……」

視線を感じる……と思ったらまだ瀬尾がこちらを睨みつけている。なんでそんなに睨みつける？ 基がいいんだから笑えよ。

「……よろしく願います……」

と自分でもなにを言ったかよくわからないまま自己紹介終了。

あー、これで最初で最後の自己紹介終わりか……瀬尾だっけ……俺は何も悪いこと言ってないだろ……。

ボタン！ と分厚い本を閉じたような音がした。ようなじやなくてそうなのか。未梨は読んでいた本を閉じ、重そうな腰を上げた。

「青山中学校出身。椿 未梨」

未梨は淡々とそれでけ言うと言った。それで終わりなの？

自己紹介が全員終わると永田が明日の日程について説明し出した。その間俺は瀬尾にずーっと睨まれていた。いや……睨まれているにしろは殺気がないし……睨まれているというより……観察されている？ まあどっちでもいい。さすがにここまで見られというのは気付かないフリっていうのも白々しいものがあるが……俺はひたすら気付かないフリをしていた。

「じゃあ今日はここまで。みんな気をつけて帰れよ」

永田がそう言うと、みんな帰りの支度を始めた。今だ瀬尾は俺のことを見ているが、さりげなく無視し、俺は後ろを振り向いた。未梨がとても綺麗な姿勢で本を読んでいたのだが、俺にとっては見慣れた風景だ。

「帰るか？」

と俯いてる未梨に言った。未梨は視線を本からゆっくりと俺に移動させた。

「帰宅」

未梨は帰りの支度を始めた。

その時である。

「ちょっとアンタ」

ずーっと俺のことを見ていただけただけの瀬尾が話しかけてきた。

ちなみに顔と口調がキレ気味な気がするのは俺の気のせいだと信じた。

「なんだ」

「付き合いなさい」

その一言でクラス中の視線が集まった。待て、今何て言った？

「男ならグズグズしないの」

瀬尾は俺のネクタイを引っ張り、廊下を駆け抜けた。物凄い勢いで階段を駆け上がっていくので、ネクタイがすごいことになっている。俺が走るのを止めたらそのまま引きずられそうな勢いだ。

「で、なんなんだ？」

結局着いた場所は……なに？ 音楽室？

『第一音楽室』と書いてある部屋の前まで連れてこられた。とりあえず俺は激しく乱れたネクタイ及び制服を直した。ドア越しに音楽室の中の様子を見ると、なにやらすごい数の人たちが集まっていた。室内はかなり広そうで、ステージまである。そのステージではギターやドラムを持った人たちが演奏しているっぽいのだが、ここからではなにも聞こえない。防音システムだろうか？ 恐らく軽音楽部とか言う奴がちょっとしたミニライブでもやっているのだろう。

もしかして瀬尾はこれを見たかったのだろうか？ もしそうなら手遅れだな。見るからに中のテンションは最骨頂に達していて、今俺たちがこの中に入ったら……

ガラン！

あきらかに演奏中だつて言うのに、しかもコイツは思い切りよく開けやがった。横に押す型のドアが一回開き一回戻りまた開いた。めったに見られない現象だ……なんて言ってる場合じゃない。

もちろん観客のみなさんは冷ややかな目でこちらを見ており、軽音楽部らしき皆さんは……あまりにも驚いたのだろう。演奏を中止してしまった。

「ねえ、ベースでもエレキでもクラシックでも……ていうかギターならなんでもいいから貸してちょうだい」

この状況でなんてことを言うんだ。演奏中だったなんてことはコイツにとってはどうでもいいことなんだろう……が俺にとってはなんとも気まずい状況である。空気を読め、空気を。しかし、世の中なにが起こるかわからないものだ。ステージに立っている優しそうな女の先輩が瀬尾のところまでわざわざ歩きエレキっぽいギターを手渡した。

俺は今あなたのことが天使に見えます。

「入部希望者……かな？」

「違うわ」

おい、先輩が困った顔してるだろ。

瀬尾は周りの視線をミジンコほどにも気にせずにステージまで歩いて行った。

「ちよつとコイツがアタシのこと見下してるからっぽいからちよーっただけ演奏聞かせてあげるの」

なるほど、俺はそのために呼ばれたのか。ってちよつと待て。俺はお前のことを見下した覚えなどない。勝手な勘違いもいいとこだ。しかしこの空気で帰れるほど俺も強い人間ではない。しょうがない。付き合ってやるよ。

「ねえ、なんかリクエストある？」

瀬尾は慣れた手つきでギターを軽くジャカジャカしている。

「なんでもいい」

「そう」

それは突然のことだ。瀬尾の目付きが変わり、激しいリズムを刻んでいく。あまりの音の大きさと突然の演奏に完璧意表を突かれた俺は腰を抜かした。なんの曲までかはわからないがどこかで聞いたことがある曲だった。そして既に瀬尾は高校生とは思えないギター捌きだ。たとえジョー・ペリーでも、ジョージ・ハリソンでも、加藤隆志でも、この演奏を聴いたら驚くだろう。冷たい目を送っていた人たちもなにやら目つきが変わった。指でリズムをとっている人たちが、体全体を使ってリズムを取っている人たち、会場の冷めきった空気を瀬尾は変えてしまった。

その演奏は心を震え起たせるモノがあった。

ギターに無関心な俺の心さえも。

「どうよ!」

3分ほどだろうか。瀬尾の高校生を超越した演奏が終わった。

「すごいわね!」

ギターを貸してくれた先輩が小さく拍手をした。周りもそれに吊られて拍手の活性となった。

「これでアタシの実力が本物だってわかったでしょ」

瀬尾はまるで拍手など無視し、見下しているような目で俺を見た。「俺にはよくわからないが…うまいんじゃないのか?」

褒めたのに何故か瀬尾はマンガのキャラクター並にほつぺたを膨らましていて不機嫌そうだ。瀬尾はほつぺたを膨らましたままステージを降り、ギターを貸してもらった先輩に返した。

「ねえねえ、私たちのバンド丁度ギターがないのよ。入らない?」

先輩が瀬尾の歩く道を塞いで勧誘している。

あんな演奏したんだ。誰だって勧誘したがるさ。

「じゃ、俺はこれで」

「ちよっと待ち——」

「ねえ、どう？ 入らない？」

瀬尾周りには人盛りが出来上がっていた。乗っ取りライブ大成功っか。

音楽室を立ち去る直前に『覚えてなさいよ』と、声が聞こえたのは俺の幻聴ということにしたい。

窓から太陽の光も入ってこなくなり、外は大分暗くなっていた。春が訪れたといっても日が長くなるのはまだまだ先に思える。

俺はなんとも言えぬ独特のステップで階段を降りマイクラスに向かった。どっかの誰かさんの精でカバンを忘れちまったからな。もしかしたら盗られてるかもな。いや、しかしあんな微妙なセンスのカバンを盗る奴なんているだろうか？ いやいや、考えたところで無限ループだ。

教室の前まで来るとなにやら男の話し声が聞こえる。まったくこんな時間まで残っているなんてよっぽどヒマ人なんだな。

ドアはガラガラと歴史を感じさせる音を立てながら開いた。ドアを開けると男が俺の席に座って、その後ろの席の人と話していた。男はこちらを一瞬見てきたがすぐに視線を反らされ話を続けた。

それにしてもどこかで聞いたことある声だな。

席に近づくと男の話し相手が見えてきた。特徴を上げるなら金髪
のショートヘアに眼鏡っ娘……

「って未梨」

なぜか未梨よりも早く男が振り向いてきた。

「キミは……彼女の知り合いかい？」

思い出した！ コイツは……式の途中未梨に必死に話し掛けてた

奴だ……確か田辺だっけな？

「知り合いだな」

未梨はこんな奴の話し相手をするためにこんな時間まで残っていたのか。もしかして田辺に気があるのか？ それはないか。まあそんなことはどうでもいいとして俺のかぁーばんかばんは……ってねえ！

「なあ、この机の上に置いてあったカバン知らないか？」

「さあ？ 僕がここに来たときにはカバンなんてなかったけど」

はぁ……高校生活初日からカバンが盗られるなんてツイて……..
…な……

「これ」

未梨は俺のカバンらしき物を持っていた。

「俺のか？」

未梨はコクンと頷く。未梨は指を俺に向けて、こう言った。

「ニィ、カバン置いてどこかへ連れられた。カバン盗られたらニィ困る。だから預かってた。待ってた。迷惑？」

未梨がここまで話すのは久しぶりだ。そして接続詞をあまり使っていない話し方はなかなかわかりにくいものがある。しかし伊達に未梨と幼なじみやってるわけじゃない。今のをわかりやすくすると……

「ニィが瀬尾に掠われてカバンだけ置いて有ったの。盗られるとニィが困ると思って預かってたの。ニィの戻ってくるのずっと待ってたんだよ。迷惑だったかな？（一部妄想及び願望あり）」

やばい、そんなふうに言われたら一撃TKOだ。ちなみになんとかなく卑猥な感じがする「ニィ」ってのは俺のこと……本名は「仁井哉、にいや」なんだけど、未梨が呼びやすいと言う理由でめでたく俺は「ニィ」になった。学校で呼ばれるとすごい恥ずかしいので是非やめてほしい。

「ありがとな」

俺は未梨の頭に手をポンと置いた。未梨は無反応無表情のまま微妙なセンスのリュックをしょい、立ち上がった。

「帰宅」

と言って俺のことを凝視する。恐らく俺も来いつてことだろう。

「じゃ帰るか」

「うん」

「ちよっと待った!」

田辺が叫んだ。

「なんだ田辺」

「田村だ!」

「どっちでもいい」

「よくない!　ところで……君達もしかして……付き合ってたります——」

「それはない」

即答。中学のときにもよく間違えられたもんだが……高校生活初日にそれを言われるなんてやっぱ付き合ってるように見えるのか? 冗談じゃない。俺はもっとおしとやかで、いつもニコニコ笑っている、『一緒にいても危険性ゼロ』の女の子がいいんだ。

「本当にか?」

「付き合う。利益から離れ、親しい間柄を保つこと。男女の交際を付き合うと言うこともある」

未梨が辞書モードに入った。未梨は一度読んだ本の内容は忘れないらしく、辞書の内容も全て暗記している。そして辞書モードとは特定不特定の単語の意味を口にする事だ。勝手に辞書モードなどと命名しているが辞書モードに入る奴なんてのは未梨を除いて地球上にいないとは考えられん。何故今未梨が辞書モードに入ったかなんてことは俺にはわからない。完全なアトランダムで発動する。きつと未梨にはなにか考えがあるのだろう……と、ちよっとフォローをしてみる俺がいる。

「俺と未梨はただ家が近いだけ。だから今も一緒に帰ろうとしたんだ。未梨のことが好きだったら勝手にしろ。俺は手をださん」

「それを聞いて安心した。じゃあ未梨ちゃん。今からどこかご飯食

べに行かない？ もちろん僕のおごりでさ」

いきなり名前呼び十ちゃん付けか、正直キモい。大体会った初日に食事に誘うのは積極的というよりキモい。誘い方も安いホストっぽいし……俺が女だったら絶対断るね。顔はカッコいいにカテゴリされるかも知れないが……未梨にとっては顔などどうでもいいことなのだろう。未梨は無表情のままにも言いそうにない。

しょうがない。ここはダメもとで田村に協力してやろう。

「おごりだってよ。行ってこいよ。タダより安いものはないぞ」

俺は田村とアイコンタクトをした。

『貸し1だ』

『キミとは友達でやっていけそうだ』

俺が断るね。

未梨はロボットのようにかくかく首を曲げ俺を見てきた。

「ニィは？」

何故に俺に振る。何故俺が行かなければならない。俺が行ったら意味ないだろ。例えおごりでも俺は行かないけどね。大体何が悲しくて初対面の男と意味不明な女と食事に行かなければならない。

「俺は呼ばれてないからな、お前ら二人で——」

「帰宅」

まあ……予想通りだな。未梨は黙って教室を出ていった。田村はそれを茫然と見送った。なんというか……哀れだな。

「やはり……キミは僕のライバルだな」

前言撤回。少しでもコイツのことをかわいそうと思った俺がバカだった。俺は未梨に続いて教室を出ていった。

「待て！ キミの名前を教えろ」

廊下にまで聞こえてくるバカでかい声だった。ここで無視したらどこまでも追ってきそうだな。

「仁井哉」

「仁井哉か、いい名前だな。また明日会おう」

もうなにも言う気になれない。

今が何時かなんていうのはわからないしどうでもいい。何時だとしても外が真っ暗という事実は変わらないんだ。

俺は未梨と一緒に夜道を歩いている。外灯があるとはいえ、さすがの未梨も本は読んでいなかった。そのかわり未梨は前を見ずに俺の方をじーっと見ている。一応言っておくが断じて自意識過剰ではない。いや、ホントに。

「田村のことどう思っているんだ？」

俺と未梨の間には特に話題がないためこれぐらいしかネタがない。
「誰」

「さっきお前にメシ誘った奴だ」

「どうも思っていない」

「それはひどいんじゃないか？ アイツは多分お前のこと好きなんだから。せめて友達程度の付き合いしてやれよ」

「彼、私のこと、好き、言っていない」

片言で喋る外国人を真似してる日本人みたいな喋り方しやがって。「二人きりで食事に申し込まれるってことは『好き』って言われてるようなもんだ」

「そう」

俺は見た。未梨が微かに笑ったところを……。多分今の未梨の表情の変化に気付けるのはこの世に俺ぐらいだろう。他の人が今のを見たとしても絶対わからない。確かに今未梨の唇の右側が1ミリほどピクッと動いてた。ほら、また……。不吉だ。

俺の15年の人生経験がなにやら悪い予感を告げていた。

1―1 ツインテール少女（後書き）

書くのに2日、修正に3日かかりました。

ギャグで楽しむというより普通におもしろいと思える小説にしたい
と思っています。

1-2 春先メモリー（前書き）

「は」が1つ多かったのを修正。10／22

「感情は一切ないぞ」↓「感情は一切ないぞ」

1―2 春先メモリー

次の日。教室に入るやいなや瀬尾が俺を睨んできた。何故睨まれてるなんてことはわからないし、わかりたくもないし、わかったところでどうにもならない。ただ俺の中にいる人生経験という組織の組員達が危険を告げていた。

――危ない、そのまま席に向かったら殺される。

――それはないだろ。

――ないと言いつ切れな。いいから逃げろ。

という組員の激しい会議の結果、俺は自分の席に行かずに回れ右で教室を出て行くことにした。

「ニィ？」

ちよつと未梨の仕草に萌えた……じゃなくて！ 俺の後ろに未梨がいるんだった。未梨は律儀にも今朝も俺の家の前で待っていた。来なくて良いのに。ちなみに決して俺は一切未梨に萌えたなんて思っていない。無理矢理言わされたんだ。作者の陰謀だ。

「どいてく――」

右肩をもんのすごい力だ掴まれた。誰かなんてのは振り向かなくても想像がつく……が、一応確認のため振り向いておこう。はい、どうみても瀬尾でした。この力はその華奢な体のどっから出てくるのか教えて欲しいもんだね。

にこやかに笑っている瀬尾の背後になにやら阿修羅象が見えた……：ような気がする。ス○ンドか？ この力はスタ○ドから出ているのか？

「どこ行く気」

「まあ……ジュースでも買いにですね」

あまりの気迫に敬語になってしまった。これは不可抗力だ。

「奇遇ね。ア・タ・シも丁度ジュース買いに行こうとしたのよ」

絶対嘘だ。発言と顔が一致してない。大体お前はなんだ？ 何故そんなに俺に突っ掛かる？ 美人っていうのは嬉しいが、俺はツンデレキャラには興味はないぞ。

「ドア前で立っているのは迷惑よ。さっさと行きましょ」

気付いたときにはネクタイを掴まれていた。この後の展開は以下略で、食堂まで連れて来られた。食堂には始めて来たが中々広く綺麗なところで、ちょっとしたファミリーストランにも見ようとすれば見れる。しかしこんな綺麗でなところでも朝っぱらから従業員もいない食堂にくる生徒など皆無で、今ここにいるのは俺たちだけっぽい。瀬尾は自販機でジュースや何やら買っている。

「はい」

瀬尾が一本の缶を野茂もびっくり、俺もびっくり、トルネード投方で投げてきた。しかも速い。体感速度150キロで飛んでくる缶を俺は超反応でキャッチした。

「アタシのおごりよ」

「どうも」

何事もない会話に聞こえるが、俺は缶をキャッチしたときに痛めた手の痛みを必死に堪えていた。缶を見るフリをしながら自分の手を確認する。どうやら外傷はないようだ。ちなみに缶はミルクココアだった。妥当なところイてきたな。

「なんで俺に絡んでくるんだ？」

当然の疑問だろ？ 別に俺は瀬尾を気を悪くするようなことは言っていない。ましてや昨日出会ったばかりの少女なのだから言えるはずもない。もしかして……俺に一目ぼれか？ いやいや、その確立はアイツの態度からしてゴキブリがいない家の存在確率ぐらい低いだろう。

瀬尾は自販機に寄り掛かり缶を開けた。

「昨日アタシを置いて帰ったでしょ」

「待つ理由がない。大体追ってくればいいだろ」

「軽音の奴らに勧誘ばっくらって追えなかったのよ。あの程度の実力でアタシを勧誘なんて十年早いわ」

虎を素手で倒した人がテレビで自慢しているぐらい自慢げに話しているような気がする。

「それで、なにか話したいことがあるのか？」

痴漢常習犯より遥かに嫌らしい顔で瀬尾は俺に近づいてきた。なんなんだ。

「一応確認だけど……アンタの名前『仁井哉』でいいのよね？」

「そうだな」

「もう一つ確認。アンタって十年前ぐらいに引っ越さなかった？」

「なんで知ってる？」

「最後の確認。アンタは昔超かあわいい女の子にハーモニカを教えたことがある？」

「……さあ？」

一本の缶が超高速で、飛んできた……ということに気付いたのはその缶に当たってからである。瀬尾がノーモーションの状態から俺の顔面目掛けて缶を投げてきたのだ。

「イッテェナ！」

もちろん痛かったので痛いというのは人間として常識である。ここで痛いと言わない奴はMかマゾだ。

——突っ込んでいいんだぞ。

「あんたが悪いのよ。バカ」

「意味がわからない。バカな俺にもわかるように説明をしてくれ」

「まだわからないの？ 仁井哉？ 読者の人たちはきっと前話で気付いてるわよ」

それは黒人に「ニガ」と言うよりも遙かに言ってはいけない台詞だ。諸君忘れてくれ。

「十年前。ある幼稚園にとってもかあわいい少女がいました」

「なんの話だ」

「その少女は幼稚園のみんなからイジメにあっていました。少女は考えました。自分の存在価値について」

それは随分ませた少女なこった。

「そんな少女のもとにある少年がやってきたのです。その少年はカッコいいとは言えず、お世辞ならギリギリカッコいいと言えるぐらい顔立ちでした。少女は少年を睨みつけました。少年は少女を恐れることなくウザいぐらいの笑顔でこう言いました。僕と遊ぼうよ」

それはそれは随分お節介な少年だな。俺が教育し直してやろうか？ 1日500円で。

「いい加減に気付きなさいよ！ それともわざと？」

「素だ。話が見えてこない」

「アタシは十年前、仁井哉にハーモニカを教えてもらった」

十年前……って何してたっけ？ まだこっちに引越す前……ハーモニカ吹いてた記憶しか……あ。ああ……アイツか。

俺の頭の中でzip形式に圧縮されていた記憶という名のファイルが解凍され始めた。ファイル解凍のパスワードは――

「葉月？」だった。

「ったく……気付くの遅すぎよ。本当にアタシのこと忘れてるのかと思ったじゃない」

どうやらモノホンの葉月らしい。それにしても人間は奥が深い。

俺の記憶にある『葉月』は部類分けするなら、確にかわいいの部類に入る……が、今の『葉月』はまるで別人だ。美少女と言う点では十年前とさほど変わらないのだが、なんというか……風格が出てきたっていうのか？ わかりやすく言うとホイミスライムが気付いたら人間になってたような感じだ。

「悪い。ていうか別人だとは思わなかったのか？」

「それはないわ。仁井哉なんて名前がアンタ以外にいるとは思えないし、『仁井哉ならこの学校を選んだ理由』もわかるし、それに……なんというか……あれよ。雰囲気よ。アンタ昔と変わってないから

ね。雰囲気だけは」

『だけ』を強調された。

「なにが言いたい」

「アンタ雰囲気は変わってないけど性格変わりすぎよ。昔のアンタはもつとねえー。んーと。そう！ 素直だったわ！」

「悪かったな。素直じゃなくて。俺はいつでも、何時でも、例え世界が滅びそうになったときでも、恋愛小説関係の高校生主人公よりかは素直だ。これは自信をもって言えるね」

「そんなのに自信を持たなくていいわよ。フィクションの人物と比べてどうするの？ 悲しくならない？」

そう言われるとキツイ物がある。言い返せないからな。

「にひひ。けど腐ってもやっぱり仁井哉だわ。本当に久しぶりね」

俺は腐ってない。腐ってるのはお前の性格だ、という言葉が喉まできたが、ワールドカップクロアチア戦の川口ぐらいがんばって抑えた。

「……そうだな」

よく耐えた、俺。そして川口。

「もつと話したいこととか文句を言いたいことがあるけど……そろそろホームルームの時間だわ。戻りましょ」

廊下を歩く葉月の姿ほど威風堂々という言葉が似合う人物はこの学校には存在しないだろう。

それにしても、だ。

——できすぎじゃないか？

何故葉月がここの学校にいる？ アイツはもつと遠くの地に住んでいたはずだ。

——引っ越してきたのか？

その考えが一番しつくりくる。親の都合かなにかでやむ得ず引越してきた。そして妥当な高校を選び、たまたま俺に出会った。いや、この考えだと……一つおかしい点がある。葉月は『俺がこの学校を選んだ理由もわかる』と言った。俺が選んだ理由——比較的学校から家までの距離が近い、からだ。葉月は俺の家を知っているのか？ ……その可能性は極めて低いだろう。俺の家を知っているなら……アイツの性格だ。乗り込んでくるだろう。

じゃあ一体なんなんだ？

——葉月はなにか勘違いをしている？

恐らくそうだろう。俺がこの高校を選んだ理由を葉月は勘違いしている。勘違いしているにしてもなにと勘違いしているのだろうか。

『この学校を選んだ理由もわかる』

理由……この学校を選ぶ理由。普通の奴なら『いい大学に行けそうだから』とかだろう。まさかそんな理由じゃないよな。

色々考えたが、最終的な結論はこうだ。

——あとで葉月に聞こう。

「ったくー。二日目から授業なんて信じられないわ。教育基準法に引っ掛かるわ」

「どんな基準なら引っ掛かるのかね」

授業も終わり昼休みに入った。あのあと教室に戻ってから葉月はマシンガントークが得意なアナウンサー如く、休むことなく一方的に話し掛けられた。その九割ほどは適当に相槌を打っていただけな

ので会話内容などはほとんど覚えていない。

「まあいいわ。昼休みなことだし……ねえ、仁井哉。お弁当持ってきてる？」

「オフコース」

「それは今日は捨てなさい。アタシと食堂行くわよ。もちろんアタシのおごりでよ。一回行ってみたかったのよね」

「俺を誘うな。他の奴を誘え」

「アタシはまだこっちに来たばかりで知り合いがアンタしかいないの」

確かにお前とは知り合いだが、十年前に半年程一緒に遊んだだけだろ。

「その辺の男でも拾え。お前なら誰かはキャッチできる」

ツラはいいんだからな、と心の声で付け足した。

「イヤよ。そんなんだったら一人で行くわ」

「いってらっしゃい」

「そうじゃなくて……！　こんなに可愛いわいーかあわいー女子高生が食事に誘ってるんだから付き合いなさいよ」

自分でかわいいとか言うとな奴は可愛さ半減だな。流石に口には出さなかったけど。

「今日のお弁当は何かな何かなー？」

駅の前でチラシを配っている人の横を通るように葉月を軽くスルーし、カバンからお弁当箱を取り出した。お弁当箱を開けるとより取り緑、今日は俺のストライクゾーンど真ん中。どストライク！！って感じた。ああ、お袋。ありがとう。今俺は猛烈に感動してるよ。葉月は大人しく諦めたらしく他の男となにか話している。そうだ、お前は他の男と食堂に行けばいい。じゃ、俺はこのお弁当を……あれ、ない。確かに机の上に置いたような……

「これ良かったら食べていいわよ」

「え？　いいんですか？」

「そのかわり十秒以内に食べなさい。いくわよ、よいードン」

なにやら葉月が気になることを言ってたのに気付かなかったのは一生の不覚であり恥だった。そんな俺はもう一回カバンの中をチェックしていた。

「あーれ……」

背中をつんつんと突かれた。もちろん未梨だった。未梨はなにとも言わずに指をある方向に向けた。指の先を見ると、そこには男が必死に弁当を食べているなんとも見ていい気分にはなれない光景があった。

「いい食べっぷりだわねー。惚れちゃうかも……」

いや……未梨が指してたのは男じゃない。葉月だ。そして葉月が葉月らしからぬ言動をしている。更に男の食べるペースが上がっている。もしかしてあれが……

「ごちそうさまっす！ これは洗って返します！」

「いいから今すぐ返してちょーだい」

葉月は半ば無理矢理男から弁当箱を返してもらっていた。しかもどこかで見たことのある弁当箱の形だ。あれは俺の弁当箱……なのか？ いや、本当はあれが俺の弁当箱なんていうのはとくに気付いていたさ。心のどこかでずっと否定をしていたが、さすがにもう限界だ。

「お前はなにやっとなんだ……」

A4ノートを丸めた物でこのバカを軽くポカッと叩いた。

「アタシはなにもしやってないわよ。その男子がお腹空いて死にそうって幽霊みたいに嘆いていたのよ。このままじゃ呪われる。けどアタシの手元には食料がない。そんなときアタシの目の前にとってもおいしそうなお弁当が降臨したのよ！」

嘘をつくな。明らかにあの男が困ったような顔してるだろ。

「三流映画以下のストーリーを作るな。聞いているこっちが恥ずかしくなる。大体俺はホラー系は好きじゃない。ったく……そこまでして食堂に行きたいか」

「アタシも少しは悪かったと思ってるわよ」

嘘つけ。その百パーセント搾りたてと表示されているリンゴジュース並にうさんくさい笑顔はなんだ。

「だからこのお弁当箱はアタシが責任持って洗って返すわ」

「いや、いい、今すぐ返せ。お前に預けたら明日の俺の弁当が無くなるだろ」

「明日も学食でいいじゃないの」

「『明日も』ってのはなんだ。まるでもう今日学食に行くことが決まってるみたいじゃないか」

「え？ 行かないの？ 三食はキッチンと食べないと体力付かないわよ」

なにを60過ぎたばーさんみたいなこと言ってるんだ。

「俺の弁当がないのは誰のせいだ？」

「まったく本当にあの男子迷惑よね」

俺は再びA4ノートを丸め、このどうしようもないバカをちよつと強めに叩いた。

「アタシのせいで！ 仁井哉はお昼ご飯が失くなっちゃったわね。」

アタシと一緒に食堂来るならおごってあげるわよ」

葉月の勝ち誇った顔が実に腹ただしい。計画的犯行の癖になにを言っているんだ。しかし俺の胃袋は少なくとも俺の性格よりかは正直者だ。このままなにも食べなかったら俺は発狂して虎になるだろう。

「あたりまえだ。先に言っとくが俺はかなり食うからな。後悔するなよ」

「にひひっ。上等よ」

今度はネクタイを掴まれなかったが、代わりに手を握られた。心臓がドキドキする……なーんて感情は一切無いぞ。恋愛小説じゃあるまいし。くだらない。

カツ丼、親子丼、カレー、チャーハン、ラーメン、ハンバーガー、

サンドイッチ……これをイマクニが歌っているように頭の中で流してみた。親子丼の時点で文字余りが激しかったので考えるのを止めた。ところでテーブルに乗っているこの料理の量はなんだろうか？

「飲み物なにがいい？ ミルクココア？」

「ちよつと待て……この量はなんなんだ？」

ミルクココアを二つ持ってきた葉月は俺の向かい側の席に座った。

「なんなんだって……いっぱい食べるんでしょ？ 遠慮はいらないわよ」

素で言っているのなら大した天然だ。大体なんなんだ、この炭水化物中心なラインナップは？ 野菜はどこだ、野菜は。四番バッターだけじゃ野球はできないぞ。

「あ！ ……もしかしてアタシが後で請求するとも思ってるの？ それなら心配しないでいいわよ。アタシはそこまでセコくないから」

黙っている俺を見て、葉月はなにやら見当違いの心配をしている。

「ちよつと料理の数多くないか？」

「そう？ アタシも食べるんだし、平気でしょ」

そう言うとき葉月はお皿に乗っているサンドイッチを二個同時に掴み、口の中に突っ込んだ。

なんて食べ方しやがる。女の子らしさが微塵も感じられない。食べ方だけなら飢えたライオン……もしくはそれ以上。

「あんひゃもたえひあさいお」

コイツと一緒に食事に行きたくないリストに追加だ。

「口に入れながら喋るな。もうちよつと落ち着いて食ったらどうだ。それに味わえ。噛み締めろ。作った人の気持ちを考えろ」

「いやよ」

葉月はあつというまにお皿にあった大量のサンドイッチを跡形も残さず食べてしまった。

「意外とイケるわよ」

この場合のイケるは二つの意味で捕らえられる。

一、 意外と食べられわね。

二、 意外とおいしいわね。

「このハンバーガーも美味しいわ。学食は三ツ星で合格よ」

A、 二でした。

葉月はダブルバーガーならぬトリプルバーガーを食べだした。見ているこっちが腹一杯になってくる食べっぷりだ……っというのは妄言だ。見てるだけで腹がいっぱいになるわけがない。むしろ空いてくる。俺は手元から1番近くにあったカツ丼に手を伸ばした。じゃ、いただきます。

「仁井哉？ あんま食べてないわね。お腹空いてたんじゃなかったの？」

葉月はグルメリポーター風に親子丼を俺の目線ちょうどまで上げておいしそうに食べていた。それはわざとか？

「残念ながら俺の胃袋は一般人レベルなんだ」

俺が食べたのは結局カツ丼だけ、それだけでも空腹から満腹にはなった。現役学生さん向けに造られてるだけのことは有って、一つの料理のようがかなり多かった。にもかかわらず！ さっきまでこのテーブルに乗っていた料理を葉月は全て平らげてしまったのだ。

「あれでしょ！ お腹空き過ぎて却ってお腹一杯になっちゃったみ

たいな。うんうん。アタシもよくあるわ」

確かにそんなことはよくある。しかし、そんな状態だったらサンドイッチ一つで充分だ。カツ丼など食えん。

「お前はいつもそんなに食べているのか？」

「そんなことないわよ」

と言って葉月は既に空の器と化した丼をドンとテーブルに置いた。

「ちよつと最後の親子丼はいらなかったわね。食べ過ぎちゃったわ」

最後のだけって……実はかなりの大食いなんだな。全部で軽く7000キロカロリーは越えてるぞ。見た目は痩せてるのに……まさか、もしかして内臓脂肪？

「なあ、お前体重なんキロだ？」

葉月は少し顔が赤くなった。あれ……なにかおかしいこと言ったか？

「……アタシだからいいけど、他の女の子にはそういう事聞いちゃだめよ。えーと……アタシのプロフィールは……157センチ45キロ。スリーサイズは教えないわよ。どうしてもって言うなら……」

「いや、別に聞きたくない」

「ふうーん。無理しないで素直に『教えてください葉月様』って言ったら教えてあげるわよ」

俺はどんなエロジジイだ。それにお前は少し恥じらいを持て。そうじゃないと俺が恥ずかしくなってくるだろう。

それにしてもあんだけ食べといて45キロ……か、日本の全ての女性が羨ましがる太らない体質か。

「幸せ者だな」

「なんの話？」

「なんでもない。メシも食べたことだし、こっから出るか」

「そうね」

と珍しく同意され、葉月は立ち上がった。

「じゃあ、片付けといてね、アタシ飲み物買ってくるから」

葉月はささつとその場から消えた。一応おごつて貰ったという立場なので、しょうがなく俺は食器（ほとんど葉月が食べた奴）をベルトコンベアで回っているところに置いた。ここに乗せれば自動的に洗い場まで運んでくれるというシステムだろう。はてさて、県立高校でこんなシステムを導入して学校の予算は大丈夫なのか？ と、しようもない心配をしながら全部の食器を片付けた。出入り口に向かうと葉月が両手に一本ずつ缶を持って佇んでいた。

「はい、ご苦勞様」

と言われて缶を手渡された。今日三本目の……

「好きなのか？ ミルクココア？」

「大好きよ」

なにも迷わずに断言しやがった。しかも第3者が聞いたらずいぶん少し勘違いされそうな言い方で。

「ねえ？ これから暇？ 暇よね？ 暇に決まってるわよね！」

最後が既に疑問形ではなく、エクスクラメーションマークの時点でどうやら拒否権はなさそうだ。

「暇と言えば暇だな」

「じゃあ、ちよつと付き合つて」

めんどい、やだ、と言おうとしたがやめた。この傍若無人の葉月のことだ。断れば今朝のようにネクタイを掴むなり、弁当の時のように俺を行かざる終えない状況を創りだすに決まっている。最悪気絶されられてから連れて行かれるかもな……さすがにそれはないか。多分。

とりあえず……悩みの種はできそうだ……

1―2 春先メモリー（後書き）

余談ですが、今、自分はFFXIIをやっています……が、自分は3D酔いが激しいもので30分以上できません。と、いうことで、もし3D酔いの治し方を知っている人がいたら是非教えてください（笑）

1―3 春先メモリー2（前書き）

誤字修正 10／31

「文庫サイズに」から「文庫サイズの」

クラスが違っていたので修正 11／5

「1年3組」から「1年2組」

1―3 春先メモリー2

くねくねとした廊下を師走のときのおばちゃんのように歩き、設計ミスを疑えざるおえない急な階段を78段登った俺はまるでドーバー海峡を横断したヒラリー・リスターのように疲れきっていた：…っていうのは大げさな例えだが、春休み明けの鈍りに鈍りきった俺の体には辛いものがあるハイキングコースであり、明日の筋肉痛が約束されたようなものだ。

階段を登りきった目の前には扉からして通常教室と比べて工事費用が倍ぐらい掛かったんじゃないかと思われる教室があった。なんでそう思うだつて？ 扉は横に押すタイプではなく取っ手タイプの時点でレベルが違うんだよ。扉の上には『第二音楽室』と書いてある。

葉月はいきなり顔を扉のガラス部分にべったりくっつけ始めた。きつとあちらの部屋から見たらさぞかしおもしろい顔になっていることだろうが……その行動は女子学生としてどうかと思うのは俺だけであろうか。それにしても一体なにをしているんだかね。

「誰もいないわね……開いてるかしら？」

どうやら中の様子を見ていたらしい。もうちょっとましな見方があると思うのだが、「なによ」と言われたら具体例を出せないのでもう口にはしなかった。葉月はドアの取っ手を掴んだ。キィーっと、地面にこすれる音を起てながらドアが開いた。

「開いたわ」

「見ればわかる。それより……音楽室こくになににきたんだ？」
「決まってるでしょ」

いつ、どこで、なにが、どのように決まったのかを400字詰め原稿用紙三枚までにまとめて提出してほしいもんだ。まあ本当にそんなもんを出された日には俺は原稿用紙を読むことなく、その場で破り捨てることだろう。そんなどうでもいいことを考えてるうちに

葉月は音楽室に入り込んでいった。無論俺も葉月に続いて音楽室に入り込んだ。仕方なくな。

見た目通りに第二音楽室は工事費用がハンパなく掛かってるのか、かなり綺麗なところで、思わず上履きを脱いでしまふところだった。この音楽室には俺が見る限りでは高そうなグランドピアノが一つ設置されているだけで、それ以外は机も椅子も楽器もなに一つ置かれていない。第二音楽室は第一音楽室に比べると手狭なワンルームみたいな感じる。教室自体の広さは普通の教室とあまり変わらなそう。普通の教室との違いを強いて言うならばここはロッカーがないぐらいだ。

「勝手に入っていいのか？」

「アタシたちはいんじゃない？」

なんだそれは。お前はどうか知らないが、俺は特待生でもなんでもない。今の内に出て行っただろうがいいかな？

そんな俺の心配をよそに葉月は高そうなグランドピアノをなにやら調べだした。覗き込んだり、単音を出したり……「猫踏んじやつた」まで弾きだした。葉月は1分もしないうちに弾くのを止めた。あきっぽい奴だ。グランドピアノに飽きた葉月は今度はグランドピアノの椅子の上に立ち教室を見渡し始めた。

「ねえ、これ見てよ」

葉月はグランドピアノの横の壁を見つめていた。なにを見ろと言うんだろうか。

「どうみても壁だな」

「違う！ もっとこっちにきなさいよ」

なんだなんだ？ 壁におもしろい虫がついてるってオチはないよな？

期待値ゼロ、むしろマイナスという心境の中、俺は葉月様の意味不明な発見の為に5メートルもの距離を歩いた。

「……………」

不自然なことに壁にドアノブがついていた。扉でもないのにドア

ノブがついている。だからどうしたと言われたら反論のしようがない。

「なんか秘密の臭い……しない？」

まるで夏休み中に特大のオオクワガタを見つけて友だちに自慢する日を待ちわびている子どもの表情だな。葉月。

「全然しない」

「あんたの眼はなんの為にしているの!？」

本当に意味がわからない。

「壁にドアノブよ？ ドアノブ？ わかる？ きつとこの先はお宝がいっぱいよ!」

いきなりなにを言い出すのかと思いきや、非現実的なことを語り出しやがった。このドアノブのどこをどうやって見ればその斬新な発想が出るのか聞きたいもんだ。聞いたところで俺の納得できる答は返ってくるはずないので聞かなかったけど。俺はもう一度ドアノブを見てみるが……本当に壁にドアノブがついているだけで扉ではなさそうだな。接着面もなさそうだが、無駄に鍵穴だけはきっちりついている。

「設計ミスとかじゃないのか？」

「それじゃあーつまんないでしょ」

お前はなにを求めているんだ。

「開けてみればいいだろ」

「そうね。あんた開けなさいよ」

なぜ俺が？ と言う疑問は胸の奥底にしまい込み、俺はこの怪しいと言えば怪しいし、怪しくないと言えば怪しくない、どうせ設計者の気まぐれか設計ミスでついってしまったのだろうと思われるドアノブを掴んだ。

ドアを開けようとするが鍵がかかっているらしく、それとも元々開かない設計なのか、とりあえず無駄にカチャカチャと音がするだけで開く気配はさらさらない。

「開かないな」

「そんなはずないでしょ」

なぜそこまで自信を持って言い切れる。

「きつと選ばれた人にしか開けられないのよ!」

「そーですか」と、適当に肯定し、「で、ここになにしに来たんだ?」

入念に謎のドアノブを調べている葉月の姿はまるで自宅の鍵を失くしてしまってどうしようかと悩んでいる少女、もしくは遊ぶお金が欲しいがための空き巣狙いの少女か、どちらかというの後者のほうに見えるのはなぜだろうか。

「えーっと、なにしに来たんだっけ? まあそんなことはどうでもいいのよ。今はこのドアノブよ!」

やってられんな。

「ねえ、仁井哉。アバカム使える?」

「……………」

5分後、昼休みの終わりを告げると同時に授業まで後5分ということを知らせる予鈴が鳴った。

ほら、葉月。いつまでもそんな無駄なことしないで帰るぞ。そんな時間があるんだったら地域のゴミ拾いにでも参加しなさい。そっちの方が将来履歴書にも書けるし、もしかしたらご褒美におばちゃんからお茶を貰えるかもしれないし、色々と便利だぞ。少なくとも開かないドアノブをいじってるよりかはな。

「もう! このままじゃ気になって授業に集中できないわ!」

言ってる。少なくとも俺の眼には今日お前が授業を集中しているようには見えませんでしたけどね。俺を巻き添えにして教師に何回注意されたもんだか。えーと……1回、2回、3回、4回、5回……

「ネチネチとうるさいわね……」

「うるさくて結構。大体お前はなにしにきたんだ?」

「だから……」

葉月はブレザーの胸ポケットに手をつっ込んだ。そこから出てきたのは一枚のプリント。

「これ読めばわかるわよ」

と、一枚のプリントを渡された。というかなんでさっき聞いたときに出さなかったんだ？ 考えたところで仕方ないか……。
なにになに……

『スクールカウンセラーだより』

他人に相談できない悩みの相談を承けます。イジメや恋の悩み。教師には言えない相談。なんでも相談に乗ります。

日時 四月二日の昼休みから放課後まで

場所 講義室

「……」

さて、こういう場合はどう反応するべきだろうか、わかる奴がいたら教えてくれ。なんだったら立場を交換してあげてもいいぞ。リアクション芸人を目指してるのならともかく、一般人の俺は特別なボケをする必要がないことは確かだ。そもそもコイツに悩みなどあるのかどうか疑わしいね。もしあると仮定してのことだが、なんの悩みだろうか？ 女子学生らしく恋の悩みとかか？ いやいや、コイツは恋心以前に人としての心が存在しているか妖しいもんだ。とまあ色々突っ込みどころ満載なのだが、常識人としてまず来てい

る場所が違うというところを指摘すべきだろう。

「なあ、カウンセラーが来るのはここじゃないぞ」

葉月の視線はドアノブから俺に写り、さらにそこからプリントに移り、もう一度俺に視線を戻した。

「バカ」

予想外の返事とはまさしくこういう事を言うんだろうな。

「この状況をボードフォン改めソフトバンクのCMにするといい」

「なに意味わかんないこと言ってるの？ アンタの見てる場所違うわよ。その裏よ」

プリントを裏返してみると俺といい勝負が出来るんじゃないかなミミズ文字が並んでいた。

「そういうことは先に言うもんだ」

と言ったものの、再びドアノブとにらめっこをしている葉月には、俺の言った言葉など右耳から左耳通り抜けたように聞こえてないんだろうな。

そんなことはさておき、俺は手書きの文字に眼をやる。

「瀬尾葉月さんに渡してください」と前置きされており、その下には「昼休みに第二音楽室に来て下さい」と汚いミミズ文字で並んでいた。

そういえば今朝のホームルームで担任の永田が葉月になにかを紙きれを渡していたな。まあ、なんだ、その紙切れがこれで、内容は葉月に対する呼び出しの手紙ってわけだ。

「なんか悪いことでもしたのか？」

「まだ入学して二日目よ。そんなのできるわけじゃない。それにしてもなんなのかな？ 呼び出されるほどのことはしてないと思うけど」

お前にはないかもしれないが、俺には心当たりがあるぞ。昨日の占領ライブとか。これは教師が来る前に関係のない俺は撤退すべきだろう。ということ、さらばだ。葉月。悪く思うなよ。これは戦略的撤退である。チャンスは葉月がドアノブとにらめっこをしている

る今だ。

「ごめんなさい。ちょっと会議があって遅れちゃった」
遅かった――。

時すでに遅しと言う言葉は今の俺の状況のために出来たと言っても過言ではないだろう。

葉月を呼び出したと思われる女性教師の登場だ。教師が来たということにもかかわらず、葉月は妙にいやらしい中腰の状態でドアノブとにらめっこを続けていた。気付いてないのか無視をしているのか。どちらにしても一つだけ言えることがある。コイツはバカ。以上。

「えーと。あなたが瀬尾 葉月さんかな？」

と、女性教師に俺の肩をポンツと手を置かれる。なぜ俺と葉月を間違える。「葉月」ってのは名前的に女だろ。

「いえ、葉月は――」

「アタシが瀬尾 葉月よ。アンタがアタシを呼び出した教師なの？」

葉月は中腰状態のままこちらを見てきた。後でコイツには尊敬語と丁寧語について深く語り合う必要があるそうだな。

女性教師は葉月の口調など気にしてない様子でにっこり笑った。

いや……苦笑いか。

「瀬尾さん。あなたは音楽推薦ここにできたんでしょ？」

音楽推薦？ この学校はそんな制度があるのか？ 初耳だぞ。この野郎。

「そうよ」

なにが「そうよ」だ。かっこつけちゃってさ。その中腰状態まま言っても全然かっこよくないぞ。

「今年はギターがプロレベルの子が入ってきたって聞いてね。瀬尾さんの演奏がどれほどのものか聴いてみたくなっちゃって……聴かしてくれるかしら？」

へえー、プロレベルの子がねえー。誰が？ 葉月？ いやいや、あり……うる、かも。昨日の乗っ取りライブの演奏は確かに……

上手かった、と思う。そういえば乗っ取りライブの件についてはスルーですか。

一方の葉月はこれおいしいよ、と言われて渡されたお菓子が、全然おいしくなくてフテクしている子供のような顔をしていた。

「すいません。アタシたちはこれから授業なので帰らしてもらいます」

皮肉さがたつぷりと籠っている棒読みだが、珍しくまともなことを言っている。ていうか葉月。ドアノブの件はどうなったんだ？

「授業のことなら平気よ。担当の先生に言つといたから。そっちのキミは早く戻った方がいいわ」

言われなくてもそうさせてもらいますよ。

「まあ、がんばれよ」

「ちよっと！ 待ちなさいよ！」
なんでなん。

「すいませんが今日はギターもなにも持ってきてないので明日にしてください。それではさようなら」

葉月この台詞をアナウンサー顔負けの3秒ちよいで言い切った。

計測はしていないが多分そのぐらいだろう。

このあとの葉月の行動は神速と言っていいほど恐ろしく速かった。俺のブレザーの裾をアトム並のパワーで握りしめた葉月は、教師などまるで無視しつつ「押」と書いてある扉を右足で蹴り開け、そして一言こう言った。

「風と共に去りぬ！」

意味不明過ぎて、凡人の俺には理解できない台詞で——などと考えていたら既に階段を下っている自分に驚いた。もうどうにでもなれ。

「一つ疑問に思ったんだが聞いてもいいか？」

「アタシのスリーサイズ？」

なんでお前のスリーサイズを疑問に思わなくちゃならん。

「……なんでお前はこんなに高校こうこうの地理に詳しいんだ？」

葉月に裾を引っ張られてついた場所は屋上であって、授業をしている教室ではない。しかも階段を下っていたような気がするのになぜ屋上なのだろうか。言うまでもないが5限はもうとっくに始まっている時間だ。早くもサボリ1だ。

「アタシはね、入学前から高校こうこうの見取り図を頭に入れたの。それで昨日は一日下回りしたから、頭の中に地図は完成してるわ」

胸を張る葉月の姿を見て、あんだけ食ってたのに80なさそうだな、と俺は悠長なことを思った。

「それで……音楽推薦ってなんだ？」

「え……？ なに言ってるの？」

かわいそうな子を見るような目で俺を見てきた。

「だから音楽推薦ってなんだ？」

「意味わかんない」

「そのまんまの意味だ」

「……もしかして……仁井哉……音楽推薦じゃないの？」

「当たり前だ。俺は音楽推薦の存在すら知らないんだ」

葉月はオーバリアクションにも程がある溜息をつき、

「じゃあなにを基準にこの学校選んだのよ！」

キレ気味葉月。

「家からの距離」

「あんたバカじゃないの？」

怒られました。

「ちよつと運命っぽい感じてたアタシがバカみたいね。しょうがないわね。この高校について一から説明してあげる」

葉月の話によると、

この学校は実は音楽校であるらしく、全国から優れた実力を持った学生を集めているらしい。事実上は県立高校なのだが、どこから

かの支援によって私立など比べ物にならないぐらいの最高の設備が整っているとかいけないとか、やっぱりいるみたいな。この学校からはプロアーティストもかなり出ているらしい。安い学費で高度な技術を身につくということとで音楽推薦の倍率は100倍までに上がったとか。

なるほどね。モヤモヤ感の正体がわかってすっきりしたな。ようするに葉月は俺がここの学校を音楽推薦で受けていた、と勝手に勘違いしてたってわけだ。

「100倍を勝ち上がった戦士ねえ……」
チラリと葉月を見る。

「なによ。アタシはイカサマなんてしてないわよ」
別に疑ってないし、昨日の演奏を聞かされれば嫌でも信じるしかないさ。ただ、お前がそこまで真面目に音楽しようとしていることに驚いているだけさ。

「ねえ、仁井哉。まだハーモニカやってるの？」

「ハーモニカねえ……俺が辞めたと思うか？」

「質問を質問で返すんじゃないわよ！」

普通さ、こういう時さ、ちょっと俯きがちな顔でさ、思っていない、とか言うもんだよね。

「ハーモニカだろ？ やってるに決まってるだろ」

「……リアリー？」

さっき英語の時間で使った単語をさっそく使っている。

「ホントだ」

俺はブレザーの内ポケットから『ハーモニカ』を取り出した。

「良かった……音楽は続けているんだ」

「そういうお前はどうかんだ？ 俺が渡してやったハーモニカはどうした？」

「アタシのは家に置いてあるわよ。盗られたら困るしね」

「誰も盗らねえよ」

「甘いわね、仁井哉。アタシは既に三回盗られかけたことがあるわ」

そんな盗るんだったら財布とか盗んだほうがいいと思うけどな。

「本当にあの時は鳥肌っていうものが立ったわ。アタシが小学生の時……体育の授業のあとに教室に戻ると変な気持ち悪い眼鏡男子がアタシのハーモニカを吹こうとしてたのよ。あー、気持ち悪い」

そのあとの男子がどうなったか気になるな。まあ葉月のことだし、病院送りか、不登校ぐらいにはさせただろう。

「あのときほど殺意が芽生えたことはないわ。もしかしたら今頃アタシは刑務所だったかもね」

「結局そいつはどうなったんだ？」

「顔面に右ストレート一発。眼鏡ごと粉碎させたわ」
充分悪質。

「まあ……そういうことだから今はないの」

そうか、と適当に相槌をとる。

「ねえ！ 久しぶりに聴かしてよ！」

「主語を言え」

「ハーモニカよ。ハーモニカ」

「1演奏500円」

「はい、500円」

マジで渡してきやがった。ジョークが通じない奴だ。と思いつつ自嘲しつつ財布に500円を入れる俺がいるわけだ。

「先に言っておくが、昔となに一つ変わっていないからな」

「そうなの？ そのほうがアタシにとっては嬉しいんだけど」

しょうがなく俺はハーモニカに口を付ける。そして当たり前のことだが音も出る。二人きりの屋上にハーモニカの音色が響き渡る。その音色は十年前となに一つ変わっていない、世界一うまく演奏できている、と、少なくとも俺はそう思っていた。

「……んー。なんか、ねえ」

葉月は歯切れの悪い返事だ。

「なんか不満でもあるのか？」

「不満というより……違和感があるのよ」

「違和感？」

「今の演奏……確かに上手かったわよ……。けどね……十年前とはなにか違うわ。なんだろう……。心に響かない……。みたいな」

「……それだけお前が成長したんだろ」

「そうなのかな？」

春風に葉月の長いツインテールがなびく。

「……そろそろ教室に戻るぞ。俺はお前と違ってサボりなんだからな」

「しょうがないわね」

葉月様先導のもと、俺は教室に向かうのであった。

ウカツだったと言うしかない。

葉月と一緒に授業中の教室に戻った俺はクラスメイトの視線を独占してしまった。お前等は独占禁止法と言う言葉を知らないのか？

……なんて言ってる場合じゃないか。葉月は俺の隣でツンとした顔で立っているだけだし、教師までもが俺のことを凝視している。理由なんて考えなくてもわかる。お前等二人つきりで消えてなにをやっていたんだ、とでも言いたいんだろう。俺も俺の立場ではなかったらそう思うことだろう。ツン顔の葉月はクラスメイトの視線など気にせずに自分の席まで戻っていった。正確に言うと葉月は誰かと視線が合うたびにそいつを睨みつけていた。葉月に睨まれた人たちは肉眼で確認できるほど体をビクッとさせていた。俺にはそんな葉月みたいなブレイブはないので夏場のペンギンのような足取りで席までちょちょこと歩いた。そこからしばらく無言の状態が続き、教師がハツとなにかに気付くような動作をして、やっこのことで授業が再開されたわけだ。

そんな感じなことがあり、授業が終わった今、俺は……正確には俺と葉月は物好きなクラスメイト四人ほどに囲まれている。人気者も辛いもんだ。

「なんだ？ 俺はさっさと帰りたいんだが」

我ながら演技が下手くそだ。誰が見てもわざとらしさMAXだろう。とりあえず状況把握のために周りを見渡して見る。簡潔に述べると、男一人、女三人、誰一人名前を知らないメンツだ。相手もそうだろう。俺の名前など知ってるはずがない。

「さっきは二人でどこにいたんだい？」と眼鏡っ漢。

四人メンバーの男性人代表が最初に口を開いた。葉月は眼鏡っ漢を生ゴミを見るような目つきで睨み、

「アンタには関係ない！ さっさと消えて。気持ち悪いから」

眼鏡っ漢の目頭に光るものが見えた。どうやらガラスのハートだったらしい。

「ねえねえ、もしかして付き合ってるの？」と、縦にも横にもデカい、デカ女。

「うっさい！ デブ！ あんた見てるところこっちまで熱くなるでしょ」

デカ女は両手で顔を覆い隠した。俺の耳にはぼっちゃり系なのに……と呟いているのが聞こえた。そこにはフォローできないな。

そこからしばらく質問責めに合っていた俺と葉月だが、質問に答えているのは葉月だけである。ただし質問を毒舌に変えて返していたがな。

「ニイ」

どこから聞こえてくる小さな声。眼鏡っ漢とデカ女の間からもそもそと出てきたのは——言うまでもない。未梨だ。

「いい加減に——」

こっん。

小気味よい音が鳴った。

なんでだって？ 俺が葉月の頭にチョップしたからだ。

「んもう！ なにすんのよ！」

「お前がいい加減にしろ。色々と言い過ぎだ」

眼鏡っ漢、デカ女より頭一つ分は小さい未梨は十年前から愛用し

ているリュックサックをしよい込んでいて、俺を凝視し、

「帰宅」

と言った。まあ俺は早く帰りたいし、なによりもこの状況から抜け出したかった。

「んじゃあ。帰るか」

「うん」

「仁井哉……ちょっと待ちなさいよ！」

さよならは突然に、だ。グッバイ葉月。健闘を祈る。

俺は5限中に帰りの準備を済ましておいたカバンを持ち、未梨のおかげで出来たスペースから巧みに抜け出した。物好きグループもさすがに俺を止めようとはせずに、あっさりと教室から退散できた。

「ありがとな」

「なにが？」

相変わらずの無表情。

「理由なんて気にすんな。とりあえず助かった」

「……うん」

大抵の奴は高校に入ると革靴などで登校するものだが、俺は普通の運動靴だ。革靴だとイザって時に素早く行動できないだろう。だから俺は運動靴なんだ。と、靴を履き替えた俺は当たり前だが校門に向かう。俺の半歩後ろには未梨が文庫サイズの本を片手で読みながら歩いている。

さて、ここでクエスチョン。何故校門に葉月がいる？

クラスから昇降口まで俺は一度も葉月を見なかった。別ルートで昇降口まで行ったと考えるのは不自然すぎるな。そんな回り込むように俺を待ち伏せする理由なんてのはない、はず。大体回り込む余裕があったら普通に追うのがセオリーだろ？

昇降口から校門までの距離は推定でも50メートルないので、間違えると言うことはまずないだろう。あれは間違いなく葉月だ。校門に寄り掛かりながら腕組みをしているツインテール少女……を見間違えるわけがない。葉月が不機嫌な表情がここからでもはつき

りとわかるね。近づいていくにつれはつきりとしてくる葉月の姿。何故か上履きを履いたままである。

「ねえ、仁井哉」

そのまま葉月を無視して校門を通る作戦だったが、やはり呼び止められた。

「なんだ？」

「その娘、だれ？」

葉月は指先を未梨に向けた。指を向けられた未梨は視線を本から葉月に移した。

「椿 未梨」

と、律儀に自己紹介をする未梨。

「ふうん……。で？」

「で？ ってのはなんだ？」

「あんたと彼女の関係」

「……近所付き合い」

「で？」

「……主語を言え。なにが聞きたいのかをはっきりさせろ」

「ただ近所付き合いだから一緒に下校してるの？」

今の葉月の発言を具現化したら確実にトゲトゲした謎の物体がでてくるだろう。

「そうだ」

「ホントに？」

「ホントだ」

「付き合っているとかじゃないの？」

一緒に下校しているぐらいで付き合っていると勘違いしないでほしいな。幼なじみが恋人同士なんてのはアニメ、マンガ、ドラマのフィクションワールドだけで充分だ。まあフィクションワールドの幼なじみなら「そんなことないよお」と、顔を赤らめて可愛く言ってくれたりするかもしれないけど、未梨は眉一つ動かさず読書中だもんな。少しは恥らえ。

「全力で否定する」

「ホントに？」

「しつこい」

そんな俺の冷たい応答にもかかわらず、葉月はふうーっと息をつき、表情は柔らんでいる。さっきまでのトゲトゲ葉月はどこへ行ったのだろうか。

「そうなんだ。まあそういうことなら仕方ないわね」

なにが仕方ないんだろうか。

「アタシはまだ授業あるからここら辺で退散させてもらうわね。気をつけて帰んなさいよ」

「待て」

今度は俺が葉月を呼び止める。俺の頭にある疑問を解消しないと今夜は眠れそうにないからな。

「なによ」

「なんで俺らより早く校門にいるんだ？　どうやって先回りした？」

「そんなの簡単よ。そこから来たのよ」

葉月が「そこ」と言って指を向けた場所はあるにえない場所――1年2組の窓、即ち俺たちのクラスだ。しかも1年2組の窓全てから、クラスメイトがこちらを覗いていた。

「あそこからどうやってきたんだよ」

「飛び降りたに決まってるじゃない。たかが2階よ、それに下が芝生だから意外と余裕だったわ」

なんとなく想像ができた。目撃者となるクラスメイト数人はさぞかし驚いたことだろう。何人かは卒倒したに違いない。窓から飛び降りる人なんて自殺願望者かラリってる人ぐらいだからな。もしかしたら葉月もラリってる部類に入るかもしれないが、そこは考えないことにしておこう。

「聞きたいことはそんだけ？」

「ああ」

「それじゃあね。えーっと……未梨だっけ？　もしものときは仁井

哉を盾にしていいいからね」

そう言うのと葉月は小型台風、もしくは大型つむじ風のように去っていった。未梨は葉月の姿が確認できなくなるまで小さく手を振っていた。

「帰るか」

「うん」

今日は妙に長い一日だった。前に座っているツインテール少女が実は葉月で、その葉月は音楽推薦というのでここに入學して、さらに葉月は窓からダイブということまでしやがった。クラスメイトからも俺と葉月の関係をなにやら勘違いしているっぽいしな……。俺は断じて葉月などに興味はない。俺の好みは葉月と真逆の性格の人である。俺も一般的の男子高校生なので、彼女が欲しいものだ。まあなんだ。焦る必要はないか。

まだまだ時間はあるからな。

1-3 春先メモリー2（後書き）

やべえ。もう大学受験ではないか。と思いつつ今だFFXIIをやっている自分が悲しいです（笑）

話は変わりますが、今回のお話、少し文字数多いですね。自分的には一話に比べて格段にうまくなっていると思います、と、ちょっと呟いてみました（笑）

2-1 ふらすとれーしょん

入学してから軽く二週間ほどが過ぎた。その間なにも無かった、と、言えば嘘になるが、報告するほどの事件は無く俺は至って平和に暮らしていたのさ。架空請求もこなかったし、ヤクザさんに拉致られることもなかったし、ましてや首にナイフを当てられることもなかった。この二週間で葉月に振り回されるのも慣れてきたし、クラスにだってそこそ溶け込めてきた。まさに順調と言う奴だ。しかし二週間も経ったというのにも関わらず未だクラスに馴染めていない奴が二名ほどこいる。

一人目――は言う必要もないか。葉月だ。葉月は相変わらずのツンツンぶりで、「アタシには近寄るなオーラ」が滲み出ている。あの日の葉月と女子クラスメイトの会話は一ヶ月は忘れられそうになる。そう、あの日は確か……入学して一週間の朝のホームルーム前のことだ。俺と未梨がクラスに入ると葉月と女子クラスメイトが二人きりで話をしていったんだ。

「ねえねえ、瀬尾さんって音楽推薦で来たの？」

「だったらなんなの？」

俺は別段会話内容を盗み聞きしようとはせずに、自分の席まで向かった。俺の存在に気付いた葉月は相変わらざるの嫌らしい笑みを浮かべ、朝の挨拶をしてきた。

「おはよっ」

「よお」

「あ、仁井哉くん。椿さん。おはよう」

名も知らぬ女子クラスメイトは俺の名前を呼んで挨拶をしてくれた。なんだか申し訳ない気分になる。

「ああ。おはよう」

「……」

この三点リーダーは言うまでもなく未梨だ。

特に葉月の会話に興味があったわけでもないが、教室という空間の中には俺、未梨、葉月、女子クラスメイトの四人しかいないうえに俺の席は葉月の真後ろだ。聞きたくなくても勝手に耳に入ってくる。女子クラスメイトに対して葉月は腕と足を組みながらお前は何様だ？　と言いたくなるような態度でイライラを隠しきれておらず――いや、もともと隠すつもりなんてないのか。

「あたしさあ……音楽推薦で落ちちゃった人なんだよ」

「だから？」

「なんだか瀬尾さんのこと尊敬しちゃうな。すごいよね。百倍の倍率の中で合格しちゃうんだもん」

尊敬する人を完璧に間違えてるよ。

「どうも」

「瀬尾さんってなんの楽器で推薦受けたの？」

「アンタには関係ない」

突き放す、というより突き刺すような言葉。女子クラスメイトは少し戸惑ったような表情になったが、すぐに元の表情に戻った。

「……あたしはねえ――」

「どうでもいい。アタシは忙しいからあんまり話しかけないで」

「あ……うん、ごめん」

さすがに今のはキツかったらしい。女子クラスメイトは苦笑して俺の方を見てきた。なにが言いたいんだろうか。答えはその日の昼休みにわかった。

その日の昼休み、葉月が学食に行っている時のことだ。葉月に話しかけ見事玉砕した女子クラスメイトに話し掛けられた。

「瀬尾さんって変わった娘だね。どうやったらそんなに仲良くなれるの？」

「仲良くなりたいたいのか？　あんな奴と」

「そういうわけじゃないけど……このままだと瀬尾さんが仲間外れになっちゃいそうな気がして……なんだかわいそう」

まず葉月に哀れみの感情をもつことを間違えてる。

「もしそうだったとしてもそれはあいつのせいだ。ほっとけばいい」
「……うん。もしそうなくても瀬尾さんにはあなたがいるもんね。
いいなあ。瀬尾さん。あたしも優しい彼氏さんがほしいよ」

俺はこの件についてずっと勘違いされたまんまだ。何人かの野次馬どもには釈明はしたが、クラスの大部分には勘違いされたままだ。まあ無理もないけど。この学校で葉月が俺以外にまともに会話をしている光景をみたことないからな。それにしてもこの件については俺の元にしか聞きにこないとはどういうことだ。

「何度も言ったが俺と葉月は——」

弁解する余地もなく彼女は仲良しグループの中に戻っていった。
……都合のいい人だ。

そして二人目は——想像道理の人物。未梨だ。未梨が一人でいることは俺にとっては見慣れた光景なので今更どうこうしようとは思わない。むしろ未梨がみんなと仲良くワイワイやっていたらそれこそ俺は未梨が危ない薬をやっているのを全力で疑うだろう。しかしそんな光景に見慣れているのは俺だけであって俺以外のクラスメイトはどうにかしてクラスに馴染ませようとする。無駄だと思うけど。
ある日の昼休み。

「椿さあん。なーに読んでんのお？」

「聖書」

「……あははっ。聖書かあ。椿さん。神様とか信じてる人？」

「別に」

「あたしも結構本読んでるよ」

「……」

「恋愛小説とか読んでる？」

「……」

「よかったら貸してあげようか？」

「……………」

「……」

最終的には沈黙が訪れるんだ。難儀なもんだ。

そしてやはり俺の基に相談が来るんだ。いい加減やめてほしいね。
「椿さん。人見知りが激しいのかな？」

人見知りもなにもあいつは元からあやう性格なんだ。ほつてやれ。それにあいつは基本的に4バイト以上の発言をしない。

「ところで仁井哉くんってどっちが本命なの？ 瀬尾さん？ 椿さん？」

ところで過ぎるだろ。それに予め聞くつもりのような言い回しっぽい。

「二人とも断じて違う」

「優柔不断な態度だと二人とも逃げられちゃうよ」
まるで聞いてねえ。

「早いとこどっかに決めてあげなよ。お互い傷つくだけだよ」
「どういつもこいつも……他人の不幸がそんなにいいか。」

まったく。なんでもかんでも俺に任せないでほしいね。バカと無口は無駄に刺激するより放っておけばいいんだよ。そのほうがクラス風紀が安定するってもんだ。葉月は勝手にツンツンしてればいいし、未梨は黙って本を読んでればいい。放任主義万歳。のはずだったんだが、どうやら俺は貴重な人間らしい。葉月と未梨とまともに話せる人材はこのクラスじゃ俺だけらしいからな。通常状態の未梨は野生のカマキリぐらい人畜無害なのでいいとして、問題は葉月だ。葉月は頻繁にトラブルを起こし、その起こしたトラブルもろもろは全て俺にまでトバッチリが飛んでくる。クラス替えはまだかな？

別に俺はいつも葉月や未梨と一緒にいるわけじゃない。比較的高校生らしい高校生活を送っているつもりだ。未梨と行動を共にしているのは登下校だけだし、葉月と話をするのだって大体が授業中や

授業と授業の間の10分休みだ。昼休みになると葉月は決まって学食に向かう。葉月は学食に行く前に俺に「今日はお弁当？」と確認してくるだけで、無理やり連れて行こうとはしなくなった。そしてその昼休みこそが唯一俺の心休まるときである。昼休みになると葉月がいなくなったことで俺のまん前席が空くことになる。そこに来る奴がいる。体育の授業中に比較的に利害が一致し仲良くなった斉藤である。斉藤は俺と向かい合うように座り、一緒に弁当を食べている。別に俺は一人でも構わないんだがな。

「お前、本当に瀬尾葉月と付きあってないのか？」

「何回も言っただろ。俺とあいつはそういう関係ではない」

斉藤は俺の弁当に箸を差し出してきたが、俺はそれを取っ払う。

「ちえ、少しぐらいいいじゃねえか」

「そこまで俺の心は成長していない」

しぶしぶ斉藤はタコさんウィンナーを口の中に放り込んだ。

「瀬尾って音楽推薦で来たんだろ？」

「そうらしいな」

「あいつこの学年の中で一番期待されているらしいぜ」

「誰が期待してるって？」

「校長」

「それは随分期待されてるこった」

「そういえば……葉月の演奏はプロレベルとかどうとか……俺には関係のないことか。」

「教師たちからは期待の新星とか言われてんだぜ」

「そういう情報はどこから手に入れてるんだ？」

「おっと。それは言えないぜ。けどなにか知りたいことがあったら俺に聞きな。どんな情報でも格安で教えてやるよ」

金取るきか。どうせ金払う価値がない情報しかないだろ。

「ふふ。俺を舐めるなよ……おい」

突然斉藤は小声になり手招きをしてきた。しかも挙動不審。

「斉藤様の情報網はな……気になるあの娘のスリーサイズまでわか

るんだぜ」

「……ふうん」

この時自分の表情がどうなっていたかはわからない。きっと軽蔑の眼差しを斉藤に向けていたんだろうな。

「マジだ。そうだな……あいつ見ろよ」

斉藤が顔と眼をちよいつと動かして、ある方向に目配せした。ちらつとそちらの方向を見るといかにも生真面目そうな女子一人が勉強に励んでいた。そういえば次は英語の小テストだっけ？

「身長161センチ、体重51キロ、スリーサイズは上から82、55、82、だ」

「斉藤」

「おうよ」

「そんな情報はどうでもいい」

「なっ……」

と言って斉藤は口を半開きのまま固まった。オーバーリアクション過ぎる。

「そうか……お前にはそんな情報は必要ないってか。彼女さんといチャイチャしたい放題だもんな」

「だから葉月は――」

「瀬尾じゃないのはよくわかってる。いいよなあ。ニイニイは」

「……イヤミか」

「俺にはお前の発言がイヤミに聞こえるぜ。一学年の女子ランキング上位二人と仲がいいんだからな」

斉藤は俺に聞こえるぐらいの小声で喋っている。それもそうだ。俺の後ろには未梨が健在だからな。たとえ未梨に聞かれたところで未梨がなにかアクションを取るとは思えないが、一応斉藤なりに気を使っているのだろう。それにしてもそのランキングは一体どうやって集計しているのだろうか。是非俺も拝見したいものだ。

そしてまた2週間が過ぎた。今日もバカみたいに早い時間から登校だ。もはや俺のストラップ的存在になっている未梨は、俺の半歩後ろという定ポジションでいつものように読書に没頭中だ。

「よう、仁井哉と椿」

背後から誰かに呼ばれたような気がする。低血圧気味の俺には振り向く力など無いし、反応してやる力もない。未梨も無反応だし、気のせいと言うことにしておこう。

「おいおい。無視はねえぜ」

俺の視界に斉藤が入り込んだ。

「なんだ……お前か。なにか用か……？」

「友達に向かってそりゃあねえだろ」

「そうか……。すまん」

「どうした！？ 元氣ないな！？ 気合入れようぜ！」

俺は低血圧で朝に弱いんだよ。なんだよお前のウザったいぐらい高いテンションは？

「お前こそどうしたんだ？ いつもは遅刻ギリギリの癖に。なんか良いことでもあったか？」

「良いことなんてのは明日から起こる予定だ。なんて言ったって明日からは全国民が待ちに待ったゴールデンウィークの日だぜ？ まさか忘れてたのか？」

……ゴールデンウィーク。もうそんな時期か。完璧に忘れてた。

「それで、だ。仁井哉。ゴールデンウィークの予定はなにかあるのか？」

「ずっと寝てるな」

「よし、ヒマだな。じゃあ……そうだな。明後日11時に駅前集合だ」

「……勝手に決めるな」

「まあそう言うな。きつとお前も喜ぶだろう場所に連れてってやるから」

と、半ば強制的に約束を取り付けられた。まあ一日ぐらいはいいか。

斉藤は自分のゴールデンウィークのスケジュールを勝手に語りだした。一日目はクラスの連中と都会へナンパしに行くらしい。俺も誘われたが、もちろん断った。二日目は俺を拉致してどこかに行くらしく、三日目は……もう聞くになれないな。

「ニイ」

ブレザーの裾をくいくいと引っ張られる。

「なんだ？」

と言って、振り返ると……珍しい。未梨が携帯を覗きこんでいるじゃないか。右手に携帯、左手は俺のブレザーの裾。さっきまで未梨が読んでいた本は不自然な形でブレザーのポケットから食み出していた。

「明日、出かける」

未梨は携帯を凝視したまま言ってきた。

「……ん？ それで？」

視線が携帯からゆっくり俺に代わっていく。

「ニイ、わたしと出かける」

「……なぜ？」

「……だめ？」

無表情のままの疑問形はやめてほしい。返って不気味だ。

「人差し指を顔の前まで持ってきて、首を80度ぐらいの状態での台詞を言ってくれたら個人的には嬉しい」

我ながら意味不明なことを言ってしまった。未梨は携帯をブレザーのポケットにしまい込み、右手人差し指を顔の前にやり、首を80度ぐらいの状態に傾けた。

「だめ？」

無表情無感情。モナリザの絵でももう少し表情に変化があるな。

ま……いいか。未梨から初めてのお誘いだ。どうせヒマだし……付きあってやってもいいか。

「いいけどな……そのかわり……『変な抗争』に巻き込まれるのは勘弁だからな」

「絶対に平気」

眼鏡の反射のせいかもしれないが、少しでも未梨の目つきが変わったような気がした。

斉藤が気分良く先導しているなか、俺は携帯のカレンダーを覗きこんだ。今年のゴールデンウィーク五月一日から五日までの五連休。よし、三日間は寝れる。

っと、その前に今日の授業を乗り切らないとな。

2-1 ふらすとれーしょん（後書き）

すごい余談ですが、10月から11月にかけて私が買った本は12冊。財布のシーズンも冬に替わりつつあります（笑）。

そして昨日も一冊買いました。ぴるぴるぴるぴるぴー♪で有名？なライトノベルです。意外にもおもしろかったのでコメディー好きにはお勧めしますよ（笑）

2-2 にゅーふえいす

ゴールデンウィーク一日前の一限目の授業は……体育。体育は比較的楽な授業だが、一限目となれば話は別だ。朝に超弱い俺がしょっぱなの授業から体を動かすということはサハラ砂漠のご真ん中でキムチ鍋を食べるぐらいつらいことだ。苦行なんて勘弁。この時間割について俺は教育委員会に訴えたいと思っている。どうかな？

「なにくだらないこと言ってるのよ」

体育着姿の葉月が言ってきた。俺が教室に入ったときは葉月は既に体育着姿で、いつでも戦闘態勢OKみたいな状態だった。いつも葉月は俺たちより早く来ているが、はたしてコイツはどれぐらい早く家を出ているんだろうか。

「ところで葉月。お前の体育着のサイズおかしくないか？」

葉月が着ている半袖のシャツが不自然にデカイ。シャツがふともも辺りまで延びていて短パンが大分隠れている。変な奴が見たら興奮しそうだな。

「一着だけ大きめの買つといたのよ。いつ背が伸びるかなんてわからないもんね」

「大きくなってから着ればいいだろ」

「他の体育着は洗濯中なのよ。今はこれしかないから、しょうがなく着てるの」

事情はわかった。だが、今からその体育着のサイズに合うスタイルになるのは、人智を超えた突然変異でもない限り無理な話だ。あと何センチ身長伸ばす気だよ。それと何故このくそ寒い中お前はジャージを着ないんだ。

「気合の入れ方が違うのよ。ほら、あんたもしっかりしなさいよ」
そんな精神論じゃ、今時の小学生でも通用しないぞ。

「俺は朝に弱いんだよ」

「そんなの体動かせばいいことでしょ」

「そうだぜ。仁井哉」

いきなり俺の机に座ってきたのは斉藤。しかも体育着姿で。いつ着替えたんだよ。

「体を動かせ、そうすればいつのまにか体がポカポカだ」

帰宅部の癖に体育会系の発言をするな。

「わかったから、どけ」

俺は斉藤の背中をぺちぺち叩き机の上から退かした。

「で、今日の体育はなにすんだ？」

「今日はな、ソー——」

「今日はソフトボールよ！」

斉藤の言葉を掻き消し、葉月が言ってきた。

基本的にウチの学校の体育は2クラス同時進行でやる。なのでウチのクラスの場合は一組と一緒にやることになる。そして男女混合だ。ついこの前までの体育はスポーツテストというものをやっていた。握力、持久力、腹筋、50メートル走、etc、など、無駄に細かく計測され、A＋～E－形式の評価で判定される。やる気の無い俺は全部テキストにやっていたら、ものの見事、判定はE－。文句のつけようのない最低ランクだ。忌々しいことに斉藤はB＋の判定だった。なにより俺を除く生徒を驚かせたのは……葉月の判定がA＋だったっていうことだ。俺はなんとなく予想できてたが、それでもちょっとは驚いた。ちなみに男子の平均はB、女子の平均はD＋。高校創立して女子でこの評価をもらった人は葉月が初めてらしい。このスポーツテストで葉月の名前は学校中に一人歩きするようになった。葉月の名を知らない奴が、この学校にいたとしたら、そいつは不登校の奴らぐらいだ。音楽推薦とスポーツ推薦を間違えたんじゃないのかと疑うね。

そして俺の身内もう一人。未梨だが……。

……

……

…

スポーツテストの日。

俺は予め未梨に言っておいたことがある。

「いいか、絶対目立つなよ。50メートル走は9秒台で走れ」

「うん」

「間違っても握力100とかは出すなよ。せいぜい30までだ」

「うん」

「おーけー？」

「うん」

…

…

…

というわけで未梨のスポーツテストの判定はC-。伏線と言えば聞こえがいいだろう。

まあ、ソフトボールで良かった。マラソンとかの走る系統の種目だったら今頃俺は教室で睡眠授業を受けていたことだろう。担当教師なし、単位0、授業参加人数0〜2人の。今頃だって誰かは寝ているんじゃないか？

そんなわけで今現在は斉藤と仲良く？キャッチボール中だ。斉藤は投げるたびに「うおりゃ」とか「喰らえ」とか「スカイフオーク」とか、漫画オタクを疑うような発言をしている。しかもボールがよく俺の頭上を越える。いわゆる暴投だ。その度に俺は走らされることになる。これではあんまりマラソンと変わらないような気もするが、考えると憂鬱になるのでなにも考えないことにした。

一方、しょぼくれた俺たちの隣でバシバシとグローブの芯に上手く入らないと鳴らない音を立てながらキャッチボールをしている奴らがいる。周りの奴らもちらちらとそいつらを見ている。言うまでもなく一人目は葉月だ。

「えいやあ！」

コイツはいちいち投げるたび気合入れる派か。

葉月は腰の回転力を限界まで使う、トルネード投法で『相方』に向かつてものすごい球を投じている。

しかし葉月の常人では考えられない身体能力の良さはこの一ヶ月で知れ渡っているはずなので今更誰も驚かないはずだ。なら何故葉月たちが注目を浴びているのか？ 答えは簡単だ。

「……」

葉月の『相方』が『未梨』だからだ。今まで目立ったところがなかった未梨が、葉月の140キロ（推定）のボールをいつもの無表情でなんなく捌いている。これには担任もとい体育教師永田も驚いている。しかし投げ返すときは葉月にギリギリ届くか届かないぐらいのふにゃーんとしたボールで返している。そこが返って眼鏡っ娘好きの心をくすぐるのかもしれない。

葉月は別に未梨の捕球センスには驚いてはなさそうだ。バカだからな、捕れて当たり前、とか思っているんじゃないのか？

「もっと強く投げていいわよ！」

葉月の言動に未梨は投げるモーションを中断して、なぜか俺の方を見てきた。

「……」

無言メッセージ。これは俺にしかわからない未梨語。わかってしまふ自分が哀しい。つまり、未梨の言いたいことは「強く投げていいの？」だ。

「今の力配分で充分だ」

俺はぼそぼそと真横にいる未梨に聞こえるように言った。ゆっくり頷いた未梨は、葉月に向かい、

「これが限界」と、言った。

キャッチボールをしばらくしていると、ウチの永田が集合をかけたきた。まだ四月末だというのに、夏を疑わせるタンクトップに短パンと、見ているこっちが寒くなってきたようなコーディネートだ。

「男子は大体いいんだが、女子があんまりできていないな」

一応言っておくが、キャッチボールの話だからな。

「というわけでテキトーに男女ペアでやってくれ」

難しい要求をあっさり言ってくれるな。こういうのは教師が決めるべきだ。そうじゃないと俺の身が持ちそうにないからな。

こんなときに俺が組む相手といったら、かなり絞り込まれる。葉月、未梨……これ以上思い浮かばん。これは明らかな女子メンバー不足じゃないのか？

「仁井哉！ アタシとキャッチボールするわよ！」

今日の葉月は当比社50%増しでテンションが高い。ただでさえ殺人的なボールなのに、いつもの5割増しの葉月の球を受け止めてみる。1球ごとに俺の手にはアザが刻まれることだろう。授業終了後の俺は119に電話を掛けてるに違いないね。未梨は未梨で無表情でこちらを凝視している。あれは「俺と一緒にキャッチボールをしたい」という未梨の精一杯の意思表示だ。多分。

「瀬尾は椿とそのまま続けてくれ！ お前らはなにも問題ないからな！」

まさにそれは永田神の救いの言葉だった。

永田さん。俺の中ではあなたのかっこよさは今キムタクを越えましたよ。

「残念だなあ」

と、残念そうなそぶりをしてみる。

「……まあいいわ。また今度しましょ」

残念だな。葉月。今度なんてものは二度と来ない、いや、来させない。と言ったものの相棒候補の二人が消えてしまったな。さて、どうしようか。テキトーに顔のわかるクラスメイトを誘うのが妥当

なところだろうか。

右、前、左、と見渡すと、男女を問わず、まだかなりの人数が余っていたが、斉藤はきっちりパートナーを見つけていた。さすが自称ナンパ師と言うだけのことはある。俺はもう一回周囲を見渡すと、すぐ隣の女子と眼が会った。確か……斉藤にプロフィールを教えてもらった女子だな、名前は知らんけど。女子は顔を軽く赤らめて視線を反らされた。その仕草がなんとも言えぬ可愛さがあった。

この娘でいいか……。そう思い、声を掛けようとしたとき、

「仁井哉さん。ウチと組まないかいっ?」

と、テンションの高い声を発しながら、見覚えのない女子がどこからともなく湧き出てきた。少なくともクラスメイトではないことは確かだ。セミロングの髪に垂れめがちな眼。こんなに可愛い娘をクラスで見逃すわけがない。俺の名前を名前を呼んだ、ってことは少なくともあつちは俺のことを知っているってことだよな?

「だめかいっ?」

ぐぐーっと彼女の顔が急接近してきた。だめなものにも……断る気などさらさらない。というわけで、すまん、俺が誘おうとした女子。

「いや……いいよ」

「ありがとっさんっ!」

更に彼女の顔が近づいてきたので、俺は少しのけ反るような体勢になった。それに気付いたのか、彼女はすぐさま俺との距離を5メートルほど開けてくれた。

「仁井哉さん。ボールは持ってるん?」

「ああ」

「じゃっ、ウチのはいらないね!」

いちいちテンションの高い人だ。葉月とは別の意味で。

「ばっちこーい!」

と、さりげなく急かしているので、俺は彼女に向かって限りなく捕りやすいスピード、コースに投げた。ボールはふわふわと上空を

舞っている。彼女は上空にあるボールを見つめているだけで直立不動状態だ。上にグローブを構えていれば捕れるというのにも関わらず……彼女はグローブをしている左手を構えずに、なにも身につけていない右手を天に翳している。

まさか素手で捕るつもりじゃないよな？

彼女はまるで動く気配がなくなったただ右手を天に翳していた。俺によって投げだされたボールは位置エネルギーを運動エネルギーに変換しつつスピードをつけて彼女の頭上に向かって一直線に落ちる。彼女は肝心なグローブを装着している左手を背後に回している。

「なにっや——」

ってんだよ、と言うところだった。

ボールはきっちり彼女のグローブに納まっている。

ボールが彼女の右手に当たる瞬間、彼女一步前進し、あらかじめ背後に回しておいた左手でボールをキャッチした。簡単に言えば背面キャッチ。この人も葉月や未梨と同じ扱いでいいんじゃないのか？

「びびったかいっ？」

男を魅了する小悪魔のような顔で言ってきた。

正直なところ俺は少し魅了された。

「少しな」

「少しかぁ。ざんねんっ！」

なにが残念なのだろうか。

「いっくよー！」

アundasローか、と思わせといて、彼女は腕は一回転させて投げてきた。

ソフトボール投げ？

彼女の手先から離れたボールは葉月ほどまで、とはいかないが、予想以上に速い。だが見えないことはないスピードだ。

ぱすん。

小気味よい音を起てて俺のグローブ内に納まった。

「おお。さすが仁井哉さん。運動神経いいねっ」

「それほどじゃない」

キャッチボールをしながら俺は、彼女が誰なのかということを必死に模索していた。全然わからん。

「ところで仁井哉さん。ウチのこと覚えてるん？」

「すまん。わからん」

「やっぱりかあ。ウチは一日たりとも仁井哉さんのこと忘れたことないのになあ」

忘れられないぐらい俺はすごいことをやったのか？

「ウチも仁井哉さんと一緒に青中出身なのになあ」

青中出身……？ 彼女を見ながら中学三年間の記憶を検索する。該当するデータ0件。

「名前は？」

「龍円寺うららでっすっ！」

龍円寺うらら？

「偽名？」

「失礼ですな。本名だよん」

龍円寺うらら……まるでどこかのお嬢様みたいな名前だな。名前だけでも聞いたら三年は忘れそうにないぐらい特徴的だな。しかも可愛いし、忘れる要素がない。

「まったく思いだせん」

「うん。だってウチ、仁井哉さんに自己紹介した覚えもないもんもんっ」

じゃあ、わかるわけないだろ。

「龍円寺さんはなんで俺のことを知っているんだ？」

同級生なのに「さん」付けてをしてしまった。

「なんていったって……ウチは仁井哉さんにLOVEだからっ！」

「なんだってえ！」

何故か俺より早く斉藤が反応した。

……そんな大声で宣言する必要ないだろ。もっとさ、こういうも

んは放課後の二人きりの教室とかで言うもんじゃないのか？ ていうかみんなの視線が痛い。

俺は俺で動揺しまくりだ。一分間の心拍数は90回を突破してるだろう。

「ごめんごめん。冗談だよんっ！」

「なんだ。冗談か」

おい、斉藤。それは俺の台詞だ。

「びびったかいっ？」

「かなり」

「かなりいー。入りましたっ！」

こんなテンションの高い人なら忘れそうになさそうだけど。

「まだウチのことわからないん？」

「ああ」

「ひどいですなあ。ウチと交わったあの夜の約束覚えてないん？」

「あ、あの夜の約束！？」

またしても斉藤が反応したが、斉藤以外の住人は既に反応していない。

この人は自分でそんなこと言って恥ずかしくないのだろうか。逆セクハラ？

「そんな約束は誰ともしとらん」

「またまたあ。仁井哉さんも隅に置けないなあ」

龍円寺さんのテンションは急成長を遂げた右肩上がりの会社の売り上げぐらい上昇し続け、衰える気配がない。

俺は本当に龍円寺さんと会ったことがあるのだろうか？ ここまで元気な人だったら夢にまで出てきそうなんだがな。もしかして3年もの間、ずっと俺に片思いとか？ いや、ねえな。別に部活やってたわけでもないし、体育祭などのイベント行事だって、やる気のない一般生徒に過ぎなかったはずだ。はたして中学の女子何人が俺のことを覚えているもんか。30人いれば健闘したほうだろう。

「仁井哉さん！ ボールボール！」

考え込んでいたら、俺は手のひらにあるボールを見つめていた。

「悪い」

サイドスローで龍円寺さんに投げ返した。

「いまエッチなこと考えてたのかなっ？」

「考えとらん」

「またまたあ。仁井哉さんの顔がすんごいニヤけてたよん。ウチのこと見て興奮しちゃったっ？」

第三者が聞いたら、勘違いしそうな言い方はやめてくれ。

「いい加減キミの正体教えてくれないか？」

「龍円寺うららでっすっ！ うららちゃんって呼んでねっ」

「……真面目に」

「偽名じゃないよお」

「俺はいつ、龍円寺さんとあったことがある？」

「だからあ、あの夜――」

「それはもういい」

「当ててくださいっ。当てたらほっぺにチューぐらいしてあげるよんっ」

おいしい話だが、丁重に遠慮しとこう。まだ俺はブラックリストに載りたくないからな。

「わからん」

「しょうがないなあ。じゃあヒント1！ いえーい！ ぱちぱち！」
1 って言うんだから2、3もあるのだろうか？

龍円寺さんは「ふふーん♪」と鼻歌でリズムを取りながら左手に装着中のグローブを外し、手首に付けてある髪留めゴムを取り外して、セミロングの髪を後頭部にまとめあげた。

「どう？ 似合う？ 似合う？」

そう言っただけで出来上がった髪形は、ポニーテール。
くそ似合っていると思うが、それがなんのヒントになるのだろうか。

「これがウチの中学時代の髪型だよっ」

ポニーテールなんて髪型は結構いるもんだろ。ヒントにならん。

「ヒント2は？」

「ヒント2いっちゃうの？ そしたらほっぺにチューがおでこにチューになっちゃうよん？」

むしろレベル上がっていないか？

「ウチはみりりんの親友だよっ」

「みりりんって誰だ？」

「みりっちだよお」

「誰？」

「仁井哉さんにぶにぶう。椿未梨ちゃんだよお」

「未梨の？ 親友？」

「いえーす、いえーす！」

未梨の親友……？ 中学三年間でアイツが俺以外と会話していたのは……………。

……………

……………

……………

中学時代、と言ってもまだ卒業してから半年も経っていないけどな。

未梨とクラスが一緒だったのは3年のみ。それ以外は違う。

3年の時、昼休みになると必ずウチのクラスに来る女子がいた。

その女子は妙に高いテンションで未梨と一緒に昼メシを食べていた。未梨も満更でもない様子で（といっても無表情だが）楽しそうにお弁当を食べていた。

その女子とは一回だけ話したことがある、ような気がする。

そう、あれは……高校が決まってからの次の週のことだ。昼休みに荒木（＊プロログ2参考）とメシを食べていたとき、

「キミが仁井哉さんかいっ？」

突然、ポニーテール少女に話し掛けられた。

「そうけど？」

おでこが当たりそうなくらい彼女の顔が近づいてきた。

「なに？」

「あ、気にしないでっ！」

気になるって。

なにかを観察するような目つきで俺はひたすら見られていた。超近距離で。彼女の息遣いが聞こえてくるどころが、息が俺の顔に当たるのがわかる。このままじゃ俺がどうにかなりそうだ。

「うんうん、合格だねっ」

意味不明な言葉を残し、彼女はクラスを出て行った。

この後に荒木に尋問されたことは言うまでもない。

…

…

…

「……中3のとき俺に意味不明に『合格』って言った人か？」

「ふぁいなるあんさーかいっ？」

「ファイナー——」

「正解っ！」

早いよ。

「仁井哉さんあいかわらずポケポケだねっ」

あいかわらずと言われるほど会話をした覚えはないんだがな。

「ところで俺のなにが合格なんだ？」

「ひみちゅだよん」

「……秘密ね。そうかい」

「まっ！ 以後お見知りをつ！」

「……ああ。よろしく」

そこで俺はあることに気がついた。

とても強い視線を感じる。しかも殺気と悪意の両方を感じる。殺気をする方向に恐る恐る振向いてみた。

また、葉月か……。

「あれれ。瀬尾さんにすごい見られてるねえ」

見られてるなんて甘いレベルじゃない。あれは眼力で俺のことを殺す気だ。

「やっぱり仁井哉さんの競争率は高いですなあ」

いや、定員割れですよ。

「おーい。集合だ！」

またしても永田に集合を掛けられる。その時、俺はグラウンドの極めて端で龍円寺さんとキャッチボールをしていた。50メートルほど離れた場所には葉月がいて、ひたすら睨まれており、俺は普通にキャッチボールさえやらしてもらえなかった。

だから俺は永田の集合に助けられた気がした。

「なんとなく女子もできるようになってきたな」

校舎に付いている大時計は授業終了の時間を指していた。

「十分間休憩したら、次は試合するか」

その言葉に俺は絶望した。言われて気付いたが、今日は一時限目と二時限目の連続体育というおぞましい日だった。くそ、この日程を造った奴は誰だ。

というわけで、二時限目突入。

試合をする、といっても所詮は授業でのソフトボールだ。たかだかレベルが知れている。

チームの決め方は単純明快。永田お手製のクジで決めるのだ。クジにはAからDの4種類のアルファベットが書き込まれており、Aチーム、Bチーム、Cチーム、Dチームと分かれる。Aチーム対Bチーム、Cチーム対Dチーム。そんだけ。

俺のクジにはA、と書いてあった。

「仁井哉、見せなさい」

さっきまで俺にほんまもののガンをつけていた葉月に容赦なくクジを奪い取られた。どうやら今は怒ってはなさそうだ。……ってなんで俺がコイツの顔色を伺わなくてはならないんだ。

「あれ、一緒じゃない」

と、言う葉月はどこか、にやついて、

「アタシと同じチームになったからには敗北は許されないわよ」

なにをたかが授業のソフトボールに気合を入れているんだ。そんなにやりたかったらソフト部にでも入部しろ。お前なら即レギュラーだろうよ。

そんなことを思いつつ、俺はAチームの面子を見渡した。俺はクジにインチキにあったことを疑ったね。

「仁井哉と一緒に。足ひっぱんじゃねえぞ」

一人目。お調子野郎、斉藤。お前こそ足引っ張んじゃねえよ。

「わおっ。仁井哉さんも一緒かいっ！」

二人目、ムードメーカー、龍円寺さん。できればその元気を俺に分けてほしい。

「……」

三人目。三点リーダーのエース、未梨。龍円寺さんに背中をポンポン叩かれてる。

「やあ仁井哉くん。久しぶりだな」

四人目。……誰だっけコイツ？ どこかで見たことあるハンサム野郎だな。

「誰だ？ お前？」

「僕を忘れたのか？」

「完璧に」

「僕はキミのことを一日たりとも忘れたことがない」

そんなさわやかな笑顔で、男に言われたくない台詞ナンバー1を言うな。鳥肌が起ってくるだろ。俺にはソッチ系の趣味はない。他

を当たってくれ。

「僕もソッチ系の趣味はないんですけど」

「嘘をつくな」

「ホントだ。キミは忘れているようだから、教えます」

誰も教えてくれなど頼んでない。

「キミに初めて会ったのは……入学式の日の放課後」

入学式の日のことは葉月に拉致られたことしか覚えがない。そういえばあの時は、葉月が葉月だということを知らなかったんだな。あれからもう一ヶ月か……早いもんだ。

「僕を無視するな！」

無視するものにも最初から聞く気などない。勝手に喋ってろ。

「えーっと。吉田だっけ？」

「田村だ！ カスつてもないじゃないか！」

田村？ ああ、ナンパ野郎か。

「そうか。すまん」

愚痴っている田村を無視して、五人目。なんとなくイタイ女、葉月。

「人数が少ないわね」

6人目、俺。

以上。補欠以前にメンバーが足りていない。

「ま、使えない奴がいるより、いないほうがいいわ」

あいかわらず葉月は毒舌。お前の使える基準はなんなんだ？

明らかなメンバー不足のため、緊急で担任永田が入ることになった。そんな永田は葉月ほどもでじゃないが、やる気に満ち溢れていて、

「やるからには勝つ気で行くんだ！」

熱いですね。俺にはついていきませんよ。

試合開始、の前に決めることがあった。ポジションと打順だ。

「アタシは三番、ショートで」

意外にも地味なところを選んできたのは葉月。お前なら四番、ピ

ツチャーとか言うかと思っただけだな。そこらへんを聞いてみると、「ソフトボールのピッチャーって下投げでしょ？ アタシには無理よ。それにピッチャーなら適任者がいるじゃない」

「適任者？ 誰だ？」

「斉藤」

「斉藤？」

まさに予想外の人物だった。

永田を含む6人の目が斉藤に移動する。斉藤も「俺？」という顔だ。

「な、なんで俺なんだよ？」

「アンタの名前は斉藤でしょ？」

あ、なるほど。「斉藤祐樹」、ね。本人とは字は違うけれど、口で言えば誰もわからん。

「斉藤。俺もお前でいいと思う」

「まさか……お前ら名前で決めてないか？ 大体あれは野球だろ？」

「野球もソフトボールも大して変わんないわよ」

あれ？ さっきお前は下投げだから自分じゃできないとか言っくなかったか？

「打たれたらどうなるかわかってる？ 殺すわよ？」

という葉月の脅迫染みた一喝により、斉藤は6番、ピッチャーに決まった。

「ねえ仁井哉。どこがいい？」

「どこでもいい」

こうしてウチのチームのオーダーが決まったので紹介したいと思う。

一番、キャッチャー、永田。二番、セカンド、龍円寺さん。三番、ショート、葉月。四番、サード、未梨。五番、ファースト、田村。

六番、ピッチャー、斉藤。七番、外野全部、俺。

いや、おい、こら、まで、この野郎、なんだこれは。

勝てる気がしねえ。

2-2 にゅーふえいす（後書き）

続きますよ。

ここで重大発表ですが、なんと私は大学に合格してしまいました！

正直そんな重大じゃないですね（笑）。

ということでもたしても余談をします（笑）。キャラクターをつくる
とき、私は「歌」を参考にして、そのキャラをつくっています。ホ
ントどうでもいいですよね（笑）

2-3 そふとぼーる（前書き）

半径20Mエメラルドスプラッシュー！

2-3 そふとぼーる

ソフトボール。いつからそんな球技が出来たかなんて言うのはわからん。わかることはソフトボールを漢字で書くと「墨球」ということだけだ。ルールはほぼ野球と同じだろう。ボールの大きさがちよつと違うぐらいだ。更にウチの授業のソフトボールは使用する球は通常の球より柔らかい、「イエローボール」を使用する、らしい。もちろん通常の球よりお値段も高い。確かにあんな硬い球が当たって怪我人でも出たら大変だからな。最近文部科学省大変そうだし、これ以上問題を起こして欲しくないだろう。

まあ、勝ち負けなどはどうでもいいことだ。俺が今やっているソフトボールというものは、勝利したところでなにかを得るわけでもないし、ましてや日の丸を背負って試合しているわけでもない。得るものがある、と言えば肉体的疲労ぐらいなものだ。気合を入れたところでそれこそ無駄ってもんだ。なのに、どうしてウチのチームの連中はこんなに気合を入っているのだろうか。理解に苦しむね。

そう考えての一回表。先攻後攻を決めるジャンケンで自信満々で名乗りを挙げた葉月は、あいこにさえ一回もならず敗北した。そして負けた言い訳はこうだ。

「そんなときもあるわよ」

そんなとき、とは、どんなときなのだろうか。本当に自分のことしか考えていない奴だな。おかげでこちらは守備からだろ。

俺は一人寂しく外野の守備位置につく。一人にしては守備範囲が広すぎるのは気のせいではないだろう。

「プレイボール！」

臨時メンバーとしてウチのチームのキャッチャーを担当している永田の声が響いた。もちろんプロテクターなどの装備は一切なしだ。ピッチャーマウンドに立っているのはエース？ 斉藤。名前負けしている上に、今の斉藤は挙動不審に陥っている、かわいそうな子だ。

そしてバッターボックスに入っているのは坊主で筋肉質な男。斉藤は大きく振りかぶりアンダースローからイエローボールを投じた。

金属バットが空を切る音が外野にいる俺にまで聞こえた、ような気がする。当たったら確実に外野まで飛んできそうだが、こちらまで飛んでくることは恐ろくなさそうだ。斉藤が投げた球はスピードはないものの、コントロールはインコース低め、ストライクゾーンぎりぎりにと抜群に良かった。さすが腐っても斉藤と名乗るだけのことはある。

続く第二球目。

かきん。

前言撤回。斉藤が投じたイエローボールはストライクゾーンと真ん中に入り、当たり前のように打たれた。これでは初球のコントロールは偶然だったと疑えざる終えない。イエローボールは俺の頭上をあっさり越え、ワンバン、ツーバン……：：：～飛んだな。

「こらーっ！ 仁井哉！ もっと必死に走りなさい！」

葉月の罵声を浴びながら、歩くような速さでイエローボールを追いつける。ボールを発見したときには既に相手はダイヤモンドを一周していた。

やれやれ。早くも1－0だ。大体外野が俺一人っていうことに問題があると思うけどな。

二番打者がバッターボックスに入る。紹介はなし。勝手に想像してくれ。

斉藤は早くも「俺はもうやだ、やりたくない、誰か替わってくれ」的なオーラが背後から沸き出していた。

「俺はもうやだ、やりたくない、誰か替わってくれ」
「いうか言ってるし。」

「なに言ってるのよ！ アンタウチのエースでしょ？ せめて一回ぐらい投げなさいよ！」

名前で決めたエースになにを期待しているのかね。期待すればするほど斉藤はみじめな姿を曝け出していくぞ。

「まーまあー。斉藤さん。もっと打たしちゃっていいよん。ウチらがしっかり守るからっ！」

龍円寺さんは元氣良く斉藤のことを励ました。親指をビシッと立てて。その笑顔にはリアルに1000円の価値はあるだろう。請求されたらうつかり払ってしまいそうだ。それぐらい魅力的な笑顔だ。「そうよ。アタシたちがしっかり守るから。外野まで飛ばされなきゃの話だけど！」

お前の笑みは見ても背筋が凍るだけだ。体に悪い。少しは龍円寺さんを見習え。大体なんだ？ そのあきらかに最後の言葉だけ強調されている喋り方は？ 外野にいる俺にまではつきりと聞こえてきたからな。ホントに一言多い奴だ。少しは未梨を見習え。ほら、未だ一步もサードから動いていない。未梨の前世がカーネルおじさん、と言っても誰も疑わない。それぐらい未梨は人形のように佇んでいた。

そして、その後の斉藤のピッチングだが、二、三番打者に対して二者連続フォアボール。守るとか守らない以前にボールが飛んでこない。これでは守りようがない。まったく、空気が読めてない奴だ。続く四番打者は今までの奴らと違う。どのくらい違うのかと言うと、FFとドラクエのHPの差ぐらい違う。なんて言ったってあれは同じクラスの野球部くんだ。直接話したことはないが、「俺はイチローの生まれ変わりだ」と、自慢話をしていたのを何回か聞いたことがある。

カキン！

強烈なライナーが一二塁間を抜け………ない。龍円寺さんの華麗なダイビングキャッチによりアウト。更に、空中に漂っている体勢の中でセカンドベースに向かって投げる。ランナーが飛び出しており、既にベースカバーに入っている葉月がキャッチ、アウト。そこから葉月がノーモンションでファーストに向かって投げた。紙一重の差でアウト。……トリプルプレー？

「いててっ……無理しすぎちゃったよん」

ダイビングキャッチ時に地面に身を叩きつけられた龍円寺さんは、ゆっくりと起き上がる。みんなが駆け寄って行くので、俺も続いた。「大丈夫？」

そう言ったのは意外にも葉月。どうした？ 葉月？ 表情まで心配顔じゃないか。お前は人の不幸を喜ぶ奴じゃなかったのか？

「ちょっと痛いけど、だいじょぶだよん。もうまみたいッ！」

龍円寺さんは自分は問題ないというアピールでピョンピョン飛び跳ねる。

「ウチは平気だから、次の攻撃がんばろぉー！」
とういことで、1回表終了の時点で1－0。1点だけで済んだのは全ては龍円寺さんのファインプレーのおかげだな。

さて、今度はこちらの攻撃だ。一番の永田がやる気満々でバッターボックスに入った。驚いたことに敵チームのピッチャーは女子だ。なにを考えているのか？ 勝負を捨てたか？

相手ピッチャー、構えての第一球目。
ストライク。

これには二重の驚きだ。球威、コントロールともに申し分のない良さ。相手ピッチャーは100%ソフトボール経験者だ。そこまでして成績が欲しいか？ この野郎。

続く第二球目。

容赦のないスイングがボールの芯を捕らえた。さすがは体育教師と讃^{たた}えるべきだろうか、それとも生徒相手に本気になっているのは大人気ないと責めるべきだろうか。芯を喰ったボールはみるみる飛距離を稼ぎ、レフトの頭上を越えた。しかも永田は全力疾走でダイヤモンドを回っている。

「スイングといい、あの走塁といい……大人げねえな」
ポツリと斉藤が呟いた。それには同意見だ。

ということで1－1の同点。続くバッター、守備職人、龍円寺さ

ん。

「みりりーっ！　ウチの勇姿を見ててねっ！」

「……………」

未梨は黙って頷く。「がんばれ」ぐらい言ってやれよ。

俺の隣で腕組みをしている葉月は、

「妙にテンション高いわね。あの娘」

お前が言うな。

かきん。

初球、決して甘いコースとは言えない球を龍円寺さんは綺麗に流し、ライト前まで運んだ。ライト前へのシングルヒット。今日のMVPは龍円寺さんで決定だな。

ノーアウト一塁。続くバッターは人間大砲、葉月。

葉月は金属バットの先端を相手ピッチャーに向けた。ホームラン予告？　バカか？

「あの星の向こうまで飛ばすわよ！」

勝手に飛ばしてろ。そのイエローボールは意外に高い物なんだからな。失くしたら弁償だからな。

「瀬尾さんかっくいーっ！」

盛り上がっているのは葉月と龍円寺さんだけ。二人ともなんとなく似たり寄ったり存在だからな。なにか共通する物を持っているかもな。どうせならそのまま友達になればいい。俺の負担も減るしな。

カキン。

またしても初球打ち。強烈なライナーがピッチャーの顔すれすれで横を抜けた。勢いはかなりあったが、飛んだ方向がセンター真正面と悪かったためにセンター前のシングルヒットで終わった。

ここでノーアウト一、二塁のチャンスで続くバッターは未梨。左右の手に異なる金属バットを一本ずつ持っている。片方は永田、龍円寺さん、葉月、ていうか今まで全員が使っていた、どこにでもあるノーマルな金属バット。そしてもう片方のバットだが、色が違う

以外には、普通のバットとなにも変わらない。

「ニィ」

「なんだ？」

「打って、いい？」

「ん？ こっちが攻撃なんだから打っても問題はないぞ」

「……わかった」

未梨は「今までみんなが使っていたバット」を俺に手渡し、バットボックスに入った。

「みりりーっ！ 無理しちゃダメだよっ！」

敵チームのピッチャーはハンカチで汗を拭いている。試合でもなんでもないこの試合に何故そんなに熱くなるんだろうね。大体そのハンカチネタは斉藤のもんだろ。おい。

汗を拭い終わったピッチャーはモーションに入り、一球目を投じた。

ガッ！！

色々な物理法則を無視したように速いスイングに、まるでバットが見えなかった。鼓膜が破れるような轟音と共に、ピッチャーが投じたはずのイエローボールの姿が消失した。イエローボールがどこへ消えたのかはすぐにわかった。なんせ黄色いからな。イエローボールはホームベースから100メートルは離れている、「校外にボールなどが飛ばないようにグラウンド全体を覆っているネット」に引っ掛かっていた。その間に龍円寺さんと葉月がホームベースに戻ってきた。未梨もダイヤモンドを回っている。

「みりりっ！ 肩とかだいじょぶっ！？」

ホームベースに帰還してきた未梨に龍円寺さんが飛び付いた。

「だいじょぶ」

「すごいわね！ 未梨！」

葉月も未梨の帰還を待っていた。喜んでいる中、悪いが、

「ちよい未梨。かもん」

手招きをちよいちよい未梨にする。

「……？」

無表情の中に疑問詞を作っている。わかる俺はすごい。

「今のバットイングはなんだ？」

「普通に、打った」

「普通の女子高生は、あのネットまでライナーで飛ばしたりしない」

「……バット、良かった、おかげ」

「バット？」

既にバッターボックスには田村が入っていた。そしてバッターボックスのすぐ近くには「さっきまで未梨が使っていた」バットが地に附していた。何故みんなは、あのバットを避ける？ 選ばれし物しか使えないすごいバットとか……ってバカか俺は。今のじゃ完璧葉月と同じレベルじゃないか。

「どうみても普通の——ってあれっ！」

持ち上げてみて、思わず変な声を出してしまった。このバットは……異様に重い。通常の金属バットより2倍……いや3倍の重みはありそうだ。

「未梨さんはすごい人だ。そんな重いバットを軽々使うんだから。僕には到底真似できないよ」

うざいハンサム面が視界に入った。言うまでもない、田村だ。

「このバットはなんだ？」

「そのことかい？ そのバットは普通のバットより重いんだよ」

「そんなのは持てばわかる。このバットと今、お前が使っていたバットの違いはなんだ？」

「違いねえ……簡単に言えば、そっちのバットの方がよく飛ぶってことだ。けど、まあ、重いからね……無理して振ると肩とか外れるかもしれない」

……。

「それにしても、このチームはすごい。あのピッチャーの球を軽々

打ってしまうんだから。僕には球の軌道さえ全然見えませんでしたね」

なんだ。打ち取られたのか。情けない奴だ。

「打ち取れた、というのとは表現方法としておかしいな。なんせ僕は彼女の投げる球にかすりさえしなかった」

余計に情けない。

「いやいや、彼女の投げる球は高校生の中でもトップクラス、と思われる。あの球威といいコントロールといい……どれを取っても一流だと、僕は思う」

ああ、そうかい。お前はコメンテーターにでもなればいい。

「できれば、そうさせてもらいたいところだ」

話が終わったら、さっさと消えろ。お前のその顔は性的に受け付けない。

「キミから話し掛けたんじゃないか。まったく、僕もひどく嫌われたものだ」

そう言うのと、田村が俺との距離をとった。

「なあ、未梨」

「なに？」

「……肩、平気か？」

「へいき」

「そうか……じゃあ言っとくがな——」

「仁井哉あ……さっさと打席に着きなさい！」

俺と未梨の間に葉月が入り込んだ。

「もう俺の番か？ 斉藤はどうした？」

「そんなの聞かなくてもわかるでしょ！」

ひどい言われようだな。斉藤。

「いいからさっさと行きなさいよ！」

葉月から繰り出された蹴りが、俺の尻にかなりの衝撃を与えた。美脚なところが余計にうざい。

「ってえな。子ども産めなくなったらどうすんだよ」

「なに？ 今の冗談のつもり？ アタシはそういうのが一番嫌いな
の」

冗談が通じない奴だな。お前は。

俺は至ってノーマルな方の金属バットを握りしめ、左打席に入
った。

敵ピッチャー（女）の眼は激しく燐光りんこうしており、相当マジだ。

斉藤に至っては「お前が打てるはずない」と言わんばかりに、既
にグローブを装着しており、次の守備に備えている。ウザい奴だ。

「仁井哉さんっ！ がんばれっ！」

よし、龍円寺さんの声援のおかげでやる気が出たぞ。……俺って
結構現金なのかもな。

一球目。ストライク。ちょい待て。いくらなんでも早すぎだろ。
黄色い線が通ったことしかわからん。上位打線の奴らはこんなのを
打ったのか？

二球目。勘に任せ、とりあえず振ってみたが、ストライク。今の
球、すげー落ちたよ。やべーよ。

追い詰められた俺はというと、昔野球漫画で見たことを必死に思
い出していた。なんだっけな……ピッチャーの肩を見ればボールが
どこに来るかわかる、だっけ？ やってみるか。

ピッチャーはモーションに入り、第三球目を投げた。

俺は驚愕した。マジで見える。これなら……打てる、ってあれっ！
渾身の力で振り抜いたバットは無残にも空を切った。ストライク。
誰が見てもストライク。審判に講義しようのないほどストライク。
インパクトする瞬間にイエローボールはホップアップした。これが
噂のライズボールというものか？ なにも素人にそんなもん投げな
くていいのにな。

「なーにやってんのよ！」

葉月は自分まで打席が回ると思っていたのか、重い方のバットで
素振りをしていた。

「しょうがないだろ。ボールがホップアップしたんだから。あんな

の打てねえよ」

「そんなのアタシだってやられたわよ！」

それじゃあ、あれを打ったってことか？　それはピッチャー自信なくすわな。

まあ、一回終了の時点で4－1。永田を除けば、男性陣の活躍は今のところは皆無だ。

続く二回表。ピッチャーは一回に引き続き斉藤。ドントマインド。「どんどん打たしちゃっていいわよ。内野の守備は完璧よ。まさにゴールドントライアングルだわ」

意味わからん。大体ゴールドントライアングルってのは、麻葉の原料がよく採れる地帯だろ。まあ、バカだからしょうがないか。

一人目のバッターの当たりはサードへの強襲。それを未梨はなんなく取りワンアウト。二人目。三遊間への強烈な打球。葉月がスライディングキャッチ。そこからすぐさま立ち上がり、持ち味の強肩でファーストに投げ、アウト。三人目。セカンドへのゴロを龍円寺さんが守備のお手本のようにゴロを救いあげ、軽快に捌き、アウト。チェンジ。ここまで守備が堅いと相手チームが気の毒に思えてくる。二回表終了の時点では、変化なしの4－1。変化したものは斉藤の自信がレベルアップしたぐらいだ。

打者を一巡したウチのチームは、永田からの攻撃だ。

「未梨」

「なに？」

「さっきの話の続きだけだな……お前がなにしようが、勝手だが……」

眼鏡越しに二つの眼が真っ直ぐこちらを見ている。

「まあ、なんだ……無理はすんなよ」

「…………」

そして、この回、またしても俺まで打順が回ってきた。しかも一回とまったく同じパターンで。

バッターボックスに入ろうとすると、監督になりきっている葉月に止められた。

「いい？ 仁井哉？ アンタにあの球の攻略法を教えるわ」

そんなもんあるんだったら最初から教えろよ。

「切り札は最後まで取っとくもんよ」

ああ、そうかい。それで攻略法ってのはなんだ？

「まず、相手の手をよく見るの。いい？ 毎回微妙に球の握り方が違うわ。それで何を投げてくるかわかるのよ」

手のひらはいっ見ればいいんだ？

「相手が腕を回している途中に決まってるじゃない」

見えるわけないだろ。それができるのはお前ぐらいだ。大体球種がわかってても根本的にあのピッチャーの球は速すぎる。

「心の眼を使いなさいよ。心眼よ。それならばちし見えるし、絶対打てるわ」

うるさい。ゲーム脳。

一応葉月の言う通りに相手の手をよく見てみるが、まったくわからん。すべて同じ手の形に見える。しかも今回はピッチャーの肩を見てもまったくコースが読めない。打てるわけない。

なんだかんだで結局、セカンドフライ。球に当てただけでも俺にとっては大健闘だ。

最終的に8－1で、チャイムが鳴り試合終了となった。はい、ゲームセット。

永田は後満悦の様子で、

「久しぶりにいい汗かいたなー！」

さすが体育会系。俺なんて1滴も汗かいてないですよ。むしろ寒い。

教室に戻り、女子の眼など気にせずに着替えを即刻に済まし、俺は机の上に伏した。そして深い眠りに落ちた。

さて、ここからの記憶は一切ない。目が覚めたときには、教室は闇に覆われていた。頭がはつきりしていないが、無意識で携帯を取り出し、ディスプレイを覗いた。

19..20

これには驚き。俺は弁当も食わずに半日も寝続けたというのか。

「……………つたく、誰か起こせよな」

愚痴を零しながら寝ぼけた体を起こす。体中の間接がポキポキ鳴り、おおきく背伸びをした。

「……………すうー……………すうー」

背後からの声に反射的に振り向いた。

闇の中に溶け込んでいる人が一名。携帯の明かりをやると……………未梨だ。しかも珍しいことに未梨が寝ている。いや、別に寝ていることは珍しくはないが、初めて見る寝顔……………眼鏡を外し、机に伏している。金髪のショートヘアが、だらしないことにぐしゃぐしゃになっている、が、そんな未梨は、かなり……………可愛かった。無表情以外に初めて見る表情、それが寝顔。ただ眼をつぶっているだけなのかもしれないが、いつもの未梨とは違い新鮮味がある。

「すうー……………すうー……………」

……………やばい。つい見惚れてしまった。なんとなく名残惜しい気持ちもあるが、そろそろやめておこう。寝顔を見られるなんてのは女の子にとっては嫌なことだろう。コイツはどうか知らんが。

「おい。未梨。起きろ」

未梨の背中を軽く摩る。閉じた眼が、ゆっくりと開かれていく。

「……………ニィ？」

「おう」

「……………」

未梨は「きゃっ」とか「いやっ」みたいな、声は出さずに、いつ

もの無表情、ノーリアクションで体をゆっくり起こした。

「わたし、寝てた？」

眼鏡なしの裸眼が俺を見つめてきた。

「ああ。寝息まで起ててな。なかなか可愛かったぞ」

「帰宅」

鮮やかにスルーされた。

未梨は寝癖などは一切直そうとはせず、いつものリュックサックをしょい込み、机に置いてある眼鏡を掛けた。別に眼鏡は掛けなくてよかったのに。

「なんで寝てたんだ？」

「ニィ、待ってたら、熟睡」

やっぱり待ってたのか……。

「別に起こしてくれて良かったんだぞ？」

「ニィ、気持ちよさそうに寝てた。起こすの、悪い」

「じゃあ、次からは容赦なく起こしてくれ。次があるかどうか知らないけどな」

「わかった」

それにしても、人気のない校舎はなかなか不気味なもんだ。しかも夜ということが、余計に気味悪くしている。そんじょそこらのお化け屋敷より確実に「緊張感」というものはあるだろう。この際だから校舎そのものをお化け屋敷にすればいい、きっと客が殺到んじゃないか？

そう思いながら、電気の点いていない、真っ暗な廊下を歩いていると、未梨が突然立ち止まった。

「誰か、来る」

「なんだって？」

冗談でも笑えないな。こんな夜の学校に俺ら以外の誰がいるって？ 教師or警備員or幽霊か。どれにしても会いたくない存在なことは変わらない。

少しずつであるが、確かに足音が聞こえてくる。前方から近づい

て来ている。そしてだんだんと姿がはっきり…………。

「あれ、アンタたち、なんでいるの？」

先に相手の方が口を開いた。まだ顔がはっきりと見えないが、今の声とツインテールと言うことでたやすく推理できる。

「お前こそなんでいるんだよ。葉月」

闇から現れた人物はまぎれもなく葉月だった。ブレザーを腰に巻き着け、サラリーマンが営業に行くときに持つて行くようなカバンを腕にぶら下げている。

「アタシはさっきまで授業受けてたのよ」

「こんな時間までか？　なにやってんだ？」

「音楽。音楽推薦で来た人たちは、みんな毎日これぐらいまでやってるわよ」

毎日、ですと？　遊ぶ時間はいつあるんでしょうか。

「それで、アンタたちはなにやってんの？」

「さっきまで寝てたんだ」

「……寝てた？」

「ああ。気付いたら真っ暗だったからな」

葉月の視線が未梨に移る。

「未梨も？」

「ん？　未梨も寝ていたな」

「まさか、アンタ……昼からずっと寝てたの？」

そんな、親父の浮気現場を発見したときのような顔しなくてもいいだろ。

「ああ。昼前からだけどな」

「信じらんない！　時間の無駄遣いよ！」
悪かったな。

「じゃあ、俺らは帰るな」

「ちよっと待ちなさいよ。アタシも、もう帰るから校門辺り待ってなさいよ」

「お前と帰る方向違うじゃないんか？」

「途中まででいいの。ちよつと教室まで楽譜取ってくるから先に行って。すぐ行くから」

来る季節を間違えたことに気付いた木枯らし一号のように、葉月は去っていった。

夜道。そこら中の家からは、夕ご飯のいい匂いが漂っている。昼飯を食べていない俺にとっては、そこらへんの家に突撃したい勢いだ。なんでもいいから暖かい物が食べたい。それぐらい寒い。マフラーが欲しくなるような厳しい寒さに、俺の体は芯から冷え切っていた。吐く息が白くなり、肉眼で確認できる。

「寒いな……」

俺は自分の手に息を吹き掛け、温める。

「男がそれやるのはキモいわよ」

そうなのか？　けど、寒いんだからしょうがないだろ。

「やるんだったら……」

と、いきなり手を取られた。

「こっちの方がいいわよ」

俺は葉月と手を繋ぐような形になった。

俺としたことが、少しグラつときた。俺的女子にやられるとググつと来るランキング第一位「こっちの方が暖かい」の必殺技をやられてしまった。前にも葉月には手を取られたことがあるが、その時はなにも感じなかった、はず。シチュエーションが違うだけで、葉月に対してグラつと来るとは……。

「どうかした？」

「……いや、お前の手って温かいなって思ってたな」

「そう？　アンタの手は冷たすぎるわよ。まあ、手が冷たい人は心が暖かいって言うもんね」

「じゃあ、お前の心は冷た……イテッ！　イテェ！　俺の手を握力で潰そうとすんな！」

「バカ」

と、言われて手をほどかれた。

「アタシはこっちだから。また明日ね」

「葉月」

「なによ？」

「明日は休みだ」

「えっ？ ……あつ。アンタたちはゴールデンウィークなのね。アタシは明日も学校なのよ。アタシ、というか音楽推薦で来た人たちね」

「休みはないのか？」

「土日は普通に休みよ。祝日が学校なのよ」

「大変だな」

「もう慣れたわよ」

葉月は一息付き、

「ま、アタシはそろそろ帰るわね。また今度。じゃあね、仁井哉と未梨」

「じゃあな」

「……」

そしてここからまた未梨と二人きり。ここからはもう未梨家の高級マンションが見える。無駄にでかいからな。

今日の夕飯のメニューはなんだろうか。カレー辺りが妥当な線かな。それともおでんか、いや、うどんっていうのもアリだな。

寒さを紛らわす為に暖かい食べ物を想像していると、唐突に手を引っ張られた。

「……」

未梨が突然、手を握ってきた。俺の手より遥かに冷たい。人形のように体温を感じられない。

「どうした？」

「……別に」

ただ無表情で俺の顔を見つめており、手を握り締められる。別に、

と、言うわりには、一向に手を離そうとはしてこない。この時ばかりは未梨が、なにを考えているかわからない。

それからは一言も話すことなく、手を握られたまま、家の前まで来てしまった。

「ニィ」

「なんだ？」

「あした、9時」

そういえば、明日は未梨と出かけるんだっけ？

「ああ、了解した」

未梨は俺の手を握る力を緩め、物が落ちるときのように手が離れた。た。

「また、あした」

向かいのマンションまで、歩く未梨の後ろ姿はどこか機嫌が良いように見えた。

結局明日はどこにいくのだろうか。未梨主催はまったく想像がつかない。

まあ、

楽しみにさせてもらおうじゃないか。

2―3 そふとぼーる（後書き）

前書きでいきなり意味不明なことを書いてすみません。個人的にすごい書きたかったんです。

さて、物語の方は大分進んできました。が、今だ「音楽の能力」がまったく出てきておりません。忘れてるわけじゃありませんよ（笑。そろそろ音楽物語を始めたいと思っています。

ここまで読んでくれた皆様、本当にありがとうございます。これからもよろしく願います。

3—1 でえと？

人間誰しもが必ず持っている物がある。「欲」だ。その中でも生きるために特化されている強い欲が3つある。食欲、性欲、睡眠欲。これらをまとめて三大欲求と言う。これらの欲は誰しも絶対に持つており、生きるために必要不可欠だ。誰もが持っているからと言っても、欲の大きさには個人差がかなりある。一日寝なくても大丈夫な奴もいれば、俺みたいに毎日10時間は寝ないとダメな奴もいる。これは睡眠欲の差で起こる。中学時代の話だが「どの欲求に自分が特化しているか」みたいな、心理テストっぽいことをやったことがある。その中であつた問題だが、むしろくしゃしたときのストレスを発散の仕方は欲求の強さで決まるものだと、書いてあつたような気がする。焼け食いをするか、自慰をするか、それとも寝るか。このような状況で自分が、どの欲が特化しているかわかる。俺のテスト結果はズバぬけて睡眠欲が強いと、判定された。その答に俺はあつさり納得できた。何故なら、腹が減っていたって、眠いときは寝ることを俺は優先するからだ。なので、俺が寝坊したこともしようがないと言えるだろう。何故ならそれも欲なのだから。

と、詩人みたいな言い訳をした、ただいまの時刻、09…30。今日は未梨と9時に出かける約束をしている。どう控えめに見たって、今の時刻は9時を過ぎている。遅刻だ。It's TIKO KU。今なら「ちょっと遅れちゃったあ。ごつめーん」のレベルで済まされるが、着替え等の準備時間を考えると、なんだかんだで後30分は掛かりそうだ。ここはとりあえず未梨に電話を……………。

「……………」

「うわっツ！」

俺は驚愕の余り、至るところの筋肉が一瞬、強張った。そして、ゆっくりと、本棚にもたれかかっている「それ」を見やった。

「……………いつからいるんだ？」

本棚を背に体育座りをしている「未梨」がこちらを見上げている。膝の上には、本棚から取ったと思われる小説が開かれている。

そういえば……未梨はウチの鍵を持っているんだったな……。それにしても、朝から心臓に悪すぎる。おかげで強烈に目が覚めたが、あとちよつとで昇天するところでもあった。

「不法侵入はよくないと思うぞ」

今日の未梨のファッションスタイルにテーマを付けるのならば、ずばり「女子中学生が無理して大人っぽい服着ちゃいました」だな。胸から上の肌が丸出しになっているキャミソールに、ジーンズを無理やり短く切ったようなショートパンツ。更に、手には白いダウンジャケットらしきものが握られている。これで、未梨10年間愛用のリュックサックを除けば、ファッションとしては完璧なんだがな。

「……………」

未梨は黙って家の鍵を見せてくる。玄関から堂々と入ったからわたしは悪くないと、でも言いたいのか？ この野郎。

「ああー。わかったわかった。俺が悪かったよ」

「……………へいき。想定範囲内」

なんか微妙にムカつくこと言われたな。とりあえず着替えをしなきゃ始まらないな。近くのコンビニ行くんだったらともかく、遠出するのにパジャマはないからな。部屋のクローゼットを開け、何着か適当に取っ払う。

俺は未梨の視線などダニの存在ほど気にせずにパジャマを脱ぎ始める。

「……………」

俺がパンツ一着だと言うのに無反応だ。が、未梨の底が見えない黒い瞳は、俺の裸体をしっかりと見つめている。例え、俺が裸になったとしてもノーリアクションで通すんだろうな。さすがに試す気にはなれないな。俺には露出な趣味はないし、まだ前科は欲しくない。なによりも、そこまで落ちこぼれてない。

早々と着替えを済ませ、ベットに腰を掛ける。

「それで、今日はどこに行くんだ？」

「都会」

アバウト過ぎだろ。一口で都会と言っても色々あるだろうが。俺にとっては田んぼが無いところは全て都会だ。

「まあ、行くか」

家を出る前に何故かオフクロが諭吉さんを二人ほど渡してきた。

英世さんでも一葉さんでもない。紛れもない諭吉さんだ。いつもなら、なにもくれないオフクロが（請求していないので当然だが）今回は無言で渡してきた。ありがたく受け取りはしたが、なんの理由も無く、こんな大金を渡すとは考えられない。なにか裏があるんじゃないかと、疑ってしまうのも無理はない。そんなもやもやした気持ちでは使わないで終わりそうなので、理由^{わけ}を聞いてみると、

「未梨ちゃんと出かけるでしょ？ 未梨ちゃんは未来のお嫁さんなんだから、なにか美味しいものでも奢ってあげなさいよ。あと今日は帰ってこなくていいからね。明日帰って来なさい。朝帰りね」

我が母上はバカみたいなことを言い出した。未来のお嫁さんとは一体なんのことだろうか。幼い頃の記憶は曖昧だが、将来を約束していないことには確信を持てる。それと、今日は帰ってくるなどは、親が言う台詞ではないと思うのは俺だけであろうか。

「多分晩飯までには帰ってくるからな」

そう言い残して、諭吉さんを2枚財布に突っ込み、家を後にした。

昨日と打って変わらず、くそ寒い。もう五月だというのに、吐く息が肉眼で確認できる。温暖化を促す人間に、「こうなったら寒くしてやる！」とでも、地球が逆ギレでもしたのかね？ やめてほしいね。

女の子と一緒に出掛ける、なんていう事は別の言い方に変えれば「デート」とも言うだろう。俺は今まさに女の子と一緒に出掛けてはいるが、これは断じてデートではない。俺のイメージ上のデート

とは、もっと和氣藹々としており、もう少しハニカんでいるはずだ。いつものパターンなら俺の半歩後ろに未梨がいるが、今は俺の右隣に未梨がいる。その未梨は服装だけを見れば高校生にも見えなくはないが、背丈と発達していない胸を見てしまうと、どうしても中学生に見えてしまう。最近の発達のいい女子高生に比べたら未梨は大分出遅れている。かわいそうに。

自宅付近の住宅街を抜け出した俺たちは、国道に出た。進行方向から逆算して考えると、行き先は大体予想できる。恐らく「待山駅」まちやまに向かっているのだろう。そして電車で、未梨の言う「都会」とやらに行くのだろう。

国道に出れば、そこからは見るものが全てが都会だ。交通量は多く、どこを見ても必ず車が走っている。反対側の道に移るのだってわざわざ歩道橋を使わなきゃならん。見ているだけで疲労が溜まる。少なくとも俺にはそう感じられる。

半時ほど歩くと、待山駅が見えてきた。駅かビルか区別がつかない。ていうか駅ビルか。いかにも都会の駅って感じで、俺は少し挙動不審気味に陥おちいってしまうのも無理はないだろう。

「そっちじゃない」

キップ売り場に行こうとすると、袖を引っ張られた。

「電車乗らないのか？」

「目的地、ここ」

「ここって……駅ビルのことか？」

うなずく。

確かにここは……都会だな。意外と近場なところをチョイスしたな。

「未梨、一ついいか？」

「なに？」

「なんか食べないか？ さっきから腹が減ってしょうがない」

今朝目覚めてから、（と言っても1時間ほどしか経っていないが）俺は飲まず喰わずでここまで来ていた。寝起きというものは、なに

も食べる気がしないが、しばらく経つと急に飢えてくる。これは人間の七不思議に入る。

「どっちでも」

「よし、決定だ」

街山駅の駅ビルは10階建て＋地下2階のおまけつき。キップ売り場とは、反対方向にあるエレベーターに俺たちは向かう。エレベーターはガラス張りで、搭乗者は景色を一望できる。目的の階は、ビルの最上階。そこにはファーストフードから私店まで、ほとんどの飲食店が揃っている。

「なんか食べたいもんあるか？」

「任せる」

俺は迷わずハンバーガーショップを選んだ。

「ここで食べるよ。えーっと、ダブルバーガーと……ポテトはMで、あとコーラはSね」

と言って気付いたことがある。レジの店員はウチのクラスメイトだ。さすがに一ヶ月も経てばクラスメイトの顔ぐらいは覚える。名前はまだ覚えてないが確か……斉藤にスリーサイズを教えられた（むりやり）、あの女子だ。だからと言ってどうもしないけどね。大体彼女は気付いて無さそうだしな。

「はい。そちらのお客様は？」

未梨は3秒間ほど、考えるような素振りを見せ、

「あまいもの」

ずいぶんアバウトだな。

「こいつはシェイクで」

1分もしない内に注文したものが出来上がり、彼女にトレイを差し出される。受け取ろうと手を伸ばすが、トレイには注文していない「チキン」がある。

「これ注文してないんだけど」

「わたしのオゴリだよ。デートがんばってね。仁井哉くん」

彼女はスマイル0円にしては割りに合わない満面の笑みを浮かべ

た。俺が店長ならば彼女の笑みに称えて自給を50円UPさせるな。てゆうか、めっちゃバレバレだな。それに「デート」ではない。

「ただの付き添いだ」

俺の言葉に彼女はクスクス笑うだけだった。まあ、チキンをおゴって貰えただけに、強く否定をする気になれない。やっぱ払って、なーんて言われたくないからな。

まだ昼前なので席はたやすく確保できた。未梨はシェイクを貰った瞬間からストローを加え続けている。一気に飲むと右脳痛くなるぞ。おい。

「……」

「このあとはなにするんだ？」

未梨のシェイクから、じゅごくごくーつと残量がつきかけている音が漏れる。ホントに一気に飲みやがった。

「遊ぶ」

「なにをして？」

「言わない」

「そうかい」

オゴリのチキンは妙に心に染み渡る味だった。

「確かに……ここは遊ぶ場所だな」

ここは9階。綺麗に磨き上げられたフロアリングには土足で入ることは決して許されない聖域。そう——ここはボーリング場。ボーリングは好きか嫌いの二択ならば、好きにカテゴライズされる。二択でなくても好きな部類に入る。キリンさんよりもゾウさんよりもボーリングが好きだ。ていうか大好き。これだけで俺はもう来た甲斐があるってもんだ。

「何ゲーム成されますか？」

「に……」

2? 少なくないか?

「じゅう？」

無理だろ。

「5ゲームでお願いします」

それと靴のサイズを言い渡し、手頃のボールを探す。

まさか未梨にボーリング場に誘われるとは思わなかったの
で、マイボールもマイグロブも持ってきていない。そんなにやり
たかったのかね？ まあ、確かに、ボーリング場に行くのは一人じ
ゃキツイからな。俺は一人でも行くけど。

「1ゲーム負けるたびに罰ゲームでもしないか？」

俺がこんなことを言うのは少なからずボーリングには自信がある
からだ。中学時代のときは、黄金の右手と呼ばれたぐらいだからな。
この手で敗北を下した奴だって2人ぐらいは要るはずだ。

「罰ゲーム、内容」

「そうだな……敗者は勝者の言うことをなんでも聞く」

「わかった」

頭上にある電光掲示板には「ミリ」さまの順番です、と、表示さ
れている。未梨は背丈に似合わない15ポンドの球をフラつきなが
ら構えている。他の人が見たら危なっかし過ぎて、見ていられない
だろう。未梨は初心者を伺わせる力任せのフォームで、投じた球は
無情にも右ガーターに沈んだ。よくそんな腕で罰ゲームの申し出に
応じたものだ、

「未梨、ボーリング何回目だ？」

「初めて」

「初めて？ そんなボーリングやりたかったのか？」

「……」

ま、なんでもいいけどな。とりあえず勝たしてもらうけどな（最
低）

1ゲーム目終了。

バカな。俺が負けるはずがない……負けるはずがないんだ！

俺のスコアは170と、一般高校生の中でも、トップクラスには降臨できるすんばらしい成績だ。しかし、未梨は一球ずつ——確実に上達し続けて、最終的なスコアは180と、あっさり俺の記録を上回りやがった。後の方の未梨はほとんどストライクのみだったからな。

「罰ゲーム？」

15ポンドの球を膝に抱えている未梨が言ってきた。ゲームに夢中過ぎて忘れていたが、罰ゲームがあるんだった。自分の首を自分で締めているとは、こういうことだろうな。だが、俺は諦めん。

「待て、罰ゲームは5ゲーム全部終わってからでいいだろ？」

今から全部勝てばなんの問題もない。くそ……ボーリングとわかっていればマイボールを持ってきてたのにな。

2ゲーム目。

ここで未梨に一句。

『知らぬ間に カープボールを 極めてる』

未梨は、この短い時間の中で、テーブルに置いてあった「カープボールの投げ方」と言う薄っぺらい説明書を読み、完璧にカープボールを修得していた。忌々しくなるほどセンスある奴だ。

そして5ゲーム目。これがラストゲーム。少なからず俺の指には疲労が溜まってきている。しかし！ このゲームに負けるわけにはいかない！ 全敗ということはなんとしても避けたい。まさに一球入魂全力投球！

「よっしゃあ！」

黄金の右手によって放り出されたボールは、ガーターぎりぎりのデッドラインから、自我に目覚めたのような動きで、全てのピンを弾き飛ばした。

ただいま第9レーン。ここまで俺は全てストライクで来ている。ここから全てガーターでも自己ベストは大幅に更新されることになる。が、ここまで全てストライクで来ているのは未梨も同じこと。ここまで来たら負けられない。これはもう俺のプライドとの戦いでもある――負けられない戦いだ。

電光掲示板に表示されている「ミリ」と「ニイ」のスコアにはストライクのマークしか印されていない。これに気付いた他の客は、自分たちのプレイを中断して、観戦モードに入ってしまった。まあ、いい。俺はギャラリーがいるほど燃えるタイプだからな。

この最大のプレッシャーの中での第10レーン。未梨は緊張を見せずに2連続ストライク。あと一球ストライクで幻のスコア300。

「なに？ あの子たちプロかな？」 「マジであいつら上手くね？」
「うそ。マジで300いっちゃうのかよ」

ギャラリーたちからは色々な声が聞こえてくる。たとえば本物のプロボウラーでも、こんな状況になればプレッシャーに負けるかもしれない。が、未梨は確実にストライクを決めてくる。これには確信を持てる。

俺の予感は見事に的中。未梨は寸分の狂いないコントロールでピンを薙ぎ倒した。

空白だった電光掲示板には「ミリ…300」と表示された。それを見たギャラリーたちは盛大な拍手を未梨に送る。

未梨は満足気表情で（俺の目にはそう見える）俺の顔を見てきた。

「ニイの、番」

「ああ。わかってる」

未梨はまさに余裕の表情を（俺の目にはそう見える）伺わせる。

そんな風にしてられるのも今のうちだけだ。俺の本気を見せてやる。肺に入るだけ目一杯空気を吸い込み、8ポンドの球に全神経を集中させる。ほら——今の俺にはピンとレーンしか見えていない、いや、見えない。周りには誰もいない。音もなにも聞こえない。まさに——無我の境地！

獲物を狙うときの鷹よりも、キレのある球がピンを全て薙ぎ払った。

「あと——2球」

再び指先に全神経を集める。俺は球で球は俺。一球入魂！決して決まり文句ではない！

更にキレを増した球は全てのピンを吹き飛ばすと共に轟音をも轟かせる。

「うしっ！」

「あいつも後一球じゃん！」「ていうか超上手くない？」「あの女の子はパーフェクトなんだよな？」「あいつもあと一球だぜ」

戻ってきた8ポンドの球を入念に磨き上げて、マウントポジションに立つ。その時だ。流れていたBGMが止まり、ボーリング場の明かりが全て消えた。そして俺と俺のレーンを照らすように明かりが点いた。これは……1時間ごとに1回ある「イベント」だ。1時間、全レーンを照らされ、その中でストライクを取れたら、特製ストラップを貰えると言う「イベント」だ。しかし、「イベント」なら何故、他のレーンは照らされないのだろうか。答は天からの声によって知らされた。

「ただいま、そちらのお客様が後一球でパーフェクトゲームを達成されます！みなさんどうか拍手を」

止まったBGMに代わり、アナウンスが響く。頼んでもないのに粹な演出だな。おい。

これは既にプレッシャーとの勝負。どこまで集中できるかで勝負は決まる。照らされているレーンとピン。黄金の右手の疲労は当にピークを過ぎている。それでも俺は右手の神経一本一本に残り全ての力を吹き込む。このために残しておいた『必殺技』もある。いや、それは嘘だけだね。そして――これが――俺の生き様だ！

基本に忠実なフォームで腕を振り子のように振り上げ、リリースポイントは少し遅らせ、投じた。生命を吹き込まれた8ポンドの球は右ガーター直前で驚異的な曲がりを見せる。そのままピンに向かって一直線。そして全てのピンを吹き飛ばした。そのあまりにも大きい威力のため、何本かのピンは手前まで飛んでくる。

「うっしやあッ！」

俺は思わず雄たけびを上げた。ギャラリー達も盛大な拍手で答えてくれた。

幻のスコア300。それが今の俺の手によって築き上げられたのだ。

「ニィ」

「どうだ、未梨。見たか！」

「罰ゲーム、考えた」

「……」

俺も言いだしっぺ敗北法則の犠牲者の一人か。いやになっちゃうね。

「キミたちの写真、撮っていいかな？」

会計を済まそうとすると、男店員が薄っぺらい笑いを浮かべながら聞いてきた。

突然の意図が掴めない質問に俺は顔をしかめ、未梨に至っては反応がない。何故見知らぬ店員に写真を撮られなきゃならん。

「なんですか？」

少なくとも店員は年上っぽいので、敬語で聞き返す。

「ほら、あそこ見てよ」

店員は指を俺の真後ろに向けた。振り返ると、食物連鎖のピラミッドみたいな物に写真が貼り付けられていた。

「今までのすごいスコアを取った人たちを、ああいう風に記録しているんだよ」

ピラミッドの頂点に乗っている人物は、元気の良さそうな女の子が満面の笑みでVサインをしている。「うららちゃん…220」と書いてある。って、どうみても龍円寺さんだよな、これ。あの人なら自分に「ちゃん」付けしそудだし……てゆうかあの人は普段なにをやっているのだろうか。

「俺はいいけど……」

と、未梨に目をやる。未梨は俺を3秒ほど見たあと、「いい」

と言った。時折り未梨は、考える仕草を見せるが、本当に考えているかどうかは怪しいもんだ。

「いいんですね！　ありがとうございます！　それじゃあ、いきますよ」

店員はさっそうとレジの下から、デジタルカメラを取り出してきた。待て、早すぎだろ。

「チーズ」

パシャ。

いきなりチーズかよ。

パソコンによって、プリントアウトされた写真を見ると、そこまでおかしくはなかった。俺はいつもの通りの表情だし、未梨に至っては磨き掛かった無表情。あの一瞬でこの写真が撮れるとは、もしかしたら、この店員はプロカメラマンなのかもしれない。

しかし、一つ許しがたい点がある。

「なんで俺の名前が『ニィ』のまんまなんだ？」

「登録されたままのお名前です。プリントアウトするんですよ」

俺は断じて、自分の登録名を「ニィ」にした覚えはない。全て未

梨の仕業か。この野郎。俺の本名忘れてやがるな。

龍円寺さんの写真は一個下に降ろされ（なんか悪いな）、あらたに『ニイ&ミリ.. Perfect』のツーショット写真がピラミッドの一番頂上に貼り付けられた。なんかまずいような気がするが、ま、いいか。

ところで、

罰ゲームはなんなんだ？

3―1 でえと？（後書き）

続きますよ。

最近更新が遅れており、楽しみにされている方（いるかな？）、申し訳ありません。短編小説を書いていたら、遅れてしまいました。今回のお話ですが、ただのボウリングですね。そして無口と二人きりは激しく書きにくかったです。ボケ担当がいまませんから。さらに音楽要素もゼロ。いや、ホントすみません。きっと次話辺りでちよびっと出るかも。

長いあとがきですみませんが、ここからは余談です（笑。最近気付いたことがあるんですが、今まで私の買った小説がほとんどが一人称なことに気付きました。しょうもない話ばかりですみません。これからも「ぽーかーふえいす」をよろしくお願いします。

3―2 スマイル（前書き）

今回は文字数少なめの6,000ぐらいです。

3―2 スマイル

世の中には二種類の人間がいる。世の中には二種類の人間がいると、まとめがる人と、そうでない人。ま、どうでもいいけどね。分けたい奴は勝手に二種類に分けてればいい。

あえて人間を二種類に分けるとしたら、喋れる人間と、喋れない人間に分けられると俺は思うね。

ここは駅ビル5階。主に女性用品を中心としているフロアだ。

なんとなく気まずいので、適当なベンチで休もうとしたが、未梨はそれを許してくれなかった。そりゃあないぜ。男の俺にとっては、このブティックとかスカートとかは無縁な物であって、女装趣味があるわけならまだしも、一般人の俺が見てもなんも楽しくない。さつきから歩き回っているが、店員を含めどうやら男性客は俺を除けばいなそうだ。

そして、俺の腕に掛かる重量が少しずつ増えてきている。

「……これって罰ゲームか？」

また、どしり、と腕に負荷が掛かる。

「なんで？」

「なんでって……な」

さつきから、俺の腕には「買い物かご」がぶら下がっている。そこに未梨が容赦なく、化粧品やら服やらなんかを突っ込んでくるから、もうかごの中はパンパンになり掛けている。ついでに言うと、俺の腕はすでにパンパン。

「お前って化粧とかすんのか？」

「……たまに」

ほう。化粧するのか。この無表情に化粧したら、一体どうなるん

だろうか？ 見て見たい気もする。

「……………」

未梨は無表情で、さらにワンピース追加。キャミソール追加。ツラ追加。色々追加。やばいぞ。少しかごから溢れだしてきた。

「ちょ、ちょい。こんなに買う金あるのか？」

「へいき」

そう言いながら、また、かごの重量が増える。一体全部でいくらになるんだろうか？

俺がレジにかごを、どん、と置くと、さすがの店員さんも驚いてる様子だ。

「えーっと……十万と二千円になります……」

へえー。十万円ね。ふざけんな。

まるでセレブの買い物じゃないか。セレブが駄ビルで買い物もどうかと思うが。

「……………」

きっと未梨の財布の中から諭吉さんが大量に飛び出すんだな、と想像していたんだが、予想に反して黒いカードが一枚だけ出てきただけ。

あれか？ カードで、って奴か？

「ありがとうございます」

いや、ホントにカードで会計済ましちゃったよ。どうせなら俺のポイントカードを使って貰うべきだったな。

俺の両腕にぶら下がっている紙袋。この中身は家族へのテイクアウトでもなんでもない。椿未梨さまさまの生活用品もろろだ。こんなもんを土産として、持って帰った日には勘当されるに違いないね。

携帯の時計は4時を示している。どうやら昼ドラの再放送は諦めた方がよさそうだ。

打って変わって、ここは地下一階。ゲームセンターだ。

エレベーターを降りて、目に飛び込んで来たのは、大量に並ぶアーケードゲーム。奥に進むと、カードゲームや射撃ゲームなど様々なゲーム台が設置されていた。激しいBGM、天井にはプラネタリアムが優雅に舞踊っている。きっとラスベガスのカジノをイメージして造ったんだろう。

コントローラなどを使うデジタルゲームより、人生ゲームやモノポリーなどのアナログ的なゲームの方が好きな俺はゲーセンには、ほとんど入ったことがない。それにしても人が多い。ゴールデンウィークにゲーセンとはよほどのヒマ人なのだろうか。俺たちも人のことを言える立場じゃないが。

「ニイ」

くいくいと袖を引っ張られる。未梨はプリント倶楽部とか言う最近の若い者に人気のある物に指を向けていた。そこには四人組の女の子たちが、わいわいしながら入っていった。

まさか、ボーリングに負けた罰ゲームとして、あの中に侵入しろと言うのだろうか。いくらなんでもそれはひど過ぎる。人道に反する。もし、あの中に緑校生が存在するならば、俺の不登校は免れないね。あだ名が「プリクラ」になったっておかしくない。

というのは、どうやら深読みだったらしい。
俺の袖を握り締めた未梨は、揺るぎない歩調で別のプリクラ台に入った。

「撮るのか？」

うなづく。

そんぐらいはいいいけど……一回四百円もするのか。プリクラ造った奴は今頃いい暮らしをしてるに違いないね。

二百円を財布から取り出そうとすると、未梨が百円を四枚連コインしてくれた。黙って見てくる未梨の双眸には、「誘ったのはわたしだから」と言う意味合いもある(多分)。その好意に甘えても良かったのだが、取り出した二百円をばれないように未梨のリュック

サックに忍び込ませといた。こいつからすれば二百円なんて大した金額じゃないんだろうけど、気持ちの問題だよな。こういうときは出来上がったプリクラは最悪だ。いや、俺はがんばって表情造ったよ。だけど、未梨の表情なんて全部共通で無表情なんだよ。それが返って、俺のイタさを際立させている。この野郎。

プリクラを撮り、行く当ても無くなったのか、俺たちは外に出た。「このあとはどうするんだ？」

「……行きたいところ、ある」

どうせ聞いたところで場所を覚えてくれるとは思わなかったので、黙って未梨に付いていくことにした。どんどん駅から離れていき、見慣れた田舎的な風景が戻ってきた。人氣が絶えた道を、歩いて行くうちに、日は順調に沈み続け、静寂な闇が訪れ始めた。

歩き続け約1時間。ようやく目的の場所についたらしい。静まり返った空間には、懐かしい匂いが漂っている。

「ここに来るのは何年ぶりだろうな」

ここは……俺が初めて、未梨と出会った場所。公園だ。十年前に比べると、ずいぶん変わってしまった。公園の中心には噴水が設置されている。そしてあらゆる遊具が新品化されている。だが、山の独特な匂いは十年前から何一つ変わっていない。そういえばあの頃の未梨は裸眼で長髪だったな。

「ニィ」

唐突に未梨から綺麗に包装されている小箱を差し出された。反射的にその小箱を受け取ってしまった。

「これはなんだ？」

「ふれぜんと」

プレゼント？ なにゆえに？

「俺にか？」

うなづく。

わーいって、待て、俺。プレゼントを貰う理由など何一つないぞ。それとも、今日は特別な日とか？ えーと……みどりの日。それに

したって、プレゼントを渡す理由にならない。こどもの日？ いや、確かに俺は、まだ、こどもだが、同年代のこどもにプレゼントを渡すわけがない。いや……今日は……「あれ」か。

「ニイの誕生日」

そう、0501。すなわち俺の誕生日。及び色々な暗証番号。

「……そうだったな」

……すっかり忘れていた。普通こんな大事な日を忘れるわけがないが、俺が忘れるのも無理はない。何故なら俺は、生まれてから一度も誕生日を祝われたことがないからだ。誕生日はケーキに歳の分の蠟燭ろうそくを立てて祝うなんてのは、つい、最近まで俺は知らなかった。ましてや、誕生日プレゼントなんてのはもってのほか。家族がテキトーだからね。しょうがないといえましょうがない。よく、ここまでヒネくれないで育ったことに感謝してほしいね。

よくよく考えれば、今回が人生初めての誕生日プレゼントだな。

ま、こんなもの悪くないか……。

「ありがとな。マジで嬉しいよ」

昨日、未梨が急に誘ってきた理由はこれだったのか。

「……別に」

「開けていいか？」

「うん」

新品化されたベンチに腰を掛け、テープがなかなか剥がれないことに苛立ちを覚えながらも、小箱の包装を丁寧に剥がしていく。

「……なんて言ったらいいんだろうな。これは」

小箱を開けて、俺の目に飛び込んできた物は、最近巷で流行っている、シルバークセサリーの「指輪」。こういう物は一部のオシヤレ男子しか身に付けてはいけないアイテムではないのか？ 俺なんて論外だろ。

「きつと、似合う」

そんな説得力ゼロの顔で言われてもな。

銀光を放つ指輪を右手小指に嵌めた。その瞬間、「おきのどくで

すがぼうけんのしょがきえました」というメッセージと音楽が脳裏に過ぎった。まさか、呪いの指輪か？

……なわけないよな。いい加減にしろよ、俺。

「よく俺の誕生日なんて覚えてたな。俺自身が忘れてたのにな」

「……ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ？」

ここで未梨は少し困ったような表情を見せる。何度も言うが恐らくこの変化は俺以外にはわからない。

そして重々しく口を開き始めた。

「……去年の春。わたしがニィにしたこと」

そこで未梨は一旦言葉を切り、

「許して欲しい。ごめんなさい」

あくまで淡々と無感情で話し続ける。

「……最初から俺は怒ってないぞ。そりゃあ、あの時は正直驚いたさ。だけど、おかげで自分が何者かわかったことだし……結果オーライ。というわけだ。て、いうかあれはお前のせいじゃないだろ。いちいち気にす——」

気にするな、と最後までカッコよく決めようとしたが、俺の視線に入ったモノを見て、思わず言葉を失った。表情がミクロン単位でしか変化しない未梨が見せる——初めての——

——笑顔だ。

冬しか訪れない地に春が訪れた。そんな例えが一番しっくりくる笑顔。

「ありがとう」

驚愕のあまり俺は、ただただ未梨を見つめていた。

「お前……笑えるんだな」

「……………別に」

いつもより多めの三点リーダーの間に未梨はいつもの無表情に戻った。くそ、写真に収めとくべきだった。

その後の俺たちかというと、公園から一望できる夜景を無意味に

鑑賞したり、腹が減った、ということで、山を下った近くのファミリールレストランで食事をしたり、いかにも二十代後半の男女同士がデートでやりそうなことをしていたのさ。

よくよく考えれば、これってすごいデートっぽいよね。

それっぽいイベントはなにもなかったけどね。
荷物がたくさんある。ということであれはわざわざ未梨の済む高級マンションにまで向かうことになった。玄関口にあるパネルにカードキーを差し込むとロックが解除され、ガラス戸が開かれた。入って左手にあるエレベーターにもカードキーの差し込み口がある。いつ来てもこの防犯システムには驚かせられる。未梨は慣れた手つきでカードキーをパネルに差し込むと、エレベーターの冷たい戸が開かれる。

最後の締めめに、自室の横にはテンキーのパネルとカード差し込み口がある。未梨はカードキーを差し込み、テンキーを見もせず叩きこむ。

「入って」

開かれた扉からは、眩しいほどの光が玄関を照らし出していた。俺が有無を言う前に、未梨は自分の靴を脱ぎ捨てて、中に入り込んでいった。できることなら、中には入りたくなかったんだが……。

中に入るのは、久しぶりだが……相変わらず居心地が悪い。

リビングに入ると、生暖かい熱風が出迎えてくれた。広々としたリビングはフローリングで敷き詰められており、床にはゴミ一つ落ちていない。十畳ほどの部屋だが、実際に使われているのは、四分の一ぐらいだ。四隅の左角に設置されている、こたつとテレビ、それにソファ。その使われている空間だけが、まるで隔離されているように、きっちりカーペットが敷いてある。

「あれー、未梨さまー。帰って来てたんですかー？」

こたつから、能天気な声が聞こえてきた。そこには、こたつから顔だけを出している、少女——というより女性がいた。

「……」

未梨はなにも言わずに、彼女に一瞥するだけで自室に踵を返す。

彼女はそんな未梨には目をくれず、俺に視点を定めている。

「仁井哉さまじゃないですかー。おひさしぶりですねー」

「……どうも。ご無沙汰してます」

俺が中に入りたくなかった理由はこの人だ。未梨の使用人――愛^{あい}沢^{さわ}さん。嫌い……ではない。気さくでいい人だと思うし、なかなか美人だとも思うけど、なんていうか苦手だ。年齢不詳の愛沢さんは、未梨と二人暮らしをしている、らしい。詳しくは……俺も知らない。知りたいとも思わない。

愛沢さんに一瞥し、俺も未梨の後に続き、部屋に入り込む。両腕にぶら下がっている荷物を、適当な場所に落とし、俺は無然と部屋を見渡した。

なんというか……女の子らしい部屋とは言えないよな。

リビングのフローリングとは打って変わって、六畳ほどの部屋には畳が敷き詰められている。それにしても、この部屋には飾りっ気というものが無い。どでかい本棚は、部屋全体の二畳は締めている。部屋の中央に敷かれている布団には、脱ぎ捨てられた制服が落ちていた。女の子の部屋には未梨以外に入ったことはないが、こんな感じではないと思う。というかそう信じたい。

「仁井哉さまー。こっちに来てくださいよー」

こたつから身を乗り出した愛沢さんは、おいでおいで、と手招きをしている。

「ゲームならやりませんよ」

「えー。なんでですかー。仁井哉さまに負けたあとから、今まで、ひたすら練習してたんですよー。もう無限コンボですよー」

ちなみに愛沢さんが話していることは、某格闘ゲームの話だ。使用人と言っても、毎日が暇らしく、一日の大半の時間はゲームに費やしているらしい。一年前ぐらいに、その愛沢さんと勝負してみたが、初心者同然の俺に惨敗。根本的にゲームに向いてないのだろう。

「俺はもう帰ります」

「なんですかぁー。ヒマじゃないですかー」

「知りませんよ。未梨とやってればいいじゃないですか」

「それはー未梨さまが相手してくれればいいんですけど……全然やつてくれないですよー。仁井哉さまからなんとか言ってくださいよー」

「……とりあえず帰ります」

「仁井哉さまー。いつでも来てくださいねー。待ってますよー」

笑顔全快の愛沢さんに、軽く手を振ってあげた。やっぱり苦手だ。

「ニィ」

「なんだ？」

「指輪大切にして」

「当たり前だろ」

俺はそういつて、指輪をしている指を見せる。

「……また、こんど」

「ああ」

我が家に入るやいなやオフクロが、

「あら？ 帰りが早過ぎじゃないの？ まさか、未梨ちゃんとケン

カしたぁーの？」

しらねえよ。勝手に想像してくれ。

「わたしが想像するストーリーだと、もう貴方たちは一線どころか二、三線越えちゃってるわね。それでねー……もう毎日……」

やっぱり気持ち悪いから止めてくれ。

殺風景なりビングで、オフクロと五分ほど対談したあと、自室に向かい着替えもしないでベッティン。もちろん一人だ。

そこで、携帯が震える。

発信元は斉藤。

「なんだこの野郎」

『一声目にそれはないだろ？ えーっと、なんだっけな……あ、そ

うそう。明日のことなんだが、十一時に駅集合って言ったよな？

やっぱし十二時に駅に変更な』

「断る」

『お前って大分気分屋だよな。まあ、ちゃんと来いよ』

「だが断る」

『まあまあ、そう言うなって。明日はきっと人生で忘れられない日になるぜ』

四の五の言う前に、一方的に電話を切られた。……勝手な奴だ。

斉藤が何を企んでいるのか考えるのもバカらしく、俺はさっそうと眠りの世界へと落ちた。

3―2 スマイル（後書き）

次話は過去編の予定です。

楽しんでいた方（いる？）更新が遅れて本当に申し訳ありません。諸事情により、遅れました。次話はがんばって一週間以内に更新したいと思います。

さて、ここからはいつものどうでもいい話です。私はライトノベルが好きです。この「ぼーかーふえいす」も私はライトノベル風に書いているつもりです。他の作者様は、果たして何風で書いているのでしょうかね。と、私のどうでもいい呟きでした（笑）

物語は折り返し地点。これからもぼーかーふえいすをよろしくお願いします。

Rhapsody in the Rain 1 (前書き)

【Rhapsody in the Rain】

Ni ya

Ai sawa

Miri Tsubaki

Rhapsody in the Rain 1

夢。睡眠中に、あたかも本当に自分が経験しているかのように感じる現象。その夢をコントロールできるときがある。うろ覚えだが、その夢を明晰夢めいせいむとか言うらしい。夢を夢と自覚できて、更にその夢をコントロールできるとか。

こういう説明をするのは普通俺ではなく、辞書モードの未梨のはずなんだが、その未梨も今はいない。

何故そんな説明をしているかといえば、俺は今、夢を見ているからだ。埃だらけの床に並べられた学習机。そこには、三十人前後の人間が座っている。服装から判断すると青中の生徒だ。どういうわけだか知らないが、今の俺には夢を夢と自覚できているようだ。しかし、この夢のコントロールはできない。どうやら、この世界では俺は傍観者ぼうかんしゃらしい。

夢と気付いた理由は、簡単明白。三十人近くいる生徒の中に、青中の制服に身を包むもう一人の《俺》が座っているからだ。もう一人の《俺》は、その様子から窺うと、どうやら俺の事は見えていないらしい。他の生徒たちも俺のことが見えていない様子だ。まるでこれは、夢というより……過去の記憶を見ているような感覚だな。自分の様子なんて見てもなんもおもしろくない。

ふと、教卓に伸ばした手がすり抜けた。

ここじゃあ、俺は幽霊並の存在か……。どうせならもっとマシな夢にしやがれ。

ホームルームを知らせるチャイムと共に、懐かしい顔が入ってきた。煌めく瞳は、無言のプレッシャーを生徒たちに与える。一教師とは思えない威圧感。

青山中学校教師で三年一組の担任、……名前は――忘れた。とり

あえず、俺が心を許した数少ない先生だ。

このころの先生は、五十過ぎの女性で、もう数年経てば還暦を迎えるという年齢だった。しかし、その表面上だけを見れば、先生はどうみたって三十歳台に見える。ちょっと老けている二十台後半でも通じる。

「仁井哉くん。椿さんはどうしたんですか？」

「さあ……？ 知りませんよ。風邪なんかじゃないんですか？」

先生が出席確認を始めて、俺は始めて未梨みりがいないことに気付いた。視線を窓の外に移動させると、横殴りの雨がガラスを激しく叩きつけていた。

未梨が欠席で、天候は激しい雨。俺の記憶に間違いがなければ、確実に「あの日」だろうな。自分が何者かはっきりとわかった「あの日」。

——まったくもって、くだらない。

何が起こったかわからなかった。三十人前後の生徒たちが一瞬にして俺の視界から消え、机や椅子、景色と言うものが消失し、世界が白一色に染まる。しかし、これは別に驚くには値しない。所詮は夢だ。もう目が覚める前兆なのかもしれない。

予想とは裏腹に俺の視界に映ったの情景は、またしても同じ教室だった。……同じ、とは言えないな。三十人近くいた生徒たちは、数人しかいなくなっている。その中で《俺》は教卓を挟み、先生が対峙している。時計が進んでいるのを見ると、どうやら、時間だけを進めたらしい。

俺の脳は一体何をしたいのかね。

「仁井哉くん。これを椿に渡しといってくれませんか？」

先生は何枚かのプリントを封筒に入れ、教卓の上に置いた。

「拒否権なんてどうせないんでしょうね……」

《俺》はうんざりしたように言ったが、先生は聞いてない。満面の

笑顔を《俺》に振り撒きながら、缶を差し出してきた。

「外は寒いですから。これが、宅配代と言うことでお願いしますよ」
「……わかりましたよ。ちゃんと届けときます」

《俺》は渡された缶を見つめながら、呆れ気味にうなる。さぞ、そのミルクココアが身にしみる味だろうな。

「頼みましたよ」

暴風雨の中での傘は無意味に等しい。そう学んだ日でもあった。昇降口から出た途端、強風に煽られ、傘を無残にも破碎された。

《俺》は、二秒の思考停止の後、傘をゴミ箱に投げ捨てた。

「あーあ」

果たして《俺》は誰に向かって罵っているのだろう。こうして、第三者として見れば、危ない人にも見える。以後、一人のときは気をつけるようにしたい。

鞆と先生に渡された封筒だけは濡らさないように、ゴミ袋に入れてあるが、肝心な《俺》の姿は見るに耐えないほどずぶ濡れだ。

そんなこんなで、未梨の住むマンションに到着した頃は、満身創痍の状態。先生に貰ったミルクココアが無ければ途中で息絶えていたかも知れない。他人事に思えるが、実際俺が経験したことなんだよな。

マンションの前に着いてからの《俺》はどうも挙動不審がちである。それもそうだ。マンションに入るにはカードキーが必要で《俺》は、そのカードキーたるものを持っていない。持っているはずがない。

「あれー。仁井哉さまじゃないですかー？」

タイミングを見計らったように、登場したのは、未梨の使用人、愛沢さん。彼女は全身を雨具で包んでおり、顔以外の箇所はきっちりガードされている。唯一覗かせる顔は、どこか幼さを感じさせる。

「なにやってるんですかー？ こんなところでー？」

「未梨に届け物ですよ……。愛沢さんこそ、こんな雨の日にとこい

ってたんですか？」

「そうですよー。聞いてくださいよー。あー、ここじゃ、寒いですよねー。中で話しますよー」

愛沢さんは、アバカムでーす、と叫びながら、テンキーを打ち込む。葉月と同レベルであることは、もはや言うまでもない。

「ちよっと待ってて下さいねー。タオルとお着替えを持ってきますー」

「この封筒を未梨に渡してくれればー」

「そういうわけにはいきませーん。風邪引いちゃいますよー。中であったまっていってくださいーい」

《俺》は、もう何も言いそうになく、黙って肩を小さくすくめるだけだった。奥行きの深い廊下を走る愛沢さんの背中を見つめていた、《俺》は、突然、顔を顰めた。この時の記憶は今でも鮮明で、何を思って顔を顰めたかはっきりとわかる。「お着替え」とは何か？だ。

「タオルとお着替え持ってきましたよー」

愛沢さんが持ってきた「お着替え」とは、黒いTシャツと黒のレザージャケット。それに黒のレザーパンツ。更に、男性用の下着ートランクスまである。それも黒だ。これを全て身につけ、バイクにでも乗ったら、完璧にライダーにしか見えないだろう。

それだけではなく、愛沢さんが着ている物は、ネグリジェっていうのかな？ 露出度が高い上に、なんていうか……すげーエロい。

ツッコミ箇所がありすぎて、《俺》は、色んな状態異常魔法を受けたように、愛沢さんに視線を固定したまま動く気配がない。

それを、どう受け取ったのか、愛沢さんは、にっこり、と薄い笑いをみせ、言った。

「残念ながら下着はわたしのでは、ありませんよー。けどー、それ以外はわたしのものですよー」

その言葉に反応して、状態異常が解けるが、《俺》は弁解するこ

となく、愛沢さんのネグリジェ姿から眼を反らした。

「……ありがとうございます」

「いえいえー。気にしないでくださーい。困ったときはなんとやらでーす」

「愛沢さん」

「なんですかー？ 制服でしたら、乾燥機に入れとけば、一時間もしないうちに乾きますよー。安心してくださーい」

「そうじゃなくて……ちょっと、見ないでくれますか？」

「……やっぱり、だめですかー？」

「な、何言ってるんですか。当たり前じゃないですか……」

そう言うと、愛沢さんは心底残念そうに俯いた。さすがに、いいですよ、と言う気にはなれないからな。てゆうかこの人は何を口走ってるんだろうか。

「ちょっと興味がありませんー。残念でーす。すみませんでしたー。わたしは奥で待ってますよー」

着替えを済ました《俺》の表情はどこか緩んでいる。我ながらいやらしい限りだ。レザージャケットから匂うフローラルの香りが、そうさせているのだろう。

リビングは、数時間前に入った状態と何一つ変わらない。十畳ほどの部屋を四分割し、その一角だけに、テレビにこたつ、壁側にはソファアが置かれている。そこだけ使っていることを強調するように、カーペットが敷かれている。ソファアに身を預けている愛沢さんは、《俺》を見るや、瞳を輝かせた。

「とてもお似合いです。完璧でーす。さすが仁井哉さまでーす」
整った愛沢さんの唇からは、褒めの言葉しかでてこない。

《俺》は軽い笑顔で答え、辺りを見渡した。

「あの、未梨はいないんですか？」

「そういわれればー、未梨さまの靴がなかったですねー」

愛沢さんは、ソファアから、ふらふらと立ち上がり、部屋の一隅にある襖ふすまを叩く。その襖の先が未梨の部屋なのだというのだから、

なんとも和風の奴だ。

「未梨さまー。いますかー？」

しかし、返事はない。未梨ならいたとしても返事がなさそうだけ
ど。

「開けますよー？」

言いながら開けては意味ないと思いますよ。

開かれた襖からは、誰もいない。あるのは本棚だけで、人の気配
などはさらさらない。

「いないようでーす。さっきまではいたんですけどー」

「そうなんですか」

その相槌には、安堵するようにも聞こえた。出掛けるぐらい元氣
なら平気、とでも思ったのだろう。

水面下では、起きている出来事も知らずに。

「未梨さまが帰って来るまで、ゆっくりしていただくさーい。夕
飯までには帰って来ると思いまーす」

「別段、未梨に用があるわけじゃないですから。これだけ渡しとい
てください」

先生から渡された封筒を、愛沢さんに手渡すと《俺》は玄関口へ
足を運ぶ。が、突如その歩みが静止する。彼女が《俺》の足にしが
みついてきたからだ。これを予測できる思考を持ち合わせていない
《俺》は、苦笑を浮かべる。

「待ってくださいーい。あと半日ぐらいわたしに付きあってくださー
い」

愛沢さんは何を血迷ったのか、変な事を口走った。

「今ならコーラ飲み放題でーす^{ほーだい}」

「俺は炭酸苦手ですから」

足にしがみつく愛沢さんをどうにか振り解こうと、努力している
が、彼女の瞳には爛々と光る物があつた。

「お願いしまーす。今ならカルピスを原液で飲み放題^{ほーだい}でーす」

愛沢さんの断固たる決意を見て、《俺》は肩を大きく竦めた。

「わかりましたから……手を離してください」

「お願いしまーす。今ならハンバーガー59円でーす」

「意味がわからないですから。少しだけ付き合いますから……」

ようやく、言っていることを理解してくれたのか、愛沢さんは抱きかかえていた《俺》の足を介抱してくれた。膝元で、瞳を潤わせ、見せてくれる笑顔はどこまでも無邪気だ。

「ありがとうございます」

《俺》は愛沢さんに聞こえないように溜息をつき、小さく呟いた。

「やれやれ」

そして、俺も呟く。

——やれやれ、と。

愛沢さんが《俺》を引き止めた理由^{わけ}。それはゲーム。

この暴風雨の中、新作のゲームを買いに行っていたらしい。馬鹿げてる。そのゲームは、基本的に二人で遊ぶ格闘ゲームなんだという。聞く話によれば、そのゲームをやる相手が、愛沢さんの脳内では、《俺》しかないらしい。この人は友達というものがいないのだろうか。

勝敗のわかりきっているゲームを見届けるほどの図太い神経など、俺は持ち合わせていない。どうせ結果は《俺》の全勝だ。何試合やったまでは覚えていないが、相当の時間と精神的疲労を労したのは鮮明に覚えている。まあ、そんなことはどうだっていい。問題は、この夢だ。どう考えたっておかしい。

今の俺は《俺》を中心に半径4、5メートルぐらいなら自由に移動ができる。それ以上移動しようとすれば、肉眼では確認できないゼラチン質のような柔らかい壁に阻まれる。しかし、物理的な壁には阻まれない。現に未梨の部屋に繋がる襖をすり抜けられる。ここまでは、夢だから、の一言で片付けられる。

夢の中で、自律できる俺は、いったいなんなのだろう。この感覚

は、夢だから、だけでは説明がつかない。リアルすぎる。

……この際、なんだっていい。一番の問題は、俺はいつ目覚めるのか、だ。今のところ目覚める気配がない。感覚的にはもう2時間近く、俺は夢のなかにいることになる。これに比べれば、前者の問題は微々たるものだ。

「仁井哉さまは強すぎですよー。もう一回でーす」

俺が真剣に悩んでいるのだというのに、間の抜けた声を聴いてしまうと、どうも集中できない。集中して考えたところで、何かが変わるとは思えないが。

「もう一回でーす」

俺と《俺》が頭を抱えたタイミングは同時だった。

まただ。

十畳ほどのリビングが音も無く消失し、世界が白一色に染まる。

しかし、それも一瞬。何かを考える、期待する時間もなく、新たな情景が現われる。そこには、先程の情景となんの変わりもないように見える。《俺》のやつれ具合を見ると、数時間は経過してそうだ。

「そろそろ帰りますね……」

「あと一回だけお願いしまーす」

《俺》が立ち上がると、愛沢さんは、すかさず足にしがみついていた。

「その台詞はもう何回も聞きましたよ。そろそろ帰らないと、俺の夕飯が無くなりますから……」

「平気^{ヘーキ}でーす。ウチで食べれば問題なしでーす。だから、もう一戦だけ勝負しまーす」

足にしがみつく愛沢さんは、瞳を潤わせ、鼻腔から出てる液体は間違いなく鼻水に違いない。どちらかというと、フェミニストに属する《俺》は、強硬手段を取れるはずもなく、愛沢さんを見て、肩を落とす。

「今日の夕飯は仁井哉さまのために豪勢ごうせいにしまーす。二黄卵におうらんの卵で目玉焼きを造りまーす。魚だって焼いてあげまーす。ロールキャベツをレタスで造りまーす。デザートはわたー」

言えば、言うほど支離滅裂になる愛沢さんの口を《俺》はティッシュで抑えた。言わせ続けければ、変な方向に行きそうだったので、その選択は間違いでは無いだろう。

「落ち着いてください。まず、鼻でもかんで下さい」

「ぐしゅ、すいませーん。ぐしゅ、ぐしゅ。ありが、ぐしゅ、とうございまーす。ぐしゅ」

ティッシュを3枚重ねしたにも関わらず、愛沢さんの鼻水は、それを貫通して、《俺》の手のひらを襲う。更に言えば、借り物のレザーパンツも、涙と鼻水がブレンドした液体が付着している。これでは、どっちが年上かわかったものではない。

「仁井哉さまはー、優しいでーす」

さっきまでの凶行など忘れたかのように、愛沢さんは《俺》に微笑みかける。

「ゲームなら、いつでも出来ますよ。近いうちに、この服を返しに来ますから……その時でもやりましょうか」

「ホントですかー？」

「ホントです」

愛沢さんは、小指を差し出してきた。

「指きりでーす。絶対に来てくださーい」

ハリセンボンを飲まされないように、近いうちに来ることを決意する《俺》であった。

未梨家を去る間際、愛沢さんにカードキーを貰った。「好きなきにいつでも来てくださーい。待ってまーす。暗証番号は………」と、笑顔で言われれば誰だって受け取ってしまうだろう。だいたい、使用人の立場からして、ご主人に値する未梨の許可も無しに、勝手

にカードキーを渡してしまう愛沢さんはどういう神経の持ち主だろうか。

我が家の前には、奇妙な光景が広がっていた。暴風雨の中で、傘もささずに佇んでいる少女。長い黒髪は雨に晒^{さら}され、黒い瞳から落ちる水滴は涙のようにも見える。その瞳からは、何も感じられない。

少女の名前は、椿^{つばき}未梨。

ただの無表情、無感動、無口な幼なじみ“だった”少女だ。

Rhapsody in the Rain 1 (後書き)

時点移動は禁じ手。確かにその通りですね。すごい書きにくいっ
たらあらしません(笑)

次話は後編。コメディー忘れて、シリアスで行きます。許してく
ださい。

一応、未梨がメインヒロインです。葉月は後半戦で多いに活躍し
てもらおう予定です。

更新が遅い、と思っている読者様(いる?)。まことに申し訳あ
りません。言い訳をさせてください。この小説を前回更新いた後に、
私は「みすふおーちゅん」という小説を探しに色々な本屋に行きま
した。その小説は先月の頭に発売されたのですが、私は見つけれ
ませんでした。話を戻します。なんと! 探し求めていた小説が見
つかったのです! しかもBOOKOFFで! 私は迷わずそれを
買いました。私はその小説を2日ほどで読みきりました。問題はそ
こからです。私は「その小説」の全巻を読み直してしまいました。
外伝を合わせて全20巻。いや、ホントおもしろい——じゃなくて、
すみませんでした。醜い言い訳すみません。

ちなみに前書きのあれ。すごいその小説に影響受けてます(笑)。
やるのは今回だけです(笑)

恐らく次話は来年です。

では、次回の更新は、早めに済ませるように努力したいです。こ
れからも「ぼーかーふえいす」をよろしくお願いします。

Rhapsody in the Rain 2 (前書き)

セオハヅキ (♀)

一人称…アタシ

特徴…ツンデレ。ツインテール

身長…1,57m

体重…45kg

好き…仁井哉の吹くハーモニカ。ゲーム

嫌い…うじうじしている人

特技…ギター。ピアノ。ハーモニカ。

備考…一年二組所属。音楽推薦で入学した十年前の幼馴染。最近出番がない。

Rhapsody in the Rain 2

夢の中とはいえ、黒髪姿の未梨は懐かしい。

痩身の身体には不釣り合いな白のダウンジャケットに漆喰のレザーパンツ。ダウンジャケットの間から垣間見れる黒いシャツは、水が染み込んでいたためかぴっちりとして身体に吸い付いており、C指定ぐらひは掛かりそうだと。

「お前……なにやってんだ？」

少しでも気を抜いたら吹き飛ばされそうな暴風雨のなか、そこに未梨は平然と佇んでいるのだ。《俺》は疑問さを感じられる面持ちで、ゆっくりと未梨に歩み寄り、借り物であるピンクの傘を差し出す。

「自然のシャワーもほどほどにしとけよな。風邪引くぞ」

「……………ニィ？」

前髪の隙間から覗かせる虚ろな瞳が、わずかだが光を取り戻すと、未梨は今まさに《俺》の存在に気づいたかのような反応を示した。

未梨の身体がふらつとよろめいたかと思えば、ひざまつくように崩れ落ちた。這い^{うずくま}蹲るような体勢の未梨は、素人目で判断しても尋常じゃないだろう。

「おい、未梨、どうした!？」

「だいじょうぶ」

未梨は抑揚のない声で応答すると、何事もなかったかのように立ち上がった。

「ただの貧血」

今のが本当に貧血なのだとすれば、今頃は全国にいる貧血持ちの人々は大変なことになっているに違いないね。

しかし、気が動転している《俺》には、貧血などという嘘っぱちに疑念のひとつすら抱かずに、なんなりと受け入れてしまう。

「そんなびしょ濡れだから貧血になんてなるんだよ。シャワーなら

家でいくらでも浴びれるだろ？ 早く帰れ。愛沢さんだって心配してたぞ……」

最後の言葉をわずかに濁したのは、《俺》が咄嗟に浮かび上がったでっ上げだからだ。実際の愛沢さんは「未梨さまなら平気でーす」とか言ってたからな。色んな意味で使用人を超越した人ということ、改めて思い知らされたね。

「やること、ある。まだ、帰れない」

そう呟いた未梨の視線の先には、雨の中を駆け抜ける一人の男の姿が見受けられた。《俺》はその影に気付いた様子は皆無だが、俺の瞳には明晰に映し出されている。

あれが、例の変態‘能力者’なのだろうな。

「やる事ってなんだよ？ 大切なことなのか？ 今日やらなくちゃいけないことなのか？ 別に急ぎの用事じゃなかったら——」

「今は、説明する時間、ない」

表情こそ無表情だが《俺》の言葉を遮った口調には、強い響きが含まれている。未梨は横目で《俺》を促すと、雨のカーテンを払い除けながら、闇の中に向かって疾走し出した。

徐々に闇に吸い込まれてゆく小柄な少女の後姿を見つめながら、《俺》は小さなため息を付き、意味も無く後頭部をぽりぽりと掻いた。

「…………どうすっかな」

呟く《俺》は、まるで誰かに意見を求めるような言い草だった。

もちろん、こんな暴風雨のなかにいるのは、俺を除けば《俺》だけであり、答えてくれる人など誰もいない。少なくとも俺の視界に収まる範囲には猫一匹見当たらないな。

いつもなら煌々と輝く外灯もこの暴風雨のなかでは、萤火程度の明かりで弱々しい。

《俺》は眉間にしわを寄せ、考え込むように首を傾げる。見知らぬ他人ならともかく、知り合い——仮にも十年近くの付き合いになる幼馴染み、しかも、様子がおかしい状態で放っておくってのも後味

の悪い話だ。かといって、追いつける必要性も特別あるわけではない。追いつけたとしても、もしかしたら、その行為自体が未梨自信に迷惑を掛ける可能性も充分にある。未梨に限ってありえない話だが、もし、彼氏との密会現場を目撃してしまった場合、《俺》は気まずさ故に蒸発してしまうだろう。

「……まあ、平気だろ」

そう自分に言い聞かせ、我が家に身をひるがえしたときには、未梨の姿は完璧に闇に吸い込まれていた。

諦めがつき、熱い吐息を漏らした《俺》は我が家に歩を進める。すると、からん、と足元で金属音が微かに鳴り響いた。何気なく――名前を呼ばれたから振り向くほど何気なく、音がした足元に視線を落とすと、そこには、いささか住宅街に似合つかわない品物があった。

十年近くここに住まい《俺》は一度たりとも、このような物が落ちていると想像しなかっただろう。驚愕の品物を目の前に《俺》は唇を捲り上げ、大きく目を瞠った。わずかな灯りを漏らす外灯に反射した金属は白銀の光を煌びやかに輝かせている。

ナイフだ。

少なくともそのナイフは果物ナイフやペーパーナイフなどの生易しい物には見えない。もしこれが果物ナイフなどに見える奴がいるとしたら、そいつは今すぐ眼科に行くことを推奨する。

「なんだよ……これ」

困惑した表情のまま《俺》はしゃがみ込み、鋭い銀光を放つナイフを慎重に拾い上げた。包丁すらまともに触ったことない《俺》は、自分の手中にある凶器に視線が釘付け状態。鋭く湾曲している刀身は、銃刀法違反で禁じられている長さをゆうに超えているだろう。

趣味がサバイバルの漫画家が、突然散歩をしたくなり、たまたまここを通り過ぎて、たまたま持ち歩いていたナイフを落とし、たまたまそれを蹴り付けた《俺》が発見した、というのは、まあ、ありえないだろうな。どんなサバイバル好きでも、こんな物騒なナイフ

を所持できるとは思えない。となると……

未梨か？

確かにナイフが落ちていたところは、未梨がちょっと前までいたちょうど足元だ。が、それだけでこの所有者を決めるのもいささか早合点というものなのかもしれない。けれども、現段階の情報のかでは、所有者候補は未梨しか存在してないことも確かだ。

もし、未梨がこの世にも物騒なナイフな所有者だとしたら、あいづはこれで何をするのだろうか？ 日が出ているならまだしも、すでに辺りは闇が覆いつくしている。そのうえにこの雨だ。視界すらままならない状況で未梨は何をしようとしているんだ？

悪い予感しかない。

思い立ったら行動に出る——そんなふうにかえてる奴は、単なる遊び人か考えなし。そう思っていた《俺》は、ピンクの傘を我が家の敷地内に放り投げ、^{どうもう}獰猛なまでに鋭い切っ先を備えるナイフを剥き出しにしたまま鞆のなかに放り込み、刺すような寒さのなかを唇を噛みしめ耐え疾走した。

——これで、めでたくお前は単なる考えなしの一員だ。

別に未梨の行く場所に当てが合ったわけじゃない。だからと言ってがむしゃらに走っていたわけでもない。てゆうのは、今だから言える付け足しの言い訳であり、実際のところは当ても何もなく、ただただ未梨が駆け抜けていった方角に疾駆してただけだ。

全体の降水量に排水溝の処理速度がまるで追いついていない。それどころか、排水溝が処理できる許容値の限界は超えており、激しく溢れ出した水はアスファルト上にくるぶしまで浸かるちよつとした池を作り出している。一步踏み出す度に足元の水溜りは激しく四散し、ただでさえ少ない体力を異常な速さで消費させていった。このとき唯一救いは、脇腹に突き刺すような痛みがなかったことだ。もし、愛沢さんの手料理を食べていたら、一分も経たないうちに、

土に帰っていたことだろう。食べていたら、食べていたで、未梨には合わなかったかもしれない。

そんな疑念が脳裏に過ぎるが頭を横に振り、払い除ける。筋肉が悲鳴を上げても、骨が軋むような感触を覚えても、肺にまともな酸素が送り込まれなくても、《俺》は無我夢中にアスファルトを駆け抜けた。

そこに未梨はいた。

見つけられたのは単なる偶然に過ぎない。何も考えず、ただ道なりに突っ走り辿り着いた結果、闇とは対蹠的な純白のダウンジャケットが視界に入っただけだ。

天に向かって聳え立つ巨大な建造物を正面に未梨は佇んでいた。いつもならば、そこでは多くの人が賑わい、遊び、勉強に励んでいる。しかし、いまでは人ひとりの気配すら感じられない。

そう、ここは俺の母校――青山中学の校庭だ。

水を吸い込めるだけ吸い込んだ土は許容範囲を超え、沼のようにぬかるんでいる。《俺》は呼吸がままならない状態で、喘ぎながら未梨に駆け寄っていった。

「どうやら、お客さんのようだね？ 見た感じは高校生……：中学生ぐらいかな？ 忘れ物って感じには見えないけど、キミは何しにきたんだい？」

透き通った男の声が疲労困憊である《俺》の鼓膜を叩いた。激しい雨音が鳴り響くなか、まるで、声の発信元がすぐ傍らにあるように聴こえる。《俺》の視界に入るものと言え、こちらに冷徹な視線を送り込んでいる未梨ぐらいであって、それ以外にも見受けられない。

「逃げて」

何の前兆もなく、数メートル先に佇んでいたはずの未梨が《俺》の眼前に現れ、ひび割れた声で淡々と言い放つ。

「早く、逃げて」

「逃げてって……なんでだよ？」

たじろう《俺》の脳内では、様々な疑問が浮かび上がっているが、何一つ言葉が出てこない。——ナイフのこと、今の声のこと、なぜそんな慌てているのか、なぜここに來たのか、文学少女に瞬間移動はできるのか。

言葉を詰まらした《俺》の鼓膜に悪魔のような囁きが伝わってきた。

「もしかして、キミが噂の仁井哉くんなのかな？」

闇夜のなかから生まれ出て來たように、突然、男が数十メートル先に現れた。男の出で立ちは、まるで今から葬式にでも行くのか、喪服のようなスーツを身にまとい、鼻筋が通ったしっかりした顔には、誰かの笑顔をそのまま切り取ったような気味の悪い笑みが張り付いている。その風貌から察するに歳は二十代といったころだろうか？

「誰だよ？ あんた」

名指しで呼ばれたことに疑問を持った《俺》が訝しげに訊くと、男はただでさえ細い糸目をさらに細め、機械的な笑みを浮かべた。気味が悪いこのうえない。

「僕は……キミと同じ存在で違う存在。って言ってもわからないよね」

男の揶揄やゆするような言葉を紡ぐと、前髪が垂れ下がった額を押さえ込み、小さく笑い出した。

「……なんで、あんたはこんなところにいるんだ？ あんたが未梨こいつを呼び出したのか？」

「どうだろうね？ 別に僕が椿を呼び出したわけじゃないよ。ただ、椿と話をしたいと思ったら、本当に椿が僕の元へ来てくれたんだ」

未梨がこんな暴雨風のなかでわざわざ学校に訪れた理由は、この男を追い駆けてきたからにまず間違いはない。問題は未梨が男を追

い駆けた理由。その理由の知らない第三者がこの状況を見ればどう思うだろうか？　様子がおかしい幼馴染。短剣まがいのナイフ所持容疑。

浮かび上がる答えは全て良いものではない。

「なあ、未梨。お前があいつにどんな恨みを持っているか知らない――」

「説明は、あとで、する。だから、今すぐ、逃げて」

またしても言葉を遮られる。

未梨は《俺》の疑惑の視線を一瞥すると、ダウンジャケットの胸元に手を突っ込んだ。出てきた手に握られていた物は、革製だと思われる漆喰の手袋。未梨は無表情のまま入念に手袋をはめる。

次の行動を思い巡らせていると、含み笑いの治まった男は人間味が欠落した笑みでこちらを見やった。

「そういうことで仁井哉くん。大人しく帰ってくれないかな？」

「……理由を聞いたらな」

十年近くも付き合った幼馴染が危ない状況に立たされているのに、理由も聞かずに帰れるわけがない。理由を聞いたとして、未梨に危害が及ぶような答えならば、どちらに非があるにしろ《俺》は男に殴りかかることだろう。

「僕は聞き分けの悪い子は嫌いなんだよ。せっかく見逃して上げて言っただけでさっさと帰ったほうがいいよ。いくらキミが椿のお気に入りでも、邪魔をするつもりなら……殺すよ？」

鷹揚な口調とは裏腹に、男は糸目を大きく見開かせ、尋常でない圧迫感を身体全体にまとい始めた。男の変化を敏感に感じ取ってしまった《俺》は、小刻みに身体を震わせ、小さく喘ぎ始めている。

夢の住人の俺に強烈な圧迫感は伝わらないものの、男の変化は一目瞭然。

完璧な殺意。

肌が焼け付くような感覚を覚えたのはこのときが初めてだ。人生経験でも論理でもなんでもない。ただ本能が《俺》に危険を警告し

ている。それもとびつきりに危険な奴を。

圧倒的な恐怖が闇と雨を支配するなか、未梨はその影響を受けた様子は見られず、威風堂々と男を睥睨している。その視線がゆつくり《俺》へと移動した。《俺》を見つめる双眸は、いつもの虚無とは違い、わずかな感情が垣間見れた。なにかを決意したような――「ニィ」

《俺》の首筋に、するり、と白く細い指が伸びてきた。その指回しはまるで赤子を宥めるように優しい。

「……許して」

撫でるようなその動きが静止したかと思えば、次の瞬間《俺》の頸動脈に小さな親指がえぐり込まれた。青ざめた唇からは小さな嗚咽だけが零れ落ちる。《俺》は自分の身に何が起こったさえわからずに、まどろみの世界へと堕ちていった。

前のめりに倒れてくる身体を未梨はしっかりと支え、既に気を失っている《俺》に、声にならない声で――消え去りそうな声で――呟いた。

「ごめんなさい」

Rhapsody in the Rain 2 (後書き)

続きます。

前回の更新日より一ヶ月ぐらい遅いですね。第三者の状況を語る一人称ってムズすぎますよ(笑)。

更新の遅い言い訳は……最近脳内が「関西」で埋め尽くされつつあり、集中力が欠落しているのが原因です。わかる人はわかってください(笑)

ちよつと余談します。

私の本棚には大量の小説で埋め尽くされています。7対3ぐらいの割合で、ほとんどライトノベルですけど、そこは置いといて。買った小説にも拘わらず、いまだ手付かずの小説が何冊もあります。いつか読もうと思いつつも、その前にまた新しい小説を購入しちやいます。その繰り返しが悪循環をつくり、いまに至ったわけです。一日72時間ぐらいほしいですね(笑)

次回は一週間以内に更新すると誓いますので、これからよろしくお願いします。

Rhapsody in the Rain 3 (前書き)

ニイヤ(♂)

一人称…俺

特徴…独り言が多い

身長…1.75m

体重…66kg

好き…ボーリング。ビリヤード

嫌い…冗談のわからない人

特技…ボーリング。ハーモニカ。飛んでいるハエを捕まえられる。

楽器を自由自在に演奏できる。

備考…一年二組所属。本編における主人公。基本的にめんどくさがりやなダメ人間。楽器を自由自在に操れる不思議な能力を持っている。スタンドで例えるならステイッキー・フィンガーズ。

Rhapsody in the Rain 3

さて、この緊迫した空気の中悪いが、俺はひとつ考えなければならぬ。

このときの《俺》は真正銘ここで記憶が飛んでいる。にも拘わらず、《俺》が気絶した今、なぜ俺の意識があるのだろうか？ これまでの出来事は寸分の狂いもなく、まるで記憶のビデオでも鑑賞しているかのように、俺の心境など哀れられるほど無視され、どんな進行していった。しかし、ここからの記憶は一秒たりとも録画されていないはずだ。録画されていないビデオで再生されるものはせいぜい砂嵐ぐらいだろうに。空白の記憶。その部分が今まさに再生されている。

夢だから、って一言じゃそろそろ納得できなくなってきたぞ。そもそもこれが夢かどうかすら疑わしく思えてきた。忌々しい記憶をこれほど忠実に再現しといて、あとは俺の脳が創造するフィクションか？

「彼氏を気絶させて、どうするのかな？」

正直な感想を言えば、このとき、目覚めることに一縷の望みを持つていたが結果はこの通り。

俺の脳はなにを見せたいんだ？

「……………」

未梨は、その痩身からは想像できない臂力りよりよくで《俺》の身体を片手で抱え上げると、校舎に向かって淡々と歩を進める。針のように鋭い殺気を放つ視線に、一瞥すら与えず、男の傍らを無言で通り過ぎた。

屋外で唯一屋根がある昇降口玄関に意識のない《俺》の身体を仰向けに寝かせると、純白のダウンジャケットを脱ぎ、それを《俺》の身体を覆い隠すように被せる。そして、未梨は胸の前で小さな十字を切り、祈るように両手を重ねた。まだ《俺》は殉教じゅんきょうしたわけじ

やないぞ。

黒いノースリーブに革手袋という奇抜なファッションは未梨の不思議少女さをより強めている。立ち上がった未梨は、50メートルほど先にいる男を強く肉薄した。未梨と男の狭間には、見えない何かが激しく蠢^{うごめ}いているように、一定間隔を開けて、ふたりはそれ以上近づこうとしない。

俺はこんな状況など知らなければ、知りたくもない。たえ、この状況が実際に起こった話だとしても、俺にとってはパナウェーブ研究所より興味の沸かない事柄だ。

「一応訊くけどさ、なんで椿は僕を追いかけるのかな？」

「あなたをとめるため」

「とめるって……僕のなにをとめようとしているんだい？」

「あなたには一週間前に五十五歳の男性と二十五歳の女性に悪意的に？能力？を使用し、内臓を始めとするあらゆる臓器機能を麻痺させた疑いがある。そこからここに至るまでの逃走経路からは？能力？が原因と見られる臓器機能麻痺者が152名。これもあなたが禍根であると見られている」

「それで？ 椿は僕をどうするのかな？」

相変わらずの気味悪い笑みを崩さずに、男は嘲弄^{ちょうりやう}の言葉を吐き出し続けた。

「わたしの役割は、あなたがこの事件に関与しているか。その真偽を調べること」

「真偽もなにも、椿の言ったことは全部本当のことだよ」
ウソツケ。

「………あなたのしたことを見過ごすことはできない」

普段から無口少女で貫き通している未梨は、人が変わったかのよう^{よう}に言葉を紡いだ。

「刑法204条及び能力の無断使用により、あなたを逮捕する」

「僕がね……もともと、ここに寄ったのも、椿、キミと話をしたかったからなんだよ。僕がこの地域に潜伏すれば必ず現れると思って

いたからね……どうだい椿、いまからでも遅くない。僕と一緒に来ないか？ もともと神に選ばれた僕たちが無能な人間に従う必要なんてなかったんだ。この？能力？さえあれば、僕たちはなんだってできる。そう思わないか？」

「思わない」

未梨は明確な敵意のこもった視線を男に送り込みつつ、一步前に進み出た。

「わたしもあなたも無能な人間のひとりに過ぎない」

「僕が無能だって……？ それは、笑えない冗談だね。あんな人間と僕を一緒にしないでほしいな」

いかにも心外げに肩をすくめ、にこやかな笑顔——だが、どこか棘のある表情で未梨を見据える。

「もう一回だけ訊くよ？ 僕と一緒に——」

「断る」

ちなみに俺はというと、考え込むのもだるくなったので、この深夜二時ぐらいに放映されていそうなアニメ的光景を体育座りをしながら遠くで見守っているのだ。この際、もう夢でも妄想でもなんでもいいから、早く現実世界に帰りたい。これなら、スカラ―電磁波について学ぶほうが幾分マシだね。

均衡状態を崩したのは男だった。

男は独特な歩調で一步、また一步、未梨に歩み寄る。

歩調といい、様子といい……あの男はなにかがおかしい。このやり場の無い違和感は、夢だからなんとかの理由ではなくて、気絶する前の俺でも実際に感じていた。気のせいではない。違和感の正体………ああ、わかった——

——あの男は身体が一切濡れてないんだ。

衣類を始め、髪の毛一本すら男は濡れていない。豪雨のなかでそれは常識的に分析してありえないことだ。

付け加えて男の歩き方。いや、別に男の歩き方は風変わりではなく、ごくごく普通だ。違和感の正体は、男の歩いている場所にあっ

た。男は文字通り？水の上？を歩いている。豪雨により発生した水溜りの表面上を揺ぎ無い歩調で進む。既に人間技ではない。

「椿も無能な人間のひとりだったんだね」

男は水上を滑るような足捌きでさっそうと未梨の背後に回り込むと、皮肉たっぷりげに呟いた。同時に、ナイフのように鋭く突き立てられた手刀が未梨の腹部に繰り出される。しかし、それはわずかに脇腹を掠め取っただけだ。未梨は男の凶行あたかも予知していたように身体を傾け躲すと、素早く身をひるがえす。そのまま軸足だけを男の足元に滑り込ませつつ身体を旋回させると、握り締めた拳を迷い無く撃ち出した。女子中学生――人間とは思えぬ疾さを持った拳は、男の顔面に突き刺さり、辺り一帯を轟音で轟かせた。

「さんねん……。あと十センチ足りないね……」

甲高い音が空間を木霊する中、男は抑揚のない声で呟いた。その声色は、とても顔面を潰された男とは思えないほど透き通っている。いや……。拳など最初から届いていない――男の眼前で完全に静止しているんだ。まるで、見えない壁にでも阻まれたように。

ところで、こいつらはなにをやってるんだろう？ 未梨から話は多少訊かされていたが、ここまで人間離れしているとは……。いやいや、これは夢だ。所詮は俺の^{しよせん}大脳が創り出している完全妄想フィクションに過ぎない。たぶん。

俺が考え込んでいる最中、未梨は次の行動に出ていた。ただでさえ一連の動きについていくのが精一杯の俺をよそに、未梨は間髪容れる隙を与えずに、握り締めた逆拳を男の下顎に跳ね上げる。コンクリートが砕けたような破碎音とともに水飛沫が激しく飛び散った。にも拘らず、未梨の拳はまたしても男に触れる直前で停止している。男は相変わらずの笑みを浮かべたままで、なんらかのアクションを起こしたとは考えられない。未梨が意図的に攻撃を止めたと考えるのなら、轟音の説明がつかなくなる。

「今日はいいい天気だね。椿。こんなにも素晴らしい天気じゃなかったら今頃の僕は顔面を潰されていただろうね」

顎^{あぎと}の手前で停滞していた拳に、突如ラファエルブルーのなにかが絡み付いてきた。一体どこから沸いて出たのか、あたかも意思を持ったように蠢^{うごめ}くそれは、アメーバを連想させる。蠢^{うごめ}くアメーバ状のものからは、無数の触手が飛び出し、か細い腕に纏わり憑き、蝕むように侵食してゆく。

「無駄だよ。キミじゃあそれを取り払うことができない」

絡み付いてくる触手をひっぺ剥がそうとする未梨に、男は子供をあやすような口調で淡々と言い放った。このアメーバ状のものはどうやら強い粘着性があるらしい。無理に剥がそうとすれば、無きに等しい肉までもが取り除かれることになるのは目に見えている。手の施しようがないという奴だ。

既にアメーバは肘までを覆い尽くし、なおもその浸食が衰える気配はない。

そこで、初めて男の微笑が消え失せた。

未梨は自分のか細い腕に絡み付いてくるアメーバを雑草でもむしり取るかのように引っ張り始めたのだ。アメーバと一緒に剥がれ落ちる皮と肉は、ぶちぶちと痛々しい音を鳴り響かせる。

「あなたは自分の？能力？を過信しすぎている。この間、わたしに攻撃を加えれば殺せなくとも、決定的な損害^{ダメージ}を負わせることができたはず」

腕とアメーバが完全な形で別々に分離すると、アメーバは未梨の手中で、どろり、と溶け落ちた。大部分の肉を削り取られた腕は、豪雨にも負けずとも劣らない大量の血で赤く染まっている。にも拘わらず、未梨は痛みに顔を歪ませるところか、眉ひとつ動かさずに男との間合いを取るように素早く後ろに飛び退った。

俺の脳はリアリティを求める場所がおかしい。これはC指定どころかZ指定にしたほうがいいだろう。あの肉が削ぎ落とされた腕を見ていると夢の中だっているのに、吐き気が押し寄せてくる。

「確かに……ちよっと僕は油断していたかもしれない。けど、そんな腕でなにができるんだい？ 攻撃が届かないキミになにができる

？」

男は自分が優位であることに気づき、一度崩した表情に再び機械的な笑みをこしらえた。

「椿。僕がなんの考えもなしにキミの前に現れたと思うかい？ 正直に言って、僕はキミに勝てる気がしなかった。だから緊急事態——ちやうどいまみたいな状況になったときのことを考えて、今日にしたんだ。僕の？能力？が最大限に発揮できる今日に……」

「……………」

未梨は足元の泥を蹴りつけ、豪雨を振り払いながら兆速で男に向かって飛翔した。あまりの疾さに俺の動体視力では、未梨の影を捉えることが限界だ。わずかに映し出される未梨の姿も幻のように忽然と消え失せた——刹那、四度に渡る破碎音が鳴り響いた。同時に男の背後に雨とは違った紅い水飛沫が爆散し、長身の影をよろめかせる。

男が細長い腕を自分の背後を無造作に突き出したのは、それから一拍遅れてのことだ。伸びきった指先には、上体を仰け反らせている未梨が男を睨み据えている。それを男は気味悪い笑みで一瞥すると瞬時に軸足を入れ替え、体勢のままならぬ未梨の顔面に手刀を鋭く突きだした。耳が痛くなる風切り音は雨を伝って広く響き渡る。だが、結果的に手刀は未梨を捉えることはなかった。額に男の爪先が触れる直前に、未梨は仰け反らせた上体をさらに仰け反らせ、コリバノフさながらの後方回転で間合いを大きく空けたのだ。

「一秒で四発……前よりキレが増してきたね？ けど、いくら疾だろうと、僕のの前では無力だよ。椿。いくらキミとはいえど、僕の？壁？を破くことはできない。現にキミの攻撃は一撃も僕に届いていない」

「……………」

男と対峙し合う未梨の前髪比率はどこかおかしい。雨に晒され瞳を完全に封鎖していたはずの前髪は、右側部分だけが綺麗に切断されて右目が露出されている。恐らくこれは男の手刀によるものだろう。

う。

まあ、夢だもんな。手刀が剃刀ほどの切れ味を持っていたって別におかしくない。と思う。

「けど、僕の攻撃もなかなか決まらないのが現実。このままじゃ、椿を倒す前に増援が到着しちゃうかもしれないなあ。その前に……勝負はつけさせてもらおうよ！」

男は空を仰ぐように両手を大きく広げると、そのまま、掌を足下にある水溜まりへと躊躇なく突き入れた。

校庭のほとんどを埋め尽くしている水溜まりが、川面に反射する夕日のように目映いばかりの光を放ちだした。発光し出した水は、幻想的な世界を想像させたが、それも一瞬のこと。発光し続ける水溜まりが、もぞもぞと微生物のように蠢き始めたのだ。まるでそれは獲物に群がるハイエナのように男の手元へと群がってゆく。それどころか、降り注ぐ豪雨でさえも男の手元へ吸い込まれている。全ての水という水が男の手元に吸い込まれていき、数秒前までぬかるんでいた土は、まるで水気が吹っ飛び、枯れた大地に亀裂が入り込んできている。

超常現象のように男の手元に集った液体は、ひとつの鞘に収まり巨大なスライム状のものが出来ていた。発光は弱まることを知らないのか、放つ光は強さを増してゆき、さらになんらかの形を構成し出している。

——彼の？能力？は液体を自分の意思である程度まで自由に操ることができる。

そういえば……未梨はそんなことをうそぶいていた……恐らく男の言う？壁？とは雨水で作り上げた物。そして、あの巨大な塊は男の？能力？使用による物。そして……

いやいやいやいや、これは夢だ……。俺の脳が創り出した完全妄想フィクションである夢だ。

「これが、僕の切り札さ。じっとしていれば楽に逝けるよ？」

形があらわになったそれは、あまりにも非現実的なものだ。

男が「切り札」と呼んだそれは、一見すればヒトの形に見えなくもない。それは、長身の男よりも頭ふたつみつつ分ぐらいはゆうに超えており、未梨と比較すれば、縦も横も二倍近くはあるだろう。その巨軀に先程まで宿っていた強い白光は嘘のように消え失せ、いまでは半透明の身体に螢火程度の灯りをその身に灯していた。雨水の集合体だけにその巨体は若干青みかかっている。

未梨は超常現象の塊を目の前して、驚きの言葉どころか表情にさえ変化が見られない。ただ、巨軀の出現と同時に、反撃のできる構えをとっただけだ。

いくら人間味が激しく乏しい性格とはいえここまで無反応で貫き通すとは……ってこれは夢だ。何度も言うようだが、これは俺の大腦が作り出した完全妄想フィクションである。あんなものが現実存在するはずがない。

本来ならば人間の顔にあたる箇所には、なにも存在していない。肩から足下にまで架けて長く伸びた豪腕は小刻みに痙攣をしている。次第に痙攣は腕のみならず全身に広がりを始め、巨軀は前のめりに倒れそうになる身体を自分の両腕で支え、体勢を保つだけで必死そうだ。

「椿……キミならわかってくれると思うってたのに。僕は……椿のことを忘れないよ」

男が詭弁を言い終えたときには、既に未梨は地を蹴っていた。

未梨は瞬間移動さながらの疾さで巨軀との間合いを一瞬で消失させる。予備動作なしに蹴り上げた爪先は巨軀の胸部に直撃し、その巨体を宙に浮かび上がらせた。空高く舞い上がった巨軀を追いかけるように、未梨も冗談のように飛翔する。

落下を待つことしかできない巨軀の胸部に、旋回する踵が突き刺さった。慣性の法則プラスアルファの速度で落下した巨漢は、受身さえ取れずに背中から大地に叩きつけられた。柔くなった大地では

その衝撃に耐えきれず、なるがままの地盤沈下を起こす。

轟音の反響が鳴り止まぬうちに、弾丸と化した未梨が追い討ちを掛ける――巨漢の胸部に小さな膝が喰い込まれた。膝が押し戻される反動で、未梨は巨軀から離れるように飛び去る。一連の攻撃が巨軀に損傷を負わせることができたかはわからないが、先程よりも痙攣の強さが増していることは確かだ。

未梨は脈打つ巨漢から視線を逸らし、再び男と対峙する。

「さすがは、椿だね。いまの一連のコンビネーションには感嘆の言葉しか思い浮かばないよ」

男は両手を合わせ、他所の国の貴族っぽい拍手で未梨を讃えた。その態度はいかにも余裕の表れであり、巨軀が倒された動揺は微塵に窺えない。あるいは動揺するほど出来事ではないのか――意味深な笑顔が消え失せたのはそのときだ。

「けど……まだ終わってないよ」

あと半秒、未梨が上体を屈めるのを遅れていたら、小さな頭部は吹き飛んでいただろう。頭上を通り過ぎた‘なにか’は、湿った黒髪を数本持つて行き、空気の壁を爆砕させた。

未梨は頭上を通過したものを巨軀の拳と視認すると、なおも痙攣を続ける足元に攻撃を試みた。上体を屈めたまま身をひるがえし、巨軀の軸足に回し蹴りを叩き込む。蹴りは決まる直前に、青い半透明の巨軀は音もなく消え失せた。目標物を失った蹴りは衰えることなくそのまま空だけを切り裂く。予想外の手応えがなく未梨の身体は体勢を保てずに尻餅をついた。

まるで無防備な未梨の頭上に、青い巨軀が舞い踊る。

天から襲い掛かる巨軀を黙認して、未梨は立ち上がろうとはせず、両の手に力を込め始めた。腕の力のみで瘦身の身体をわずかに浮かびあがらせ、振り子のように勢いをつけると、後方に飛び退る。巨軀が舞い降りたのは一泊遅れてのことだ。

巨軀の着地は大地に軽い地響きを起こさせた。着地とほぼ同時に繰り出されたのは巨軀の逞しい豪腕。自分の頭より大きい拳を未梨

は足を巧みに捌き、紙一重でかいくぐる。そのまま巨軀の胸元に身を滑り込ませると、未梨は自分の腰元に手を回した。

「えっ……………」

この場に似使わない恭しい声は未梨の口からほとばしったものだ。瞬きひとつさえしなかった漆黒の瞳は、わずかだが小さく見開かれ、驚愕と動揺の入り混じった複雑な表情に豹変した。ただ、背後に回した手はなにかを捜し求めるように激しく動かされている。

その瞬間を巨軀は見逃さなかった。

未梨は瞬時にいつもの冷静さ、もとい無表情を取り戻すが、そのときにはすでに巨軀は撃鉄を振り被っている。今度こそ躲せるタイミングじゃない。そう悟ったのか、未梨は顔面を覆い隠すように両腕を持ち上げた。しかし、その分腹部はまるで無防備だ。

そこに、コンクリートさえ砕きそうな巨軀の拳が撃ち放たれた。

強烈過ぎる一撃をまともに浴びた未梨の身体は、つむじ風に煽られる木の葉のように軽々と浮かび上がり、空中で放物線を描きながら地面に叩きつけられ、ぬかるんだ土の上を転がり続ける。いくら泥が衝撃を緩和してくれたといっても、未梨の身体を貫いた衝撃は計り知れない。

それでも必死に起き上がろうとする未梨だが、泥だらけの身体は痙攣が発症しており、うまく立ち上がれないでいる。

「今度こそ、さよならだね……椿。そんな無理しなくてもいいんだよ」

身悶える未梨の姿に見かねた男は、背後に巨軀を従えながら未梨に歩み寄った。

やっつのことで立ち上がった未梨は、眼前にいる男を睥睨する。しかし、痙攣の治まらない身体はとても痛々しい。

「椿……………もう、キミの負けなんだ。最後ぐらいじっとしていたほうがいいよ」

男が雄弁に語っている最中に、背後に控える巨軀はその豪腕をいつでも繰り出せるように構えを取っていた。

「わたし……は………」

未梨がぐぐもった声で一言一言言葉を吐き出すたび、開閉される口からは血が溢れ出している。

「ゆっくりでいいよ。最後の言葉ぐらいいちちゃんと聴いてあげるよ」
男が窘めるように言うと、未梨は咳払いひとつし、血塊を吐き出した。

「わたしは、あなたの？能力？を甘くみていた。だから……」

「だから？」

「わたしも？能力？を使用する」

「………笑えない冗談だね。それじゃあ、今まで？能力？なしでの動きをしたのかい？ありえないね。負け惜しみもいいところだよ………もう、死んでいいよ」

男が言い終えると、巨躯の拳が雷撃の如く振り下ろされた。
唸りを上げる拳を目の前にして未梨は俯いたまま、呟いた。

「制限解除レベル1——限界値三〇パーセントの引き上げを申請——
六〇パーセント——承認完了」

刹那——暗雲を切り裂き、稲妻が大地に突き刺さった。轟音と同時にやってきた落雷は凄絶な闇夜を青白く染め上げ、視界と聴力の機能が停止に陥る。

だが、それも一瞬。一瞬だったはずだ。

回復した俺の視界に映るものは、佇む未梨と仰向けに倒れている男。数秒前までいたはずの青い巨躯の姿はどこにも見当たらない。

あの一瞬の間になにが起こったんだ？ いままで起こっていた出来事は全て俺の白昼夢だったのか？ ……って、深く考える必要はないな。これは夢なんだから。だいたい夢のなかで白昼夢を見る奴なんていないだろうな。

「左腕橈骨筋、左橈側手根屈筋を及び三十二箇所負傷。代謝速度の

引き上げを申請——承認完了」

閻魔^{えんま}の呼び掛けのように呟いた未梨の左腕からは、腕そのものを覆い隠すほどの白煙が立ち昇り、肉の焼ける音が響き渡る。未梨はその不可解な現象を鮮やかにスルーしつつ、気絶している《俺》へと視線を転じた。

一方、なにも知らずに九死に一生を得た《俺》はといえば、アホ丸出しのアホ面で気持ちよさそうに寝息をたてている。ここにいる《俺》は真正銘の自分なのだが、アホ面を見ていると無性に苛立つてくるのは何故だろうか。もし、殴れるのだったら、今頃《俺》は違う意味で眠りこけてるに違いないね。

やがて、未梨の左腕から立ち昇る白煙は勢いを弱めつつ、消え失せていった——現れたのはほぼ無傷な左腕。未梨は感触を確認するように、再生した左手を開閉させる。しかし、治癒された傷は左腕だけであり、額や頬などにちらほらと視認できる生傷は痛々しく残されていた。

これが、未梨の？能力？なのだろうか？ 実際に見たのは初めて……ってこれは夢だ。俺の脳が（以下略）

未梨はどこからともなく取り出した縄で気絶している男を手際よく束縛すると、それを乱暴に担ぎ上げ、校舎へと向かった。

消しゴムでも投げるように男を石畳に落とすと、無表情のまま《俺》のアホ面に一瞥し、血で染まった額を拭うように前髪を掻き上げた。

「ニイ」

未梨は萎れた花のように力なくへたりこむと、まだ微かに朱色の残った纖手で《俺》の身体を小さく揺する。アホ面から徐々に陰しい表情に変わっていき、ゆっくりと瞼^{まぶた}が捲り上げられた。

「……………」

眠たげな瞳には本来ならば、額や頬が裂け赤い液体が滲み出ている未梨の蒼白な顔で埋め尽くされていることだろう。まあ、それは《俺》が一般人と過程しての話だ。重度の低血圧を持っている《俺》の瞳には濃霧にでも覆われているように白一色に世界全体染まり、実際のところはなにも見えていないだろう。まったく状況が把握できていない《俺》は、あくびを噛み殺したような吐息を漏らし、腹筋のみを使って上体を起こした。ぼーとする脳を叩き起こすように頭を大きく左右に振る。

「……………」

靄が外れ視力を明晰に取り戻した《俺》の視界に映し出されたものは、どしゃ降りの雨だ。

「ニィ」

《俺》は、消え去るような囁きよりも、耳たぶに直接吹きかかった熱い吐息に敏感に反応した。ぞくぞくとした悪寒が背筋全体に走る。耳朶に吹きかかる熱い吐息の第二派が来る前に、首を機敏に動かし、たそのとき。《俺》の表情は豹変した。

「……………未梨？ お前……………それ、どうしたんだよ！」

未梨の姿を一目見た瞬間、ヒステリックに喚いた。同時に途切れた記憶が鮮明に蘇える。しかし、今はそんな悠長に追求している時間はない。

「ま、待ってろ、今ひゅぐ119を……………！」

呂律が回りきってない口調で喚き、立ち上がりとした瞬間、小さな手がレザージャケットの裾に絡み付いてきた。あまりにも唐突な出来事に反応しきれずに体勢を崩した《俺》は、情けなく尻餅をつき、転倒した禍根を凝視する。

「わたしなら、だいじょぶ」

裾を握り締めたまま応じる未梨は、日常会話の声色と寸分の違いもない。だが、口調とは対照的にその風貌は喧嘩類のものでは、付かないような傷ばかりだ。いくら本人が「だいじょぶ」と言おうが、「無事で良かったな」とは誰も言えないだろう。

「……どうみても大丈夫じゃないだろ、変な意地張るなよ」

「だいじょぶ」

今の「だいじょぶ」は先程よりも強みを帯びていた。未梨は頬から滴り落ちる血を舌で舐めとり、更に言葉を紡いだ。

「わたしの身体は普通じゃない。だから、へいき」

お前が普通じゃないのは身体じゃなくて性格だろ。混乱状態などに陥っていなければ、入学したての小学生のように元気よく発言していただろうに。状況の把握ができていない《俺》は、未梨の発言をくそ真面目に問い正した。

「お前が普通であろうが、普通じゃなかろうが、怪我をしたら病院に行くもんなんだ」

いまだ裾を握り締める未梨を振りほどこうとするが、反則的な力を持つ未梨を動かせるはずがない。《俺》が徐々に力を強めているにも拘らず、未梨は座った姿勢からピクリさえ動かない。

《俺》は嘆息し、肩を小さくすくめた。

「……本当に平気なんだな？」

うなづく。

幾分落ち着きを取り戻した《俺》は、小さく罵^{のの}りながら石畳に腰を落とした。

雲の裂け目からわずかに顔を覗かせる月が、唯一の証明器具だ。

それを思想家のように見上げる《俺》は訝しげに眉間に皺を寄せている。実際のところは話すタイミングがなかなか見つからなく、脳内人格に召集呼びかけ、きっかけを立案していたところだ。

「人間ひとりひとり、必ず何かの才能を持っている」

沈黙と闇が空間を支配するなか、未梨はまるで的外れな会話の切り出してきた。未梨は《俺》の反応ひとつさえ窺わずに、言葉を続ける。

「生涯に自分の才能に気づける確立は八千万分の一。だけど、これは確認できただけの数値。才能を開花させた人間は、人外的能力を手に入れることができる。それが《能力者》」

「……………」

「《能力者》の能力は3つに分けられる。肉体強化系能力。感覚系能力。精神エネルギー変換系能力。いままでに、なにかを達成した偉人たちは、才能を開花させた《能力者》。古来より《能力者》は表向きには能力を使用することは禁じられている。？能力？の存在が公おおやけになれば人々に壮大な影響を与えることになる。世界最大機密事項。ときには、故意に？能力？の存在を公する人も現れている。それ以外にも能力を利用し、何も知らない市民に危害を与える人――彼のような人も出てくる可能性もある」

未梨は視線を横移動して、俯せに身悶みもだえる男を一瞥した。

「彼は自分の？能力？に溺れ、自我を失い、その結果、？能力？を持たない大量の人間に危害及ぼすようになった。彼のように暴走した人物が出没したとき、一般人に悟られず隠密に処理しなければならぬ。それを執行するのが、特務機関。わたしはその特務機関の《能力者》」

「……………」

「わたしの任務は彼を必ず確保すること。ニイと鉢合わせになったのは、わたしの身体が彼の？能力？に侵されたとき。体内に流れる血中水素イオン指数を変動させられアシデミアに陥った」

そこまで言うと、未梨は大きく息を吐きだした。

未梨からすれば全て明晰に伝えた、安堵のため息なのだろうが、《俺》は素数をひたすら数えているように、小難しげな表情だ。むしろ《俺》の表情には「こいつ頭おかしいんじゃないかね？」と顔にはつきりと、しかも斜体で書かれている。

「じゃあ、なんだ？ お前のそのヤバイ怪我は、あの男が抵抗してきたからか？」

肯定。

「彼は精神エネルギー変換系能力者。自分の意思である程度まで液体を操ることができる」

そんな売れない漫画によくありそうなありがちな能力があるわけ

ないだろ。

「それで……お前の？能力？はどんなんだ？」

「身体能力の限界値増量。遺伝子レベルの情報操作により、一時的に運動能力をあげることができる」

いかにも胡散臭さを代表する胡散臭い話である。未梨の横顔を窺う《俺》の表情は心配と嘲笑のふたつが入り混じった複雑の面持ちだ。

「……俺にわかるようにその能力とやらを見せてくれよ」

そう言い終えたときには、小さな少女の姿は幻のように消え失せている。一拍遅れて《俺》は未梨が消えたことに気づき、驚きに目をしばたいた。

「遺伝子レベルの引き上げにより、いまのわたしには人外の疾さを出せるようになった」

背後から現れた未梨により、《俺》の開きかけていた口は一文字に閉じた。

「これがわたしの？能力？」

未梨はあまりに近距離で呟き、またしても耳朶に熱いものが吹きかかる。しかし、後ろに身体を向きなおした《俺》は身震いひとつ起こしていない。目の前で行われた瞬間移動さながらの高速移動に、身震いを覚えることすら忘れているのだろう。

「……ちよつと待て。もう一回なんかやってくれ。今のだけじゃ、信用できない。信憑性に激しく欠けるぞ」

「別に信じなくてもいい。ただ、覚えていてほしい」

さっきから未梨は、ありがちな台詞でしか会話が交わされていないような気がする。

いまのところ《俺》の気持ちは半信半疑といったところだろう。まあ、無理もない。わたしの特技はイオナズンです、と言ったところで誰も信じない同様、わたしは能力者です、と言われたところで信じられるはずもない。せめて、ユリゲラーやそっちの系の方々が言えば、まだ《俺》はなんとなく信じ込んでしまうかもしれない。

ユリゲラーじゃなくて、ユンゲラーだったら間違いなく信用するだろう。

とゆう冗談はさておき、未梨はごくごく普通の幼なじみの女の子だった。幽霊が見えるとか、ESP能力が使えるとか、そんな人類普遍的能力の欠片さえ見せなかったノーマルな女の子。でも、性格はアブノーマルな女の子。

いままでそんな関係だった幼なじみに、いきなり「わたしは能力者です」などと、とんでもカミングアウトされ、信用する奴がいるだろうか？ これは断言できる。信用する奴などいるはずがない。もし、信用する奴がいるとすれば、そいつは現実見てない奴ぐらいだ。

だが、目の前で行われた瞬間移動さながらの動きは、説明しようがない。なにか不思議な能力が働いているとしか見ようがないのは。

「ニィ」

「……………なんだ」

脳内人格フル召集の俺には、もはや未梨の怪我など見えてないだろう。現状を把握することに全ての組織を費やしている。

そして、それは俺にも言えること。夢の中に入り込み、俺の体内時計では既に4時間が経過している。

「いまから言うことを訊いてほしい」

「…………いまさら前振りなんてするな。ズバツと言え。ズバツと。そのほうが俺も楽だ」

「わたしはいままでニィを騙していた」

確かにズバツと意図不明なことを言ってくれた。しかし、語る未梨は至ってはいっぴくなく真面目な声色である。虚無的な表情にもどこか沈鬱なものが入り混じっている。

「なにをだ？ 性別でも偽ってたのか？」

今の台詞は《俺》なりに気を使ったつもりなのだろうが、俺の眼には空気の読めない人にしか映らない。我ながら情けないことよ。

「本来のわたしが命じられている役割は監視」

「なんのだ？」

「ニィの」

「俺の？」

「うん」

「なぜに？」

「ニィはわたしと同じ存在——能力者の可能性がある」

未梨の何気ない一言は、《俺》の脳内に核弾頭級の深刻な損害を
与え、脳内人格半数以上が不毛な死を遂げることになった。ダメージ

「……………ない。それはない。ありえん。俺は遺伝子をどーのこーの
できる特技など持ち合わせてない」

「能力者の能力が他者と同じになることは、ごく稀にしかない。ニ
ィの能力では遺伝子操作はできない。ニィの能力は、《音》」

「……………詳しく」

「ニィのハーモニカを始めとする楽器での演奏。本来の音源とは別
である不特定多数の音の唸りが存在している。普通ならばそれはあ
りえないこと。ハーモニカ本来の音源とは別に発生した唸りは、も
とである音波と重なり合い、特殊な形のフレンジ効果を起こしてい
る。どれもひとつの楽器からは起こりえないこと」

思い当たる節のあった《俺》は一言一句聞き逃すまいと必死に耳
を傾けていたが、小さな口から吐き出される言葉は全て新鮮味のあ
るまるで訊いたこと無い単語だ。

「悪いが広辞苑はいま持っていないでね。残念ながら理解不能だ」

「ニィは気づいてるはず。自分の？能力？に」

さりげなく誤魔化そうとする《俺》の言葉に、未梨は的確にイタ
いところを突いてきた。

「……………ぶっちゃけるとな、確かに俺には変な能力が備わっているか
もしれないな。未梨の言う通りそれもちゃんと自覚している。けど
な、お前の言っていることはさっぱりわからん。ただ、俺は楽器を
触れると……………なんていうか、そいつの演奏方法がわかるんだ」

「それは能力の一端に過ぎない。ニィの能力の真髄は違うところにある」

「真髄って……なんだよ？」

「わたしにはわからない」

「なんだよ、それ」

未梨が非の打ち所のない無表情から発せられる言葉に、《俺》も非の打ち所の無いおかしい表情で対抗する。

「ひとつだけ言えることは、ニィの演奏により発生する音波には不思議な能力が付加されていること。それが人体や自然にどのような影響を与えるか、まだ解明されていない」

「影響なんてなんもないんじゃないのか？」

「必ずある」

普段からあやふやな返答でしか応じない未梨が、こんなとき限りはつきりと言い切る。

「……話を戻すけどな、お前は俺の、えーっと、その、能力とやらを監視してどうするんだ？ 気がつけば、黒いライダスーツ着た筋肉質な集団に囲まれてたりしないよな？」

「襲われることは……ない。わたしはどうもしない。上に報告をするだけ」

いまの三点リーダーはなんだったのだろう。とても気になるところであろう。

「ニィの能力を知っているのは、特務機関のなかでもごくわずか。

情報がリークされていない限り、ニィの身の安全は保障される」

「それって、逆を言えば情報が出回ったら俺の安否は保障されないってことだよな？」

「うん」

「……そうですかい」

もはや驚くことすら忘れたかのように、《俺》は悠然な態度で落ち着き払っている。ニヒルな主人公なら「やれやれだぜ」とか言うのだろうが、生憎《俺》はニヒルでなければ主人公でもない。自分

が一番可愛い——臆病者心を持ったひとりだ。
チキンハート

内心では暴走状態しつつも、《俺》は必死に冷静な表情をとりつくろう。

「それで、俺はこれからどうすればいいんだ？」

「いままで通りにしてくれればいい。今回の出来事は緊急のもの」
のっそりと立ち上がった未梨は、縛られた男を肩に担ぐと足早に校門に身体を向ける。

「わたしには、まだやること、ある」

「待てよ。最後にひとつ、いいか？」

「なに？」

「もし……もしの話だが、俺が本格的に音楽活動しようとしたら、お前は どうする？」

「ニィの能力はまだ判明されていないこ箇所が多い。それに能力を悪意的に行使するつもりなら、確実に特務機関からの圧力が掛かる。詳しいことが判明されるまではニィは表舞台には立てない」

未梨は淡白に結論だけを述べると、振り向きもせずに揺ぎ無い歩調で足を運び始めた。

「……十年前、お前は特務機関とやらの命令で俺に近づいたのか？ 最初っから能力とやらを調べるために話しかけてきたのか？」

死刑人の最後の懺悔ように《俺》は喉に詰まった言葉を搾り出した。《俺》の問いに未梨は歩みをとめ、ゆっくりと身体をこちらに向き直した。

「わたしは——」

世界が白一色に染まった。そうとしか言いようが無いこの状況。しかし、三度目のこの現象だが今回は奇妙な違和感を感じる。気持ち悪くなる浮遊感、それに加え身体が妙にダルい。

白い世界にどこからともなく差し込む眩しい光が、徐々に景色を構成し出している。そこには、見慣れた天井があった。

もしかしくなくても、俺の部屋だよな？

地球の重力が二倍になったと疑いたいぐらい重たい身体に鞭を打ち、普段から貯めておいた気合で上体を起こし、首を左右に捻った。俺が寝ていた場所は間違いなくいつものベット。そして間違いなくここは俺の部屋。

夢はもう終わりか？

とりあえず、こういう悪夢から解放されたときにやることはひとつ。俺はベットから立ち上がり、部屋にひとつしかない窓に手を掛け、勢いよく開け放つ。差し込む朝日は、きっと俺だけのために輝いているんだ。

「スゲーッ爽やかな気分だぜ。新しいパンツをはいたばかりの正月元旦の朝のよーによオーッ」

よし、いままで完璧に目が覚めた。なにやら下の住人が俺に向けて嘆かわしい視線を送っているが、それはここが現実である証拠を裏付けてることになる。

……それにしても、あれは一体なんだったんだ？ 夢、なのだろうか？ いや、そもそも悩むことが間違えているな。もとより夢以外に選択肢がないじゃないか。昨日未梨があんな話を盛り返すから夢に出てきたんだ。そうに決まってる。

——わたしは……あの時、本当にニィの演奏が好きで近づいた。だけど、結果的には騙していることになる……ごめんなさい。

未梨……ね。

あの台詞は俺の妄想が創り出した幻想だろうか？ それとも……いや、感傷に浸るのはやめとこう。俺らしくもない。

なにはともあれ俺はこうして無事目覚めたんだ。喜ばしいことだ。それに今日は斉藤と出掛ける予定が入っている。あいつは意外にもめざといやつちゃからな。無駄に勘ぐられるのは好きじゃない。テンション上げ気味でいかなければ。

気合を入れたところに、枕元に放置してある携帯が唸りを上げていた。

発信元斉藤。

『ふと思っただが、カントリーマアムっていまのうちに買占めといたほうがいいんだろうな』

「藪から棒に……なんだ？」

『お前が朝弱いって自分で言っただろ。俺の熱いモーニングコールしてやっただよ』

「……ああ、すまん。起きてるから平気だ」

『よし、いい返事。いつもの仁井哉に間違いないな。ところで、お前は昨日眠れたのか？』

「もう、ぐっすりとな」

夢の世界で彷徨ってはいたが、そんなことを斉藤に説明したところであしらわれるだけだ。それに嘘はついていない。

『俺なんて昨日から一睡もしてないぜ？ もう興奮しちまってさ、眠れなくて……だが、気分は最高に「ハイ！」ってやつだアーッ！』

斉藤の性格は段々と把握できてきたような気がする。遠回しに言えば、アホだな。

『それではここでひとつ、お前に問おう。てゆうか答えてくれ。頼むから』

「……なんだ？」

『俺が尊敬する偉大な男は言っただ。男が備え持つ召還獣は、どんなに鋭いナイフよりもキレがある、とな。だけどよー、この言葉の良さをわかる奴は、大抵みーんな男なんだ。それでよ、昨日一字一句間違わずにこの台詞を女に言っただけよ。さて、どうよ。みるみるうちに女の顔は紅しようがといい勝負ができるほど赤くなってゆき、俺は顔をグーで殴られた。今でもズキズキするぜ……で、殴られた理由を考えていたんだが、経験豊富な俺でも一向にわかる気がしない。ということ、お前はわかるか？』

「……悪い、急用を思い出した」
電話の向こうで喚く斉藤を構わず、俺は一方的に通話を終わらせた。

別に斉藤のアホ丸出しの質問に答えるのがおっくうになったわけじゃない。冗談抜きで急用を思い出したからだ。斉藤の質問にはあとでゆっくりと答えてやりたいと思う。てゆうか、答えてやらなきゃならん。あいつがあのままの性格で人生を突っ走れば、近い未来に警察にお世話になっているに違いないからな。

現在時刻、九時三十分。十二時までに駅前、ということは、間に合わせるためには十一時までには家を出なきゃならんな。

まあ、イザというときはドタキャンでもなんでもするが、極力約束事は守っていききたい。このポリシーを守るためには、いまずぐ行動を起こさなければならぬ。

俺はベット下にある引き出しを乱暴に開け、小さな緑色のアタッシュケースを取り出した。このケースに麻雀牌まーじゃんばいを収容するのがケース本来の用途なのだが、いまではその役割は果たしていない。入っているものは――

――あの日に拾ったナイフだ。

あの日、混乱を通り越して狂乱しそうになっていた俺は、あろうもとかナイフを家にまでお持ち帰りしてしまった。しかも、俺はなにを血迷ったのか、スネークもご調達しそうなナイフを箱に押し詰め、そのままベット下の引き出しに収納したのだ。

もともとこのナイフが誰の物なんてのは、わからなかったし、所有者候補の未梨はなにひとつ尋問してこない。警察に届けるにしても、人間すら三枚に卸せそうなナイフだ。そんなナイフを警察に持っていた日には、すくなくともアフタヌーンぐらいは失うことを約束されることだろう。

しかし、まあ、このナイフは未梨の所有物と見て間違いなさそう。だ。改めて見てわかったが、あのときの俺と会話していた未梨は、いつもと違い視線が固定されていなかった。いわゆる挙動不審。あ

んな状況なら誰でもそうなるかも知れないが、感情の欠落が激しい未梨に限り、その行動は現代社会におけることもたちがカマキリの腹を突っ突き、肛門から出てくるハリガネムシを観察するキテレツな遊び現場を目撃することぐらい珍しい。

それに、あのチャウ・シンチー顔負けの非現実戦闘中に未梨は腰辺りを探り回していた。あの瞬間ほど未梨が動揺したシーンを俺は知らない。あんな声帯変わったんじゃない初々しい声を上げて、一体未梨はなにに驚いたのか。憶測だが、あの時の未梨はナイフを探していたのでは？

うん。夢について真剣に考えてる俺。葉月並に頭悪い。

それにいかんせん。頭痛をもよおしてきた。普段から使わない脳みそをフル活動させた代償だな。もう、考えるのはやめだ。どうせ、俺の前頭葉ぜんどうようでは知恵という知恵を搾り出したところで真実に辿り着くことはない。なら、最初から考えずに行けよというのは、まあ、正論だろうな。

なにを始めるにせよ、まず未梨に合わなければ今日は始まらないま祈ることはひとつ。

愛沢さんがいませんように、と。

Rhapsody in the Rain 3 (後書き)

今回のお話。長い上に意味不明ですみません。未梨の発言は読まなくていいです。

そして、前回。一週間以内に更新するといいつつ、ぜんぜん間に合いませんでした。テスト勉強もとい溜まった小説読んでました。すみません。

あと、今回のお話どこかに必ず誤字があると思います。あとで直すつもりでしたが、その場所を忘れてしまいました(笑)。見つけられたら教えていただければ幸いです。

ちよつとだけ余談。

前回の更新からこの日までにライトなノベルを5冊ほど読破しました。わたしにとってはかなりハイペースです。そこで残りの本を意味無く発表。

○界○○物語、4巻

○・ヴィンチコード、上中下巻

○様ゲーム、1巻

○シウタ、1巻

○○天使○クロ○ゃん、2～4巻

○i s s i n g、1～13巻

はい、泥沼です。

次話はひさしぶりにほのぼのと書かせていただきます。これから

アリーヴェデルチ。

3―3 お前はお前で俺は俺（前書き）

ツバキミリ（♀）

一人称…わたし

特徴…無口。眼鏡っ娘

身長…1.45 m

体重…33 kg

好き…読書。甘いもの

嫌い…自分。苦いもの

特技…限界突破

備考…一年二組所属。仁井哉とは十年近い幼馴染。脳内に広辞苑の内容を全て敷き詰めてある。基本的に人と話すことは無く、ひとりぼっち。特務機関の派遣能力者。スタンドで例えるならメイド・イン・ヘブン

3―3 お前はお前で俺は俺

人はなにかに踏み切るときには、大抵きっかけというスイッチが存在しているものだ。そして、そのきっかけとやらも大抵たいしたことではない。晴れていたから、茶柱が立っていたから、なんていうのも立派なきっかけだと俺は思う。くだらないと言う奴も中にはいるだろうが、それは他人から見た感想であり、それをきっかけにした本人からすればとても重大な可能性だって否定できない。きっかけがくだらなろうが、お涙頂戴物だろうが、あとの可能性は本人次第である。

言いたいことを要約すると、始めたきっかけがたいしたことないならば、終わるきっかけも大抵たいしたことではないのではなからうか？

正直に言えば、俺は一年前、自分の進路について軽く頭を抱えていた。平凡に進学するか、それとも真面目に音楽活動に取り組むか。そんなときに未梨の一言が身に染みわたったね。

――ニィは表舞台に立つことは出来ない。

別に未梨の話を全部を全部鵜呑みしたわけではないが、自分の道を決めるのには丁度いい“きっかけ”とはなったわけだ。だからと言って、未梨のことを恨んでいるわけでもなくば、感謝しているわけでもない。いままで通り、平凡な日常を過ごしていたのさ。

未梨の住まいである高級マンションは無駄に防犯システムに凝っている。そこがこのマンションの売りだとはいえ、敷地内に入るだけでもカードキーが必要なのはどうかと思うね。マンション関係者でない部外者は住人の誰かを付き添いに置かなければ、内側から扉が開くのを待ち、開いた隙を逃さずに忍び込むという姑息な手段しか残されていない。俺はそんなTPOに欠ける行為など行わずとも、

マンション内に侵入する手立ては用意済みである。なんていったって今回の俺はカードキーを所持しているのだからな。愛沢さんから授かった愛沢産のカードキー。その辺はぬかりないわ。

と、気合を入れてカードキーを取り出したところに、ひとりでに正面玄関が開かれた。これはバスの停車ボタンを見知らぬ人に先取りされたときの脱力感によく似ている。なんて、一瞬思ってしまったのがそもそもの間違いだった。開け放たれたスライド式の扉から闘牛のような怒濤の勢いで飛び出してきた人物が俺の存在など気にも留めず、それとも見えてないのか、こちらに猪突猛進。唐突過ぎる奇襲攻撃に俺は回避動作を取れず、いい角度で腹部に体当たりを貰ってしまった、なるがままに尻餅をつく。

「前見ろよ……って——」

逆光の影響で顔は確認できないが、恐らく女性だと推測される人物は超前傾姿勢のまま、いまにもこちらに倒れます三秒前。もちろん、ここはエセ紳士として受け止めるべきなんだろうが、俺はどこをどうやって支えればいいんだ？ 下手なところにもでも触れてみる。セクハラ容疑を掛けられ、多額の慰謝料を請求されるかもしれない。などど自問していたら、すでに女性は俺の胸に顔を埋めていた。軽い衝撃程度と引き換え女性と密着できるとはいいい見返りである。立場が逆だったらもっとおいしいと思ってしまうたのは、男である以上仕方がないと言えよう。

「あー、すみませんでしたー。お怪我はありますかー？」

マウントポジションから訊こえてきたのは、現実と大分かけ離れているアニメ的獨特の声である。この微妙に間違えている日本語と聞き覚えのあるアニメ声は……

「あれー、仁井哉さまじゃないですかー」

「愛沢さん……ですか？」

疑問系にしたのは、他でもない。声こそ愛沢さんそのものだが、顔自体はまるで別人だ。目の前にいる愛沢さん？ はどうみても戦闘力53万の綺麗なお姉さんにしか見えない。俺の記憶に存在する愛

沢さんは、大人っぽい中学生で映画館代を安く済ますことができないほどの童顔なはずだ。

「はいー？ わたしは愛沢ですよー。どうしたんですかー？ そんな死んだミノムシみたいな顔しないでくださーい。わたしならだいいじょぶでーす」

この意味不明な比喻表現は、愛沢さんに間違いないだろう。

「…………顔、変わりましたね」

「えへへー。ちょっとしたおめかしでーす」

いまだマウントポジションをキープしている愛沢さんは、顔どころか服装までも別人だ。俺の知りうる愛沢さんは、いつだって髪の毛ボサボサのうえに普段着は赤ジャージかネグリジェ姿。さらに使用人という名目でありながら、実質上は半引きこもり状態。趣味はゲームでゲーム機の電源は常時ON。やっている割には上達の気配が見当たらない。凶行に走ることも度々目撃される。これだけを聞けばただのダメ人間しか想像できないだろう。いや、実際にそうなのかもしれないけど。

しかし、そんなダメ人間の象徴となる愛沢さんはいまでは見違えるほど、もとい見間違えるほど美しい。いつもなら寝癖のたえない髪は、毎日海洋深層水で洗髪しなければ出ないような艶が出ており、綺麗に透き通っている。腕の長さを差し引いても裾がたつぷりと余る男物のパーカーに、見えちゃいかんものが見えている短いスカート。

やばいぞ。この角度は最高にヤバイぞ。戦闘力4万の俺ではあと一分も立たずに精神崩壊を起こすに違いない。

「あ、あの退いてくれますか？」

「すみませーん。重いですよねー。わたしの不注意でーす。あー、服汚してしまいましたねー」

糾弾する愛沢さんの動作はひとつひとつが緩慢で、この間にも俺の精神はタチの悪いウィルスが侵食しつつある。落ち着くんだ……『素数』を数えて落ち着くんだ……。2、3、5、7、11、13

……って、ダメだ……無意識的に視線が走ってしまう。だって、男の子だもん。

「仁井哉さまー、だいじょーぶですかー？」

「なんとか……」

時間にすれば数秒の出来事に過ぎないが、俺にとっては永久にこの時間ときが続くのかと思えたぐらいだ。まさか愛沢さんは俺に精神崩壊を起こすことを目論む新手の敵か？

「起きてくださーい。仁井哉さまー」

愛沢さんは、傷ひとつない白魚のような手を俺に手を差し伸べてきた。振り撒かれる笑顔は、まるで俺の妄想が具現化したようにデイ・モールト（非常に）良い。

「……ありがとうございます」

「貸し1ですねー」

ここで発言を聞いたただすのは大人じゃない。それに愛沢さんは、素で「貸し」と「借り」を間違えているんだから、弁解したところで無駄な時間を費やすだけだ。

ところで、愛沢さんは化粧までしてどこへ行くのだろう？ 興味がないと言えば嘘になる。

「新作のゲームでも買いに行くんですか？」

「違います。今日はお仕事でーす」

あれ、愛沢さんって無職でニートの居候じゃなかったっけ？

「先月からー、アルバイトを始めましたー。週3で月二十万でーす。日本政治のようにぼろいでーす」

その例えはわかりにくいですし、自分の国なんですから嘘でも言っちゃだめですよ。

「仁井哉さまは、未梨さまに御用ですかー？」

「まあ……そんなところですね」

「そうなんですかー。だけどー、未梨さまなら、たぶんまだ寝ていると思いますよー」

早起きの化身みたいな未梨が、まだ起きていないと？ 珍しいこ

ともあるものだ。

「昨日、仁井哉さまは、未梨さまと出掛けていたんですねー？
それからの未梨さまは、ちょっとおかしいです。初めて未梨さま
がわたしとゲームやってくれましたー、大好きなはずのチョコレ
ートを半分も残してましたー。極め付けにカルピスを薄めて飲んで
ましたー。信じられませーん」

最後のはともかく……確かに未梨らしくない。超甘党の未梨がチ
ョコレートを残すわけがないし、いままで散々と拒否っていたゲー
ムをやるとは、どうにもおかしい。

「なので呼び鈴鳴らしても未梨さまは出てきませーん。勝手にはい
ちゃってくださいーい。未梨さまの寝顔は見て癒されまーす。よか
ったら仁井哉さまも癒されてくださいーい。未梨さまの寝顔は穢れた
現代社会のなかにあるオアシスに等しいです。あー、ラクガキす
るなら枕元のペン入れに水性マジックがありまーすよー」

「そんな微笑^{ほほえ}ましいことはしませんよ。用が済んだらすぐ帰ります」
愛沢さんは、えへへ、とはにかむような表情でこちらを見つめて
いる。真っ直ぐ過ぎる無垢な瞳をこちらに向けなくてほしい。青少
年の俺にとって、その瞳はどんなに神々しい光より眩しく映る。

「やっぱし、仁井哉さまは優しいですー」

俺の反応を楽しんでいるように、愛沢さんは悪戯っぽく笑った。
こんな子悪魔ならいてもいいかもしれない、と思っってしまった自分
が情けない。

「……それより、お仕事行かなくていいんですか？」

「あー、そうでしたー。いまにも遅刻しそうだったんです。ピン
チですー」

とてもじゃないが愛沢さんは慌てているようには見えない。のろ
のろとパーカーの袖を捲り上げ、そこから顔を覗かせる可愛らしい
クマさんの顔が付いた腕時計に目を落とした。

「んー。交通ルール無視すればまだ余裕で間に合いまーす」

「さらっと犯罪予告しないでください。車にでも轢かれたら大変で

すよ」

「心配してくれるのですかー？」

「当たり前です。愛沢さんがいなくなったら寂しいですよ」

後悔先に立たず。つい真面目に答えてしまったが、いまの俺の台詞、どう考えても死語だ。

その証拠に、愛沢さんの頬はみるみるうちにりんご病患者のように赤く染まりつつも、あらゆる表現を駆使したような満面の笑顔を振り撒いている。

「……仁井哉さまのご命令は従います。よし、こうなったら命懸けで交通ルール守ります」

普段のトロい愛沢さんからは想像できぬスピードで、30メートルほど離れている駐輪場に駆けていった。自転車で行くつもりなのだろうか？ 愛沢さんが自転車を漕ぐ姿のイメージはまったく湧かない。転倒シーンなら、標準録画のような鮮明さでイメージできるけど。

年上とは思えない小柄な背中を見送ったところで、俺はマンションへと顧みた——時ならぬ爆音が平和な住宅街に鳴り響いたのはその時だ。しかも、あろうもことか心臓を震えさす爆音はどんどん俺に近づいてくる。

「仁井哉さまー、どうしたんですかー？」

振り返りざまに視界を埋め尽くしたのは、女性のフェロモンを存分に漂わせる愛沢さんの超どアップ顔。それだけでも俺の精神に後遺症を残せるほどの驚きなのだが、愛沢さんのまたがっている物にも驚愕を覚えずにいられない。

「……最近の自転車はすごい大きいようですね。知りませんでしたよ」

「自転車じゃないです。あー、確か仁井哉さまは見るの初めてでしたねー。紹介しまーす。わたしの相棒——モンスターちゃんです」

モンスターちゃん——恐らくこれは自転車ではなく大型二輪だろ

う。赤と黒で縁取られたボディは新車を思わせるほどの煌びやかな光が宿っている。それにまたがる愛沢さんの姿ほど滑稽こっけいな絵はそう見られるものじゃない。

「無免許はよくないと思いますよ」

「仁井哉さまー、さっきから微妙にいじわるです。ほらー、免許証しよーならちゃんと持っていますー」

ビシッと目の前に突き付けられたのは財布……ではなく、財布の定期容れに収容されている運転免許証。用心深いことに生年月日の箇所は親指でしっかりと隠されていた。そこまでして歳を秘密にしたいものかね。

いま思えば、一年前の日に借りた服はライダースーツだった。よくよく考えればそれは愛沢さんがライダーということを裏付けていたんだな。

それにしてもこれほどバイクにまたがる姿が似合わない人が、この世に存在しているのかきわどいところだ。そして、極度の前傾姿勢により、スカート内部の花園も見えるかどうか也相当きわどいところである。もしかして、俺はムツツリなのだろうか？

「仕事いくんじゃなかったんですか？」

「ちゃんと行きますよー。仁井哉さまに挨拶だけしようと思ってましてー」

愛沢さんは話ながらも、首に掛けていたハーフタイプのヘルメットを装着し、付属品たるゴーグルを瞳に被せる。ゴーグル越しに笑みを浮かべる愛沢さんの姿は、もはやウケ狙いと思えん。

「……気をつけてください」

「はい。いってきますー」

再び爆音が空間に轟いたときには、大きな車体はひとりでにスピーターンを始めている。華麗なハンドルワークでターンすると、まばたきひとつの間に巨大な鉄の塊は路上へと突進していった。文字通り風のように消えていった愛沢さんがいたという余韻を残すように、摩擦熱によって溶けたタイヤの臭いで辺り一帯を包み込んでい

る。

見た目はてんで似合ってはないが、腕は達者のようだ。

人は見かけによらない、とはよく言ったものだ。ところでこの格言の第一人者は誰のだろうか？

「お邪魔いたす」

電子ロックを無事解除した仁井哉は、前人未踏の大地——未梨家へと脚を踏み入れたのであった。

……ついウルルン風に実況してしまった。愛沢さんとの会話の影響で、知らず知らずのうちにテンションが「ハイ！」ってやつになってしまったのか。恐るべし、愛沢さん。

未梨さまは寝ていますから、勝手に入ってくださいーい、と言った愛沢さん。いまさらなんですけど、俺、男ですよ？ 性欲をもてあます若い男女がマンションでふたりきり。陽イオンと陰イオンを近づけるようなものだ。まあ、俺と未梨に限って卑猥な出来事はなにひとつ起こらないだろうがね。例えるなら、俺が水で、未梨が油。同じ容器に入れたところで決して混ざり合うことはない。火種が飛んできたら、爆発する恐れがあるけど。

リビングに繋がる蝶番ちょうつがいを引いた瞬間、食欲をそそる溢れんばかりの芳しい香りが俺の鼻腔を強く刺激した。匂いの源に視線を走らせれば、芳しい湯気を充満に発するプラスチック容器があるではないか。この匂いは……みんな大好き日清のインスタントラーメン。察するに愛沢さんの朝食の残滓ざんしといったところだろう……ってダメだ。食べ残しとはいえ、常識的に考えて勝手に食べるのはNG。本来の目的は、ナイフを未梨に届けることを忘れてはならん。

俺はインスタントラーメンの甘い誘惑を振り払い、リビングの一角にある楔くわを軽くノックしたのだ。反応は………ない。

「未梨、起きてるか？」

念を押して声を掛けてみるが、やはり反応は返ってこない。ここ

までやったのだから、無断で入ってもマナー違反ということにはならないだろう。勝手に部屋に上がり込む自体が、マナー違反かもしれないが、そこは考えないことにしたい。

襖を開ける際、接着面となる木と木とが擦れ合う音を最小限に抑え込むようにする俺は臆病者の域を極めつつある。

畳に独特の匂いが充満する部屋、愛沢さんの言う通り、未梨は布団上に倒れこんでいた。小さな寝息を立てている未梨は猫のイラストがプリントアウトされたパジャマに身を包み、無地の抱き枕にしがみ付いている。未梨は意外に女の子らしさを持ち合わせているので、そこらへんは驚くに値しない。それより……

未梨の両頬にドラえもんみたいな三本線のヒゲがペイントされている件について。

こんな小学校低学年レベルの悪戯をする人なんて、考えずとも自ずと思ひ浮かぶ。ズバリ、愛沢さん。本当にラクガキするとは、きつとあの人の脳内では広大な地平線がどこまでも続いているんだろうね。

「……………ニイ……………」

「起きてたのか——」

って寝言かよ。夢に俺でも出てきたのかね？

「……………すう……………すう……………」

とりあえず座ってみたが……………起こすタイミングが見つからん。

睡眠を妨害される気持ちには、人一倍わかっていただけに、なおさら起こしにくい。ま、まだ慌てるような時間でもないし、寝顔を存分に咀嚼させてもらおうじゃないか。

「……………ニイ……………ニイ……………」

ニイニイ連呼するな。

未梨の夢の中は何人の俺が存在している異次元空間なのだろうか

？……………想像するだけで気持ち悪いな。

「……………すう……………」

こういう寝顔だけを見れば、一介の女子高生にしか見えないんだ

けどなあ。人間離れた奇怪な“能力”など備え持っていなければ、もう少し人間らしさを身に付けた女の子になったかもな。そう考えると、未梨は果てしなく勿体無いことをしている。もし、未梨が穢れを知らない清纯の乙女だったら、今頃はしがない俺なんて登校しないで、性格も成績も運動も首席のどこぞや社長の息子をやってる奴とリムジンで登校している可能性だって否定できない。特務機関やら世界機密の能力やら知らないが、そんなもんは最初から存在しなければいいんだ。

それはそうと、世界機密とかうそぶいていたわりには、未梨は結構人間離れた動きを度々見せている。まだ記憶に新しいのは一昨日、未梨がソフトボールの授業中に二打席連続ホームランを出した日のことだ。筋肉剥き出しの男子が打ったならばともかく、身長、体重、胸さえ平均以下の女子高生が飛距離の伸びにくいソフトボールをネットまでかつ飛ばすとはありえないだろう。しかし、これはまだ序の口な話だ。

……
……
……

それは中学生時代、クラス対抗球技大会の日であった。

当時一年生の俺はクラスは未梨と別々——しかも、仇敵であるクラスだった。そして、俺と未梨が選んだ球技はお互いにドッジボール。可能性的には充分にありうる話だ。

とまあ、話を飛ばして球技大会決勝戦。我がクラス対未梨のクラス。我がクラスの圧倒的な実力で、仇敵たる男女を薙ぎ倒していき、残りが未梨ひとりになったときのことだ。当時の未梨は根暗美少女として男子からの人気がなかなか高く、もの好きな男子も何人かウチのクラスにも潜伏していた。そして、もの好き一名、未梨がボールを拾う姿を見て「ハアハア」と俺の隣で気持ち悪く喘いでいると

――。

「ヤッダーバアアアアアア！」

甲高い奇声が俺の鼓膜を叩いたときは、隣にいた男は地面に倒れ伏していた。男の顔にもボール独特のあとがくつきりと捺印されている。そして、俺の足元に転がるボール。以上のことをふまえて、計算式に当てはめ、aを求めましょう。

aⅡ未梨じゃね？

先程まで「パスパスパス！」とセックスピストルズみたいに騒がしかった外野どもは、ヤクザにでも睨まれたように黙り込んでしまった。未梨のレーザービームを顔面に直撃した男といえば、うつ伏せのまま身体をヒクヒクと痙攣させている。凍りついた空気を崩したのは、学年の中でもドツチボール最強と称えられていた男子――荒木だ。荒木はセクハラまがいの顔つきとは裏腹に、投げる球には球威があるうえに微妙なクセがあり、学校全体から見ても捕球できる人物は数名に絞られる。それだけではなく、荒木の投じる球に勇敢にも捕球しようとした男子の小指を持っていたという、ちょっとした武勇伝まで創っていた。

「俺は女子供だろうが、容赦はしねえんだぜ」

いかにも小物っぽい台詞を唾と一緒に吐き捨て、静止したボールを爪先で蹴り上げ、自分の胸元へと運んだ。普通に拾えばいいものを、ここぞとばかり男を上げるつもりだろう。が、敵チームはおるか味方である内野人まで荒木に生温い視線を送っている。

「くそお……なんで神はいつも俺に冷たいんだあ！」

嘆かわしい捨て台詞とともに荒木の豪腕が炸裂した。なんてセコイ奴なんだ。

コートのだ真ん中に佇んでいる未梨に凶弾が襲い掛かる。すくなくとも女子に投げるスピードじゃない。芯から腐りきってやがる。

「ぬうわんだとお！」

荒木が小物の象徴となる絶叫をあげたのは、もちろん未梨が迫り来る凶弾を捕球したからだ。それだけならまだ人間としてギリギリ

許される範囲なのだが、ありえないことに未梨は荒木渾身の一撃を片手で受け止めている。ボールのサイズよりも二回り以上小さい掌で片手キャッチとは、破ってはいけない人間の物理法則に逆らうさぎだろ。

「あんまりだ……HEEEYYYYY！」

すでに荒木の発言が日本語ではなくなっている。ダメ人間なりにショックだったのだろう。唯一の特技であるドッジボールで必殺の一撃を女の子——しかも、片手で捕られてしまっふたては、身も蓋もない。まだこれが筋肉質の女子ならば幾分報われたものの。

あっけなく終わった荒木に対する世間の風当たりは低温火傷が発症しそうなほど冷たい。行動から発言まで醜い工作をしこんでおきながら、あの結果では責められて当然と言えば当然であろう。残念ながら俺も同情する気にはなれん。

「う、うろたえるんじゃないッ！ ドイツ軍人はうろたえないッ！」

確かに敵味方含む全員が一目でわかるほど動揺しているが、一番うろたえているのはどうみてもお前だ。それにここにいる誰一人、ドイツ国籍を所持している奴はいない。

どうこう騒いでいるうちに、未梨はゆっくりとボールを天に翳していた。来るのか？

「よし、今度は俺があいつの凶弾をとっちゃる。しょせんは女子の投げる球。とるにたらんわッ！」

こいつの激んだ瞳には倒れている男が映っていないのか？ いや、荒木のことだ。見えていてなお、その意思を貫き通しているに違いない。バカは偉大だな。

しかし、いくらウサギが気合を入れたところで、ライオンに白旗を挙げさせることは不可能である。

俺は未梨の手元に全神経を収束させていたが、リリースポイントすら見分けることができなかった。未梨の手元にボールが消えていると、俺の中枢神経に電気信号が伝わったときには、荒木はチェ・

ホンマンにでも殴られたかのように後方へと吹っ飛んでいる。

ライオンに噛み殺されたウサギの死に顔は妙に幸せそうだった、とき……

……

……

…

と、まあ、こんな感じで未梨はときおり、自然の物理法則を無視している。ちなみに、その後の荒木は一体どのような心境の変化があったのか知らないが、未梨にベタ惚れ。とことん救いようのない奴だ。

てゆうかそろそろ駅に向かわないと、斉藤との待ち合わせ時間間に合いそうにないぞ。未梨には悪いが、ここは強硬手段の処置をとらざる終えない。

・予めアラーム設定を済ませておいた携帯を枕元に忍び込ませておきます。

・そのまま一分間待ちます。

・一分後、携帯のバイブレーション機能がフルに発揮されます。

・脳を直接揺さぶられるような感覚に捉われ、どんな眠気もイチコロです。

……とゆうはずなんだが、一向に目覚める気配が見られない。よほど疲れているらしいな。だが、ここで黙って帰宅では、俺の無きに等しいプライドが許されない。

とりあえず、鼻をつまんでみた。

「……………」

10秒経過。

「……………」

30秒経過。

「……………」

60秒経過。

そろそろやめとかなければ、幼なじみを殺害してしまうかもしれない。

愛らしい鼻から手を引いた直後、再び未梨は「すうー」と寝息を立て始めた。それが必然的でも故意的にせよ、どうにかして未梨を起こさなければ……。どうする？ 俺？

脳内人格たちが咄嗟に集合し、緊急会議を開き始めた。

――殴れ。

却下。

――キス。

白雪姫ではありません。

――大人のキス。

お前は消えてなくなれ。

――香ばしい匂いで釣れば？

「グッド！」

そうだ、そんな単純で効率の良い手があったではないか。

俺は足の力だけで素早く立ち上がり、台所へ足早に向かう。お目当ての物は他でもない。とりあえず、甘い食べ物ならなんでもいい。甘党の未梨のことながら、何気にチョコレート辺りを買いつめて溜めしているに違いない。

予想はズバリ的中。冷蔵庫をひとたび開けてみれば、数種類に及ぶチョコ、チョコ、チョコ。言いたくないが、あえて言ってやる。チョコッと貰って行くぜ。俺は適当な数週類をポケットにくすねて、畳の部屋へ、わざとらしくスライディングをかます。

「……………すうー……………」

誠心誠意込めてのスライディングも無反応だ。結果はわかりきってたんだが、心なしか虚しいのはなぜだろうか。こうなったら俺もラクガキでもしてやろうか？ 書くとしたらおでこに「肉」辺りが定番だが、あいにくそんな時間はないんでね。やめといてやろう。

「ほれ、未梨。お前の頭文字、^{イニシャル}MとTが印されたチョコだぞ」

「……………ニイ？」

牀のなっているペットのように目を覚ました未梨は、納まりの悪い金髪を片手で抑えながら、上体をゆっくり起こす。

おもしろいほどわかりやすい反応だな。まさに予想を上回る効果だったと言えよう。

「まあ、食べ」

半開きの口にMとTが捺印されているチョコを投げ込む。

「……………」

未梨はしっかりとチョコを味わいながらも、なにか言いたげに虚無的な視線をこちらに向けている。

「えーっと。とりあえず俺がここにいる理由はお前に渡すものだからであって、別に寝顔を覗こうとか寝込みを襲おうなんて疚やましい気持ちは一切ないぞ。ここまでに到る経緯は、あとで愛沢さんにでも問い詰めてくれ」

「渡したいもの、なに？」

そう、これだ。この二語文形式の喋り方こそ本来の未梨である。

「もしかしたら、お前にとって大事な物かもしれんし、まったく関係ない物の可能性もあるな。これ、見てみ」

俺は緑色に縁取られたアタッシュケースをヤクザが警察に裏金を渡すように見せ付けた。

「これ、どこで？」

「一年前、あの雨の日。ウチの前に落ちていたもんだ。……やっぱ、お前のなのか？」

「うん」

懐かしむような無表情で、違和感なくナイフを手取る。

「これ、大事な物。ずっと、捜してた」

「……そうだったのか。なんだか、渡すの遅くなって……悪いな。あん時はなんてゆうか、その存在を海馬組織に留めることすらままならないぐらい動揺しっぱなしで……とりあえず、すまん。もっと早くお前に言うべきだった」

建て前上ではなく俺は心底「すまない」と思い、頭を下げる。

「ニィ」

すうーっと視界に入り込んだ白いふたつの手が俺の左手を優しく包み込んだ。

「仲直り、した。わたしは、気にしてない」

左手を包み込む白い指が、小指へと移動する。そこにある物……『指輪』だ。

「これ、仲直りのしるし。元気、だして」

日常と変わらない淡泊な喋り方。初めて出会った時から十年間、こいつはなにひとつ変わっていない。無口だし、無表情だし、学校では友達を作ろうともせず読書に打ち込みっぱなしだし、なにかと無愛想だし……未梨に対する不満なら山ほど出てくる。

だけど、それはそれでいいのかもしれない。未梨はおしとやかな清純乙女風よりも無口、無表情、無感動で謎の組織を裏に構える不思議な能力を持った女子高生の方が数倍似合っている。それに未梨は未梨なりにいいところも少なからずある。ただ、表現する術を理解してないだけだ。事実こうして励ましてくれているじゃないか。

「未梨」

未梨がどれだけ危険な存在であろうが、未梨は未梨で俺は俺だ。

「……ありがとな」

「別に」

なにはともあれ、俺の任務はこれにて終了である。

「じゃあな、未梨。俺はちよつと用があるから、帰るわ。起こして悪かったな」

「気にしてない」

会話を打ち切ったところで、俺は早足で玄関へと向かうと、未梨は律儀にも見送るつもりなのか、パジャマ姿のまま背後霊のように憑いてきた。

「また、今度」

「……………なーんか言うこと忘れてるような気がするな。まあ、忘れ

るぐらいだからたいした用事でもないか。じゃあな、未梨」

出たところで、携帯の時計チェック。よし、全てが予定通りに進んでいる。この時間帯なら慌てずとも斉藤を待たせることにはならなそうだ。そういや、今日はどこに行くのだろうか？ 斉藤は傲然ごうぜんな態度で、俺が喜ぶ場所’とは語ってはいたが、見当すらつかない。そもそも俺が喜ぶ場所というのは範囲が広すぎて具体性に欠ける。しかし、斉藤のあの態度を見る限り、相当すごいところに行くんだろうな。あそこまで宣言しておいて、まさかなんの変哲もないアミューズメントパークという選択肢は芸がなさ過ぎる。

ところで全然関係ない話なのだが、ラクガキの件について未梨に指摘するのを忘れていた。いや、だってあまりにも違和感無さ過ぎたもんだから。一応ここは偽善者としてメールぐらい送っとくべきだろうな。

タイミングを見計らったように携帯が震え出した。

なにになに……今日のあなたの運勢は絶好調。思いも寄らぬ出会いがあるかもよ？ ラッキーアイテムは黒いサングラス。もっと詳しく知りたい方は下記のアドレスまで………新手的な広告メールか。そもそも占いなどという科学的立証のないものは信じるに値しない。恐らくこれと同じ内容のメールは俺以外にも多数の人間に送られていることだろう。その大勢の中の何人かがもしかしたら占い通りの一日になるかも知れん。しかし、それは偶然に偶然が重なり、結果、占い通りに事が進んだだけである。たとえば、この胡散臭い占い通りに今日が終わったとしても、俺ならば「ふーん」の一言で流すけどね。

俺は携帯を尻ポケットに滑り込ませた。

なんか忘れてるな。

3-3 お前はお前で俺は俺（後書き）

未梨編終了です。

今回のお話ですがJOOJOネタ9個あります（笑）。もし、おもしろいと感じた人（いる？）がいるならば、それは私ではなく全て荒木先生のおかげです（笑）

そんな感じで書きましたけど、とりあえず未梨編終了です。次話は……がんばります。

段々小説と掛け離れてゆく余談をします。

小説や漫画やゲームが、アニメ化するとしましょう。人気が出るの条件はなにかと、考えたとき、やはり、声優さんの上手さで決まるのではないのでしょうか。どんなに原作が超大作でも声優さんが棒読みだったり、キャラにあってない声ならば、ファンはさぞがっかりでしょう。そう考えると堀川りょうさんはやはり偉大です。かくいう私は、アニメはほとんど見てません（笑）。ハマるとすごいみちやいますけどえ。

しばらく修行します！　なので次話の更新日は未定です（いつものことですけど）

これからもぽーかーふえいすをよろしくお願いします

4-1 龍が如く(前書き)

リュウエンジウララ(♀)

一人称…ウチ

特徴…はっちゃけてる

身長…1.65m

体重…55kg

好き…人間

嫌い…炭酸系飲み物

特技…声帯模写。ソフトボール

備考…一年一組所属。仁井哉と未梨と同じ中学出身。未梨とは中学時代から仲がいい。スタンドで例えるならムーディ・ブルース

4-1 龍が如く

一日六時間。これだけの睡眠を取れば一日に支障なく人間は動けるらしい。俺の昨晩から今日に掛けての睡眠時間は十時間をゆうに越えるのだが、早速倒れそうなのはなぜだろう？ この感覚は寝すぎて身体がダルいやらの類たぐいではなく、修学旅行で興奮しすぎて、一睡もできなかったほうの感覚に近い。要約すれば睡眠不足。十時間寝ていて睡眠不足と言うのもおかしいものだが、実際にそうなのだからそうなんだ。

スポ魂マンガでよくあるようなタイヤと自分を縄で繋げると丁度こんな感じに身体に負荷が掛かるのではないのかと考えつつ、歩くことを断固拒否しようとする足を無理やり動かし、俺は駅へと向かった。

身体に鞭打っただけのことはあり、待ち合わせ五分前に到着。いま思えば斉藤に駅前集合とは言われたが、具体的な場所はなにひとつ話を訊いていない。しかし、発展を遂げた現代日本には携帯電話という大層便利な代物がある。俺は昨日の履歴から斉藤へとリダイヤル。

『エルニーニョ現象って海の水温が上昇することを言うんだよね？
でよ、エルニーニョって意味がいきなり気になりだして調べてみたらよー、スペイン語で「男の子」って意味らしいんだ。海水の温度上昇にまったく関係ないんだ。なんか腹立たね？』

気象庁にテレフォンでも入れろ。それよりいまどこだ？

『仁井哉きゅんノリが悪いでちゅ。普段の仁井哉きゅんなら疾風迅雷しつぷうじんの如くおもしろいツツコミを入れてきゅれたでちゅ』

赤ちゃん言葉はやめい。

『ツツコミとしては5点だな。さらに人間としては2点。赤点ってレベルじゃねーぞ』

いいから、どこだ？

『そんな俺に会いたいのかい？ 嬉しいこと言ってくれるじゃねーか。俺ならさっきからずっとお前の後ろにいるぞ』

まさに俺は疾風迅雷の如く振り向いた。が、そこに斉藤の姿はない。

『つてゆうのは冗談だ。いまそっちに向かつてる途中。白骨が剥き出しになるぐらい自分の指でもしゃぶってろや。じゃあ、切るぞ』
ため息ひとつも出ないね。

とりあえず斉藤が来るまで立ち往生っていうのはごめんこうむりたい。個人的には人一人分ぐらいが丁度くつろげるスペースと熱いミルクココアを希望するが、実際問題、ここいらにはベンチひとつ見当たらない。休憩したい奴は喫茶店にでも行けと言うのだろう。さすが資本主義社会ジャパン。いい感じに腐ってる。

「だーれだ？」

集合時間になってもこない斉藤に放つ必殺技を稲妻空烈刃か稲妻

クロスブリットアタック

十字空烈刃にするか、思案していると俺の視界がブラックアウトした。人肌でしか出せない温かさ——誰かの手が覆いかぶさっているのだろう。いわゆるあの恋人同士などでよくやる「だーれだ？」と女の子が男に目隠しをし「〜ちゃん」みたいに男が言う、見ているだけで尋常じゃない殺意が込み上げてくるあれだ。そして、現在俺に行動を実行しているのは、九十九パー斉藤。なにを言おうが野太い声が全てを証明してくれている。せめて声ぐらい女の子っぽくしてほしいね。

「男にやられてもなんも嬉しくないぞ」

俺は瞳を覆う両手を乱暴に持ち上げ、斉藤のニヤけた面構えを想像しながら顧みた。

「失礼極まりないって感じい？ ちょーMM？ なーんて冗談だよん。仁井哉さん」

これには驚きを隠せないね。

振り返ってみれば斉藤とは似ても似つかないカジュアルに決めている女の子だ。薄朱レンズのサングラス越しにこちらを上目遣いで

見上げる姿は反則的なまでの愛らしさを持っている。短い髪はふたつにくぐられぴよこぴよこと揺れ、全身から発する女性独特の香りはエクセレント（意味不明）。しかし、なによりも早く先行した思いは、

誰だ？

「あつれれー。まさか、ウチのこと忘れちゃった系？ ふーん、仁井哉さんにとって、しよせんウチはゴミのように何人もいる彼女おもちゃの一人に過ぎなかったのかあ。琵琶湖で泣きなくなっちゃうよん。いずれは涙も枯れ果て、ウチは琵琶湖に心中。お化けになったたら仁井哉さんの枕元に取り憑いてやるう」

微妙にしゃがれ気味なハスキーボイスを発する彼女は、さきほど耳にした斉藤の声とまったくの別物で、俺は自分の聴覚に障害があるのではないかと疑いたくなる。が、この少女の目星はついた。

「龍円寺さん……だっけ？」
りゅうえんじ

「YES I AM！ チッ♪ チッ♪ うんうん。今日も絶好調、龍円寺うららでっすッ！」

リアクションの取り方がわかりません。

「ところで仁井哉さん。いつまでウチの両手を握っているのかなあ？ 愛情表現にしても、ちよいイタイよん」

「悪い。てゆうかごめん」

火傷をしたとき耳たぶを触るような無条件反射的で動きでパツと龍円寺さんの両腕を解放した。

「さすが男の子。微妙にイテテって感じかな？ 痕あとついちゃったら仁井哉さんが責任とってウチをお嫁に引き取ってね。それはそれでいいかも……とゆーことでふつつか者ですが、よろしくっすッ！」

ひとまず龍円寺さんのボケはスルーして、斉藤という名のバカにフライングチョップをしなくてはならん。あの野郎、龍円寺さんまで巻き込んでこんな悪戯を仕掛けるとは不屈きけしからん。

「斉藤はどこにいるんだ？」

「斉藤さん？ ウチはしらんよお」

「そんなはずはない。さつき声は斉藤に違いない。あのアホ声を聴き間違えるわけがない」

「声のこと？ あれはウチが斉藤さんの声マネをただけだよん。」

あー、信じてないなあ。これは隠されたウチの3つの特技のひとつ『声帯模写』なのだ」

「それで？ 斉藤はどこにいる？」

「いまの驚くところだよーい。ウチが本気を出せばねー、アナゴさんからマスオさんまで自由自在に模写^{コピー}することができのすよ」
真似できる範囲せまいですね。

「あー、あ、あゝ、オッス、オラ斉藤。生まれも育ちもサンフランシスコン。座右の銘は妹より姉。だけど妹も捨てがたい」

「斉藤っぽいな」

「あれれ？ リアクション薄いすな」

あまりのそっくりさに驚きを通り越してなんも反応できないだけだ。声帯模写……へんてこりんな能力よりよっぽど可愛らしい。

「龍円寺さんならいい声優になれるよ」

潤った唇に人差し指を当てながら、こちらを見据える龍円寺さんはニヤニヤという擬音に相応しい表情。そもそも何故に龍円寺さん^{なにゆえ}はさほど面識のもたない俺に声を掛けたのだろうか？

「ねえねえ、その仁井哉さん。ヒマならちよつとウチとお茶しないかい？」

「……いい話だけど今回は遠慮しとくわ。斉藤を待ってるんでね」

「……ウチのはち切れんばかりの愛が斉藤さんに負けるとはあ。これにはお姉さんショックを隠しきれないよん。じゃあさあ、じゃあさあッ！ ウチも仁井哉さんと斉藤さんに憑いてっっていいかいッ？」

ここで「Yes Yes Yes oh my god」と直結できるほどの決断力は持ち合わせてない。それに今回企画立てした斉藤であり、その斉藤の話も聞かずに龍円寺さんの同行を独断で決めてしまうのはいささか自己中というものではなからうか。まあ、斉藤なら龍円寺さんが同行すると耳にすれば「いい」とバカみたいには

しやぐに違いない。

「俺はいいんだが、斉藤がなんて言うかわからんな……斉藤が「いい」って言うんだったら、いいんじゃないか？」

「おー、言ったねッ？ 男に二言はないぜよ、よん」

「ないよ。それより、龍円寺さんこそいいの？ 今日の予定とか？」

「んー？ ウチのスケジュール訊いてどうするのかなあ？」「今夜は家に帰さないぜ」とか言っちゃう系？ いやん、うららちゃん困っちゃうよん。まだ、心の準備はおろか身体の準備も出来てないよん……あれ？ なんの話してたんだっけ？」

斉藤はまだか？

「お前らふたりってホントに出来てたのか？ 噂はちらほらと耳にしてたんだが、エセ情報かとばかり……龍円寺はこんな冴えない奴のどこかいんだ？ 弱みでも握られているんだたら、容赦なくホームから放り投げていいんだぞ。いや、それともあることないこと言い触らして仁井哉を不登校にしてやろうか。地味に効くのが机の上に菊の花を置くことだ」

これが俺が待ちわびていた斉藤の第一声目である。発言がかわいそうな子に訊こえてなんだか目頭が熱くなってきたや。

よからぬ想像をしている斉藤に事情を説明すると、

「龍円寺も一緒に？ あ、えー、ねえ」

予想とはまるで違う歯切れの悪い返事。てっきり斉藤のことだから、龍円寺さんが来ると耳にした瞬間、筋肉を膨張させて上着を破るくらいの芸当をするほど喜び狂うことかと。さきほどから斉藤は横目でチラチラと促^{うなが}しているが、それがなにを示していることもわからないし、残念ながらただの気持ち悪い人にしか見えない。

「ダメかいッ？」

「いや……ダメってわけじゃないんだが………な？」

な？ ってそんな爽やかに言われても、俺はなんも答えられんよ。

「別に付いて来てもいいし、むしろ俺は付いて来てほしいと思っている。けどな、今から行く場所は龍円寺にとっちゃつまらぬところ

だと思う」

「どこ行くのさあ？」

「……………えっと。それはだな……………仁井哉。ちょっと席外せや」

俺に目的地を知られたくないのか？ まあ、なんでもいい。丁度喉が潤いを求めているところだ。

「飲み物でも買ってくるから、そのあいだに話は済ましとけよ」

龍円寺さんの笑い声が訊こえたのは、それから数秒後のことである。

ところでJRという単語をご存知であろうか？ Japan Railway、略してJRで直訳すると日本鉄道。

「仁井哉さん、雑学王だねえ」

「……………いま、俺声出してた？」

「うんうん。なーんかブツブツ言ってたよん。まーさか、最近流行のアルツなハイマーかいッ？ もし、仁井哉さんがそうだととしてもウチの愛は不滅だから安心してよろしい。誠心誠意の気持ちを持ってウチが責任を持って介護してあげるよん」

斉藤とどのようなやり取りがあったか不明だが、結局龍円寺さんも同行することとなった。他愛ない話？をしつつも、俺らはJR日本鉄道≠電車でまだ見ぬ目的地へと高速移動中である。もはやひとつひとつの駅名が訊いたこともないどころか、県をひとつ越えてしまった。乗り換えと乗り継ぎを合わせ、すでに三度ほど済ましているが、それらの電車賃は全て斉藤持ち。無料^{ただ}ほどこい事はないが、一応社交辞令として断ってみたところ、

「いい、気にスナ。いや、うそ、やっぱ気にして。そして、神の如く俺を讃えるんだ」

律儀にも龍円寺さんは「ははー」と両手を合わせ、斉藤にお辞儀をしたが、俺には公衆の面前でそんな行動は出来ないので、一礼だけで済みます。

「おう！ ゆー、しゃいばーい？ いえす、いえすッ！」

一駅ごとにテンションが確実に上昇している龍円寺さんは、もう

会話が成立しないほどおかしくなっている。斉藤も斉藤でさっきから流れる景色を眺めていて、まるでリストラが決まった窓際社員のように黄昏れている。俺の同行者の皆さんはどうも感性が特殊らしいです。

俺は呆れている。

斉藤はいつもと変わらない。

龍円寺さんは物珍しいそうに辺りを見渡している。

すれ違う男性陣の8割方、未梨愛用のリュックサックと同じようなデザインをした物を装着し、色鮮やかなバンダナを巻いている。すれ違う女性陣の6割方は思わず「萌えー」と叫びたくなるような愛らしい格好をしている。それを見た龍円寺さんは服の選出を間違えたと嘆いているが、あんな格好をしている女性と肩を並べて歩く俺としては、それこそ顔から火が出るほど恥ずかしいという奴だ。

ここ秋葉原。

どうでもいい話だが、つい最近まで俺は「あきはばら」ではなく「あきはばら」だとばかり思い込んでいた。

「で、どこに行く気だ？ すみやかな回答及び納得できる回答を求めろ」

「それは、着いてからのお楽しみだよん。斉藤さんの言うとおりきつと仁井哉さんは喜びのあまり発狂しちゃうよん」

「龍円寺の言う通りだ、仁井哉。知らぬが仏って言うだろ？ あらかじめに行き先を伝えてしまったなら、着いたときの喜びは半減だ」

「その使い方は間違っている。だいたい龍円寺さんに行き先教えて、俺に教えないということはこういうことだ？ 知る権利は俺にだってあるだろ？」

「だが断る！ この斉藤が最も好きな事のひとつは、気になる情報を教えて欲しいと思ってるやつに『NO』と断ってやる事だ……」

いい感じにウザイな。

今現在、俺たち三人はよくわからない街をトライアングルのような陣形を取りつつ目的地に向かい行進している。斉藤が先陣を切り、一步後ろで俺と龍円寺さんが学生として節度の保った距離で平行に歩いている。龍円寺さんが笑顔の絶えない人だとは知っていたが、いまの笑顔はどうも気味悪い。葉月が度々見せるいやらしい笑顔にとってもよく似ている……とゆうかその物だ。女の子だからいやらしいで済ませられる表情であって、男なら生理的に気持ち悪いと言われるに違いないね。いや、女の子でも顔によっては、アウトの可能性もありうる。

しかしだな、と俺は思った。

龍円寺さんの思考回路はさっぱり読めない。龍円寺さんは個人的な感想を抜きにして客観的に見ても美少女のカテゴリーに含まれているだろう。まだあまり話してないので確証は持てないが、性格だって悪くないと思う。それなのに、だ。なぜ俺に付いて来る？ たまたま俺を見つけたにしろ、そこから一緒に遊びに行くまで発展はするものか？ そもそもなぜ龍円寺さんは駅に居たんだ？ 普通、用もないのに駅に来るか？

「むむむ………えいッ！」

ぷに、と頬に軽い衝撃が走る。龍円寺さんの突つつく攻撃。

「なんでも考え込むのは仁井哉さんの悪い癖だよん。そんな難しい顔しちゃってー、楽しむときは楽しむッ！ 遊ぶときは遊ぶッ！」

メリハリつけて生きていこうじゃないですか」

「別に……ちょっとボーっとしてただけ」

「ウソハヨークナイデースヨー。仁井哉さんの癖くせ、特別に教えてあげるよん。なにかを考えると、仁井哉さん、鼻頭に触る癖があるよん。ついでにそれやっちゃうと魅力二割減。男らしくないよん」

俺は自分の鼻頭にある左手をゆっくり離し、龍円寺さんに視線を転じる。

なぜ俺の癖くせを知っている？

確かに俺には龍円寺さんの指摘の通り、考え込むと鼻頭に触れる癖を持っている。三年前ぐらいにオフクロに、その癖キモいからやめろ、と指摘されて俺が初めて気づいたこの癖。癖というのは出会って二日そこで見抜けるものなのか？

「いゃん、仁井哉さん。そんな獣の目でウチを見ないでよん」

……考えすぎか。あんな夢を見た直後だから神経過敏になっているのかもな。素直に美少女と仲良く行動できることに感謝をし、存分と堪能たんのうしようか。

「楽しむとき楽しむ、ね」

あれ、これ名言じゃね？

「斉藤。なんとなく目的地が読めてきた、とゆうより秋葉原あきはらについた瞬間閃いた場所がある」

「ほーう。言ってみやがれ、ジャリ坊が」

「…………あれだ、可愛いメイド服に身も心も包み込んだ女性が、お帰りなさいませご主人さま、とか言うところじゃないか？もし、そうだったらお前が泣くまで殴るの止めないからな」

「お前、それじゃあどのみち違うって言う選択肢しかないじゃんか。ま、実際違うところなんだけどな。そんな在り来たりの展開をこの斉藤がするとも思ってたか？それはお前が俺に対し過小評価し過ぎだ。俺は常日頃から相手の裏の裏のそのまた裏を付くように心得ている。それと、俺は『仁井哉が楽しめる場所』と言ったはずだ。メイド喫茶ごときで仁井哉が喜ぶとは俺も思ってない」

「さすが斉藤さん！ウチたちに出来ないことを平然とやってのける精神力ッ。そこにシビれる！あこがれるウ！」

誰があこがれるっていうんだろうね。

それにしてもヤマが外れるとは……他に思いつくものといえば……アニメ、ゲーム、マンガ、電気用品……ダメだ。俺が喜ぶ場所？検討すらんないね。

想定範囲外の事件が立て続けに発生すると、人間は現実から目を逸らし妄想とゆう仮想空間に逃げ込むものだ。俺はどこかに吹っ飛んでしまいそうな自我を氣力の限り尽くして繋ぎ止めたが、もしかしたら自我がないほうが幸せだったかもしれない。

「仁井哉さん、どうしたん？　きっと中はハーレムそのものだよん」
「……………まじで、勘弁してくれないか？」

一見して普通の喫茶店。しかし、入り口前に置かれている看板なようなものに『妹喫茶』と呪いの単語のように殴り書きされている。この喫茶店がどのようなものか俺の辞書には書かれていないが、想像するにいかわしいものに違いない……………この際、内容なんてセミが脱皮に到る過程ぐらいどうでもいい。

「仁井哉、どうしたんだッ！　金のことなら心配するな。俺にはバイトで稼いだ初任給がたんまりある」

金のことを心配してるわけじゃなければ、特にここを拒絶してるわけでもない。

ガラス越しに働く回る店員さんのなかに、

なぜ、愛沢さんがいるんだ。

4―1 龍が如く（後書き）

連載始めて4ヶ月ほど、やっと『4』に入りました。そして記念すべき15話。文体が最初と変わってますけど、あんまり気にしないでください（笑）

新しい連載を近いうちに始めたいと思ってます。目にしたら見てやってください。ちなみにSF予定です。

いつもの通りちょっとした余談をさせてください。

つい先日、買っちゃいました。前回の電撃大賞で大賞を授与した「ミミズクと夜の王」と金賞「扉の外へ」。いや、まだあまり読んでないんですが、驚きましたよ。「ミミズクと夜の王」には『挿絵』が一枚も入っていないんです。ライトノベルなのに驚きです（笑）。けど、内容はやはり大賞だけにおもしろい（まだ途中でですけど）。ちよっとだけ気になったことは小説の初版発効日「二〇〇七年二月二五日」。明日ですよね（笑）。

これからよろしくおねがい致します。

4-2 うららが如く（前書き）

サイトウ（♂）

一人称…俺

特徴…欲望に忠実

身長…1.65m

体重…58kg

好き…女の子。楽しい人

嫌い…ムサイ男

特技…情報収集

備考…一年二組所属。仁井哉が緑校に入学してから、初めて出来た友達。情報を集められるという特技があり、信用性も高い。頭の回転が速いのだが、その性格から第三者からはバカとしか見えないかわいそうな子。スタンドで例えるならトーキング・ヘッド

4―2 うららが如く

妹好き、妹萌え、シスターコンプレックス。世の中には特殊な性癖を持った方々も大勢いるとは知っていたが、『妹』好きに到っては全知全能である俺の脳でも理解に苦しむね。いや、まだ実の妹に恋することならわかる。ひとつ屋根の下に住んでいる妹は非常に優しく人気物でとても有能な人格者――決定打で美人ならば、「ああ、なるほど」ぐらいの感想は出せそうだが、なぜ妹のいない奴らが妹好きになるのかが理解できない。「お兄ちゃん」とでも呼ばれたいのなら、「お兄ちゃん」に改名すればいい。特に妹好きを非難するつもりではないが、これから俺の前で妹好きと名乗る男らは戒めとして指一本切り落として欲しいね。

「お帰り！ おにいちゃん！ おねえちゃん！」

「たっだいまー！」

龍円寺さんの性格がともうらやましく思える今日この頃。

店内は外から窺ったときよりも、遥かに多くの客人どもで埋め尽くされていた。客層の大半は当然のことながら男だが、中にはちらほらと女性の姿も見受けられるのは意外だ。それにしても本当に人が多い。満席なので帰ってくださいこの野郎と言われても、いまなら悪態ひとつ漏らさずにハーレーダビッドソンよりも疾く優雅にさっそうと移動できる自身があるが、

「あ、テーブルひとつ空いたよ！ おにいちゃん！ おねえちゃん！」

現実はいつも非情だ。周波率を十パーセント上げたような甲高い声で応対する妹店員さんはあっさりと喜ばしくない知らせを伝えると、雅に踵を返し、

「こっちだよ！ おにいちゃん！ おねえちゃん！」

タメ口は仕様なのかな？ ふざけてるね。

どうみても年上にしか見えない妹たちに「おにいちゃん」と呼ば

れている奇怪な現象を分析しつつ、外から丸見え配置の席へと腰を落とした。俺は斉藤から奪ったシャレた帽子を深く被りなおし、龍円寺からお借りした薄朱のサングラスに手を添える。当然ながら斉藤、龍円寺さんの二方には愛沢さんの存在を報告していない。バレたら俺の命はそこまで……故意的に愛沢さんと呼び寄せ精神的仕打ちを仕掛けてくるに違いない。不幸中の幸いは、まだ愛沢さんが俺の存在に気づいてないということだ。

「仁井哉さーん、室内なんだから帽子を外したほうがいいんじゃないかなあ？ 社会のマナーに反するよん」

メニューの隙間から顔を覗かせる龍円寺さんは、俺の気持ちなどお構いなしにNGワード「仁井哉」を連呼してくる。これが斉藤ならばその舌引きちぎるものの、龍円寺さんでは手の施しようがない。「仁井哉さあん、さっきからだんまりしちゃってどうしちゃったの？ ウチは寡黙な男の人より、ハジけちゃってる仁井哉さんのほうが好きだよん。あ、それとも下痢かい？ 我慢は身体によろしくないよん」

女の子が下痢とか言わない。

「慣れない雰囲気緊張してるだけだ……それに、斉藤だってさっきから黄昏れてるだろ？」

「……………ん？ 誰か呼んだか？ いま俺は目を保養中だから、たぶんあんま反応できないぞ」

そうだった……斉藤に緊張という感情が欠落していたんだ。口数が少ないのは妹店員さんたちの切磋琢磨せつさくまと働く勇姿を網膜に焼き付けているからで、店内の雰囲気吞まれたわけじゃない。ある意味勇者だな。

「仁井哉と龍円寺……あの女性ひと見てみ。あれは妹ってレベルじゃねーな……戦闘力53万はあるぞ」

斉藤が横目で示した先にいる女性——お察して貰いたい、愛沢さんである。全身のありとあらゆる汗腺かんせんが一気に開放された気分だ。他の店員さんとデザインの異なる赤を強く強調した制服に身を包み

込んでいる愛沢さんは、仕草から接客の仕方までナチュラルにこなしている。

「あの身のこなしかた……間違いねえ。あれはメイド上がりに違いない。そうだよな、仁井哉？」

それは腐っても使用人だからだろ……なんて言えるわけねえ。てゆうか俺に振るな。

「メイド上がりの妹……どう考えても邪道だと思う。だが、それがいい！」

「わお、あの愛らしさは最高に反則だねえ。鬼に金棒、いやいや、サミーにコルクバットぐらい反則的だよん。仁井哉さんはあの女性、どう想っちゃってる？」

「俺は、さっきの店員さんのほうがいいと思う」

自分で自分に賞賛の言葉を贈ってもバチが当たらないほど、俺はいつもと変わらない平淡な声を絞り出すことができた。これで話の矛先が反れば万事オーケーなのだが……。

「すみませーん。注文お願いしまーすッ！」
まるで聞いてないね。

しかも、よりによって龍円寺さんのオーダーに答えたのは、真紅のスカートをひらひらと翻しつつも絶対領域を確保している愛沢さんじゃあないか。いや、それほど慌てるような状況ではないし、ここで行動に出たら返って怪しまれる……愛沢さんの鈍感力に賭けたほうがやり過ぎせる確立は高いとみた。

「お客さま……じゃなくてー、おにいさま、おねえさま、ご注文は決まりまー」

「ハンバーグセット、オレンジジュース」

愛沢さんが言い終わる前にあらかじめ決めておいたメニューを声を落とし言い放つ。これも作戦の一種だ。下手に黙していたら、龍円寺さん辺りが「仁井哉さんはなに食べるん？」とか言いそうだからな。

「ウチはー……この『いもうと』によるおにいちゃん、おねえちゃ

んのためのいもうとのてづくりちゃーはん』ってお姉さんが作ってくれるのかい？」

「えーっと……どうやらそうらしいです。あと仕事の都合上わたしのことは『れん』とお呼びくださーい。接尾語は、ちゃん、さん、たん……おにいさま、おねえさまのご自由にどうぞー」

顔の角度を変えずに視線だけを愛沢さんに巡らせると、胸元に『れん』と記されたネームプレートが付けられているのが確認できた。偽名に違いないだろうが、俺は実際に愛沢さんのフルネームを訊いたことないので確証は持てない。考えてみれば、俺は愛沢さんの生い立ちも、過去もなにも知らないな。未梨の使用人――愛沢さんも特務機関とやらの一員なのだろうか？

「こらこらあ、ダメだよん、『仁井哉』さん。れんちゃんの胸元ばっか見てちゃ、うららちゃんがものすーんごい嫉妬しちゃうよん」

体内にアドレナリンが大量分泌する感覚がいまなら絵に書ける気がする。愛沢さんはネジ巻き式のおもちやのように首をゆっくり回すと視線をこちらにロックオン。はいはい、万事休す。

「奇遇ですねー。わたしのおともだちにも同じ名前の方がいまーす」

俺はどうやら愛沢さんの鈍感力を甘くみていたようだ。顔を隠しているとはいえ、服装や雰囲気やらで勘付くものだが、寂しいような嬉しいような。首の皮一枚なんとか繋がったが、まだ緊急事態であることに変わりない。そう自分に言い聞かせ、現状を挽回できる作戦を練ることとした。

「それはそれは、本当に奇遇ですね。きつとれんさんのおともだちの仁井哉さんは、こっちの仁井哉とは違って、さぞ素晴らしい人なんでしょうね」

プレイボーイぶっている斉藤を殴り殺したい衝動に駆られて脳内血管が詰まりそうだ。まるで回転しない。

「仁井哉さまは本当にやさしいです。わたしがピンチなときは毎回駆けつけてきてくれまーす。見た目も中身も完璧にできている人

間でーす。この前なんて、わたしが狂犬に食い殺されそうになったとき、どこからともなく現われた仁井哉さまがさっそうと追い払ってくれましたー」

愛沢さんの言う狂犬とは生後一年にも満たないチャウチャウ犬のことであり、犬好きでもない俺の網膜でさえ、その姿はとても可愛らしく映った。スーパ―の入り口付近の電柱にリードで繋がれていた子犬に吼えられ丸くなっていた愛沢さんをたまたま見かけ、リードの位置を隣の電柱にずらしただけである。いまの話を読む限りでは、俺がまるで噛まれたら狂犬病が発症する狂犬を追い払ったみたいじゃないか。

「へえー、カッコいいねっ。仁井哉さん」

龍円寺さん。俺に話を振るタイミングがおかしいですよ。

「……ああ、カッコいいな。俺とは大違いだ」

「それと仁井哉さまは、」

「そこまでにしときなっ、れんちゃん。愛しの仁井哉くんの話はいいからいいから、他のおにいちゃんたちが待ち侘びてるよ。ほら、ここはあたしが引き継ぐから、いったいっ」

「ダメでーす。るりさまー、素が出てますよー」

「あんたなんて素で接してるようなもんでしょ……あーあ、キャット被んのも楽じゃないわねー。って危うく流されるところだった……ほらほらほら、さっさとキッチンのほうにいったいっ」

突如降臨したちよつと喋り方がルー大柴と似てる妹店員さんに言われるがまま、愛沢さんは名残惜しげにこちらを見やりながらとぼとぼと去っていった。その店員さんの胸元のネームプレートに『るり』と言う文字が刻まれている。るりさん、あなたの背には後光が差してます。

「それは、西日だからだよん、仁井哉さん」

声に出したつもりはなかったのだが……これでまた俺はアルツハイマー予備軍の可能性が濃くなった。

「あー、いー、うゝ……ごめんね！ おにいちゃん！ おねえち

やん！　ところで注文決まった？　まだなら早く決めて欲しいな
っ」

早急に済まされたボイスチェーンに営業スマイルを振り撒いてくれるるりさんを見て「職人だな」と思いつつも、最後までCOOLで貫き通した俺はある種の才能があるのではないか、と思った。

「そういえば、オーダーまだだったねえ。ウチは『いもうとによるおにいちゃん、おねえちゃんのためのいもうとのでづくりちゃん』と、ダージリン・ティーでお願いしまっすッ」

「じゃあ俺は……『いもうとがぶきようながらもあいじょうたっぷりそいでつくっちゃうかもしれないすぺしゃるらんちせつ』と、ジンジャーエールを頼むわ。ちなみに『いもうとが（以下略）』って『るりちゃん』が作るんじゃないよな？」

斉藤の口調は愛沢さんのときとは打って変わって、まるで十年來の親友と話すように親しげに言葉を投げかける。いくらこの妹店員さんのレベルが愛沢さんに劣るとはいえ、ちよつと露骨に態度変えすぎじゃないか？

「……安心して！　おにいちゃん！　るりはね、お料理係じゃないの！」

顔の筋肉が引きつったような笑みを振舞いつつ、るりさんは喉を震わす。おい、ちよいキレてるんじゃないのか、これは。

「そうだよな。『るりちゃん』のお料理はちよつと食べられるものじゃないからな。ちよつとした生物兵器になりえるね」

なぜお前はさつきから火に油を注ぐようなことばかり言うんだ。恨みでもあるのか？　痴話喧嘩なら他所でやってほしいね。

とりあえずここはトイレにでも一時非難し、ゆっくりと今後の作戦を練ることにしよう。十中八九、斉藤は『れん』さんが俺の知り合いと勘付いてるに違いないからな。いや、半信半疑と言ったところだろうか？　愛沢さんが話した仁井哉の武勇伝と俺を重ね合わせるには少々ムリがある。斉藤を出し抜く手立てを見出さなければ……。

「仁井哉さん、どこいくん？」

「ダブリューシー」

「トイレ？ 案内してあげる！ おにいちゃん！」

わざわざトイレまで付き添って貰うのは多少の嫌悪感を感じるが、ここは従っておいたほうが無難かな？ そう結論づけた瞬間、るりさんは鉄骨さえ粉碎できそうな握力で「逃がすまい」と俺の手首をがっちり掴んできた。そこまでして俺をトイレに導きたいのか？ 行き着いた場所はすくなくとも用を足すような空間ではない。職員専用の更衣室といった感じの部屋——脱ぎ散らかっている洋服のなかには愛沢さんが朝、身に付けていたと思われるものもあるので、ほぼそうに違いないだろう。ここに呼ばれた理由？ 検討もつかないね。もしや、これから淫らな行為が行われるというのか？ いや、このりくつはおかしい。

「まあ、そんなナーバスしなくていいわよ。テキトーに腰がけて……別に取って食おうってわけじゃないからオールライト」

つい数分前まで「おにいちゃん」と言っていた人物とは思えないほど、殺伐としたおねえさんキャラに早変わり。さすが職人さんであると感じしつつ、俺は正直な疑念をぶつけてみた。

「俺はあなたに恨みを買った覚えはないですよ。なんの用ですか？」
「つれないねえ。さっきキミのことヘルプってあげたのに」

俺がいつ、どこで、どのように、助けられたのだろうか？ むしろ、拉致られた気分だね。

「とぼけるつもりなのか？ 察するにキミはれんちゃんの言う『仁井哉』くんでしょ？ あーっと、まだ、とぼけるつもりならキミのそのキャップひっぺがしてれんちゃんの前に突き出すからね」

……なんなんだ、この人は？ 思考の読めるエスパーか？

疑惑の視線を送り込みつつ、俺は中が蒸れてきた帽子を外してみせる。

「……………なんで、わかったんですか？ 俺が『仁井哉』って」

「べっつにいい、推理^{インフアー}ってほどのことはしてないよ。まず、キミの名

前は『仁井哉』である。前々からキミのことは知ってたよ。れんちゃんに仁井哉くんの武勇伝を耳にタコできるぐらい訊かして貰ってるからね。名前としては希少価値つくぐらいレアだし……。それと、キミの立ち振る舞い——ポーカーフェイス装ってたつもりでしょうけど、ノイズにどっぷりと脂汗浮き出てたわね。キミはれんちゃんに正体を隠しておきたかったんじゃないかな？」

ずいぶん不確定要素の多い推理なことだ。蜂の巣のように穴だらけで、瞬間接着剤で傷口を措置するぐらい無理がある。が、勘任せにしてはあまりにも的確な場所を射抜いてくる。

「決定打になったのは、キミの付き添い、^{プリムヌ}馬鹿者一名」

「斉藤、ですか」

「へえー、知ってたんだ」

さっきの会話を辿れば斉藤とるりさんは知り合いであることは一目瞭然。友達、にしては険悪な雰囲気を漂わせていたが、友達に似た関係であることは間違いないだろう。わからないこと言えば、愛沢さんと斉藤はどの程度、俺の個人情報をるりさんに横流ししているか、だ。

「あのプリムヌも、ときどきキミのことを話しててね。プリムヌが話してた『仁井哉』くんは緑校一年生、れんちゃんの言う『仁井哉』くんも緑校一年生。そしてキミはあのプリムヌの連れで、名前は『仁井哉』くん。これだけのインフォメーションがあって、気づかないのはよっぽどの鈍感ちゃんぐらいね」

「……それで、俺になんの用です？」

「やっぱキミ、つれないねえ。キミはれんちゃんに正体をシークレットにしたいんでしょ？」

できれば、同行者二名にも悟られたくない。

「それはインポッシブルね。ちんちくりんなガールのほうは知らないけど、プリムヌは確信犯、パーフェクトにバレてるわよ。れんちゃんがキミのアクウエイタンスってね」

それが真実なら俺は鼻歌混じりに斉藤を撲殺しかねないぞ。

「ごめんねえ。あたしがあのバカにぼろっとリークっちゃったのよ。いま思うとミステイクだわさ」

「……どんな風に伝えたんですか？」

「そうねえ、うろ覚えだけど『ウチのショップにすんごいプリティな店員さんがジョインしたんだけど、その娘のアクウエイタンスに緑校に通う仁井哉くんっているらしいけど、あんたフレンドに仁井哉くんっていないなかったっけ？』って感じで」

うろ覚えどころか明確過ぎる情報ありがとうございます。

さて、どうするものか？ 一見偶然が重なったかのように見えるこの事件も全て斉藤の汚い手により創り上げられたシナリオだったわけだ。斉藤の目的を推測するに、俺の反応を楽しむといったところだろう。そういえば、あいつは人の不幸を糧にする根っからのサディスト属性を備え持つ奴だったな。最初から斉藤に踊らされていたってことか。愛沢さんにバレるのも時間の問題かな……やんなっちゃうね。

「そこ で よ。キミの正体がれんちゃんにバレないようにヘルプしてあげようじゃないの！」

もしや、この人も斉藤とグルなんじゃないのか？ 甘い餌を与えられるだけ与え一気に突き落す巧妙な計画が仕組まれている可能性だって……いかんいかん、疑心暗鬼に陥るところだった。

「もちろん無償^{ただ}じゃないからね。ギブアンドテイク、等価交換、資本主義社会のカマンセンス。無料^{ただ}より安いものはない、同時に無料より怪しいものはない。キミにやってもらいたいことがあるのよ」

「内容次第では断りかねますよ？」

「拒否したら、れんちゃんにバラすよ？」
不条理だな。

「そんなフェイスしなくてもベリーイージーなことよ。名付けて作戦D！ 作戦内容をエクスプラネーションすると、」

縦社会の波がとうとう俺のところまで及んで来たと自嘲しつつ、るりさんの申し出に耳を傾けることにした。なけるね。

「ずいぶんと永い^{なが}トイレだったねえ。でっかすぎてつまっちゃったっ？」

龍円寺さんとの会話に於ける教訓、スルーが大事。

色素が抜けたような瞳で妹店員さんたちを黙々と観察している斉藤は、おそらくこちらの行動を全て悟っているだろう。愛沢さんのことも、俺がるりさんと密会していたことも。抜け目のない奴とは薄々把握していたが、いや、把握したつもりだった。るりさん情報によれば、斉藤の知能知数は150と東大もビックリな天才児らしい。が、俺は知能知数の平均を知らないのですさほど驚けない。それに、あらためて実物を見ても天才児と言うより、思春期による性の盛りに忠実な現代社会に生きる青年というキャッチフレーズがとてもよく似合う精神遅滞患者のほうが斉藤にピッタリだと思う俺は果たして知能知数はいくつなのだろう。

とりあえず斉藤を^{マーク}注意するとして、不確定分子、龍円寺さんはどうするべきか。悩みどころだ。

「おつまませー、えっとお、はい！ ハンバーグセットのおにいちゃん！ あとお、はい！ 『いもうとによる（以下略）ちゃーはん』のおねえちゃん！」

頭を抱える俺の眼前にハンバーグを差し出したのは、優しい笑顔を振り撒きながらも斉藤を見る目は笑っていない、どこか恐ろしさを感じさせるるりさんだ。斉藤は好きな女の子を苛めるときのような気持ち悪い笑顔でるりさんを一瞥すると、ニヤリと唇をほころばせる。

「俺のはまだかな、るりちゃん？」

「ごめんね！ おにいちゃん！ でもー、少しぐらいペイシエントして貰わないと、勢いでおにいちゃんの^{ぞつぷ}臓腑^{ぞつぷ}ずたずた引きずり出して、そのプリティなお口にぶっこんじまうかもっ！」

さっそく素が出てますよ、るりさん。

「最近の妹は罵倒で客をもてなすのか？ そんなんじゃない、おにいちゃんたちは喜ばないなあ」

るりさんの引きつった笑顔のまま、俺を睨み据えてきた。きつと脳内では毛細血管がぷちぷちと切れているんだらうね……しようがない、当初の予定通り作戦Dを開始しますか。

ちなみにDの意味は特にないらしい。

るりさん曰く、「あのプリムヌがあたしをプロボックしてきたら、キミは一ミクロンの躊躇ためらいもなく、バカの足をクラッシュして」と訊いてうなずいたのだが、クラッシュの定義がどれほどなものかわからないし、そもそもプロボックの和訳が俺の辞書には記されていない。インスピレーションを働かせ辿りついた結果「斉藤がるりさんをバカにしてきたら躊躇ちゅうちゅうなく、斉藤の足を踏み潰せ」となった。あながち間違いじゃないだろう。

手探りならぬ足探りで斉藤の足位置を補足し、個人的な感情もだいぶ含めながら勢いよく踏み潰した。

「イッテ！ ……ルビウムって元素があるの知ってるか？ 仁井哉？」

大声を上げた誤魔化しとしては若干ムリがあると思うぞ。

るりさんはざまあみろと言わんばかりの表情で斉藤を一瞥すると雅いちゆいに一揖し、軽快な足取りで去っていった。

一方、斉藤は煮え湯を飲まされたように、

「やっぱ、なんか仕掛けてくるとは思ってたけど、そうきたか……。あまりにも捻りがなさすぎて、まるで予想外だぜ。ま、『姉貴』らしいといえば——」

「ちよい待て、斉藤。姉貴って誰だ？」

いや、訊かずとも想像はたやすいが、訊かずにはいられないこの感情は言語で表現できない。

「訊かされなかったのか？ るりちゃんこそが俺の『姉貴』だ」

こういう時に一番ツッコんでくれそうな龍円寺さんはいえは無反応のまま食事に嗜んでいるご様子、まるで興味をしめしてない。

「……まるで似てないな」

「血が繋がってるわけじゃないからな」

「マジんがー？」

「うそだ」

死ねばいいのに。

「まあ、正直なことは誇らしいことだぞ。だいたい義姉なんて探しても、そうそう見つかるもんじゃない。ましてや可愛い義姉なんているわけない。義姉が可愛くなければ本物の姉が可愛いわけがない。とゆうわけで、姉貴は可愛くない。おーけー？」

斉藤が義姉について語り出した辺りから、俺はハンバーグを咀嚼そしゃくさせて貰っている。いや、まじでうめえ。まったりしていて、それでいてしつこくない。口の中で肉汁がシャッキリポンと踊るのがまたたまらん。

「まあ、姉貴のことなんてどうでもいい。それより、仁井哉、おまえずいぶんいい身分じゃあないか。瀬尾といい、椿といい……お前の隠れ特技はフラグ立てか？」

「なんのことだ？」

と言いつつ、周りに愛沢さんの姿がないことを確認する俺はとことん臆病者チキンです。

「どうせ姉貴からほとんど情報が漏洩ろうえいしてるんだろ。れんちゃんとお前の関係を俺はすんごく知りたい。それはもう喉から手が出るほど。どうやったら、あんな舌足らずな声の女性とお近づきになれるんだ？」

「斉藤、愛沢さんはただの使用人で――」

「おまえんちはあんな美人ちゅらかーぎを使用人として雇ってるのか？ S N E G？」

「違う！ 愛沢さんは未梨の使用人で――」

「椿だけでは遊び足らず欲求不満に陥った結果、使用人のれんちゃんまでに手を出したのか……S N E G？ 仁井哉の人生はどうやらハーレムルートの傾向にある。これじゃあ、後ろから刺されても文

句言えないよな？」

「人の話を訊かない奴は宇宙人にさらわれるって小学校のときに先生に教わらなかったのか？」

「この際、おまえとれんちゃんの関係はどうでもいい」

話が成立しない奴だ。会話はキャッチボールと言うが、こいつの場合真逆の方向にボールを投げているので捕れるわけがない。

愛沢さんの魅力について教鞭を振るう斉藤を軽くスルーして、俺は再び食事を嗜むことにした。いや、まじでうめえ。

それから、何度かひやひや場面にも遭遇したが、るりさんの手引きのおかげで難を逃れることができた。会計も済まし、愛沢さんとるりさんを含む五人の妹店員さんに見送って貰う際にもひやひやしている俺をよそに龍円寺さんは無邪気に手を振っている。微笑ましいね。

「よし、メシも食ったことだし、次行ってみようか」

次ってなんだよ？

「なについて……仁井哉が喜ぶ場所に決まってるだろ」

なにを言うかバカ者。またいかがわしい喫茶店に連れて行く気じゃないだろうな？

「バカはおまえだハーレム野郎。あそこはメシを兼ねて、れんちゃんを見に行くとゆう俺個人に行きたかった場所だ。姉貴に普段からのうっぷんを晴らすためでもあったけどな。本来の目的地は別。それともなんだ、もう一軒別の場所行きたいのか？」

「……本来の目的地の詳細を知りたい」

「断る。なぜ教えなきゃならん」

全然意味不明な台詞なのだが、斉藤はまるでサヨナラホームランで勝負を決めたヒーローのように堂々と答えた。逆にこっちが問いたいね。

「ねえねえねえねええ、仁井哉さん」

妹喫茶に訪れてから、口数が妙に少なくなった龍円寺さんが久しぶりに口を開いた。正確には俺がるりさんと密会したあと、もっと

正確に言えば斉藤が愛沢さんについて語りだした辺りだ。小さくくられたふたつの髪束をぴよこぴよこ揺れらしながら、こちらへと急接近を仕掛けてくる。意外に身長が大きいことで隣同士並ぶと龍円寺さんの顔位置がそうとう近い。これは反則に近い技だ……未梨ならいざ知らず、龍円寺さんの場合は次元が違う。

「……なんだ？」

「愛沢さんのこと好きなん？」

息を吹きかけるように囁かれた言葉。すぐさま風に掻き消された声、しかし、俺の脳内ではドップラー効果ように木霊リフレインしている。やがてそれも治まったところで、俺は考え始めることとした。まず、龍円寺さんはなに口走っているのだろうか。俺が愛沢さんのことが好き？ 好き嫌いの二択ならば、断然好きと即決できるが、龍円寺さんのニュアンス的に恐らく女性と見て好きか否かだ。いや、待て俺。KOOL……じゃなくてCOOLになれ。なぜ愛沢さんに抱く感情をわざわざ龍円寺さんにカミングアウトしなければならん。

「答える義務はないね」

俺が導きだした返事に龍円寺さんはノンノンと指を振ると、

「ふっふっふっ、反発する仁井哉さんもいいねえ。うららちゃん、青春ビンビン感じちゃうよん。だ、け、ど、お姉ちゃんに隠し事とはいけすかないよん」

意味わからん。俺の周りにはまとも会話を成立させることができる人キャッチボールはいないのか？

「うららちゃんに隠された3つの特技、其の式は読心術だよん。ウチの前では隠し事はノンノン。仁井哉さんはね……口ではとても言えないような淫らなことを想像中だねっ。若さゆえのなんとやらあ。あ、は、は、は、」

龍円寺さんとの会話に於ける教訓2、ほっとしても話が進む。

それからの龍円寺さんはいつもの調子に戻り、愛沢さんについて

掘り返すようなことは口にしなかった。

女心はわからん。特に龍円寺さんのは。

4―2 うららが如く（後書き）

今回は大分暴走気味で書いたので、意味不明部分が多いです。気にしないでください。登場回数を平均するとサブの愛沢さんの出番が多いような気がするの、気のせいです。決して書きやすいとかの理由じゃありません。

あと、SF連載するとか妄言を吐いたような気がするが、そんなことはなかった。

ちよつと余談。

4月1日。分裂するらしいです。夏には驚愕するらしいです。それより学校を出たいです……わかる人がいることを願います。

これからよろしく願います。

4-3 シナファイ

斉藤の一人称が「俺」から「私」へと移り変わるときがある。

「考えても見ろ、仁井哉くん。私たち人間は実に不思議な生き物だとは思わないか？」

幾多の人影が闊歩するこの中、斉藤は前フリも前置きも何ものなしにとんちんかんな禅問答ぜんもんどうを開き始めた。返事代わりに嘆息する俺の隣には、蠱惑的こわくに微笑む龍円寺が崇高な菩薩ぼさつの言葉を聞き入るように耳を傾けている。そんな必死に拝聴しなくてよろしい。猛烈に頭が悪くなるから。

「たとえばだな……あれをしてみるがよい」

斉藤が指差す先には、大腦を構成する重要なパーツをどこかに置き忘れなければ到底真似できないような姿をした二十台半ばぐらいの女性が道行く人々にチラシと笑顔を給仕きゅうじしていた。それがどうしたというのは、これから斉藤が説明してくれるだろう。

「彼女は何故あのような格好をしているんだと思う？」

「仕事」

俺は特に考えず反射任せにぶっきらぼうに答えた。斉藤は不気味に唇の端を吊り上げ、

「簡潔にまとまっていたいい回答だ。間違いではないが正解でもない」

「はいはい。ウチが思うに……あの人は趣味でやっているだよん」

首尾よく龍円寺さんが答えた。

「ふむ、それも可能性のひとつだ。否定はできないが肯定もできないな」

「んー、正解はなにさっ？」

「正解などは存在せん。確率論なら仁井哉の説がもっとも正解に近いだろうが、それはあくまで確率での話だ。真実ではない」

何が言いたい。

「つまり……私たちが彼女の目的を推測したところで正解に辿り着くことはない、と言うことだ」

齊藤は同年代とは思えぬ老獪な笑みを浮かべ、

「仁井哉くんの説を採用して彼女は仕事であのような格好をしているとしよう。なら、彼女の目的はなんだ？」

「金が欲しい一心で働いているんだろうな」

ふむ、と首肯する。

「模範解答があるならば、確かに彼女は「金」の為に働いているのだろうな。しかし、私はそう思わん。もしかしたら、彼女は仕事のフリをしているライバル店のスパイ。店の破綻を目的とする輩かも知れぬぞ」

想像力豊かというかなんというか……。

「ありえないだろ」

「そう、ありえない。その通りだ。そもそも「仕事」という仮定が間違いならば、私たちが導き出したロジックは全て不正解となる。根本的な情報に齟齬があれば、以降の繋がりが全てが狂うのだ」

思考をフル活動させている訳ではないが、まったくわからん。いや、たとえ俺が思考を巡らしたところで現段階の演算処理能力では、残りの人生を費やしても理解できる日がやってくる事はないだろう。見るところ龍円寺さんも理解していないらしい。

「簡単に言えばだな、人間は古今東西思案する生物として存在を確立するのだよ、仁井哉くん、龍円寺くん」

「せんせーいっ。意味がわからないよん」

右に同じ。

「大丈夫。俺もわかってない」

見慣れている道を百メートル歩くのと、見慣れない道を百メートル歩くのでは、断然後者のほうが疲労が溜まりやすい。とゆうのは精神上のまやかしであり、実際そんなわけがない。同じ距離を歩

けば、同じように疲れる。地元以外でいつもより足が鈍重と主張する奴は単なる体力不足野郎だ。よって、俺は単なる体力不足野郎に当てはまることになる。

ぶらぶらと足を引きずること数分、やたら面積の広い空間へと辿り着いた。外見は普通のデパートかのように見えたのだが、中に入ってまあびっくりしたね。敷地面積の不有効活用としか思えない人形、人形、人形の山。

「おお。すんごーい品揃えっ。他では見られない珍品も多数っ。あーとっ！ この人形めっちゃ仁井哉さんそおーっくりだよん。わおっ、うららちゃんもびっくりの千円。むうー、でもこの値段でミニチュア仁井哉さんが買えるのなら安いもんだっちゃっ」

龍円寺さんのテンションは俺の予想よりつねに斜め上を行く。

「ってちよつと待った、なにをテイクアウトする気だ」

「このミニチュア仁井哉さんだよんっ。ほらあ、この目とか仁井哉さんそのものだよん。かわゆいよんっ」

「ダメ絶対くん」

「……ウチにはミニチュア仁井哉さんを持つ資格がないのかあ。もう、いいよん……そうだよね……ウチって迷惑だよね……生きててごめんなさい……」

悄然とした口調とは対極的に、その表情は今日最高潮に達するに等しい笑顔だ。龍円寺さんは軽快な足取りでレジへと向かう。おい、台詞と行動が矛盾しているぞ。

「まあ、いいじゃまいか。お前はそれだけ龍円寺に好かれている。龍円寺はああ見えて一年女子のなかで彼女にしたいランキング文句なしのナンバーワン。緑校の男子どもは、どうやらはっちゃけ系が好みらしい」

俺の隣で両腕を組み、毅然と佇む齊藤がレジに並ぶ龍円寺さんを見やりながら批評家のように呟いた。何度も気になったが、そのランキングはどのように集計されているんだろうね。

「ちなみに、おまえの幼なじみふたりも上位ランカーだ。確か、椿

が20位前後で、瀬尾が30位台前半。上位といってもあれだけ顔が良くて、この順位は異常だけだな」

開閉される口からは、訊いてもいないことをぺらぺらと発せられる。

「それより、斉藤。まさかここが目的地じゃないだろうな？」

「いや、ここだっちゃ」

珍しく会話が成立したのだが、とても腹立たしいのはなぜだろう。あと、その喋り方生理的に気持ち悪いからやめてほしい。

「俺がぬいぐるみに興味を示すとも思っただったら、とんだ見当違いだな」

「だああれが、ここが目的地といったハーレム野郎。あと、俺にれんちゃんを紹介しろ」

どさくさに紛れて願望を口に出すな。気持ち悪い。

「斉藤、とりあえず自分の一個前の台詞思い出せ。お前の発言は全てが矛盾している」

「おーけー。よく訊け仁井哉。おまえの言いたいことは把握した。だから、黙ってろ」

脈絡のない発言に俺はこれ以上の情報は引き出せないと直感的に悟った。

「よしっ、キミの名前は……ミニチュア仁井哉さん、略してニイくん。わかったかいっ？ うん、わかったぜ、龍円寺さん」

龍円寺さんは路上でやっても食べていけそうな腹話術で、俺によく似た人形とひとり楽しんでいる。辱めを受けている気分だが、心なしか嬉しいのはなぜだろう。

「ごめんねえー、仁井哉さん。百八式まである欲望には勝てなかったよん。お詫びのしるしに、この中の人形ちゃんたちのひとつを進呈するよん」

差し出されたのはどれもどこかで見たことのある四体の人形たち。刺すような鋭い目つきは、人形ながらも迫力のあるツインテール少女の人形。どこことなく葉月に似ている。

赤縁眼鏡を掛け短い金髪に無表情のまま作られている少女の人形。どことなく未梨に似ている。

笑顔が燦然と輝く元氣そうな少女の人形。どことなく龍円寺さんに似ている。

可愛らしい臙脂色の服がよく似合う、癒される顔立ちをした女性の人形。どことなく愛沢さんに似ている。

黒い陰謀を感じるのは、気のせいと信じたい。

「……いや、遠慮しとく」

「遠慮なさんなってっ、平成の純情ぼーいつ」

龍円寺さんは外人っぽいイントネーションで言い切ると、ぐぐつと四体の人形を胸元に突きつけられた。

どうやればここまで選びにくい人形たちをチョイスできるんだ？

四体の人形の中から一体を選択。どの人形を選出したとしても斉藤と龍円寺さんは、俺が抜擢した人形の人物に一番好意を抱いていると勘違いするのは必定事項だ。

いや、そうじゃない、仁井哉。逆を考えるんだ。

どれを選んでも結果は同じ。ならば、心理の裏を突けばいい。

「……じゃあ、これ、貰うわ」

「完璧フラグ成立だな。仁井哉。おまえはもうそのルート一直線だ。他のルートにはもう戻れない」

「へえー、ふうーん、はぁーん、その娘を選ぶとは……仁井哉さんは幼なじみ萌えかいっ？」

俺の手中に納まる人形——無愛想で金髪眼鏡っ娘の人形。前もって言うておくが、この人形は未梨ではないぞ。人形だ。

「いいよん、いいよん。ところで、斉藤さん、れんちゃん人形はいるかいっ？」

「オーケー。今日から俺の家宝にするぜ。これで俺もれんちゃんルートに一直線だ」

お前はナチュラルに受け取りすぎだ。少しは羞恥心を持つことも、人間として大切だぞ。気持ち悪い。

「ウチの手元に残ったのは、ニイちゃんとハツキンとうらら二号……
いゃん、仁井哉さんのえっちっ。とゆうわけで、ちよっくらお手洗
い行って来ますっ」

ここであえてツッコまないのが、ツツコミの玄人という奴だ。龍
円寺さんは三体の人形を胸ポケへと強引に詰め込み、さっそうと
雑踏の中へ向かった。人混みと同化する直前、龍円寺さんの後姿に
哀愁を感じたのは俺の錯覚だとしておこう。

「じゃあ行くか、仁井哉」

「……待て、龍円寺さんはどうするんだ？」

「龍円寺には行く場所をもう伝え済みだ。ほっといても勝手に来る」
それまで愛沢さんによく似た人形をイヤらしい顔で観察していた
斉藤の目付きが唐突に鋭くなった。斉藤はこの世の全ての心理を理
解したと言わんばかりのため息をつき、感情を消した声音で言葉を
吐き出す。

「それより、仁井哉……龍円寺なんだが……」

まさか、龍円寺さんにデステイニフィールしたから協力しろと
か言う出すつもりじゃないだろうな。

「あいつ、何者だ？」

「……なにがだ」

「龍円寺うらら、青山中学校出身、十五歳、性格は明るく周囲の人
望も厚い。容姿に到っては一流モデルにだって引けを取らないスー
パー女子高生。趣味は人間観察、ソフトボール。なにやら、中学時
代にソフト部でエース四番を一任されてたらしい。同じく中学時代
はその際限のない恍惚とした美貌から、男子相手に愛のメッセー
ジを受け取った数もバカにならない膨大な量だと言う。しかも、あろ
うもことか告白全てを一刀両断。男性経験はなし、と俺は見ている」
「……いつ調べたんだ？」

一個人としての情報収集能力を超えた内容に半ば呆れ気味に俺は
訊いた。

「龍円寺は今まで俺が出会ってきた誰よりも異質極まりない存在だ」

「日本語で頼む」

「お前は龍円寺に対してなにか違和感を抱かないのか？」

上りエスカレーターに乗っているため、斉藤は俺を見下ろしている。

「思慕しぼな心意気を感じる」

「それは十中八九、龍円寺が仁井哉に恋心を抱いてるからだ。他に何か気付いたことはないのか？ 龍円寺うららの異彩さに何か気が付いた事柄は？」

「何も気付かん。てゆうかさつきからお前はなにを話しているんだ？ 俺に理解できるように説明してくれ」

斉藤はただ首肯する。默然と顎を撫でながら神妙な面持ちで何かを考え老け始めた。

斉藤と出会って約一ヶ月。決して長いとは言えない日数であるが、俺は斉藤の性格をそこそこ把握している——いや、しているつもりだった。今眼前にいる斉藤は、少なくとも二四時間古今東西鼻の下を伸ばしている斉藤ではない。

「……悪い癖が出ちゃったな。すまん、仁井哉。俺の思い過ぎだつちや」

屈託くつたくのない笑みで斉藤はニヤリといやらしく微笑んだ。数秒前に屈託だらけの表情を窺うかがわせていたのは幻想だと思わせるには充分なほど対極的である。

それを見て、俺は深く詮索するのはやめようと思った。

奏でる旋律在り。それ伶俐な音色。

また奏でる旋律に異種在り。旋律は旋律を産み、旋律消えぬ。

重なる旋律は旋律を相殺、更なる美を造形。人、耽美追求をやめる事無し。

と斉藤が言っていました。

どんなサプライズが用意されていようと驚くことはないと思っていたが、実際辿り着いた場所に、俺は驚愕を覚えられずにはいられなかった。驚きと言うより、懐疑心を覚える。

「どうだ、驚きの余りぐうの音も出ないかつ！」

粗雑に並べられているのは、ギターを始めとする膨大な数の楽器。高級ホテルのエントランスのように磨き掛かった空間に、さまざまな楽器類のみで三叉路^{さんさろ}を造形している。

すこぶる気分を良さそうに鼻を鳴らす斉藤を尻目に、俺は呆然と辺りを見渡した。奇妙な高揚感が身体の内側から込み上げてくるように、不思議と居心地がいい。ノスタルジーを感じる、悪くない雰囲気だ。

「お前の隠れ特技は俺も重々承知している。ハーモニカ、演奏できるんだろ？ いやいや、何も言わなくとも俺は全てを把握済みだよ。推察するにお前は密かにギターに興味を抱いていたよな？ お前は瀬尾と対話している時が、一番楽しそうな表情をしている。正確に言えば、音楽について語り合っているときか。その瞬間の仁井哉の表情^{かお}と言えば、初代ポケモンでストライクが影分身を多用してきた時のウザさに匹敵するほどの物だ」

懐かしい気分、感慨さえも覚える。初めてハーモニカに触れたときのような……

「無視か？ 英語で言うトディスリガード？ ツツコミのない仁井哉なんてポケットがない猫型ロボットと同等の存在だ。そういえば、あの猫型ロボットって友達になりたいアニメキャラランキングトップらしいんだがな、投票した奴らは絶対ポケット目当てだよな？」

しかし、俺はもう音楽とは拘わらないと密かに誓った身だ。高らかに宣言した訳ではないが、誓いを無視すれば未梨に負担を掛けることになる可能性だって否定できない。なにより、そうはいはい自分の意見を棄却してしまったら、俺自身に一番しっぺ返しが来ることになるだろう。

そうだ、最初から答えなど決定付けられている。人生の必定事項

にも既にそう記されているに違いない。

「……そこまで無視を貫き通すのか、まるで俺がイタイ子そのものじゃないか。自分世界に引きこもるのもほどほどにな、って訊いてないか。正直、寂しいです」

「なあ、斉藤」

「何用だ、愚者偏向野郎。観念奔逸状態で軽い躁鬱病にでも陥ってる」

言うとき斉藤はあからさまな渋面をつくる。よく解らない日本語はどうせ悪態を婉曲して言っているだけだろう。

「今日は他にどこか寄る宛てはあるのか？」

「いや、あとは安住の地へと凱旋するだけだ」

「……じゃあ、帰るか」

「ほおー、そうか。なら、龍円寺が来たら帰るとしよう」

いつもと変わらぬ調子で斉藤は唇をほころばせ、律動的な足取りでベンチに向かい、腰を下ろした。

理由も何も追求してこない斉藤は、銀行口座の貯金がひとりでに増えていくように却って気味悪い。

「訊いたって教えてくれないだろ？」

心の内を見透かしてきたように斉藤が口を開いた。

「お前の見識力は大したもんだ。お前の推察通り俺は密かにギターに一抹の興味を抱いていたし、弾いてみたいとも思ってたよ。だが、買うとなれば話は別だ。金がない。ただそれだけの理由だ」

「いんや、違うね」

なぜ、断言できる。

「金が無いという理由は？ 決め手？ に過ぎないはずだ。金が無いのを条件に真の理由を隠蔽しているんだろ？ ってのは俺の推理だから気にせんでいい」

斉藤は唇の端をわずかに持ち上げる下品な笑みを浮かべ、顎を撫でる。

荒唐無稽極まりない推測だが、あいかわらず鋭いところを抉るよ

うに突いてくる奴だ。こっちが必要以上に口を開けば、その分齊藤確信に迫ってくる。

幸い齊藤もこれ以上追求する気はなさそうだ。

それから他愛も話すること半刻。短いローテールをひよこひよこと揺らす、龍円寺さんの帰還である。女性が用を足すのにどれほど時間を要するか俺の知識には含まれてないが、いくらなんでも一時間近くも必要としないのは明白だ。しかし、それを問うのはあまりにも失礼、というより恥ずかしいのが本音です。

「ごつめんねっ。ちよつと迷子になって怪しいお兄さんに連れ去られそうになって、なんとか逃亡してきたものの途中でさらに宇宙人の襲が来てえ、命からがらここまでやってきたんだよん。すまそんっ！」

話の信憑性は非情に疑わしいものだが、龍円寺さんはそれ以上なにも言いそうにない。まあ、本人が無事ならそれでいいでしょう。

駅に戻った俺たちは、JRに乗り込みまた二十駅ほど逆戻ることとなった。肉体的にも精神的にも疲労困憊な俺を余所に、齊藤と龍円寺さんはまだまだエネルギーが有り余っているようで、こしあんとおつぶあんのどちらが美味かというくだらないの一言に尽きる討論を交わし始めたのだ。そのとぼっちはコーラを飲んだらゲップが出るぐらい当たり前のようにこちらへと飛来、電車内ですら安らぎを得ることが出来なかった。

なので、待山駅に到着したときは溜飲りゅういんが下がり、郷愁さえも感じられた。

「仁井哉、お前ここまでどうやって来た？」

「ウォーク」

「バカだろ。お前」

真面目に答えて何故バカ呼ばわりされなきゃならん。

「バスは金が掛かる。タクシーなら尚更だ」

「自転車チャリという学生に必須アイテムがあるじゃあないか」

「……乗れん」

答えた瞬間斉藤の表情は一変。大げさに肩をすくめ、驚愕を顔に刻んでいる。

恥ずかしながらも、俺が自転車に乗れないと言うのは隠しおおせようのない事実。十年前、未梨の漕ぐ自転車の後部座席に座らせてもらったすぐ次の日から、俺は自転車を漕げるよう訓練をしたものだ。拙い運転でふらふらと公道に出た俺は自動車に轢殺されかけ、それ以来自転車に跨ろうとすればトラウマ（鳥肌、蕁麻疹、吐き気頭痛）が発動するようになった。後部座席に座るだけなら問題ないのだが。

俺の心情を知らない斉藤はぼそぼそと龍円寺さんと顔を近づけ討論し始めた。

「高校生にもなって、自転車乗れない子なんて前代未聞ですよ。龍円寺さんはどう思います？」

「ウチは可愛いと思うよん。自転車に乗れない仁井哉さん。なんだから母性本能くすぐられるよん」

会話の子細がこちらまで明晰に届いている。ワザとだろ。

「冗談はさておき、歩きか、ファイトだぞ、仁井哉。残念ながら俺の自転車は後ろに荷台が付属してないんで、ふたり乗りは物理的に不可能だ」

お前になど最初から期待などしていない。

「じゃあさっ、仁井哉さん。ウチの後ろで良かったら家まで乗せてってあげよっかつ？」

予想外な事をさらりと言ったのは盪惑の塊、龍円寺さんである。

「心遣いは嬉しいけど、俺ん家まで結構な距離あるし、大変だろ？ 遠慮しとくよ」

「仁井哉さんこそお心使い無用さっ。ウチの交通手段はバイクなのだよん」

「中型免許持ってるのか？」

斉藤がささやかな疑問を訊く。

「オフコースなのだっ！ ビッグなスクーターでさっそうと仁井哉

さんを家まで送ってあげるよん」

「まあ……そういうことなら、お願いしようか……」

龍円寺さんの提案を受け入れたと同時に、斉藤が「やれやれ」とボヤいた。

斉藤が違法駐輪をしていたのは言うまでもない。斉藤は別れを告げると同時に俺の耳元で「杞憂だと思うが一応龍円寺は警戒しとけ」と気になることを言い残したのだ。龍円寺さんのどこに気を付ければいいのか、できれば注釈付けてほしかった、と今度会うとき言うてやろう。

優雅なバイク旅、とまでは行かなかったが、快適であることには違いない。徒歩で一時間近く掛かる距離を数分で移動することができた。自転車も充分素晴らしい乗り物だとこれまで思っていたが、バイクは別格である。

「ほーほー、ここが仁井哉さんの家かあ。可もなく不可もない、ノーマルスケールな一軒家。だが、それがいいっ！」

龍円寺さんはフルフェイスのヘルメットを頭からすっぽり外すと、天衣無縫な笑顔で我が家の感想を述べた。

「ここが仁井哉さんの家だと言うことは、このバブルに任せた勢いで建てちゃった系のマンションが未梨っちの家なのかいっ？」

「ああ」

龍円寺さんは宵闇を軽くライトアップする荘厳に聳え立つマンションを見上げ惚けている。いつまでも付き合う訳には行かない。

「それじゃあ……俺はそろそろ失礼するよ」

「ばいびーっ！」

近所の方々からクレームが来ないことを祈りつつ、俺は龍円寺さんに別れ告げ、玄関口に手を掛けた――

《自分に嘘をついちゃ、ダメだよ、仁井哉さん。素直が一番！》

途端、脳内に直接響き渡るような？声？が全身を駆けめぐる。

「龍円寺さん？」

「んー？　どうかしたん、仁井哉さん？」

「……いや、なんでもない」

もう一度別れを告げ、俺は我が家へと顧みた。

今のは何だ？　幻聴？　いや、？音？を捉えたのは鼓膜からでは無く、脳だ。耳から伝わった情報というより、直接脳内に電気信号を送られたと言う表現が正しいか？　それとも脳内から直接発生したような……

今の出来事を反芻しつつ、俺は自室のドアを開け――

「やあ、お帰りなさい」

聞き覚えのない男の声に俺はドアノブを握りしめたまま膠着してしまった。自宅という条件下で、まさか自室に見知らぬ男が愛用のマイベツトに腰を下ろしているなど、誰が予想できるだろうか。

「どうも、久しぶりだね。もしかして、僕のこと、忘れちゃったのかな？」

「ああ、忘れてたささ。昨日まではな」

誰かの笑顔を切り取り、そのまま貼り付けたような表情。今から葬式にでも行くような喪服のようなスーツに身を包んだ男は、まぶた瞼にちらつかせる長い前髪を掻き上げた。

「それは光栄な限りだね。キミが僕のことを忘れてたらどうしようかと思ってたところなんだ、フフ……」

「何の用だ」

「まあ、落ち着いてください。僕の隣にでもどうぞ」

「いいから、答えろ。俺に何の用だ」

半分演技半分本気で苛立ちげに俺は訊く。機械めいた笑みのまま

「フフ……」と気味悪い笑いを声を漏らす男は、

「そういえば、まだ僕の自己紹介がまだだったね、仁井哉くん」

俺は警戒心を高めつつ、いつでも逃走できるようにと手筈を整え

る。

「僕の名前は愛沢あいさわ滋しげる。いつも椿と？妹？がお世話を掛けてるでしょう……以後お見知りおきを……フフ……フ」

一年前のあの日、未梨と苛烈な戦闘を繰り広げた張本人がそこにはいた。

4-3 シナファイ（後書き）

戦闘シーン書きたい病。今回の話は文章的には私的に最悪の出来だと思っています。

しかし！次は恐らく最高の出来が完成すると踏んでいます。思っているだけで自信はありません。

一回のBOOKOFFでラフベのみ五千円を使った負け組の私ですが、わずかながら宣言させて頂きます。

岩井恭平ブームは近いうちに来ると私は踏んでいます。すいません、それだけです。脈絡もなんもなくてすみません。

では、終わりまで残り半分ぐらいでしょうが、これからよろしくお願いします。

4-4 狂詩曲

どうも最近、俺は不条理なラビリンスに迷い込んでしまったらしい。

そうでなければ、自室に男が紛れ込んでいるはずがない。ましてや、その男が殺人未遂の前科一犯を所持しており、近隣に住む使用人の？妹？などと名乗りを上げているんだ。性格から容貌に到るまで、何一つ共通点が見当たらない。

愛沢滋。

男はそう名乗った。そして、未梨の使用人である愛沢さんの？兄？。

斉藤がこのことを耳にしたら発狂しそうだと、潜在的に思ってしまったのは余裕が存在するということなのだろうか。

「なんだ、あんた。帰ってきてたんだ。ただいまぐらい言いなさいよねー。不審者かと思っちゃったじゃない」

滋に警戒するあまり、家主の存在を忘れていた。

どこから沸いて出たと言え、恐らく俺が気付かなかっただけで階段を登りという通常ルートで来たと思われるオフクロが、片手に湯気立つティーカップを携えつつ背中を小突いている。

不審者なら目の前にいるんだが。

「扉の前でぼーっとしないでくれる？」

ひかがみにオフクロの容赦を知らない爪先がめり込んだ。尻餅を付く俺を尻目に横切り、そのまま部屋に足を踏み入れ、

「はい、滋さん。コーヒー容れてきたから、どうぞ」

名ばかりの学習机にコーヒーを置くオフクロに、滋はあくまで笑顔のまま謝辞を述べる。オフクロも満更でない笑顔で滋を一瞥すると、自然過ぎる素振りで俺の存在を露骨にスルーし、部屋から出て行った。

声を掛ける隙すら見つからない。前科一犯の不法侵入者を追放す

るどころか、コーヒを差し出すなど言語道断。人が良すぎるにも限度があるぞ。

「勘違いしないで下さいね。僕は堂々と正面玄関から来させて頂きました。ここまで優遇を受けるとは予想外ですけど……いい母親ですな……キミの処遇が羨ましくなるほど……」

俺は尻餅をついたまま、開け放しの扉に鍵を掛ける。

「……で、用件はなんだ」

「キミと話がしたかった。一対一で、誰の阻害も無しに、ね」

その発言を訊いて俺は初めて滋の顔をまじまじと直視した。心の内がまったく読めない微笑、アイドルでもやればコアなファンが多数付きそうだ。服装は見方によれば、リクルートスーツにも見えなくも無いような気もするが、やはり端的な感想を述べさせて貰うと喪服にしか見えない、が、今は滋の容姿など問題視される点ではない。

こっちはつい一年前まで俺を殺すなどと、冗談じゃ済まされない台詞で脅されたんだ。その張本人が俺と話がしたいだと？

やめてくれ。冗談は能力と服装だけに留めて欲しい。

「連絡無しに来たことはお詫びします……だけど、緊急な事態でして……それにキミとってもいい情報になるものを僕は多数所持している……良かったら提供して上げようと思ってね……」

「お前が逆の立場だとして、信用できるか？」

滋は意表を突かれたように目を丸くした。一瞬浮かべた笑みは、苦笑だろうか？ 未梨とは一味違った意味で、無機質な印象を受ける。笑顔以外の表情があるのか疑わしい。

「いいね、仁井哉くん。その質問は実にユニークだよ。そうだね……僕がもし、キミの立場だとしたら……：どうなんだろう……：多分、僕は信用しない。でも、相手は未曾有かつ異彩な存在……：下手な行動、発言は仇になる可能性は極めて高い。そう言った現段階の状況を分析すると、大人しく話を傾ける——他にも選択肢は数個浮かんだけど、これが一番得策だろうね。どうかな？」

わずかに見開かれた糸目が俺を明晰に捉えている。

滋の回答は間違えてない、シャクに触るほど正論だ。それが、気に入らない。

「……いいから、話せ。そしてさっさと帰れ」

皮肉にも滋は笑顔で応対する。淡泊でもなければ邪険をしてくる訳でもない。逆に毒気を抜かれそうだ……が、警戒しすぎて損することはないだろう。

「そうだね……まず、キミは特務処理機関を知っているかい？」

「？能力？の存在が表沙汰にならないように丸め込んでいる能力者たちだけで構成された機関だろ」

「概ね正解。注釈を加えると特務機関のなかにも一般人は多数存在しているよ。もしかしたら、一般人のほうが多いかな？一口、能力者と言ってもピンからキリまでバリエーション豊富だし、僕や椿のような人間を虐げられる能力は稀有けうのほうなんだよ。キミの？音？みたいに日常生活に応用できない能力者が、大半を占めている。使えない能力者を無闇やたらと集結させるより、有能な一般人を雇ったほうが効率がいい。機関はそう判断したんだ」

ああ、そう。

「僕の？能力？を知ってるかい？」

——彼は精神エネルギー変換系。自分の意志である程度まで？液体？操作が可能。

「知らん」

肯定をしないのは単に俺が意固地になっているから。「はい、知っています。あなたの能力はくく」などと、脳内がピンク色に染め上げられている奴らの談笑だ。

滋は学習机に置いてある湯気立つティーカップを手に取り、くると回す。カップ内の液体がうねっているのが確認できる。数秒回した後、結局一口もつけずに俺の眼前のフローリングにティーカップを設置した。

意図が読めん。まさか、飲めというのではあるまいな。

「?能力?は万能じゃない。少なくとも僕のは、ね」

液体のうねりは止むどころか勢いは俄然増し、ティーカップ内に本格的な渦が発生し出した。

赤墨の液体はうねりつつ紐状へと変化し始め、地球の重力に逆らうようにカップから数センチ離れている宙へと螺旋を描きながら浮かび上がり、一ヶ所に集う液体は少しずつ人形を構築していった。

長髪、無機質な表情をした少女。

そのモデルは恐らく一昔前の未梨だろう。全身の色合いが赤墨という除いちやいかん点を除けば、限りなくリアルな未梨だ。髪質から衣類まで精緻に完成している。俺が歩んできた人生観では、種も仕掛けも無しにコーヒーが精緻な人間を構成することは断じて起こりえない現象だ。よって、これは夢である。

と、一年前の俺なら現実逃避を行っていただろう。しかし溜飲が下がるが如く、一年間堆積を続けた鬱積^{うつせき}、およそ7割部分を外科手術により摘出されたように、俺の精神をどこまでも澄み渡っている。不透明な真実が透明になった瞬間。

?能力?は実在する。人間たる以上、知的好奇心というものは付き物、ましてやあのような?能力?を目にして、気にならない生命体が存在するわけがない。断言できるね。なんなら俺の貞操を賭けてもいい。

それはさておき、滋の?能力?は本物と立証された。つまり、俺は未だ嘗て無い窮地に追い立てられている。にも拘わらず、俺の精神状態に変化が見られない。脈拍は上がらい、冷や汗どころか汗一つ出てこない。

第六感が滋の存在を安全と認めているのだろう。謂れとなる根拠もないが、自信だけはある。

「このコーヒーは約百ミリリットルだろうね……さて、問1。果たして、この液体にいくつの水素分子が含まれていると思う?」

一応、現役高校生な訳だが、理系を色々な意味で捨てた俺にその問題に答えられるだけの知識はないに等しい。百ミリリットルのコ

ーヒーに含まれている水素原子の数など、人生を生きる上必要でない知識であることは明白である。海馬組織に留める価値も存在せん。」約、10の18乗。僕的能力は無からの水素原子生成、水素原子操作。僕が今現在行っていることは10の18乗ある水素原子を操作しているんだ」

解らん。天文学的な数字ということは解ったが。

「僕以外の人間が、この概念が理解できる日は来ないだろうね。同じようにキミの？能力？概念を僕が理解できる日は来ない。？能力？概念は能力者本人以外には解らないんだ」

ぴん、と滋が唐突に指を鳴らすと、赤墨の人形は一瞬でただのコーヒーに戻り、ティーカップ内で弾けた。多量の液体がフローリングに飛散したのは、この際目をつむってやろう。

「問2……？能力？を開花させる条件。キミはどう思う？」

アトランダムじゃあないのか、そんなん。

「機関の方々もそう主張する人間で八割方を占めます。彼らにとっては、些末な事なんでしょうね……。？能力？開花が完全無差別なものではありません。なんらかの条件があるはずです……。」

言い切るには、理由があるんだろうな。

「理由ですか……。たとえば、そうだね……。少女Aがいるとしましょう。少女Aは科学的な差し添えが無くても、自力で空に羽ばたける、と考えていました。しかし、少女Aの周りの人間は「できるわけがない」と反駁します。至極当然ですね。僕もそう思いますから。僕にも生まれながらついた先入観があるのでね」

一息つくかのように滋は、コーヒーを一口だけ啜る。あれだけ喋れば喉も渴くだろうからな。

「だけど、結果的に少女Aは大空を羽ばたいた。科学的差し添え無しに、ね」

「？能力？が目覚めたんだろ？」

「その通りです……。では何故、少女Aは？能力？を開花することができたのでしょうか？」

俺は鼻頭に手を添え、考える。

妥協するには十秒として掛からなかったけど。

「少女Aがそう望んだから、結果的に空を羽ばたけた。これしか思いつかん」

「六十点、かな。概ね正解です……フフ……」

滋はさらにもう一口コーヒーを啜り、

「観念の崩壊。すなわち新たな概念の確立、？能力？が開花するときです。少女Aは、偏向した独学理論に1パーセントの疑念を抱かなかったことで、観念という遮蔽壁^{しゃへいへき}を破壊し、少女A独自の概念を生み出した……そこには少女Aにしか理解できない概念がある……おもしろいものです」

一応、俺は能力者だが、そのような奇天烈な頭脳を持ち合わせていないのは自覚しているつもりだ。

「今の話は一例に過ぎないよ……。キミは生まれながら付いた先天性の？能力？だったね……。実は先天性の？能力？は稀有な例でして、僕の？能力？も先天性のものなんだ……。友達になれそうだ」

全力で断るし、話もカシオペア座の方向に逸れている。そもそも何の話をしていたんだっけ？

「余興に過ぎない話ですよ……。キミも紛いなりに能力者として、知る権利があると思ってね……。椿からは、最低限の説明しか受けていないんでしょう？ 良心の気紛れだと思ってくれて構わないよ……」

無性に脱力感が仰がれてきた。知る権利があると思ったという理由一つで遠路遙々俺に会いに来たというのか？ ならば電報一本寄越せばそれで済むことだろうが。直接出向いたのには、少なからず理由があるはずだ。

「そろそろ本題に入って欲しいね」

「……では、仰せの通りに。キミに訊きたいことがあります。包み隠さずに教えて下さい」

プライバシーに拘わってくるものなら、情報の秘匿はするぞ。生

い立ちぐらいなら教えてやらんでもないが。

「キミは昨夜から早朝に掛けて？夢？を見なかったかい？ 明晰夢のように現実感漂う夢を……」

「……見たかもな」

未梨の見方が少し変わった幼なじみに、能力者という肩書きが追加される事件となったあの日。俺の現実認識が360度回転した挙句、さらに10度ぐらい屈折してしまったあの日。夢の中だが、超常現象の塊のような二足歩行の巨大水人形まで表れた。思い出したくもないね。

「決定だね」

「何がだ」

言い終える前に俺の右腕に、ねっとりとした粘着性の強い？何か？が絡み付いてきた。強靱な捕縛力……血流が止まっているかもしれない。反射的に視線を右腕に落とすと、限りなく無色透明な？アメーバ？のようなものが蠢動している。見間違えるはずがない――夢で見た滋の？能力？だ。

「動かないで下さい……被害は最小限に押さえます……」

指先一本ですら動かそうにない。右腕は完全に？アメーバ？に取り込まれたっぽい……未梨の真似で肉ごと引き離す膂力も無ければ、実行力も無い。回復機能は備わってないからな。

泰然としている滋は、ごそごと内ポケットから携帯電話を取り出し、熟練の手付きで操作し出した。俺の為に110をしていないことは確かだ。

「こちら、派遣戦闘委員、ラフソディ《狂詩曲》……目標物を確保……任務完了。ああ、？音？の能力者に怪我はない。フフ……僕を甘くみないでほしいね」

携帯を折りたたまれた途端、金縛りが溶けたように右腕が自由を取り戻した。見れば？アメーバ？状の物体は綺麗さっぱり右腕から剥離し、今では滋の腕に絡み付いている。

任務完了？ なんのことだ。

「僕が秘密裏——と言っても全部の任務が秘密裏だけど。特務機関から一任された任務。それが？これ？の回収」

摘むような形で握られている？それ？を見て、俺は自分の右手に視線を転じた。

あるはずの物が、無い。

「……そんな？指輪？ひとつ盗るのが、任務か？」

人生初の誕生日プレゼント——未梨から授かった？指輪？が滋の手には握られていた。

滋は無機質な笑顔に、不気味さをブレンドさせた禍々しい笑みを浮かべる。

「まったく……椿も僕に面倒な役回りを押し付けてくる……たまにはゆったりとした休暇がほしいよ……そうだね……温泉に浸かりながら……」

「返せ」

「それはできません。？指輪？をキミに返したら僕は任務放棄と見なされ、特務機関からきついお灸を据えられることになるからね……減給はされたくありません。それに……あと一日、？指輪？を嵌めていたなら、キミは確実に死んでいたよ」

バカ言え、俺の思い当たる一番のバカ野郎でもな、もうちょっとマシな言い訳が出来るぞ。それともなんだ、指輪が呪われたアイテムだとか言うのか？

「呪いのアイテムですか……そうだね。これは一種の呪いのアイテムです。一見してなんの変哲の無い？指輪？だろうけど……これは突然変異した能力媒体の一種でね……人間が身に付ければ精神を蝕み続け、その者の末路は運が良くて廃人、普通はこの世とさよなら。現実世界に於ける呪われたアイテムみたいなものさ……」

滋は伸びきった前髪を弄いながら、注釈を加え続ける。

「解っていると思いますが、椿は？指輪？を能力媒体とは気付かず、キミに渡した……と、僕は予測します。あくまで予測ですが、ほぼ間違いないよ。品行方正な椿がキミに危害を加えるとは、到底考え

られないからね」

俺にも考えられない。伊達に十年も付き合っていない。未梨の性格は把握しているつもりだ。時折未梨が凶行に走るのは見てきたが、少なくともそれは、ちょっとだけ人間離れた行動を取るだけで、級友や道行く人々に危害を加えることは一切なかった。昨日だって？笑顔？で？指輪？をプレゼントしてくれたんだ。あれだぞ、未梨の笑顔はな百万ドルの夜景にも勝るぞ。普段からあの笑顔を保ち続けていれば、男女問わず未梨の周囲には雑踏が出来上がるぐらいなものだ。

だけどな、

「結局のところ、それはマジで呪われたアイテムなわけか？」

「そうです」

滋の加工前メラナイトのような瞳には、わずかだが非難の色を帯びている。

「この？指輪？は椿の無意識レベルに近い精神的ストレスによって形成された能力媒体です。トリガーとなったのがキミの存在。凡百の想いが錯綜する不安定な精神状態のなか、捌け口に選ばれたのが？指輪？」

端的な説明を求める。

「ここ一年、椿の精神状態が極めて不安定だったのをキミは知っているかい？」

それは初耳だし、俺の視力に異常が発生してない限り、未梨は普段と誤差1ミクロン範囲の表情変化で日常を過ごしていたはずだ。情緒不安定な様子はなかったぞ。

「椿は機関や？能力？、自分の正体を告白した要因で、キミから忌避されるんじゃないかと、密かに恐れていた……それが一年前からストレスを貯め続け……今に到る訳です。？どういうわけ？だか、椿の精神は今現在、空前絶後、あり得ないほどの落ち着きを見せています。これからは少しは自重して下さいね……」

「荒唐無稽って知ってるか？」

緩慢な動きで肩を竦めた滋は、

「説明、言葉に根拠が無く、実に馬鹿げている。確かそうでしたよね……それがどうかしたかい？」

いい、何でもない。皮肉が通じないほど対応しにくい奴はいない。

「その？指輪？が呪いのアイテムなんて根拠がどこにあるんだ？」

「キミは？夢？を見た……それだけでいい。全てを如実に物語っている」

だから、何を根拠にいつているんだ。夢なんて誰でも見るだろう。

「……フフ、ごもつともな意見ですね。いいでしょう、説明します。まず、昨夜から明朝に掛けて、ここ一帯に強力な？能力？反応が見受けられたらしいです。当初は椿を疑いましたが、違いました。原因はキミの嵌めていた、この？指輪？です」

俺には？能力？反応とやらが観測できることに對して驚きを覚えたい。

「さきほどにも話したように、この？指輪？は能力媒体、一種の呪いのアイテム。能力媒体は精製者の凡百の想いが集束して、出来るものです。キミの見た現実感漂う？夢？は、椿の想いの結晶、いわば過去に起こった現実……。僕も一度ぐらいはタイムトラベル気分を堪能したいものです」

床下で陶器が割れるような甲高い音とオフクロの嬌声が響いた。

何やってるんだか。

滋は鼻で笑い、

「僕がキミから？指輪？を強奪したのも、ちゃんとした謂れがあるんだよ」

ああ、それが一番の疑問だ。まさか見せびらかしじゃあなかなろうな。

「この？指輪？にも潜在意識が宿っている。無いに等しい意志がね。僕が熱弁を振るえば、この？指輪？は賢明に拝聴しているんだよ」

訊けば訊くほど、現実が遠退いていく話だ。驚愕する要素がたんまりしているが、素直に驚けない俺の精神は徐々に普遍から離れ掛

けているのだろう。？指輪？に意志があると訊いて、「ああ、そうなんだ」と納得しかけてしまう。脳内がメルヘンチックになってしまう。

「？指輪？に意志が宿っている、と、強奪はどう結びつくんだ。関係ないんじゃないのか」

「大有りなんだ。僕の任務をこの？指輪？に悟られれば、キミに被害が出ることは明白。自己防衛の為に手段を問わずに？指輪？はキミの指に粘着していた可能性もある。最悪、キミの指を切り落とすぐらいの心構えはしてたんだよ」

物騒だ。遠い昔なら義手やら義足やらに一抹の憧れを抱いていたが、あの頃の俺は小学生特有の病に侵されていただけで、今となつては健康第一的な考えに到達している。何より痛いのはごめんこうむりたい。

「納得はしてもらえたかな？」

得心とまではいかないが、一応把握したつもりだ。？指輪？なら勝手に持って行け。

「では、僕はそろそろ失礼させて貰うよ……解っていると思うけど、椿には件の用件は内密にお願いします……」

ベットから重い腰を上げた滋は、名残惜しげな視線をこちらに浴びせつつ――

「ちよつと待て。お前は全て終わったかも知れんが、俺にはまだ山ほど訊きたいことがある」

「フフ……いいですよ。思えば一方的に僕が語りかけていたようなものでしたね……」

意外にも素直に応じた滋はベットにでも腰を下ろすかと思いきや、部屋唯一の窓辺のポジションを取る。俺に背を向けたままだが、きつとその表情には笑みが浮かべられていることだろう。

「大凡予想できますが……仰せの通りに、どうぞ。僕が答えられる限り、いくらでも情報を提供しましょう……」

「まず、」

俺自身について。

滋は特務機関を裏切ったのではないのか。

夜通し尋問しなければならぬぐらい疑問を貯蓄しているが、最初に訊きたいことは決まっている。

「まず？」

復唱せんでいい。

「お前と愛沢さんの因果関係についてだ」

4―4 狂詩曲（後書き）

近いうち修正するかも。矛盾点がないかとハラハラハラスメントしています。

次話は……あれです。続きません。「5」に入ります。

番外編始めました。織細は「Other Episode」でっ
！

other Episode 00: Gun Slinger (前書き)

主人公は「仁井哉」ではありません。

other Episode 00: Gun Slinger

「……暑い」

そう呟いた少女は見事なまでの物憂げな表情を作り上げ、苛つきを覚えるほどの晴天の空を仰ぎ眺めていた。別に空を見たくて見ている訳じゃない。空以外に目のやり場がないのだ。

「何故、わたしがこのような暑苦しい場所にいるんでしょうか……ああ、神様、わたしの美貌はそこまで罪なのですか……一刻も速くクーラーのガンガン効いた密室空間に閉じこもりたいです……」

ベンチに少女は身を預けている。

少女の滞在している場所は動物園。マスメディアからも注目されている新設の観光名所だった。二足歩行するレッサーパンダを始め、二足歩行するライオンまでもがいるというのだから、それをマスメディアがネタにしないはずがない。ましてや、全国的に夏休みシーズンに突入した日本は、動物目当ての親子やカップルなどで溢れかえっているのは至極当然の光景と言えよう。それは、まあ、いいとする。

少女の前を横切る人々は皆、訝しげな視線で一瞥をしてくる。それが、なによりも気に食わない。

市民の注目を浴びる理由は把握している。己の美貌——ではなく、服装だ。美貌も若干配慮されていると思いたい。

真夏の直射日光を吸収する気なのか、黒よりも黒い漆黒のレザージャケットにレザーパンツ。更に肩胛骨にちらちらと触れる黒髪が少女の異質さを増長させている。傍らに置いてある黒のロングコートは暑さに耐えかねず、即刻脱ぎ捨てたものだ。

このような異質極まりない格好をした年頃の少女が、よもやひとりで動物園のベンチにダウンしているとなれば、嫌でも世間の注目を集めることとなるだろう。

『定期連絡だ、現状を報告しろ。』
《ガンスリンガー拳銃屋》

喧噪とはまた違う、男のテノール声が、少女の鼓膜を振るわせた。「まだターゲットは未確認です。ところで、その《がんすりんがー》って呼び方やめてくれないでしょうか？ 羞恥を通り越して、なんだかイタイです」

しかし少女は驚くことなく応じる。

彼女の耳孔じしこうには超小型通信機を詰めてある。付属品となるマイクロフォンは少女が着衣しているレザーコートに付けてあり、そこから通信を行っている最中だ。予め来ると解っていた少女にとっては、驚く要素など毛頭なかった。

『気を抜くな、《拳銃屋》。必ず園内に？能力者？が潜んでいるはずだ』

「解っております。ところで、この革ジャンですが、もうちょっとなんとかありません？ 勝手に光合成しますし、通気性最悪です。ファッションセンスを疑います。世俗の所見は間違いなく変人でしょう。ああ……煩悶はんもんが煩悶を呼びます……」

『警戒を怠るな。また三十分後、通信を入れる』

テノール声の主は淡々と述べると、一方的に通信を終わらせた。

——相変わらず、冷たいお方です。

さきほど、売店で仕入れてきたスポーツドリンクのペットボトルを手に取り、小さな口内に含めるだけ含める。

中身は、ぬるい。

「ああ……神様……このわたしが何をなさったというのですか？ このままではわたしの夏の長期休暇は霧散してしまいます………はあ……」

独り言も虚しくなり、少女は自嘲の溜め息を体外に吐き出し、空から正面を視線を転じた。同年代、もしくは少し年上ぐらいの男女の中学生グループが動物でも観察するかのようになこちらを見つめている、否、見下ろしていた。

漆黒の瞳が全力で集団を睨み付けると、全員が一斉に視線を少女から反らし、忌避するかのように去っていった。

またもや自嘲の溜め息を吐き出し、少女は緩慢な動きで立ち上がる。

黒いロングコートを片手に、もう片方の手にはペットボトルを握り締め、宛てもなく園内探索を始めた。服装が浮世離れた少女は齡十五歳と思えぬ腰の曲がっており、さらに足取りは夢遊病患者のように蛇行していた。

事の発端は二日前。

特務処理機関——通称、特務機関はひとつの強力な？能力？反応を捉えた。

？能力？とは人間が誰もが備え持っている才能のことである。しかし、自分の才能に気づける者は、八千万分の一と極めて確率は低い才能を自覚し、？能力？を開花させた人間は、人外の力を得ることが出来る。それが《能力者》。

《能力者》の？能力？の種類は大まかに3つに分類分けが可能だ。

肉体強化系。

感覚系。

精神エネルギー変換系。

そして、能力の危険性、応用性、感受性、などを踏まえて、レベル分けをされる。

今回、特務機関が捉えた？能力？反応は第三級指定と認定された。第一級から第十級まで分類分けされるなかで、第五級指定以上の《能力者》は人間を？能力？で虐げることが可能なほど強大な力を備え持っている。第三級指定の《能力者》となれば、建築物ひとつ崩壊させるのも、人を人形のように操るのも、容易いことだろう。

そのようなことが勃発するのを防ぐため、事前に？能力？を秘密裏に処理する必要があった。

能力者を秘密裏に処理する機関——それが特務処理機関である。特務機関の上層部は、第三級指定の？能力？反応が見受けられた

動物園に、第五級指定、精神エネルギー変換系能力者――《拳銃屋

ガンスリンガー

》を派遣したのだ。

一方、派遣された《拳銃屋》の方はやる気の欠片さえ見当たらない。

徘徊開始わずか十分。降り注ぐ直射日光に殺意を覚え、太陽を睨み付けた少女だったが、結果的に目を痛めただけに終わり、自然の恵みに勝てないことを悟ると、今までにない鋭敏な動きで、冷房の効いている屋内へと駆け込んでいった。

今まで屋内に入らなかった理由は、少女なりに任務を追従していた裏付けだったのだが、任務に励んだ時間を換算すればわずか十分であることは、彼女は知らない。

そして彼女は今、なけなしの資金でクレープを購入するか否か葛藤中だ。

「残高、1600円……電車賃が片道1130円でしたから……残り470円……どうしましょう……」

派遣戦闘委員《拳銃屋》と言えど、その全貌は来年高校生となる、十五歳の少女だ。年頃の少女ともなれば、クレープに惹かれるのも無理はない。

「すみません……領収書、ください」

クレープ屋の壮年の男が、一瞬眉をひそめるのが解った。それも前略同様無理はない。たかだか、400円のクレープに領収書を求める変わった少女など、見たことないだろう。

ベテランか年の功か、壮年の男はすぐに営業スマイルを見せ、

「あー、お嬢ちゃんの名前はなんだい？」

「あ、愛沢あいさわ恋です。愛知県の愛に、軽井沢の沢。恋愛の恋、です」

「あいよ……っと、ほら、領収書とクレープ」

男が差し出してきた領収書を無造作にレザーパンツのポケットに突っ込み、たじたとクレープを受け取ると、恋は逃げるようにクレープ屋を後にした。

喧噪だらけの冷房の効いている屋内より、閑散としているが自然の恩恵だらけの屋外へと移動する。静寂を求める今現在の恋は、快適な空間よりも世俗の視線が及ばない空間を選んだのだ。

「ああ！ もう、辱めを受けた気分です！」

恋は眼前にいる猛禽類たちと比較しても、猛禽類らしいと言える立ち振る舞いでクレープをほおぼる。

「だいたい、機関の経理部は無能の集まりです！ 百円単位で領収書を書いて貰う気持ちがおかしい！ ああ……神様——」

『訊こえるか？ 《拳銃屋》
ガンスリンガー』

突然の通信に、手に携えていたクレープが自由落下する。

べちゃりと生々しい響きが、恋の鼓膜を叩いたときにはクレープは惨憺なる姿へと変貌していた。

「至急応答しろ。《拳銃屋》」

「訊こえません。ああ、訊こえませんとも！ わたしはただいま敬虔なクリスチャンとして、冥福をお祈りしているだけなのです！」

『三十三秒前、一瞬だが？ 能力？ 反応が確認できた』

「……それより、クレープが無為な殉職を果たしました。この喪失感は今最大級でしょう。万年赤貧のわたしには再び購入できるほどの、貯蓄はございません」

「座標の確認が終了した。？ 能力？ 反応が見受けられた場所——サファリゾーンだ」

「……最悪です。今日はわたしにとって、厄日やくびなのでしょうね」
恋は心底自分の不運さを呪った。園内で想定できる範囲のなか、もつとも最悪で危険な場所だ。

サファリゾーン——この動物園がマスメディアから注目を集める最大施設だ。敷地面積約百五十万メートルの自然が生い茂る隔離空間に、ありとあらゆる動物が生息している。ライオン、トラ、チー

ター、ゾウ、ワニ、e t c、e t c……。観光経路は動物園直属の観光バスのみだ。

移動途中の電車内で大方パンフレットを目に通した恋は、サファリゾーンの危険性を把握していた。人間相手ならまだしも、野生状態に極めて近い肉食動物を相手にするのは、さすがに骨が折れる。

『至急、サファリゾーンへ向かうんだ、《拳銃屋》』

恋の脳裏に疑問が過ぎる。それもまた最悪な疑問だった。

「バスはないのですか？」

『これは秘密裏に行われている任務だということを忘れるな。もう一度繰り返す。至急サファリゾーンに向かうんだ』

「あ、ありません！ わたしのディクシヨナリーには百獣の王を手な付ける知識など皆無です！」

『大型肉食獣となる獅子は、こちらが刺激を与えなければ人間を襲うことはない。サファリゾーン内のみで発砲許可は下りている』

「そういう問題ではありません！ あのような広大無辺の地に、箸以上に重量のある物を手に取ったことのないか弱き淑女を送り込むという機関の神経が信じられません。愚の骨頂です！」

『一旦通信を切る。詳しい座標はさきほど送信した。一分後には届くだろう』

通信先の男はあくまで冷静に応じる。

恋が次なる愚痴をマイク先の男にぶつけたときには、すでに通信は遮断されていた。

——今頃あのお方は涼しげな空間でくつろいでいるに相違ありません！

心の内で憤怒しつつも、恋はサファリゾーンへと小走りで向かっていた。

嫌々な任務であるには変わりないが、奏功させなければならぬことを彼女も重々理解している。任務を放棄、もしくは失敗のような形で終止符を打てば、ただではすまない。機関からひんしゅく輦はんらん轡しよくを買うだけならまだしも、一般人に？能力？についての情報が氾濫すれば、

混乱を招くことは目に見えている。その禍根が恋自信となれば、彼女の居場所、いや、存在は消されることとなるだろう。

サファリゾーン入口は雑踏そのものだった。通常営業ならば、この時間帯は丁度バスが発進しているはずなのだが、どういう訳か全てのバスは駐車場に停滞している。

硬く閉ざされた巨大鉄扉の周囲には人盛りが完成しており、その隙間から「本日サファリゾーン臨時休業」と、いかにも即興で作られた看板が垣間見れた。稼ぎ時だというのにサファリゾーンを一時閉鎖した理由、

特務機関の圧力が掛かっていることは、一目瞭然だった。一般人を巻き添えにしないよう、配慮したのだろう。ここまで政治的に介入できる圧力があるのならば、幾許もない予算面を方を増強して貰いたい。

そんな悠長なことを考えつつ、恋は雑踏を忌避するため、入口を後にした。

サファリゾーンにある侵入経路はふたつ。入口と出口だ。

しかし、入口が閉鎖されている状況で出口が開いている可能性は、恐らくゼロだろう。そうなってくると、侵入は困難だ。

サファリゾーン一帯を囲む鉄索に到っては、恋の5〜6倍の全長で屹立している。

派遣戦闘委員として鍛え上げられた恋の身体能力を持っていれば、鉄索を登り超えるぐらいは差し支えはない、が、それは鉄索の上部に張り巡らされている有刺鉄線が無ければの話だ。もし有刺鉄線が無く、よじ登るにしろ、鉄索の高さと恋の身体能力を照会すると十数秒の時間を要する。その間、第三者に目撃される確率は極めて高い。特務機関の任務は、あくまで秘密裏に、だ。

人気のない鉄柵の前で立ち往生している恋。数秒の逡巡後、胸ポケットに常備してあるスイッチを一押しした。

「侵入経路がございません。どうしたら、よろしいでしょうか？」

『無駄な通信を厳禁だ。《拳銃屋》』

「そうは言いましても、サファリゾーンに入る手立てがございせん。機関お得意の圧力で正門を開放させてもらわないでしようか？」
『？能力？行使の許可は出ている。卿の？能力？ならば侵入、任務ともに支障はないはずだ』

愛想の欠片もない指摘に、恋はあからさまに慚然とする。

「……わたし、？あれ？をしますと尋常ではない飢餓感きがかんに襲われるのです。？能力？の酷使は極力避けていこうと、密かに誓いを立て

——」

『卿の凱旋がいせんを祈る』

無音だが、通信が遮断される瞬間を自覚できた。

恋は360度全ての範囲に人影がないことを確認すると、再び鉄柵へと顧みた。その表情は不承不承というところだろう。片手に携えていた黒のロングコートに腕を通し、再び嘆息を吐き出す。

「しょうがないです……」

小さく肩を落とした恋は、意識を鉄柵の向こう——サファリゾーン内へと集中させる。

能力——発動。

次の瞬間、恋は鉄柵の内側にいた。高速移動ではない。今の一瞬、恋は地球上から存在を消し、鉄柵の向こう側に忽然と表れたのだ。その間に起こったタイムラグはない。

物体転移能力。

それが、第五級指定、精神エネルギー変換系と認定された恋の？能力？である。彼女は産まれながらにして？能力？を身に付けていた先天性であり、その所為で物心付いたときから、特務機関という普遍から懸け離れた世界に住み着くこととなった理由でもある。

恋は自分の？能力？を酷く嫌っている。機関から言わせれば、希少で価値観の高い？能力？なのだろうが、少なくとも恋はそう思っていないかった。物体転移能力と大仰な名称だが、簡単に言ってしまうえば応用性の悪いテレポーションだ。物体を転移できると言っても、物体の質量によって転移範囲は極端に変化する。自分自身を転

移させるとなると、エネルギーを半端なく浪費するうえ、転移範囲はせいぜい半径5メートルぐらいが限界だ。加えて、自分以外の物体を転移させるには、ある条件を満たさなければならぬ。

今回のターゲットは第三級指定と認定されている。この場合、第三級以上の戦闘委員を派遣するのが定石と言えよう。しかし、機関は第五級指定の恋を派遣委員として送り込んだ。これには少なからず理由があった。

恋は？能力？を差し引いて、有り余る高い身体能力を備え持っている。自称、天賦の才と恋は周囲に語るが、あながち間違っていない。唯一の欠点となる腕力不足も銃が補ってくれる。？能力？抜きでの戦闘レベルでは、恋は群を抜いていた。そういった彼女の身体能力と？能力？を持つてすれば、第三級指定、ましてや訓練経験無しの素人能力者に負けるはずないと見なされていた。

それでも、やはり第二級指定以上となれば話は別となりますけど……。

東南アジア辺りの密林を縮小化したように生い茂る木々を拙い動作で切り開いていき、恋は熱帯雨林さながらの湿った空気漂う道無き道を進んでいる。サファリゾーン内で生身の人間が出歩くのはあらゆる要素の危険がまわりつく。餓えに耐え凌いでいる獣たちと出会えば、人間とは比べ物にならない驚異の身体能力を備え持つ獣相手に逃走は不可能だろう。極力エンカウントはしないでいたい。

そう考えた結果、恋は比較的安全な密林を通じて目的地に向かう、安全策を選択した。

——無為な戦闘はしたくありません。

レーザージャケットの裾を捲り上げ、あらわになった白魚の腕には腕時計が装着されている。しかし、今の時計は時間は表記しておらず、替わりにサファリゾーンの簡易地図がデジタル表記で映し出されていた。地図上には赤い点と青い点が浮かび上がっている。青い点は恋が今現在滞在している場所、赤い点は数分前に？能力？反応が見受けられた座標だ。

能力者がすでに現場から姿を消している可能性も否定できない。
同時にまだ居座っている可能性もゼロではない。

「……あれ？」

地図を眺めていた恋の表情が突然強張る。

恋は目の錯覚、あるいは疲労による脳内錯乱だと思うと、瞼を擦り、頭を左右に激しくシェイクした。再び腕時計に目を落とすが、結果は変わらない。

赤い点、すなわち？能力？反応が見受けられた場所、

百獣の王、ライオンエリアの中心部分だった。一匹や二匹ならともかく、群れをひとりで相手にするには、いくら派遣戦闘委員である恋と言えど、無傷では済まない。骨折、裂傷などの負傷ならまだ救いようがあるが、

食べられてしまったら？

「……任務前に遺言状を書き留めて置くべきでした」

小枝を踏み潰すたび鳴り響く音に、恋は一喜一憂しながらも、已然とやや重くなった足取りでライオンエリアへと歩を進める。

——もしかしたら、『能力者』はすでに百獣の王の胃袋に収まっているのではないのでしょうか？ そもそも、何故サファリゾーンなどの危険地帯に身を潜めているのでしょうか？ ？能力？によほどの自信が無ければできない芸当です。それとも……。

「……やってしまいました」

思案する余り、警戒が厳かになっていた。まだ森の中ということには変わらないだろうが、恋が居る場所は一種のオアシスのような広い空間だった。

翡翠色の双眸がこちらを睥睨している。とてもじゃないが、わたしには真似できそうにない力強い眼光です。

威風堂々とした肢体、威嚇のつもりなのかダンデライオンが剥き出しに唸っている。今にも飛翔しそうな鋭い剣幕。タテガミがあるということとは雄なのだろう。

最強動物として名の高い、百獣の王。獅子^{ライオン}だ。

「確かに、わたしは端麗なる美德を兼ね備えた絶対的美女ですが、性的意味以外に咀嚼しても別段おいしくありません。無駄な贅肉は全て削り取ってしまったので、味の方は保障しかねます。それに、わたしはあなた方に危害を加えるつもりなど毛頭ありませんので、ここは――」

前方から突進してくる獅子に、恋は驚愕を覚えた。すぐさま身を投げ出していなければ、胴体を噛み千切られてたに違いない。それを証明するように、さきほどまで恋の背後に控えていた大木の幹が半分近く取り除かれている。

受け身と同時に身体を起き上がらせ、恋は威風堂々たる体軀を睥睨した。

風格漂わせる獅子も恋の剣幕にただならぬ気配を掠め取ったのか、あきらかな臨戦態勢を取る。

「……逃走不可能と判断します」

恋は白魚のような右手を澄み渡る空に翳すと、一丁の回転式拳銃シングルアクションが音もなく表れた。まるで最初からそこに存在していたかのように。

「派遣戦闘委員、ガンスリンガー《拳銃屋》。行きます」

other Episode 00: Gun Slinger (後書き)

この物語は「愛沢恋」が主人公です。本編の「愛沢さん」と同一人物。本編と平行？しながらちよつとづつ更新する計画であり、恐らく5〜7話で終わると思います。今回は動物園編の任務、これは愛沢さん自信の自己紹介みたいなものです。時空系列的に本編では幼稚園生の仁井哉が葉月といちゃいちゃしている辺りです。

私のチャレンジスピリッツにより、初めて書いた三人称という形式ですが、文法的にどうでしょうか？

戦闘シーン書きたい病です。

ちよつと余談です。

フィギュアスケートが盛り上がっていた数日前、私はちょうどフィギュアスケートを題材にしたイラストレーター神レベルのラノベを読んでいました。久しぶりにアタリを引いたラノベでした。あとがきに愚痴を零したという伝説の作者です。是非お勧めします（笑）

では、これからもよろしくおねがいします。

other Episode 01::Gun Slinger 2 (前書き)

R e n A i s a w a (♀)

C o d e n a m e :: G u n S l i n g e r

F i r s t p e r s o n :: わたし

A g e :: 15

H e i g h t :: 155 c m

A b i l i t y :: 第五級指定、物体転移

other Episode 01: Gun Slinger 2

撃鉄ハンマーを起こしたのが、戦闘の合図だったのだろう。

獰猛な牙を剥き出しに雄叫びを挙げた獅子は、恋に突進を仕掛けた。一步踏み出す度地響きを響かせ、多少の障害物など物ともしていない。人間を襲わぬ獅子が何故こうも突撃してくるのだろうか……極度の興奮、あるいは混乱状態おちいに陥っているのか、しかし恋にそれを思案する時間的猶予が取り残されていなければ、もとより思案する気もさらさら無かった。

恋は大地を踏み付け、宙を舞った。そのまま大木の枝を片手で掴むと腹筋の力で上体を回転させ、更に空高く舞い上がる。標的を見失い呆然と佇む獅子に回転式拳銃をロックオン。

こちらを覗く翡翠色の双眸そうぼうに宿る感情は驚愕きょうがく、激昂げつごう、歓迎されていないことは明白だろう。

「お許しを、ライオンさま」

言い終えると同時に撃鉄が撃ち降ろされ、45口径の凶弾が吐き出された。意志を持たない銃弾は目標物に向かい一直線に飛翔する。一瞬、獅子は己の身に起こった変化に気付かなかっただろう。

威風堂々たる肢体はゆっくり右側に傾倒し、獅子は万雷ばんらいたる雄叫びを挙げた。

恋は腰に巻いてあるホルスターに回転式拳銃を収めると、獅子を一瞥いちべつし、

「安心して下さい。あなたさまなら一時間も経てば、移動に差し支えがないほどには回復しますと思います。全て素人考えですけど」獅子の左前肢には挟れるような形で大きく穿うがたれてあった。それが動けない原因となっているのだろう。

ラバーバレット。

恋の扱う銃器の弾薬は護謄弾ラバーバレットが基本装備となっており、殺傷能力、有効射程距離水準を故意的に極めて低くしてある。貫通能力に至っ

ては皆無と言っていていいだろう。

しかし恋はそれで良かった。人を傷つけることを必要以上に忌み嫌う恋にとって、ラバーバレットほど適材な弾薬はない。万が一の状況に陥らない限りは、？能力？行使と被覆鋼弾フルメタルジャケットの装填は厳禁と、心の内で誓いを立てていた。

「それでは、お大事にです」

唸り挙げ続ける獅子を尻目しりめに、恋は踵かかを返し森林へと足を踏み入れた。

獅子の目が届かない場所まで進むと足を止め、周囲に人気がないことを確認する。そして唐突に胸元へと手を忍び込ませ、ペンダントのようなアクセサリを取り出した。

それは燦然と輝く銀色円形のペンダント。

恋は大仰なほど緩慢かつ慎重な動作でゆっくりとペンダントの外蓋を開放させた。

一枚の写真。

お世辞にも鮮明とは言えない写真がペンダント内部に内蔵されていた。

それにはふたりの男女がセピア色に活写されており、ひとりはずうまでもなく恋だ。嫌そうな表情を故意的に作り上げているつもりなのだろうが、心なしか笑っているのは押さえきれぬ感情が溢れ出してしまった証拠だろう。その恋と手を繋いでいる長身の男性は、恍惚とした柔和な顔立ちをしている。喪服じみたスーツは彼のトレードマークでもあるらしい。

恋の知りうる人間の中では、もっとも人間性の読めない男でもあり、同時に尊敬している男でもある。加えて、派遣戦闘委員最強と謳われる能力者——コードネーム、《狂詩曲ラフンディ》。

この世で恋が同じ血を共存する唯一無二の存在。

「兄さま……わたしをお守り下さい」

恋は自然の遮蔽物しやへいぶつを避けるように闊歩かつぽしながら、淡々と目的地へ向かう。進むも進むも、カメラに納めて照会しなければ解りそうにない似たような景色がひたすら続いている。森林内と言うことで日光こそは降り注いでこないが、蒸し蒸しとした暑さは恋の体力を着実に蝕んでいく。獅子と鉢合はちあわ せになってしまった時間を差し引いても、なんだかんだで三十分近くは足を動かしている。そろそろ目的地に到着しても疑わしくない頃合いだ。

恋は腕時計もとい簡易デジタル地図に視線を落とした。地図に表記ミスが無ければ、目的地となる百獣の王エリアも相当近い位置にあるはずなのだが――

「やっつとです……」

木々の隙間から漏れだしている陽光。じめじめとしている蒸し暑さに恋の低い臨界点など、とうに突破していた。遮蔽物を蹴散らしながら小走りで恋だったが、ふとその歩みは制止する。

見渡す限りのグラスランド。茫洋と広がる草原には獅子の姿もちろほらと窺えた。

「1、2、3……………8頭、です」

恋は大木に身を隠しながら、獅子の頭数をカウント、計8頭。目を極限に細めて数えて直してみるが「8」と言う絶望的数字には変わりない。数刻前の戦闘は一頭のみだったので事を円滑に運べたのだが、8頭となれば話は別だ。

恋の扱う回転式拳銃は基本性能は、元あったシングルアクションアーミーに自ら手を加えた45口径、最大弾数6発。ちなみに手を加えた部分はほぼデザイン部分だけであって性能に大した変化はない。

単純計算、一発で一頭倒す計算でも2頭残ることになるのは勉強に疎うとい彼女でも暗算はかろうじてで可能であった。物陰ひとつ見当たらない地帯で装填リロードが可能かどうかとも危惧きぐするところだ。それに8頭全くと応戦しつつ、前提となる一発で一頭を仕留める超絶技巧など、《拳銃屋》の称号を持つ恋にさえもともと持ち合わせていない。

ムリです。不可能です。ジ・エンドです。

思いつくだけの否定後を脳内に反芻しつつも、恋は状況の確認は怠らない。

寝ている獅子も居れば、宛てもなさそうに彷徨く獅子もいる。果然と虚空を見つめている獅子もいれば――

倒れている男もいる。

恋はレザージャケットに付属している通信器を一押しした。

「能力者と見られる男性を確認しました……寝ています。私的意見を述べさせて貰えば、青空に誘われた感じではなさそうです。気絶している線が濃厚のうこうだと思えます。どうしたらよろしいです？」

『早急に能力者と接触を図れ、《拳銃屋》』

「ムリです」

計ったようなタイミングで恋は口を挟み、苦情に近い抗議を訴え始めた。

「男性の周囲には、確認できるだけで8頭の獅子が徘徊はいかいしています。わたしが身を晒せば飛んで火に入る夏の虫でしょう。だいたいですね、何故わたしのような第五級指定能力者が二階級も違う第三級指定を連行しなければならないのです。わたしの記憶に障害がなければ前回のターゲットは第四級指定でした。前々回の任務も第四級指定でした。てゆうより、最近？能力？に目覚める人が多すぎませんか？ わたしに回ってくる分のみで、一ヶ月に2件はあります。はっ、まさか、全ての能力者の処理をわたしに負担させるのが機関の魂胆こんたんなのでしょうか？ ああ！ 最悪です！ もう少し無垢なる乙女を労るお心使いは機関にはないのですか！」

『考慮しよう』

通信を切られる覚悟をしていたが、その予想は裏切られた。まさか、頭でっかちのあのお方が……

『狙撃銃の使用を許可する。さすれば問題はないはずだ』
スナイパーライフル

「少しでもあなたさまに期待したわたしが愚かだったです。それと、狙撃銃の方は必要ありません。あれはゴム弾でも威力を殺しきれま

せんから、お好きになれません」

『卿の好きにすればいい。私の任務は《拳銃屋》のサポートだ。最終的な判断は現場に一任してある』

「言われなくとも好きにさせて貰うつもりです」

『卿の凱旋を祈る』

通信が終了したところで、恋は肩を大仰に落とした。

大見栄を張ってしまいました。どうしよう？

狙撃銃を必要ないと嘯いたものの、恋は獅子を対処するに到ってこれといった得策があったわけでもなかった。それに他にも気になる要点がいくつもある。

——何より男性は半裸な理由が不明です。下着一枚で出歩くことが趣味とする性癖の持ち主でない以上、あのようなふしだらな格好はしていないでしょう。

「あー！ もう！ なるようになれです！」

頭脳労働を得意としない恋が奇抜な作戦を思いつく可能性は低い——なら、正面突破という選択を敢行しようではありませんか！

恋は木陰から身を投げ出すように飛び出した。

刹那——

「あああああああああああ！」

嬌声とは懸け離れた裂帛のような女性の咆哮が、恋の鼓膜を破る勢いで鳴り響いた。その咆哮は獅子たちにも多大な影響を与えたらしく、一目散に8頭が8頭全て、東奔西走、とゆうより恋に向かい猪突猛進。

「な、なんです！」

身構えた恋など、獅子にとってはアウトオブ眼中、地響きを挙げながらそのまま横切り、森の深層へと姿を消していった。

そして訪れたのは静寂。

咆哮はかなり近くから訊こえた。にも拘わらず、声の発信源とな

る物体は何一つ見当たらない。身を隠す物体がない草原で、それは至難の業と言うより不可能と断言しておくべきだろう。

「お前か……！ 我の身を弄ぶ愚者か！」

突如、恋の眼前に芝生を巻き上げるつむじ風が発生し、次の瞬間には眼前に長身の女性が毅然と佇んでいた。

先端恐怖症の人物が眼を合わせたらたちまち戦慄を起こしてしまいそうな鋭い翡翠色の瞳、背中まで伸びているブロンドヘアは人工では作り出せない色合いと艶が出ている。日本人ではないことは確かだ。そして……

十中八九、《能力者》です。

「答えろ！」

官能的な曲線を描くプロポーションだが、その身に纏っている衣類は上下とも仄暗い作業服。恋が即刻湧き出たイメージはガソリンスタンドの店員であった。

「ま、待って下さい！」

恋は両手を挙げて、女性に制止を促す。

「とりあえず、落ち着きま——」

「答えろと言っておるだろうが！」

褐色めいた右手が恋の頸動脈を疾風迅雷の如く押さえ込むと、人間離れした膂力で矮小な身体を軽々と持ち上げた。その時、恋が淑女ならざる下品な鳴咽を零してしまったのは不可抗力である。

そんな危機的な状況でも、恋の頭脳が支障なく稼働し続けるのは十年近く機関に所属してきた経験の賜物だろう。外人女性の前後不覚な発言、？能力？の目覚めに思考が追いついてないのでしょいか？ いや、今はそのような些末な問題は無視しましょう。まず、女性の抑圧を最優先とすべき順序です。

能力——発動。

「動かないで下さい。動いたら……撃ちます」

女性の背後へと空間転移を果たした恋はさっそうと回転式拳銃を引き抜き、ブロンドヘアが軽やかに靡く後頭部へ突きつけた。

「ゆっくり、こちらに振り返って下さい」

振り返った女性の表情を改めて目にし、同性たる恋でも思わず見とれてしまった。憤怒と狼狽が錯綜した仏頂面を除けば、深窓令嬢の留学生のようなグローバルな美貌を備えている。仄暗い作業服を着衣しているが、サイズ的にはどうやら一回りほど小さいらしい。七分丈のような灰色ズボン、おまけに綺麗なへそまで露出しているサービスショットだ。その風貌は二十歳前後といったところであらう。

「それを我に向けるな！」

女性は額に突きつけられた銃口を躊躇無く握りしめる。暴発する恐れがあるにも拘わらず毅然とした振る舞いで回転式拳銃をふんだくると、嫌悪感を露わに鉄の塊を背後へと投げ捨てた。

予想外だらけの一連の動作に恋は抵抗する暇もなく、ある種の感嘆さえ覚えていた。

女性は一呼吸置くと、威厳に満ちた動作でその場に座り込んだ。あぐらをかくにしろ、髪を掻き上げる仕草にしろ、外人女性の取る全ての行動は無駄な威厳が溢れ、一枚の絵になっている。

「まず、先程の無礼は詫びる。悪かった」

「……………はい？」

前フリもなく強襲してきたかと思えば、今度は武装解除させられたうえに謝辞を送ってくるとは誰が予想できただろうか。脈絡のない女性の振る舞いに恋はただただ呆然と突っ立っているだけで、漆黒の瞳を丸くした。

「我も突然の出来事で少々頭に血が上っていた。そうだな……八つ当たりと思ってくれて構わない。しかし、責任の全てが我にあるわけではない。責任転嫁をするつもりではないが、お前にも責任はあると我は思うぞ」

「あのですね……」

「心の内を露呈すれば、我はお前たちが嫌いだ」

「だからですね……」

「それはそうと、お前、私の腕からどのように抜け出したのだ？
いくら疾かろうと我に悟られず背後に回り込むなど、不可能な芸当だ」

語る女性からは数秒前の殺気は消失し、殺伐とした態度に変貌している。すっかり毒気を抜かれた恋も嘆息をつき、その場に座り込んだ。

「まず、わたしのお話を傾聴してもらいたいです。よろしいでしょうか？」

「構わぬが、私の疑問にも答えて貰うぞ」

威厳すらも感じさせる毅然とした態度に、恋の調子も狂いっぱなしである。

「……解る範囲であればいくらでもお教えしましょう」

女性は胸元まで伸びている透き通ったブロンドヘアを指先で捻りつつ、首を縦に大きく上下させ肯定した。

まず、何を話すべきでしょうか？ 能力？、特務機関……？

それよりも個人的にこのお方が置かれている立場を把握したほうがよろしいかも知れません。

「お名前を訊かせて貰えますか？」

「私の名か？」

「そうです」

「我には名という概念がない。お前の好きなように呼べば良い」

怪訝そうに秀眉を寄せる恋。

？能力？に目覚めた大抵の能力者は浮世離れしている超然とした変人が大半を占めているのは恋も重々把握していた。実際に今まで恋が会って来た能力者たちの9割方が、脳内にステロイドホルモン大量投与しなければ思い付かないような実にユニークな思考を持ち合わせている面々。そして残った一割が世間的に「普通」と呼ばれてもいい人種たちだ。

今回のターゲットはもちろんのこと前者である。しかもその強者だらけの中で、三指には入る屈指の唐変木だ。

「そうなりますと、何とお呼びすればよろしいですか？」

「さっきも言ったはずだ。好きなように呼べ。我は気に止めん」

「では、気にしません」

恋ははつきりと言い切る。風変わりな女性には変わりないが、今までの任務で接してきた能力者と比較すれば、戦闘にならないだけマシと言える。？能力？に目覚めたばかりである新米能力者の大部分は、自分の置かれた立場を理解できず、無自覚のまま自己暗示を掛け、発狂するケースが極めて多い。派遣委員が現地に到着した頃には、立派な「変人」がデキ上がっており、有無を言わずに襲いかかってくるワンパターンで統一されていた。

この女性も色んな意味で出来上がっているが、正気はまだ保たれているようだ。

「まず、二日前ほどから、何か身体に異変が生じませんでしたか？」話を切り出し始めると、突如女性の表情が豹変した。尋常ではない殺気を放ちつつ、恋の胸ぐらを掴んだ。

「我の身体に何が起こっているのか、お前は知っているのか!？」

「詳しくは知りません。ただ？能力？に目覚めたのでしょうか。それがどのような人体影響を与えたのか、わたしには知りようがありません」

女性の激昂にも動揺することなく応じているように見えるが、内心ではハラハラ状態が胸ぐらを掴まれた辺りから続いている。

「我は元には戻れないのか？」

「？能力？喪失は前例がありません。一度目覚めさせた物を再び眠らすのは、今のところは不可能とされています」

「不可能……だと……?」

ふっと、恋の胸ぐらを掴んでいた白晢の指先が萎びた花卉のように落下する。外人女性の端麗なる美貌には絶望が刻み込まれていた。拳げ句果てに、翡翠色の瞳には一筋の涙。それをきっかえに女性は

か細い嗚咽を吐き出しながら、慟哭し出した。

恋は理解に苦しんだ。？能力？は確かに常識という枠から飛び出した超常現象で一般人の方が忌避するのは解りますが、何もそこまで精神的ショックを受ける物ではありません。嫌なら？能力？を行使しなければいいことです。

泣き叫ぶ女性、目のやり場に困った恋は視線を彷徨わせた。結果、
「……男性の存在を忘れていました」

下着一枚で仰臥している男性が目飛び込んだ。

恋は慟哭する女性をひとまず放逐して、半裸男性の元へと小走りで駆け寄った。ついでに回転式拳銃も拾い、腰に巻き付くホルスタ―に収める。

「脈はあり、外傷なし、呼吸あり」

男性の安否を確認すると、見るに絶えない裸体にロングコートを被せた。風貌は三十代前半、無精髭を伸ばしている。髪には無頓着なのか恋よりも長く伸ばしており、ノミが沸いてそうなほど汚い。

エセお嬢様と同僚から非難される恋とはいえ、半裸の男性をコート一枚被せ放逐し、そのまま能力者を連行するほど精神は歪んでいない。それに、今回の？能力？騒動に男性が巻き込まれている可能性大。口止めとして機関に連行するのが定石だろう。

恋のショートとミディアムの間中に値する黒髪が一陣のつむじ風により、ふわふわと巻き上げた。

「その登場の仕方は控えて貰えると、個人的にはとても喜ばしいことです」

つむじ風と共に現れたのは、能力者の外人女性。泣き出してから一分も経たないうちに理性を取り戻すとはなかなかの神経の持ち主だ。もしかすると人員不足な機関の一員としても一活躍できるかもしれない。

それでも心なしか、翡翠色の瞳が充血しているのは、痩せ我慢に近い物だろう。

「この男性は、あなたさまの仕業ですか？」

「そうだ。我が剥^はいだ」

一拍置き、

「……………ずいぶん積極的なことです」

ぼそぼそと感想を述べる恋の表情は軽く湯気だった。痴漢に遭っちゃった、と嬉しそうに語る級友を見るようなねっとりした軽蔑の眼差しが外人女性に降り注ぐ。

「む、しょうがないであろう」

潤んだ翡翠色の瞳がつり上がる。

「我も生物上は雌だ。裸体で出歩く訳にもいくまい。丁度そやつが通りかかった。だから剥いだ」

「意味が解りません。自分の衣類はどうなされたのです？」

「我がそのような物を持っているように見えるか？」

「見えます」

恋が女性を見目に段々と変化が生じ始めた。最初は危険人物、唐変木、情緒不安定、そして今は天然の露出癖を持つ美人女性。いかかわしいステイタスの持ち主です。

「……………男性に尋問したほうが良さそうです……………」

恋はしゃがみ込み、目をつむる男性の両頬を容赦なく平手打ちをした。

小気味よい音と共に男性が飛ぶような勢いで起き上がる。

「おはようございます」

本性を笑顔で包み隠し、見る物を惑わすような笑みを男性に向かい振りまくった。声も本来より周波率を十パーセント上げている。

男性は自分の頬を抑えながら、焦点のズレた目をゆっくりと恋に移動させる。

「……………ああ、どうも」

目元に大きな隈が出来上がっている男性は万年微熱でうなされていそうな不健康そのものを象徴する顔立ちで鷹揚に口を開いた。

「キミは……………誰だ？」

「通りすがりの美少女Aで結構です。それよりお聴きしたいのです

が、あなたさまはこの女性をご存じでしょうか？」

恋は背後に毅然と佇む女性に向けて指で促す。

「さっきまで裸だった女性だ………って！ 何で俺の作業着をそいつが着ているんだ!？」

「我が剥いだからな。許せ、人間。私の裸体を網膜に焼き付けることができたのであるから、充分であろう。普通なら万死に値する行いだ」

何かを思い出したように男性の顔は、青ざめた表情とは懸け離れた頬を紅潮し出した。

「思い出すのは後にして下さい」

男性のあからさまな態度に恋は猫を被るのを辞め、声も本来の物より周波率を五パーセントを下げたように低くした。それでも顔は笑っている……兄の遺伝子が組み込まれているだけある。

あからさまな変化に男性はビクッと身体で反応をしめした。

「今からわたしが質問なさることに、あなたさまは忌憚も嘘も偽り無く正直にお話下さい」

笑顔に圧力を感じたのか、男性は黙って大きく首肯する。

「まず、質問1です。あなたさまは何者ですか？」

「お、俺はこの従業員だ。……そろそろライオンのメシ時間だから、エサを持ってきたんだよ」

「そのような物は見当たりませんが、どこにあるのです？」

周囲を見渡すが、エサも無ければ車やバスも滞留していない。

「お、おかしいな。そこに車を留めて置いたんだけど……」

狼狽える男性は顔つきからして怪しい。

こういう病弱キャラは実は敵と相場が決まっているのです。と、根拠のない考えを張り巡らしていた恋であったが、背後から響いた高音アルト声が現実を引き戻される。

「エサなら我がありがたく頂戴した。ついでにそやつが乗車している車という物はどうやら我が破壊してしまったらしい」

「……何をいつているのです？」

しばらく油を差さなかった機械のような無駄にカクカクした動きで立ち上がり、外人女性を四角い視線で睨め付けた。

「……破壊してしまった「らしい」とは随分他人事のような比喻です
ね」

「それはだな――」

甲高い風切り音が鳴り響いた、と恋が認識したときには理想的な曲線を描いている頬に一筋の線が刻み込まれていた。

「なんのおつもりです？」

外人女性の褐色じみた右腕が白皙の頬を掠め取り、こめかみの真横を通過していた。恋が泰然と睥睨する先には、奇襲を仕掛けた張本人が目を見開き驚きをあらわにしていた。

本当に奇襲なのだろうか？ 恋は考える。今の攻撃は完璧に意表を突かれましたけれど、顔を目前にして不自然な動きで軌道が逸れたような気がします。

「……逃げた方がいい」

「どういことですか？」

「言葉通りの意味だ」

「それがわたしには理解できません」

「我の――」

右拳が顔面に襲いかかってきたが、恋は音速に近い動きでホルスターから引き抜いた銃身で受け止めた。女性の拳はハンマー並の硬質があるのか、受け止めたにも拘わらず腕に来る負担が相当な物だ。

「理性が――」

間髪入れる暇なく、入れ替わりで左拳が繰り出された。

轟音。

顔面に触れる間一髪のところ、コッキングとショットを同時に済まされた回転式拳銃からゴム弾が吐き出され、女性の左肩を穿った。拳の制止には成功したが、女性へのダメージは後方へと一歩二歩ふらつたのみだ。威力を殺してあるゴム弾とはいえど、これだけの近距離ならば脱臼ぐらいは確実に起こる。ふらつく程度のダメ

―ジで収まるはずがない。

恋はひとり確信をした。

肉体強化系能力。

何事もないように屹立する女性は俯かせた顔を持ち上げた。

翡翠色だった瞳が、紅く染まっている。

「私の理性が無くなるということだ。愚か者め、さっさと逃げれば良い物を。もう我は身体の自由をほとんど奪われている。自我も近いうち無くなるだろう」

叫びになり損ねたような吐息が断続的に聴こえる。恋は音の聴こえる方向へ器用にも目だけを移動させると、そこには血の気が失せ、瞠目している浮浪者のような男性が腰を抜かしていた。

事態を把握出来ない普遍的人間が、この状況を目にすれば何も男性でなくとも腰を抜かす。銃刀法違反が政令されている日本で、回転式拳銃を扱う十五歳の少女と肩を撃たれたというのに平然と語る女性。

「あなたさまはこの場から出来るだけ離れて下さい」

「あ、あああああ脚が震えてた、たたた立てないんだ！」

「じゃあ、そこで大人しくしていて下さい」

宥めるように言うと、恋は前方に一步踏みだし、女性の胸元に潜り込もうとする。女性は舞い踊るかのような淀みない動きをみせた。歴然とした身体能力の差、一瞬で背後に回り込まれた恋に、上段蹴りが襲いかかる。

「伏せろ！」

女性の叱咤が耳に届くより速く、恋は身を伏せて一撃をやり過ぐすと、上体をそのままに地とほぼ平行な前傾姿勢で女性の腹部へ全身を使い当て身を仕掛ける。

女性は倒れるどころか、後ずさりさえしない。

安定感が良い？ 違う……これは――

「愚か者が！」

女性がぎこちない動きで褐色の腕を持ち上げ、恋の痩身を激しく

突き飛ばした。大地から靴裏が離れ、飛ぶように突き飛ばされた恋は、前方に突風を巻き起こす踵かかとが通過するのを目にした。そして本来仕留めるはずだった目標を見失った踵は大地と激突し、秘めたる破壊エネルギーは放たれる。踵を中心に芝が付着している土石が四散し、緑一色だった大地の一部が醜い肌を露出させた。

改めて肉体強化系の恐ろしさを目の当たりにした恋は、戦慄を覚えずにいらなかった。しかし、戦いに於ける天賦てんぷの才と呼ばれるだけあって、驚愕しつつも思案は怠らずに現状分析を続ける。

——とりあえず、第一段階、男性に被害が届かないまでの距離を稼ぐことができましたので良しとしましょう。それにしても、

「あなたさまに助けられました。けど、襲いかかったのもあなたさまですので、これはお礼を述べるべきところなのか正直微妙なところですよ」

先程、外人女性が恋を突き飛ばしたのは、恐らく恋の身を庇った結果であろう。彼女が内なるもう一人の自分と葛藤しなければ、今頃恋は人間離れたパワーに押し潰されていたに違いない。

「……次はない。私の目が届かぬところまで逃げろ。でないと、我はお前を殺めるに違いないだろう」

吸い込まれそうな真紅の瞳は、悲しげに恋を見詰めてくる。

「わたしは黙っていいようにされるほど、大人しくしないで」

「我を殺めるのか？　できるならそうすればいい。我はお前を責めない。見たところ人間にしては、勿体ないほどの身体能力に恵まれている。しかし、そのような偽物では我を殺めることはできぬ」

「何を勘違いしているのです？」

一步、また一步恋は後ずさりながら、女性との間合いを自分の有効範囲へと広げていった。

「わたしは死にません。あなたさまも死にません。一応加えて置きますが、あそこで情けなく腰を抜かしている男性も死にません。ていうより、あなたさまを止めないとわたしは減給処分……下手をしたら路頭ろどうを彷徨うことになるのです！　ストリートチルドレンと言え

ば訊こえがよろしいでしょうが、わたしにはそのような称号は必要ありません！」

一定の間隔を置いたところで恋は後退を止め、回転式拳銃をホルスターに収める。そして、胸に常備している通信機のスイッチを一つ押した。

「ちょっとしたハプニングです。機関拳銃の使用許可を申請します」
『……………申請完了。許可は下りたはずだ、《拳銃屋》』

通信先の男は要領の良さだけは無愛想さに反比例して、高い水準を重ね持っている。申請許可の速さ、仕事の要領の良さ——多数いる補助委員の中で恋が男をサポートに選んだ最大の理由だ。

「ありがとうございます」

恋は素直に礼治を述べる。今回ばかりは本当に助けられました……まあ、許可が下りなくとも勝手にやらして貰うつもりでしたけど。回転式拳銃に替わり、恋の手元に表れたのは二丁の機関拳銃^{マシンピストル}。回転式拳銃に比べ、威力は劣るものの、連射性能は比較対象にならないほど高い。

機関拳銃二丁は恋が一番得意とするスタイル。

すなわち、本気だ。

「派遣戦闘委員、《拳銃屋》は買い被ったぐらいの過大評価が丁度いいのです」

恋はこの場にそぐわない和むような笑みを女性に向かって振りまいた。

「愚か極まりない話だ。だが——」

だが——

続きはなんだったのだろう。

訊くことはできない。何故なら、女性は女性であって女性ではない存在に遷移してしまったからだ。尋常ならざる殺気はひしひしと肌を通して伝わってくる。

肉体強化系能力者。

能力者の？能力？でも非常に稀有なカテゴリーに含まれるのが肉

体強化系だ。何が稀有のかと言えば、千差万別という能力者の中で
肉体強化系は1割にも満たしていない。基本的な身体能力を増幅さ
せ、人外のパワー、スピードを使えるようになる数ある？能力？の
中ではアナログ的ものだろう。しかし、
強い。

無言の重圧……虚空を見詰める真紅の双眸に、恋の痩身が映し出
された。

「派遣戦闘委員、
《拳銃屋》ガンスリンガー。行きます」

other Episode 01::Gun Slinger 2 (後書き)

見直してないので誤字とか日本語的おかしい部分があるかも。

では、ちよっくら5000マイル走って来ます。

other Episode 02::Gun Slinger 3 (前書き)

ラブソディ3以来の長文です。

この物語は本編より約10年前の話であり、主人公は「愛沢さん」で「仁井哉」ではありません。

other Episode 02::Gun Slinger 3

先に仕掛けたのは恋からだ。

視線が交錯するなか、無防備な外人女性に無数の銃弾が飛び掛かった。

予想通り、女性は銃声と同時に行動を開始するが、それは『予想を置いて予想外の出来事』だった。

虚ろな女性が一步だけ足を踏み込むと、その足下が突如盛り上がり、たちまち高さ数メートルの巨大な壁となって放った銃弾が全て防がれる。

「……！」

恋は驚愕を覚える余裕もなく、横手に一陣の旋風が巻き起こった。既に女性は全てを粉碎する一撃を振り上げている。咄嗟に恋は、身体を旋回させ目標も確認せずにトリガーを引いた。滑らかな曲線を描く肢体に無造作に、吐き出された銃弾が送り込まれる。背後へと足ずさる女性。全弾を撃ち尽くすと同時に、素早く踏み込んだ恋はふらつく女性の胸元に身体を潜り込ませ、腹部目掛けて蹴りを繰り出した。速度、タイミングともに交わすのも受け止めるのも、ましてや反撃するなどは不可能だ。

鈍い手応え、衝撃。

電柱でも蹴りつけたかのような身体の硬質さに恋は大きくバランスを崩した。攻守交代——虚ろだった女性の紅い瞳に、ひとつの感情が芽生えていた。

笑み。それもあまりに禍々しいものだ。

繰り出されたのは拳。恋は女性の右拳を二丁の機関拳銃で受け止めるが、バランスがままならぬ状態で、耐えられるほど柔な攻撃ではない。あえなく後方へ吹っ飛んだ恋は尻餅をつく。隙だらけの恋に、裂帛の一撃——女性の踵が打ち下ろされた。反射動作で恋は銃身を盾に受け止めたが、恋の腕力では女性の脚力を押さえ込むこと

ができず、二丁の機関拳銃はあえなく弾かれる。手持ちの銃器を失った恋の側頭部に、続けさま二撃目となる踵が送り込まれた。

能力——発動。

女性が繰り出した蹴りは恋を捉えることなく大気を切り裂き、つむじ風を巻き起こした。物体転移により瞬間移動を果たした恋は先程の位置より数メートル後方、膝を大地に着け、へばり込んでいた。それもそのはず。恋の？能力？——物体転移は一度のテレポーションで浪費する体力は計り知れない。今のを含めると今日は既に三回は？能力？を発動させたことになる。時間を長く置いてあるわけでもなく、約三十分近くの間継続使用したのが仇となり、今現在の恋の体力は、著しく低下していた。

それに極度の体力消費には他にも理由がある。

女性の？能力？について、頭を悩ませていた。

彼女の人間離れた身体能力、肉体強化系と見限り、他の選択肢は除外されたと想定していた。しかし、彼女は不可思議な？能力？で『地面を持ち上げ』、銃弾を防いだ。見間違いはありえない、ましてや奇跡が起こったわけでもない。彼女は恋の目前で堂々と？能力？を行使し、銃弾を防いだ。地面を持ち上げる？能力？……纖細は不明だが精神エネルギー変換系の？能力？であろう——そう仮定を建てると、彼女の人間離れた身体能力の高さの説明がつかなくなる。

『訊こえているならば、応答を頼む、《拳銃屋》』

男のテノール声が恋の^{ただ}耳朵を刺激した。

「……訊こえています」

『状況を報告しろ』

「……能力者^{ターゲット}暴走中、ただいま抑圧しています。原因は？能力？開花と同時になんらかの副作用が働いたと思われます」

漆黒の双眸が見詰める先には、正気を失った女性がまるで別人のような禍々しい形相で高笑いをしている。狂喜に満ちています。

「それより、能力者に異なる？能力？が複数身に付く可能性はあり

ますでしょうか？」

対話をしながらも、恋は？能力？を行使し、弾き飛ばされた機関拳銃を再び手元へと引き寄せ、空になった弾倉を抜き出すと予備のマガジンを装填した。

『前例はない。機関のデータベースにもそのような情報は皆無だ』
もちろんの事、恋もそのような前例は知っているはずもない。

「わたしがただいま応戦中のお方は二種類の？能力？を持っているらしいのですが、どうしたらよろしいでしょうか？」

『能力者の抑圧、連行。卿のやることはそれだけだ』

前代未聞の異例な能力者にも拘わらず、通信先の男は声音ひとつ変化がない。表情こそは窺えないが無表情をキープしているのだから。

「解りました……けど、普通の交通機関では彼女を連行することは厳しいです。そちらで何か対策を練つといて下さい」

待って下さい——恋の脳裏にふとした考えが過ぎる。

能力者の？能力？はひとりにつきひとつ……この場にいる人間は、わたし、外人女性だけではありません……自称従業員の男性がいました。男性が能力者という線はないでしょうか？ 女性は肉体強化系能力者、男性は精神エネルギー変換系能力者。

「わたしとターゲットを除いた、異なる？能力？反応は見受けられましたか？」

『確認済は第三級指定、第五級指定の二種類だ。それ以外の？能力？反応は見受けられない』

と、ゆうことは、男性はシロですか……。

だいたい男性が能力者であり、彼女をサポートしているのだとしても、そこには男性にとってどのようなメリットが存在するのだろうか？ それに脅える男性の姿が計算尽くされた演技だとしたら、それこそアカデミー助演男優賞物だ。

——そもそもやり方があまりにも回りくどいです。他に可能性があるとするれば……ひとつの？能力？を応用させて、肉体をも強化さ

せている……この線も極めて低いでしょう。そんな応用力が効く？能力？など、最低第二級指定以上の卓越した能力者でなければ不可能です。

外人女性は今し方、恋の存在を認知したかのように、眼の焦点を合わせた。

噛いがピタリと止んだ。

「……………うあああああああああ！」

悲鳴に近い雄叫びを挙げたのと同時に、恋は上体を屈めながら女性の有効範囲へと果敢に踏み込んでいった。

反射的に襲いかかってくると思いきや、女性は発狂したままその場で頭を抱えている。

好都合とはまさにこのこと。恋は女性の胸元に滑り込もうとした、刹那——地面が突如盛り上がり一枚の壁が出現した。例の正体不明の？能力？。進行を遮られた恋は一瞬の躊躇いも逡巡もなく、回り込むように壁を迂回する。恋の視界が遷移して最初に映し出されたものは、女性が撃ち降ろすように放たれた手刀。

恋は上体を無理やり捻り曲げる。

文字通り風切り音を発する手刀は、わずかに脇腹を掠めとり、特殊材質で縫製された漆喰のジャケットを切り裂いた。恋は怯むことなく捻り曲げた身体をそのまま旋回させ、横手に回り込むと機関拳銃を女性の大腿部へ突きつけた。

「終わりです」

ほぼゼロ距離からの一点集中砲火。想像を絶する凄まじい反動が恋の腕に襲いかかる。しかし、女性の方はその数十倍のダメージを受けているはず……これだけの近距離ならば肉体強化系とて無傷ではいられない。

轟音の反響が鳴り響くなか、外人女性は「何事も無かったかのよう」に身体を恋へと開き直った。たった今穿ったはずの右大腿部には損傷どころか、既着している作業服さえも無傷だ。何故？

大地すら穿つ破壊力を秘めた拳が、地面を這うような位置から恋

の下腹部に突き刺さる。

骨が、軋む。

受け止める暇もなく、恋は腹部に強烈すぎる一撃を浴びた。その衝撃で恋の足は大地から軽く浮き上がり、開口された口から朱色の液体が吐き出された。続けさま顔面に桁違いの破壊力を秘めた拳が送り込まれた。ほぼ無意識状態のまま、顔を護るように銃身を盾にしたが、ふんばりが効かない状態では当然のように遥か後方へと吹っ飛んだ。

受け身すら取れずに恋は背中から地面に叩きつけられた。やはり、能力？の酷使が恋の体力を確実に蝕んでいるらしい。それに腹部に感じる焼けるような痛み……機関特製のジャケットが緩和してくれたとはいえ、内臓には重大なる損害を受けたことに変わりない。恋は口元に付着した血を拭いながらも、思案は怠らない。思考を止めたときこそ、敗北の瞬間だと思いこんでいる。

——全弾直撃で無傷とはいくら肉体強化系とはいえ、ありえません。それに肉体強化系でしたら、衣類まで無傷にすることはできないはずです。機関特製のジャケットならまだしも、どこにでもある作業服が機関拳銃に耐えられる耐久性を持っているわけがないです……もしかすると……。

「……あれ？」

立ち上がるうとした恋は自分の視界に濃霧のうむのような靄もやが発生し、再び尻餅しりもちをついた。

今の一撃……恋が考えている以上に身体には応えている。

「自覚している以上に体力の浪費が進行しています……ので少し待ってくださいか？」

恋が見上げる先には、ブロンドヘアが風に靡かせ、威容な雰囲気かもを醸し出す女性の姿がある。衣服も体力も満身創痍の恋に対し、女性性は息一つ切らしてなければ、作業服さえも若干埃が被っているくらいだ。

自分の置かれている立場を再確認したうえ、恋は小さく吹き出し

た。

——歴然とした実力差です。適うわけありません。

「普通でしたらですけど……」

二丁の機関拳銃を見下ろす女性に向かって、容赦なく投げつけた。女性には虫でも追い払うような手の動作で機関拳銃はあっけなく弾かれる。

「あなたさまに無くてわたしに有る物」

恋は腰に巻き付くホルスターに手を伸ばし、回転式拳銃を引き抜くと同時にコッキングを済ませ、女性の露出した脚に狙いを定めた。
キャリア「経験の差です」

火を噴く銃口が女性の素足に弾丸を撃ち込んだ。銃弾は脚線美を描く脚の肉をえぐり取り、女性はガクッと片膝を大地に着けた。

撃鉄部分に左手、引き金に右手。撃鉄を起こし、引き金を引くというシークエンスを手動とは思えぬ存外の速さでひたすら繰り返す。肌が剥き出した部位だけに狙いを定め、一直線に弾丸が迸る。ゴム弾を使用している為、貫通はしないものの、女性の両手首、両足首から血潮が溢れ出し、明瞭なダメージを与えられている。

全弾を撃ち尽くすと、恋はおぼろげな足取りで立ち上がり、今にも倒れそうな歩行で背後へ後ずさった。

「思った通りです。あなたさまがタフな訳ではなく、？能力？行使により、衣服の耐久性を強化していたのですね。分解、化学結合。物質状態の性質、形状変化。蹴りを入れた時点で気付くべきでした」恋の考えはこうだった。

外人女性はふたつの？能力？を保持している。ひとつは、肉体強化系。階級により強化できる箇所に差は出てくるが、第三級指定レベルなら、全身強化は容易いだろう。

そして問題となる二つ目、恐らく精神エネルギー変換系『性質変化』。

結合済の物質を一度分解させ、他の原子、分子を取り込むことにより、一時的に物質の形状や性質を変化できることが可能な精神エ

エネルギー変換系の代表的な？能力？。しかし、分解できる物質は無機物か、命を持たない有機物限りだ。人間を始め、生物の性質に手を加えることは出来ないと言う。

兄が教えてくれた数少ない入れ知恵が、今回初めて役に立った。

「うあああああああああああああああ！」

裂帛の雄叫びを挙げつつ、女性は這うような姿勢で恋に向かい猛進する。

「まだ、やる気ですか？」

普通なら歩くことも困難な怪我を前進に負っているにも拘わらず、女性は攻め込んでくる、が、先程の動きと比べれば段違いに緩慢で遅い。体力残量が尽き欠けている恋にでも、安易に躲^{かわ}せる。

わざと女性を胸元に誘き寄せる。下顎に跳ね上げられた蹴りを、恋は斜め前方に踏み込み躲すと、不安定な一本の軸足を跳ね上げるように引っ掻けた。女性は背中からまともに叩きつけられたながらも、片手で恋の袖口を掴んだ。

「なっ……！」

恋の右腕に赤く染まった二つの脚が絡み尽き、人外の臂力^{りよりよく}と勢いで間接許容範囲を超えたあらぬ方向に引っ張り倒され――

ゴキリ。

芝生に倒れ込んだ恋の右腕は本来向くことのない方向を差していた。

恋は、今までに感じたことのない右腕の激痛、瞳孔の湿り具合も全て歯を食いしばり耐え抜き――反射的に？能力？を発動させた。

転移終了と同時に全身の力は抜け落ち、恋は草原へ倒れ込み、ある言葉が脳内を反芻^{はんすう}した。それは恋が派遣戦闘委員になり初任務前に兄が言った台詞だ。

――いいかい、恋？ 相手がどんなに格下で、ひ弱そうな人間だろうが、瀕死に近い重傷を負っていても、降伏するまで気を抜いてはいけないよ。窮鼠猫^{きゅうそねこ}を囓む、油断大敵。一番恐ろしいのは？能

力？なんかじゃない。一番恐ろしい物は……

人間なのだから。

恋はその言葉を解っているつもりだった。しかし今の恋の姿はなんだろう？ 己の勝利を勝手に確信し、油断した挙げ句、片腕を再起不能にさせられた。体力の限界を超えた上で？ 能力？ を使用してしまった。結果的に重傷を負い、もはや立ち上がる体力さえもない。それでも奏功そうこうさせなければならぬ責務がある。形振り構なりふってられないければ、手加減ももうできない。

「……不覚です……給与倍増はしてくれませんか、割に合いませんね……」

「お、おい、平気か」

恋が転移先を選んだのは男性がへたり込んでいる場所だった。使える物は最大限に使う——兄が教えてくれた教訓。

「見ての通り、もはやわたしには立ち上がる体力はおろか、腕一本挙げることもすら至難の業に思えてきます」

突如襲った嘔吐感、唯一稼働可能な左手で口元を覆い、仰臥したまま咳き込み始める。革穴空手袋はゼリーのようになっとなりした朱色の液体が多量に付着した。

様々な任務をそつなくこなしてきた恋だが、これほどの深手を負った経験はない。これ以上の油断と迷いは、己を死に追いやるだけだ。

「すみませんが……肩を貸して頂きますでしょうか？」

「あ、ああ」

男性は震えるながら、腰が抜けたへっぴり腰で立ち上がった。狼ろう狽たいながらも、もやしのような細身の身体に、密ひそかに秘められていた力強さで恋の身体を持ち上げる。同時に男性は再び尻餅をついた。ただ、恋を立ち上がらせる作業だけでも、今の男性にとっては一年分の労力は使ったことだろう。

「ありがとうございます」

下半身の感覚は完璧に麻痺していた。見た上条、平静を装っているが、意識も長くは続きそうにない。視界の半分はモザイク処理を施されたようにぼやけている。下腹部のダメージが先程の？能力？行使をきっかけにして、感覚的に痛みが倍加したようだ。

恋は血まみれの唇を噛み締め、遠くへ行ってしまうような意識を全力で繋ぎ止めている。

霞んだ視界の先に映ったのは、一步步近づいてくる人影。

ブロンドヘアを靡かせる外人女性は、痛々しく血が溢れ出している足を引きずりながら、淡々と歩を進めている。死人のような表情は何を意味しているのだろうか？

「……まだ逝く訳にはいきません」

恋は回転式拳銃を噛み加え、ホルスターから一発の弾薬を取り出した。弾頭部分はゴムでは無く、鋭い銀光と異彩を放つ金属……実弾である。加えたまま、血がこびり付いた銃弾を器用に詰め込み、口から銃を乖離し、手元に携えた。

銃を構える左腕は小刻みに震えており、まるで狙いが定まらない。「もつと……近くです……」

一步、一步、確実に接近はしている。恋が満身創痍同様、また彼女も満身創痍なのは変わらない。しかし、肉体的に深手を負っているのは、恋であることは明白であり、いくら銃器を携えているというアドバンテージがあるとはいえ、その場から一步も踏み出せないのでは、プラスマイナス、差詰めマイナス方向に進んでいる。二種類の？能力？を備え持つ外人女性からすれば、四肢に負っている怪我など取るに足らないことだろう。

女性との距離は約3メートル。

射程範囲内だ。

朱色に染まった人差し指が、終焉へ誘うトリガーを引いた。

鳴り響く轟音も腕に来る負担も今まで使用していた弾薬とは桁違いに大きい。が、放たれた銃弾は無情にも狙いを大きく逸らし、女

性の遙か頭上を通過した——はずだった。

遙か空へ消失したはずの銃弾が、女性の右足下に出現し、鋭利的な角度から脚線美を描く足首を一直線に突き破る。一センチ近い大穴が開通し、片膝を大地に着けた。

「まだです」

恋が呟くと同時に、今度は先程とは逆、女性の左足元に、先程貫いた銃弾とまったく同一の銃弾が現れた。それは唯一の支えとなっていた左足を無慈悲に貫き、女性の体軀はなるがまま倒れる。唸り続けているところを見ると、意識はまだあるのだろうか、少なくとも立ち上がり襲いかかってくる心配はない。

そう言った脳内分析が終了した途端、恋の瘦身は力無く倒れ伏した。彼女の意識は既に無い。

ここで、恋の？能力？について今一度説明しなければならぬ。

基本的な？能力？は『物体転移』と言い、恋曰わく「応用性の悪いテレポテーション」だ。自分以外の物質を転移するのにはある条件が必須なうえ、物体の質量により、転移できる範囲は限定され、自分自身を転移させるとなれば半径5メートルが目安である。ここではあえて恋の体重は伏せておきたいと思う。

ここまでは前に記述してあるように、特に重用視されるべきでもない。

まず、恋が自分自身以外を転移するうえの条件を説明しよう。

自身のDNA情報、つまり「血液」を転移対象に刻み込むこと。

これが転移の前提条件である。

恋が今回、当該対象となる能力者女性の動きを止めるためとした手段、一度放った銃弾を転移させ、繰り返し足を貫くと言う単純明快な作戦だった。しかし現状を飲み込めない第三者からすれば、実に不可思議的な事態に見えることだろう。一定のベクトルを備える銃弾は終点に辿り着くまで威力は衰えない。物体転移？能力？に銃器——これ以上に相性が良い物はあるのだろうか？ 少なくとも恋にはこれ以上の組み合わせは思い付かない。

本来ならここを説明の掉尾^{とつひ}とするところなのだが、もう少しだけ恋の？能力？について注釈を入れたいと思う。

どこからともなく出現する銃器の謎。言うまでもないが、これは？能力？行使により、自宅及び、機関本部から転移させた物だ。恋が扱う銃器たちは全て、自身の血液が多量に含まれているオーダーメイドに近い逸品。よって、転移条件は満たしている。しかしそう離れていない恋の自宅はまだしも、特務機関本部から銃器を引き寄せたとなると、何百キロをもの距離を隔て、転移させたことになる。逆に恋自身から、自宅や機関に転送することはできない。

これは、「引き寄せ」と「送り込み」の違いだ。

物体を自身に引き寄せる場合、？能力？を行使しても肉体的疲労は最小限に押さえられ、尚かつ質量5キログラム未満の物質なら、転移範囲は日本領土全域まで広がる。

一方、物体を送り込む場合、1キログラムの物質ならば、恋を中心軸とし、半径百メートル以内。引き寄せ時と比較するのであれば、転移範囲が極めて短く、更に肉体的疲労も引き寄せ時の数十倍と負担である。

このように多々の条件が絞られている事から、恋は己の？能力？を少なからず嫌っていた。

そして、任務から一ヶ月が経過した八月の終わり。

全治三ヶ月の『右腕圧迫骨折（女性に折られた）』、『左肩脱臼^{ワイルドキャット}（女性を仕留める際、違法改造した威力を数倍に跳ね上げた銃弾を使った結果）』、『内臓損傷（女性に殴られた）』などを始めとする到るに重傷を負い、二ヶ月の入院を言い渡された恋は自宅療養^{じたくりようよう}を希望するも、入院生活を特務機関から強いられ、夏の長期休暇は物の見事に霧散してしまった。今だ外れぬギプスを眼にし、気付いたら定年を目の前にした会社員のように老け込んだ溜め息をついた。

明日からは学校というものが始まる。つまり恋は級友たちに醜態を

晒すことになる。

「……ああ、神様。この仕打ちはあまりにも無慈悲です……」

全身黒装束とは違う、骨折用に仕入れて貰ったサイズが二回りは大きいパーカーに、これまた仕入れて貰った灰色スウェット。センスがあるとは言い難いが、少なくとも任務用の服より、数十倍は一般的世俗的普遍的な世間の目を引くこともない衣類であることは間違いない。

そして今日、絶対安静を条件に一ヶ月フライングの退院を許して貰うことに成功し、自宅に向かい羽振りの良さそうなエステイマで移動中である。直線の割に臓器を揺さぶる横Gを度々感じるのは、運転手たる男性が免許取り立ての若葉マークだからだ。

「乱暴な運転はくれぐれもお控え下さい。わたしは怪我人であり、淑女でもありますので」

「健闘はしている。しかしこの世は必然で出来ている。保障はできない。卿も用心は怠るな」

運転席の方から、テノール声が響いた。

ハンドルを忙しく操作する男性は短く髪を刈り上げており、季節感ゼロなのかスーツ一式を着込んでいる。ここで特に男性の紹介必要はないだろうが、念を置き、一言説明させて貰おう。

おみきけいごち

尾崎啓一——特務処理機関、補助委員として恋を筆頭にその他数人の派遣戦闘委員のサポーターとして、影ながら機関を支える主軸人物だ。二十歳とまだ若く、現役で国立大学に通う将来を嘱望される得難い人材でもあり、機関に入社？してきたのは約一年前になる。果たしてどのような経緯があったのかは、ベールに包まれたままだ。「そこは、『心配するな。俺が何をしてでも護ってやる』、ぐらいの意気込みを言って貰わなくては、わたしのサポーター失格です。もう少し愛想良くできないのですか？」

「無駄な感情は全ての行動に支障を起こす可能性も否めない。《拳銃屋》——卿の行動パターンは感情に流され、自ら窮地に向かっていく。今回の任務は——」

「反省会なら入院中に耳にデビルフィッシュができるほど延々しました。それに今は任務ではないので、呼称は愛沢（こしやう）でお願いします」
「名前など記号に過ぎない。愛沢」

言っている内容の割には、ちゃんと名を呼んでくれる。筋が堅いことです。

「……そういえば、似たような台詞を一ヶ月前に訊いた覚えがあります」

「正式には三十四日前。卿が任務を遂行している時だ」
何故知っているのです。と一瞬思った恋だが、理由はおのずと出てきた。律儀にも海馬組織に留まっていたのだ。

特務機関特製の小型通信機は遮断状態であっても蓄音機（ちくおんき）として、立派に役目を果たしているプライバシーゼロに近い道具であった。この聞き捨てならない情報を訊かされたのは入院直後のまだ意識も虚ろ気だった頃で、今という今まで忘れていたのも許容範囲だろう。

「ああああッ！」

そこで恋は「ある事」に気づき、大声を上げ、白晳（はくせき）の表情が見えるうちに赤く染まってゆく。

「どうした？ 愛沢」

「な、ななななななーんでもありません！ ちょ、ちょちよつと、あ、アイスが食べたいなー、という感情がお、抑えきれずに、こ、言葉に出してしまったのです！」

恋はぷいっと窓の外に視線を転がした。

『兄さま……わたしをお守り下さい』

間違いなく訊かれたであろう他人に訊かれたくないナンバー1の台詞。

——愛沢恋！ この世に生まれ十五年、人生最大の弱みを初めて他人に訊かれました！ どうしましょう？ あのような醜態を……第三者から見ればただのブラコンにしか見えないはずです！ ああ

っ！ わたしの株価が大暴落です！

「あ、あのー？ おひとつお尋ねしたいのですがー、通信機に録音されたのは、あなたさまは毎回お聴きしているのですか？」

「それが私の任務だ」

難攻不落で知られていた恋の自尊心は啓一の無情なる一言であっけなく崩壊の兆しを表した。

「どうせ、わたしはブラコンです………何かいけません？ 兄妹愛とは素晴らしい物とは思いませんか？ わたしは決して兄さまが好き——なわけではなく、尊敬対象としてのひとりなのです！ そう、やっぱし、わたしは兄さまが大ッツ嫌いです！」

自虐的な台詞を啓一は黙殺し、直線だと言うのに忙しくハンドルを操作していた。

これは恋が入院中に訊かされた話だ。

件の任務で、恋のターゲットとなっていた能力者はどうやら人間ではないのだという。

ライオン
獅子だ。

『我は元々気高い……えー……我々の固有名詞は、お前らの言語でなんと言うんだ？ 獅子？ そう我は気高い獅子だ！ それがあるうもことかこのような姿に……元に戻る方法はないのか！？』

と、女性本人の口から発せられた。

見舞いという大義名分でやって来たサポーターたる啓一に、厳肅な面持ちで初めて恋が訊かされたとき、口に含んでいた牛乳を吹き出し、重傷を負った臓器に響くほどの淑女らしからぬ笑いを発した。別に信用していなかったわけではなく、語る啓一があまりにも真面目であり過ぎ、滑稽だったからである。

政治家の演説と肩を並べるほど胡散臭さがぶんぶん漂う話だが、

彼女の身体を隅々まで検査したところ、あらゆる異常性が発見されたのだと言う。

第一に女性の基本的な情報。

身長1・73m、体重160kg。

神の造形物の如く、蠱惑的曲線を描くスレンダーボディを見る限り、内臓に脂肪が大量付着してようがその数値をたたき出すことは人間である限り不可能だろう。

第二に人間離れた身体能力。

肉体強化系能力者に引けを取らない運動能力の高さ。細心の注意を払って？能力？反応の有無を何度も確認したうえで、検査を行っても反応は見受けられなかったと言う。身を以て女性の力を体験した恋には、あれだけの身体能力が？能力？無しで出せるとは訊かされた今現在でも信用できない。

第三に驚異的な恒常性。

両足、全二ヶ所を貫かれた女性だったが、その弾痕は一日で塞がり、二日目には傷跡と肌が見分けがつかないほど完治していたという。もはや人間でも獅子でもない究極的治癒力だ。

更なる子細を訊くと、女性の？能力？は第三級指定『性質変化』と正式に認定されたのだとか。人間離れた身体能力は、獅子から人間に変貌するときに受け継がれた遺伝性の物だと考えられている。実質上、第三級指定と認定されているが、危険性だけを見れば第二級指定レベルは掛かって、（せんしやう）僭称ということにはならないだろう。

そもそも人間以外の動物が？能力？（ぼつぼつ）勃発は前代未聞の事件。ましてや、動物が姿を変化させ、高名な頭脳を備え、人間に転生するなど、本格的に世界はファンタジー色に染まってきている前兆だ。もし、彼女の証言が全て真実ならば、これからの特務機関は恋たち機関構成員に過労死者が発生するほど労働を強いる、喜ばしくない事態が起きることもなりうる。

今頃彼女がどうなったのかは管轄外となった恋に知る術はないが、大方の予想はできる。飽くなき探求心を持つ、機関研究員たちの実

験に付き合わされている辺りだろう。

「結局、女性の暴走の原因は何でしたのでしょうか？」

翡翠から紅玉髓に変貌する瞳。彼女の瞳が紅く染まるときこそ、理性が無くなり、手当たりしだい視界に収まる物を破壊しようとするデストロイヤーと変貌するときだ。

「恐らくだが、獅子から人間へと変貌する際に、本来ある破壊衝動が急激に増幅した結果だ」

「変貌も何も……彼女はあの時点で、あなたさまより幾分か人間らしかったです」

さり気なく皮肉を織り交ぜるのは、恋にとっては習慣的な物だ。そして、皮肉を浴び続ける啓一は気にせずといった表情で、恋の疑問に淡々と答えた。

「外面的な構成は完成していたのだろう。恐らく外からでは窺えない内面部に変化が生じていたと思われる」

「……もしかして、彼女はあれから暴れたりしていないのですか？」
「ああ」

「……もし、もしですよ？ 先月の任務日付を一日後にしていれば、わたしは彼女と戦闘を繰り広げることもなかったのでしょうか？」

「恐らくは、そうなる」
「最悪です……」

恋は呟き、現実から目を逸らし過ぎてしまった長期休暇を脳内でシミュレートし、仮想空間内で楽しむことにした。

築約三十年、そろそろ限界が近付いてきた二階建ての萎びたアパートは大地震が猛威を振るったとき、まっさきに倒壊する最有力候補であろう。しかし1LKで家賃三万円という破格な値段——という基本的な財政管理は機関が全て保障してくれるので気にする必要

のないことであり、実際に恋は気にした試しがない。見た目こそは、倒壊作業が行われる十二時間前と思えるほど貧相だが、一定の衛生的水準を保てる程度は設備が整っており、内装もそこまで悪くない。「愛沢。ひとつ言っておくことがある」

一応、断言しておくが、ここは恋の自宅である。

駐車場というものが存在しない為、エスティマを道路沿いに違法駐車した。機関の圧力で違法駐車にならないのだろうか？

「何事ですか？ まさか、緊急な任務ですか？ 思えば、緊急じゃない任務などあった試しがないですけど」

「今日付で卿は戦闘委員を取り消されることになっている」

恐らく、この何気ない一言は人生最大の苦痛だった入院生活よりも、心の深層にまで響き渡ったことだろう。

「な、なななな、なぜですか！？ わたしはクビですか？ いや、むしろ喜ばれる事態かも知れません……やっぱダメです。わたしにはまだ残された責務があり、今まで機関に所属していた時間がありにも長すぎたものですので、勉学という凡人に必要な不可欠な知識をわたしは備えておらず、今さら普通に就職をする気があるわけでもなければ、就職というのもわたしの年齢的にまだ遊びたい時期には耐え難いものであって、要するにクビにされたら、生きていく為に必要な資金がないという悲惨な事態になるのです」

「勘違いをするな、愛沢。卿の役職が戦闘委員では無くなるだけだ」
ほっと胸をなで下ろすが、すぐさま厳しい表情を取り戻す。

「……それはそれで由々しき事態です。わたしは何になるのです？ 情報委員辺りですか？」

「監視委員だ」

「嫌です」

恋はオウム返しのように、唾と一緒に言葉を吐き出した。

監視委員——特務機関で数ある役職のうち、もっとも厳しく危険が付きまとう、仲間の内では忌避されているポジションだ。戦闘委員も命懸けであることは変わらないが、監視委員となると年中無休

でターゲットとなる観察対象をマークしておかなければならなくなり、暦しよみが変わろうがカレンダーが赤く塗りつぶされていようが、まったく適応されない肉体的にも精神的にも双方削り取られる、無頓着かつ図太い神経の持ち主でないと到底勤まらない役職である。

無論、自称繊細な淑女の恋では適材適所とは言い難い。

「機関はもう卿に決定付けている」

「……………あなたさまの辣腕らつわんで何とかありません？」

「卿の監視対象者直々の指名らしい。私が口を挟む隙はおろか、機関の決定は嘗て無いほど迅速な処理だった」

その真偽は疑わしい。しかし普段から会話に冗談ひとつ織り交ぜない朴念仁たる男が、嘘八百でこんなしょうもない嘘っぱちを言うわけがない。

「……………ああ、神様……………十年後のわたしは過労死していないでしょうか？」

山のような荷物を全てサポーターたる啓一に任せ、恋は一足早く自室に出向いた。解錠しようとしたその時、恋は扉の異変に気付いた。

施錠がされていない。

不穏な人気ひとけを鋭敏に感じとった恋は厳戒態勢を敷き、蹴破るつもりで繰り出した蹴りがドアに突き刺さる。

「なんだ？ 騒がしいぞ。人間社会のルールでは扉を静かに開けるものだ、我は訊かされたのだが、それは間違っているのか？」

「……………何故あなたさまがいるのです？」

扉を開き、目に飛び込んできた光景は先月、凄絶な死闘を繰り広げた女性が紅いバンダナを頭に巻き付け、こたつでお茶をしている奇異な光景だった。敏捷な動きで立ち上がる女性は作業着とは百八十度違った服装で、へそが露出されたペアトップ、大腿部が半分以上露出しているデニムのショートパンツ。口調と蟹股がにまたに近い歩き方を矯正すれば、モデルの道で充分トップを狙える素質はある。

みしみしと床が抜け落ちそうな効果音を発しながら近づいてき、

「先月は無粋な真似をした。我はお前に助けられた。感謝の意を込めて、これからしばらくは誠心誠意お前の世話をする」

「それはわざわざどうも……ではなく！ 何故あなたさま——」

「アリアだ」

「……はい？」

「我の名だ。アリア・ガーネット・アンダーソン。どうだ、良い名前とは思わんか？ 暦で言えば一ヶ月、我は様々な人間文献を読みあさり、試行錯誤の結果、この名に辿り着いたのだ！」

「どうでもいい——とは、さすがの恋でも言えずに、表情だけはどうでもよさげになっている。」

「素晴らしいと思います」

喧嘩を売っているような、やる気のない低い声音。

一方のアリアは満足げに胸をならし、

「やはり、お前もそう思うか。これで我の名付け能力は過信では無かったことが証明された訳になるな」

と、微妙に嬉しそうに言った。先月までとは大違いです。

「……それで……アリアさまがこの貧乏アパートに何のご用です？」

「アリア・G・アンダーソン。今日付で卿の監視対象となる能力者だ」

澄み渡ったテノール声が、恋の後方に響き渡る。視線をアリアに釘付け状態だった恋は荷物運送を一任してあった啓一が存在を忘却曲線上に置いてしまっていた。

「監視対象？ アリアさまが？」

「そうだ」

ちらりと、恋は万引き常習犯のような目つきでアリアを一瞥する。大量の疑問符が頭上に羅列されていた。監視対象となる本人が把握できているのか怪しい。

視線を啓一に戻し、

「アリアさまが監視対象なのは解りました。けど、何故わたしの家にわたしより速く在宅している理由が解りません」

「それは――」

「我はここに住むことにした」

「……………本当ですか？」

恋は路頭にダンボール詰められた子猫のような潤んだ瞳で啓一を見詰める。級友の男子生徒たちは、この上目遣い作戦を実行すれば大抵の頼みは快諾してくれるのだが――

「決定事項だ」

特務機関屈指の仕事バカである啓一には効き目ゼロ、機微な部分の変化さえ見られない。

「……………もうちょっと迷う動作を取っていても罰は当たりませんです……………まあ……………女同士ですし、監視対象が同居してくれるとなれば、もしかすると戦闘委員よりも楽できるかもしれません」

考えれば考えるほど美味しく思えてくる役職だ。恋が耳にした普通の監視委員は機関に属さない能力者たちが、？能力？の存在を公にしないようターゲットに悟られず、ひたすら見張り続けるという二十四時間年中無休の最低な仕事。

しかし今回の監視対象は事情を承知している上、同居までしてくれる。少なくとも命懸けの戦闘に駆り出されることや、不幸な怪我により入院することも、男性研修医から嫌らしい視線を浴びることもない。

「そうです！ もはや、毎日がエブリデイの如く、これからのわたしは普遍的な学生として、残りの学校生活をエンジョイできるのです！」

恋は何とか稼働可能の左手をアリアに差し出す。

「……………握手と言う物か。同盟などを結ぶときにする儀式であろう？」

「そんな堅苦しい行事ではありません。一種の挨拶のような物です」
そうか、とアリアは鷹揚おうように頷き、差し出された白魚のような白皙の掌をがっちりと掴んだ。

「では、改めまして、わたしの名前は愛沢恋です。どれくらいのお付き合いになるか解りませんが、よろしく願います。アリアさま」

「機関の連中はいいけ好かない奴が多いが、お前なら信用できる。こちらこそ、よろしく頼むぞ。恋」

「愛沢」

黒と緑の視線が親睦しんぼくを深めるかのように交錯している最中、空気を読めない朴念仁ぼくねんじんがいつもと変わらず一定の音程で言葉を吐き出した。一顧いつこした恋の睨み付けなど、啓一にとって効果があるわけはなく、平然とした面持ちを保ったまま説明に補足を加えた。

「卿の任務は『監視』とアンダーソンの『サポート』だ」

「そのようなボキャブラ不足な説明では、わたしには何のことやら見当もつきません」

「アリア・G・アンダーソン。第三級指定「性質変化」。卿に替わり、特務処理機関、派遣戦闘委員ダンデライオン《蒲公英》となることと決定した」

「初耳です……」

褐色の健康的な掌を握りしめ、恋は啞然とアリアに顔を向けた。

「我も初耳だ」

漆黒の視線を受け止めつつ、アリアは応じる。初めて訊かされるという割には、彼女の態度に動揺は見られない。とゆうより、彼女が持っている機関に対する認識力では事の重大差に気付けないのだろう。

「《蒲公英》ダンデライオンの任務時に、サポートとして《拳銃屋》ガンスリンガーが同行する」

「だ、そうだぞ、恋」

我関せずと言わんばかりの表情は、自分には関係ないことだと思ひ込んでいるのだろう。

「何を人事のように……これはアリアさまにも多い関連性のある由々しき事態です」

アリアは首を75度に位置する角度に曲げ、

「そうなのか？」

「そうです」

恋は繋いでいた手を振りほどき、十畳のリビングに向かう。

「結局、未知な同居人が増えただけですか……」

なんだかもう、愛沢さんのキャラが解りません（笑）。そもそもこの動物園編は2万文字以内に抑えようとしていたのですが、結果的には大きくはみ出し、作者たる私も把握しきれいていません。

ということで、次話は一旦本編に戻ります。

本編の区切り事に、番外編を数話を組み込む予定です。番外編は確実にコメディーから懸け離れているのですが、そこら辺は違う小説だと思って読んで頂ければ、それなりに楽しめる可能性が僅かながらあるかもしれないのですが、それは可能性と言うだけであって、もしかしたら無いかも知れません。

本編↓ツンデレ

番外編↓エログロ

で、行きたいと思います（笑）

と、いうことで前回はすぐにこっちを更新するつもりだった為になかった余談を……。

一応、私も学生という身分上であります故に、大学に通わなければいけません。

マジ、本読む時間ねえ（笑）

電車の中で文庫本（ライトノベルじゃないよ。流石に公言して読めない）を読んでもすぐに睡魔が襲いかかり、夢想空間へGOとなります。誰か癒して下さい（笑）

では、また近いうちに。

5ー1 ツインテールは自重して下さい(前書き)

久しぶりのほのぼのコメディー

5-1 ツインテールは自重して下さい

特待生と訊いて一般的に思い浮かべる人物像は、聡明な眼鏡くん、もしくは野球に己の全てを掛けている熱血であり、爽やかでもある少年。人それぞれで、そこら辺のイメージは若干異なるかも知れないが、真っ先に思い付いた特待生像がこんな感じの憐憫に思えるほど未来を嘱望されている少年少女たちだ。

そもそも特待生とは立派な略語である事をご存じだろうか？ 正式には「特別待遇学生」と言い、一部の私立学校に置いて成績優秀者やスポーツなどで誇れる功績を残した一部の人物に与えられる特権だ。その内容は、主に学費の免除などが代表的だろう。

何故、このような説明をしているのかと言えば、俺のもっとも身近に存在する特待生は、学業態度最悪の上、頭の中身もJAS規格を満たしていないミソ程度な物で、この学校はダメ人間に投資している富が盛んでいるのかと懷疑心を抱いてしまうのも無理はないだろう。

だって、葉月が特待生とかちよーありえない。

黄金の週と呼ばれるゴールデンウィークもいつのことやら、今は五月下旬、五月病もそろそろ醒めて来てもいい時期に突入してきた。通称催眠授業の数学の講義中、俺は襲い掛かる睡魔と精神内部に凄絶な戦闘が繰り広げられている。黒板に次々と綴られていく文字は、ヘブライ語表記にしか俺の瞳に映らなくなってきたその時、現状の異変を鋭敏に感じ取った。

何かが、おかしい。ステージⅣの睡魔だろうが、俺は授業に墜ちた経験は無い。それは何故？

思案している内に覚醒してきた意識。それは同時に答えを授けてくれた。

「……うー……」

いつも邪魔してくるはずのツインテール葉月が、唸りを上げつつも勉強に励んでいる。

ありえん。これは十年遅れでノストラダムスでも来襲する前兆か？授業が終了して数分が経過したにも拘わらず、葉月は今だ熱心に教科書と睨めっこをしている。自家製ブルーチーズ作成に失敗した新種のカビを食べて、脳構築パーツが組み替えられたか？

「葉月、どうした？」

「何が？」

振り向かずに葉月はぶっきらぼうに答えた。声音から分析して、相当ご立腹の様子だ。ちくちくした威圧感を肌を通して毛細血管にまで伝わってくるが、そんなぐらいいじゃ俺は臆さないぞ。

「勉強なんてして、何の気の迷いだ？」

「バカ。アタシだってね、時々勉強ぐらいするわよ」

現段階の気持ちを描写するなら「意外」以外の何物でもない。

「あ、そう。悪かった。がんばれ。俺は邪魔にならんようどっか行ってるから」

弁当一式を手を持ち、斉藤を始めとする大分馴染めてきた級友たちのもとへと向かおうとすると、

「ちょっと待ちなさいよ！」

ブレザーの袖口を器用にも掴まれ、武力による制止を強制された。脈絡の無い行動は慎んで貰いたい。

「なんだ」

「あんた、何でそんなに余裕があるのよ？」

余裕とはなにか？ 金銭的余裕に関しては考えるまでもなく葉月の方が数十枚上手に行くだろうし、精神面に到ってはカップ内に表面張力が発生している水のようにいっぱいいっぱい、もしくは少し零れてるかもしれない。ここ最近の俺は余裕と言う言葉が別次元の単語だと思えてくるよ。

「来週はテストよ！ 仁井哉、あんた、そんなに頭良いわけ？」

テスト。そう言われてみればそんなイベントが合ったような気がしないでもないが、今月様々なイベントをこなしてきた俺にとっては気に留める値もない些事ささいに過ぎん。

「だんだん腹が立ってきたわ……そもそも問題が難し過ぎるのよ。高一でこれとかありえない!」

確かにこの学校は曲がりなりにも偏差値そこそこ、全国水準よりも上に位置するが、進学校と言う訳ではないので、どこと比較しても目を見張るような差は出ないはずだ。にも拘わらず、葉月が必要以上に頭を悩ませている理由は、単なる学力不足。構造計算書偽造が浮上したマンションのような思考回路なのだと想像していたので、葉月のバカぶりに驚く要素はこの次元を探しても見つからないだろう。

「ここの数学、サイコロを例にする問題が多すぎだと思わない?」

「解らなかつたら、36通りと書けばいい。一問は当たるぞ?」

「仁井哉……ちょっと、しゃがみなさい」

言われるまま素直にしゃがみ込む俺は、将来嫁さんが出来たら尻に敷かれるタイプなのだろうな。

見下ろしてくる葉月は、下品極まりない笑みを浮かべ、俺の側頭部を両手で挟み込み、顔を近づけてくる。待て、この事態は何だ。急展開は嫌いじゃないが、いざ自分がその急展開の波に奔流ほんりゅうされるとなれば話は別だぞ。

お互いの呼吸が届く位置で葉月は制止し、

「↓溜め↑+A——ブツチャーのヘッドバッド!」

鈍い振動が脳内に直接響き渡る。

葉月の頭部と俺の頭部が激突し、言いようのない痛みが脳内部に襲い掛かった。

「いってえ……」

徐々に痛みが引いて行き、顔を上げてみれば、ヘッドバッドを繰り出した本人がその場に頭部を押さえ蹲うつすくまっており、意気消沈いきしょうちんとしていいる。同情する余地はないが、あまりにも哀れな姿に咎とがめる気力が

霧散^{むさん}してしまった。

「バカ！ 痛いじゃないの！」

前言撤回。ちよつとムカつて来たぞ。

「自業自得だ、ばーか」

言ったあとに後悔。今の発言、現代社会を生きる小学生にも劣^{おと}るとも劣っているあまりにも低次元。葉月の毒に侵されつつあるな…
：解毒剤があるならば一万までは惜しまず出資するね。

「くうー……この痛さはヘッドフォンに髪の毛が絡まっている事に気付かないで、そのまま毛根から毛が抜ける時の痛みと同じぐらいね……」

俺は理解しがたい比喩^{ひゆ}をするツインテールとの距離を詰めて、今度はこっちが葉月の顔を覗き込むように接近する。よほどの衝撃だったのか、目尻が涙で滲んでいる。俺に非は斉藤の存在価値並に無いのだが、多少なりに罪悪感を感じるのは、こいつが生物学的に女であるからで、葉月が男だったら今頃は七年殺しで再起不能にしているところだ。

「なによ」

「大丈夫か？」

「べ、別に痛くなんかないわよ」

「さっきまで、「痛い、死にそ、ザナルカンドが見えてきた、これがアタシの物語だから」とか必死に痛さを表現してただろうが」

ふん、と鼻を鳴らす葉月。頬^ほが紅潮^{こうしやう}気味なのは涙を堪えている、あるいはカフェイン中毒患者特有の禁断症状か。まさか葉月が高血圧で、服用しているバイロテンシンの副作用ということはないだろう。

まあ、本人が大丈夫と公言しているんだ。

遠慮はいらないな。

「なあ、葉月」

「……………なに？」

右手を葉月の顔を覆うように位置まで上げ、親指をストッパー代わりに中指を引っ掻け、前方へありったけの力を込める。そこで

ストップパーたる親指を解除すると、阻害が消えた中指は力の逃げ場を探し、前方へ吹っ飛ぶ。

音の圧力変動が起こる。

力の捌け口を求めている中指は、葉月の前頭部に直撃し、秘めたる破壊エネルギーをありのまま開放した。

「つつっ！」

声にすらならない叫び。葉月は再びその場に蹲り、呪怨のような悲愴な唸りを喉から発している。

小難しく表現しているが、端的に言えば、デコピンを咬ましたのである。

「ささやかな仕返しだ」

「……に、い、やア！」

潤んでいる瞳を目の当たりしても、もはや罪悪感を感じられない。「葉月、そもそもお前と小突き合いをしている理由が解らないんだが」

「自分の心に訊きなさい！」

「そんなツンツンするな。短気は損気だぞ」

「うるさい！ アタシだってね、好きで怒っている訳じゃないのよ！」

好んで激怒する人間がこの世に実在するとしたら、そいつはガチガチ縦社会で日頃の鬱憤を後輩に叱責するという形でストレス解消を図る根っからのサディスト属性を備え持つパワーハラスメント大好き人間ぐらいなものだろう。ちなみに後輩の部分は生徒にも置換可能だ。

「いい加減にやめとけ」

睨み合う俺と葉月を制止する如く、間に割り込んできたのは斉藤。仲立ちする為に来るとは、斉藤らしからぬ行為だ。内心では見返りにクラス女子からの名声を求めているに違いない。

そんな実直な感想が表情に出てしまったらしく、斉藤は否定の反応を示した。

「仁井哉、お前ずえんずえんって全然、俺の事信用してないよな。とりあえず、周囲の視線うながを見てみる」

斉藤に促うながされるまま、360度、周りの見渡してみれば、クラスの全員が全員、愛くるしい小動物でも観察しているような生暖かい視線をこちらに向けている。女子は発作ほっさを無理やり押さたような、くすくす笑いをしているし、男子は「俺にはついて行けない」と微ほ笑えましい笑顔。

まづった。

俺のもっとも嫌いなバカップル同然のいちやつきをカップルでもなんでもない葉月と繰り広げてしまった。いや、いちやついていたつもりは斉藤の存在理由並に無いが、客観的に判断して、今のはいちやついていたの同然だ。

「見ているこっちが赤面物の微笑ましさだ。夫婦漫才めおとは教室内では禁止」

「だ、誰が夫婦漫才よ!」

そこに敏感に反応しめを示すでない。

「いいか、瀬尾。お前は仁井哉の主観的感想の通り、ちよいとばかりツンツンしすぎだ。典型的な素直になれない型とは言え、年中ツンツンばかりじゃあ、そこら辺の地雷ゲームと同然、いや、それすらも劣る。打開策として考えられるのは……そうだな、先程の頭突きシーンをめくるめくアナザーディメンション的な舌を絡せませる接吻くっ——うがつ!」

R-18的な淫らな単語が出てくるのを予想し、俺は斉藤の喉ぼとけにエルボーを送り込んだ。いい角度で入ってしまったのは不可抗力で、客観的な判断としても充分許容範囲である。

「もう……どうでもいいわ」

そう呟いた葉月はブレザーの袖口で目元に溜まった液体を払拭しつつ、立ち上がると、おぼろげな足取りで教室を出て行った。

斉藤は断続的に咳き込みながら、

「瀬尾め、俺をスルーするとは不届きけしからん」

「お前の存在の方がけしからんと俺は思う」

「仁井哉。瀬尾を追わなくていいのか？」

あからさまに話題を切り替えるな。ちょっとお前は会話の流れを無視し過ぎだぞ。てゆうより、何故葉月を追わなくちゃなんのだ。「こういうシチュエーション——じゃなかった。こういうシチュエーションの場合はヒロインの名前を叫びながら追い掛けると相場そうばが決められている」

お前の語る相場は、俺の主観世界では確立されていないし、葉月の名前を叫びながら追い掛ける昼ドラ展開など、それこそ級友たちの格好の的となり、昼メロくんのレッテルを張られることになるぞ。それにしても……

「あんのバカ……俺の弁当たずまひかっぱらって行きやがったな……」

手元に携たずまひえていた弁当一式が消失していた。何でもかんでも葉月と決定付けるのは褒められる思考ではないが、それでも真っ先に浮かぶ人物像はバカツイスターだ。胃袋に小宇宙コスモが広がるあの大食いだ、今頃は臓器が食物をエネルギーに変換作業中だろう。

「くそ……お前のポジションが羨ましい」

羨望せんぼうの眼差しでこちらを見据える斉藤は、とてもじゃないが正気の沙汰とは思えない。俺の正常なる胃袋は食物を欲しいと鳴き声を上げているが、弁当を失った今、食物を摂取する手段は学食に向かう選択肢以外の余地はないわけで、しかしこの時間帯に食堂に向かうと地雷原に突っ込むような物だし、今日に限って財布を忘れて、手持ち金はゼロ。

「斉藤、手持ちはいくらだ？」

「5円チョコ、消費税込みで十九個は購入可能だ。何なら貸してやろうか？」

それは嫌味と捉とらえていいのだろうか？ 学生の味方である学食とはいえ、百円メニューは揃とろっていないぞ。

「仁井哉……これは「試練」だ。食欲に打ち勝てという「試練」とお前は受け取った。人の成長は………未熟な自制心に打ち勝つ

ことだとな……っておい、無視すんな」

斉藤の戯れ言は意識外へシャットアウトし、俺は自席へと腰を下ろす。ふと、前方の卓上を見ると、A4ノートに達筆らしき読解不可能の文字がぎっしりと羅列られつしていった。

あのバカは何を躍起やつきになって、勉強に奮闘ふんどうしているんだ？ テストなんて、葉月にとって気にするに値ないイベントだと思っていたが、人間意外な一面があるものだ。

「ニイ」

背中を小突かれ、一顧する。俺の後部座席に控える人物——お察しの通り未梨である。シャレた赤縁眼鏡あかふちに、人工的な色合いを出す金髪は女子にしては短めである。磨き掛みがかった無表情が発する微細なモールス信号が捉えるのはちょっとした至難の業。習得するまでに十年の歳月を費やしたものだ。特技として履歴書に記入しても誇れるだけの価値はある。

「あげる」

そつと差し出されたのは未開封のあんパン。

施しを受けたいのは山々だが、あんパンは未梨が持参してくる唯一の食料である事は重々承知済みだ。それを受け取るほど飢えているが、飢えていない。

「俺なら平気だ」

ちよつとした痩せ我慢です。

「……」

未梨は機械的緻密な動作でビニール袋を開封する。そのまま中身を取り出し、おちょぼ口に運ぶと思いきや、未梨はあんパンは精緻に二等分し、その半身をこちらに差し出してきた。

「はんぶんこ」

無表情から発せられる機微なモールス信号を俺は確かに捉えた。

ここまでの気遣いを断るのは却って失礼だな。

「サンクス、未梨」

「べつに……」

俺は差し出されたあんパンを受け取り、最大級の感謝の気持ちを含めつつ口内へと運んだ。斉藤がぶつくさ罵るのを黙殺して。

授業五分前を知らせる予鈴とともに葉月は戻ってきた。俺の弁当一式を携えているところは、殴って欲しいという暗黙のサインかこの野郎。

「おいしかったわ」

弁当の感想など訊いとらん。

「他に言う事は？」

「玉子焼きの味付けの仕方が訊きたいわね。嗜好の違いを超えたおいしさだったから」

「他に」

「お箸が歯に引っかかって折れちゃったわ。ごめんなさいね」

謝る箇所が違うし、人の箸を噛み砕くとは何事だ。

それから葉月は自分の侵した非を固執なまでに認めようとはせず、黄昏れ気味に俺の言葉をあしらい続けていた。教師が教室に闖入してきたところで俺もいい加減どうでもよくなり、これから始まる授業に集中することとし、ツインテールとの口論は打ち止め。

それにしあって授業開始の途端、葉月の勉強に打ち込む姿勢がまるで国立大学を目指している勉強バカに変貌するとは一体全体どういう風の吹き回しだろうか。昨日までの葉月は男女混合の二十メートルシャトルランでひとり200回こなした挙げ句、教師に強制終了を命じられ、ぶつくさ罵っていたほどエネルギーハツラツで、テストの件について、ほのめかしたりするなどは一切無かった。そして、今日になってみればこの有様。あからさまに怪しい。

今や、瀬尾葉月の名は問題児、超人、ツインテールの三拍子で学校全体に流布されており、意気消沈としている葉月を目にした教師は瞠目して、名簿とツインテールを照らし合わせている。今は五時間な訳だが、恐らく俺が気付いていなかっただけで、一限目からこ

このクラスに講義に來た教師は驚きの反応を示していたのだろう。そりゃあ、誰でも疑いたくなるね。二ヶ月近くに渡り、授業を受けているとは言い難い態度だった奴が、別人のように振る舞っているのだから。心理学者の菊池聡さんも感嘆符を浮かべることだろう。

普段なら起こりえない絶対的静寂は、講義を行う教師にとっては気まずいらしく、いつもなら円滑に進む授業も心なしかスローペース。生徒も重苦しい空気の所為か、時間の流れを遅く感じている様子で、その禍根は負のオーラを噴出させる葉月であることも全員が全員、把握している。ちなみに俺は伊達に未梨の幼馴染みをやっていないので、沈黙耐性は当の昔に習得済。雑魚とは違うのだよ雑魚とは。

微妙に普段と異なる授業の終了後も葉月は忙しくペンを走らせていた。

「ニィ、帰宅」

既にリュックサックを背負い込んでいる未梨を例えるなら、疑惑の高校を潜入捜査中の中学生といったフレーズが浮かんだ俺は末期なのかも知れない。

「……帰るか」

「仁井哉、待ちなさい！ アタシも帰るから！」

いちいち声を張り上げるな。てゆうか、お前は音楽推薦のどーのこーのがあるんじゃないのか？

「今日からテスト三日前。部活動もアタシたち推薦組の授業もないのよ」

「未梨がやだって言うから先帰るわ」

「……言っていない」

……未梨が否定した、即ち突っ込んだ。これは言うまでもなく前代未聞、天変地異。しかし考えてみるといい傾向かも知れない。もしかしたら、葉月に好感を抱いているのではないだろうか。

「よし、帰るわよー！」

考えようによっては俺は今現在、女子ふたりと帰宅中であり、ハーレム状態なのかもしれない。出来れば「仁井哉くん、一緒に帰ろう、えへ」みたいな恭しい女の子を所望しょうぼうしたいと思うが、口にするくにすると斉藤辺りに刺されそうなのでこの想いは心の深層部分にしまっしまて置くことにしよう。

右斜め前方に葉月、左斜め後方に未梨、中心は俺という斜線の隊列を無意識上に取りっているのは不思議なものだ。潜在的せんざい性格のあらわれなのかな？

一緒に帰ると言っても実際に歩く距離は北海道と沖縄の総距離の1／2500km程度であり、葉月とは校門から五分でグッバイバイである。

葉月はツインテールの先端を弄いじくり回しつつ、

「ねえ、未梨。あんた勉強できる？」

「……ひとなみ」

ウソツケ。お前が人並みなら、俺の無知蒙昧むちもうまいもいとこだし、葉月に到ってはネアンデルタール人よりも劣ることとなるぞ。

「人並みね……うん、そうね……そうしましょ。未梨、今から数学教えてくれない？ アタシン家ちでさ。あ、ついでに仁井哉も来なさいね。アンタは拒否権無しの強制だからね」

俺の存在がおまけ扱いの上、強制とは存外だな。自慢じゃあないが推薦組とは違って、俺には受験勉強をしたアドバンテージがあるんだ。お前に教鞭きょうべんを振るう程度の知識なら、俺にだって充分可能だぞ。

「いいのか、未梨？」

「べつに、いい」

本当にどうでも良さそうに言うよな。もうちょつと時間を大切にしなさい。

「おーし！ 決定！」

無駄に意気込む葉月。黄昏れたり、怒鳴ったり、今日の葉月は妙

に情緒不安定だな……あれか？ 女性が周期的に起こる月経^{げっけい}とかなんとか――

「仁井哉、アンタ今しようもない事考えてない？ 顔がたるんでるわよ」

「めっそうもございません、はい」

葉月はどうでもよさげに、ふーん、と頷く。

何て勘のいい奴だ。もし俺が、サトラレだったら葉月の手により、今頃は首と胴体が分離していたな。

「……………」

だいたい、この広辞苑と聖書ばっか読んでる根暗無口の未梨に人に物を教えることが可能なのかどうか危惧^{きぐ}するところでもあり、その答えは考えるまでも不可能なのだから、行くだけ無駄足だろう（俺がね）

まあ、いい。テストが近いというのは事実な訳だし、五月の最後くらいは学生らしく勉強しろとの、どっかの神様のお告げに違いない。

そう思わなければ、やってられないのが本音だけだね。

5-1 ツインテールは自重して下さい（後書き）

ちょっと一人称がへたれたような気がする。

というわけで久しぶりの葉月登場。私がこの小説内に出てくる登場人物の内で二番目に書きやすい葉月。執筆がありえないほど速く済みました（笑）。ちなみに一番書きやすい人物は「愛沢さん（天然）」。一番書きにくい人物「未梨」です。

本来ならそろそろ終わりに差し掛かってもいいのですが、番外編＋計画性無の所為で、どこまで伸びるか解りません。

ちょっと余談。

ネタがないので、最近読んだ小説の感想。

『そのときは彼によろしく』

一文字がでかい、ベタな展開だがそれがいい、夏目きゅん、父さんがいい人。

こんな感じです（笑）

では、またその内に。

5-2 ツインテールとハーモニカ

勉強会という名目で急遽瀬尾邸に招集された俺と未梨であつたが、家柄や家族構成を知らない身としては一身上の都合で転校させられ初出勤をする学生の気分で、好奇心旺盛とはいひ難い俺には少々冒險的行動といえよう。しかし瀬尾邸にまったく興味をそられないといえ、それは嘘になり、セロが虚空からハンバーガーを取り出すまでのセンチンスぐらいは惹かれる要素は含まれている。引越してまもない葉月が一体どんな家に住んでいるのか？ まあ、俺は1Kのしがないアパートで一人暮らしと予想する。たかだか娘の遠征に、わざわざ家族相同で引越しはするとは思えないし、葉月の性格上、一人暮らしで無ければ到底誘つてくるとは思えない。

万年無感動無表情の未梨だが、ある程度の道徳は兼ね備えているので、瀬尾夫妻（そもそもいるかどうか不明だけど、いと仮定して）が登場しても、最低限の挨拶はできるだろう。その辺に到っては心配も杞憂に終わるに違いない。例え未梨が日本の裏側に位置するブラジルにひとり放置されようが、顕著な行動は取らずに無表情をキープしたまま、次の日には自宅で蔵書の整理整頓でもしていそうだからな。

とゆう未梨が不祥事を起こす可能性や、瀬尾家イデオロギーの方面にしか思案がなかった俺は、実際に瀬尾邸を目の当たりにして驚きを覚えられずにはいられなかった。

「……」

未梨が示した反応は眼鏡の縁をくいと上げただけ。それは瀬尾邸に対して示した反応ではなく、ただズレを直していた可能性が濃厚だが、未梨の人間性を尊重して、瀬尾邸のリアクションと受け止めたと思う。

一世代前の時代劇などに頻繁に出ていたような巨大鉄扉が、俺らの前に立ちはだかった。門構えから尋常ならざる異彩を放って

いるが、何故か表札には筆文字で「中村」と記されている。

「仁井哉、早く入んなさいよ」

葉月と未梨は既に扉の内側にいた。お前はいつから名字を「瀬尾」から「中村」になったのだ。

俺は小走りで扉の向こう側に入り、その全貌を目にした。広大無辺といえbigだが、限りなくそれに近い情景がそこには広がっていた。高校のグラウンドと健闘できそうな敷地面積、我が家とは月とスッポン、雲泥の差、比較対象にはならない。細かな箇所まで整えられた庭は茫洋ぼうようと広く、転々と設置されている花壇かだんにはパンジーやペチュニア、その他名称不明な色取り取りの花が百花繚乱ひゃっかりようらんとしている。人工的な池道には清らかな水が流れており、それを縁取るように、蘭らんらしき花が規則的に咲き並んで、風流を感じさせる配列になっていた。清流の終点には石垣に囲まれた水辺に、資産家の象徴とも呼べる錦鯉にしきいが嬉しそうにエラ呼吸に励んでいる。

かたんことと一定のリズムで音を鳴らすつくばいに、未梨は顔の向きを固定しつつ、おもむろに口を開いた。

「……水源、どこ？」

訊たずねる箇所がいかに未梨らしい個性溢れる疑問だ。しかし、俺はそんなことよりここがなんなのか知りたい。しがない1Kのアパートと予想が、ダーツでひとつ隣の的まとを射抜いてしまったように、まるで的が外れている。

「こっちとは反対側に湧き水があるわ。地下水脈がなんとかって言うってたけど、アタシはそっち方面についてよくわかんない」

「そう……」

「湧き水っても大したもんじゃないけど、良かったら後で案内してあげよっか？」

「……うん」

葉月はくるっと身体を方向変換させ、ムーンウォークしながら未梨と相對をする。葉月は訝しげに、未梨は無表情に、お互いに視線を受け止めつつ、何かを探っている様子だ。斉藤風にいえばフラグ

が立ちそうな気配とでも言える。

「ねえ、未梨？」

「……？」

「……なんでもないわ」

そう、と未梨は首を小さく上下させた。

巨大鉄扉から数十メートル進んだところが、とうとう瀬尾邸の本邸。由緒正しき歴史を感じられる木製の引き戸を葉月は不作法極まりなく、乱暴にスライドさせた。内室は外観ほど古風ではなく、西洋風なフローリングが敷き詰められている。まだ玄関だというのに無駄にスペースが広い。ここだけで我が家のリビング以上はありそうだ。

「こっち！」

躰が不十分な子供みたく、葉月は靴を脱ぎ捨てる。そして目の前にある木製階段を二段飛ばしで登っていった。

「お邪魔します……」と、俺。

「………します……」と、未梨。

ツインテールの後に続き、階段を上がる。二階は一階とは一味違い、道幅は我が家と同じぐらいのものだ。しかし、登った直後三叉路が形成されているとなると、部屋数がいくつあるのだろうという疑問が必然的に浮かぶし、どちらに行けばいいのかと悩むのも必然的である。

「こっちよ！」

右手から耳に残る甲高い声が上がリ、見ると扉の隙間から葉月が顔だけを出していた。そしてすぐさま引っ込める。俺は背後に金髪眼鏡ツ娘の存在を確認し、ツインテールの呼ぶ部屋へと繋がる蝶番ちょうつがいを引いた。

一流ホテルのスイートルームを葉月色に染めたようなこの部屋は一体何畳あるのだろう？ 最初に視界に飛び込んできたのは、部屋の2割は占めているオフィスなどに設置されていそうなパソコンデスク。その卓上にあるのは言うまでもなくパソコンだ。それ以外は

特に目を引く品物は存在しない質素な感じに収まっている。

「テキトーに座ってて」

言われるまま俺はその場に座り込んだ。カーペットの質感が高級過ぎるのか、それとも単に俺が貧乏性のだけか、とりあえず落ち着かない。

未梨は座ろうとはせずに、本棚にある蔵書に目を奪われている。

その間に葉月はシングルなのかダブルなのかとりあえずスペースの無駄遣いの天井付きベッドの下から折りたたみ式の簡易テーブルを引っ張り出し、それを部屋の中央に設置した。

「さーて、やるわよ！」

葉月は数学の問題集と白紙のルーズリーフを簡易テーブル上に広げ、奮起一番と意気込みシャープペンシルをさっそうと走らせるが、その勢いはすぐに衰えた。

勉強中に悪いが、そろそろ訊ねてみたいと思う。

「葉月、ここはどこだ？」

「はあ？ アタシの部屋に決まってるじゃない」

「……お前、雪国あつちから引っ越して、緑校りょくこうに編入したんだよね？」

「そうよ。こっちに来てから、まだ三ヶ月弱しか経ってないわよ」

なら、俺の疑問はもっともな物だぞ。遠路遙々緑高へ編入する為、住まいを移したお前が、何故に由緒正しき深い歴史がありそうな豪邸屋敷などを住まいとしているんだ？ 大体表札の「中村」って頻繁に目にする名字は誰だ？

そこら辺について俺が訊ねると葉月は、なんだ、と組んでいた足を投げ出し、頬杖をついた。

「実家よ。ここ、お母さんの実家。おばあちゃんとおばあちゃんの家。「中村」ってのはお母さんの旧姓よ」

ひとつ疑問解決。

それにしあって、随分と立派なお家だな。葉月の祖父か祖母は資産家であることはまあ間違いないだろうし、俺が知らないだけで瀬尾家は高額納税者の御大として世間に流布るふされているのではないの

だろう？

「さあ？ アタシもおじいちゃんについては、よく解らないけど昔はその道で大活躍だったらしいわ。一世代でこんな家建てちゃうんだから、相当でっかい仕事を成功させたんじゃない？」

孫のくせに祖父の偉大な経歴を知らないとは、なんたるゆとりであろう。こんな豪邸を一世代で建てるとは、他人の俺でさえその経緯を訊きたくなる。できれば少し便乗させてもらいたい。

「……本……読みたい」

今の今まで、しようもなく突っ立っていた未梨が自分の気持ちを真摯的に訴えた。読みたきゃ勝手に読めばいいのに、変なところに律儀な無口だな。

「本？ あー、うん。勝手に読んじゃっていいわ。たいしたのはいけど、気に入ったのあったらいくらでも貸してあげるわよ」

「……」

未梨は本棚まで律動的な歩幅で進むと、そこからおもむろに一冊の蔵書を引き抜き、背筋を伸ばしたまま読みふけ始めた。せめて座ればいいのに。

「それで、何の話していったんだっけ？」

葉月は右腕で頬杖をつき、左手で高速ペン回しをしつつ、視線をこちらに戻した。熟練のペン回し者は、統計的に頭がかわいそうな状態になっているという斉藤の台詞が脳裏に過ぎった。葉月が実践しているとなんと説得力があるのだろうか。

「もういいから、勉強してろ」

「……仁井哉、訊きたい事があるのならねー、訊ける状況のときこそ訊ねるべきよ。明日にはアタシの気が変わっているかもしれないし」

そう言って、葉月は回転させていたペンの先端をこちらに向ける。ペンで人を指すんじゃない。

めずらしくもつともらしい雄弁を語る葉月だが、立ち塞がる勉強という名の壁から合理的に目を逸らすため、精神内で折り合いをつ

けただけだろう。しかし今のツインテール論理は、俺の主観で確立している論理と同一していた。葉月と思考レベルが同じなのは業腹だけだ。

「じゃあ、訊くが……なんでわざわざこっちに引越してきたんだ？ 音楽校ならあっちにも曲がりなりにあるだろ？」

俺の問いに、葉月はわずかに表情を曇らした。某ゲームのドキドキ地雷パニックの一步目で地雷を踏んだような気分だ。あれはツライ。

「……そうね。仁井哉の言うとおり、あっちにも音楽を専門としている学校なら、それなりに有名なのもあったわ。けど、ダメ。緑校と比べたら設備が可愛い小道具にしか見えなくなっちゃうし、あっちだと交通の便も悪いのよ。だから、おじいちゃん家から5分で通える緑校を選んだの」

内容はともかく、葉月の湿度90%を記録している表情が、あからさまに隠しエピソードがあることを如実に物語っている。しかしそれを誘導尋問で白状させられるほど、俺は話術には長けていない。だから俺は、

「あ、そう」

としか言いようがない。

心なしか重苦しい空気。話題を切り替えた方がいいな。

「そろそろ勉強に戻った方がいいんじゃないの？」

「……これ、解らないわ」

俺はチラリと読書中の眼鏡っ娘を尻目にしたが、当初の目的など忘れているご様子で本の虫モードに入っていた。このときの未梨は甘味物をちらつかせれば、現実呼び戻すことが唯一可能なのだが、幸か不幸か俺の手持ちに甘味物はない。

「俺が教えてやる」

葉月の背後に回り込み、机上の問題集を覗く。消しゴムのクズがページの間に大量付着しており、印刷されたはずの既存文字までが色褪せている。数学以前に消しゴムの正しい使用方法について教え

る必要がありそうだ。

問1、サイコロで偶数の目が出る確率を求めよ。

「1／2」

問2、サイコロで奇数の目が出る確率を求めよ。

「1／2」

問3、サイコロを2度振るとき、起こり得る全ての現象を求めよ。

「……さんじゅう、ろく」

俺は葉月の隣で共同作業で一問ずつ問題を解き明かしている。

「基礎は出来ているな。一段階レベルアップしてみるか」

問6、サイコロを3個同時に振り、合計の和が「5」になる確率を求めよ。

「……………」

葉月は後頭部をぱりぱりと搔きながら、自慢の脚線美を見せつけるが如く、大胆に足を組む。残念ながら俺の位置からはスカート内部に広がる花園に咲き誇る色を確認することはできないと、葉月に対して想ってしまったことをひとり後悔。日を重ねるごとに、俺のムツリ度が増しているような気もするが、それは疲労による錯覚だとしよう。

「解らないわ。教えなさい」

俺は命令口調に性的興奮を感じる特殊な性癖の持ち主ではないので、葉月の傲慢さはちつともありがたくない。普段からありがたいと思っていないけど。

「それにしても、お前がテストを気にするとは意外だな。赤点のひとつやふたつ取ったぐらいで退学になるわけじゃないんだから、もう少し気でも抜いたらどうだ？」

「退学みたいなもんよ。アタシはね」

まあ、お前は普段から授業態度最悪だからな。テストで点数稼がなければ、退学になるのは必定事項に書かれているんだろう。ご愁

傷さま。

「違うわよ!」

俺の慎ましやかな擲論^{やゆ}に、葉月は声を荒げて反論した。

「アタシみたいな音楽? 特待生? はテストで赤点ひとつでも取ったらその時点で、特待生の権利が剥奪されて、音楽科から普通科に強制移動されるのよ」

「……? 特待生?? お前が?」

「ん? 言ってなかったっけ?」

俺が訊かされたのはお前が音楽推薦で緑校に入学してきたという事柄だけで、特待生などの根源を持っているなんてのは初耳だ。

それで、なんだって? 赤点ひとつで特待生の権利剥奪? カルピスをいちご牛乳で溶媒したぐらいあまあまな特待生制度だな。俺も特待生として迎えてくれないかな。

「仁井哉、あんた人の話ちゃんと訊いてる? アタシは『音楽』特待生。普通の勉強なんておまけみたいなもんよ。本職の方は一般人じゃ三秒で音を上げるぐらい難しいだからね」

誇らしげに無い胸を張る葉月。そのおまけ程度に頭を悩ませている時点で、お前は他の特待生とやりに遅れを取っている現実に気付いていないとは、かわいそうな娘だ。

「赤点で特待生の根源が剥奪されるのはわかるが、なんでわざわざ普通科に移動させられるんだ? 学費を払えばいいんじゃないのか?」

「音楽科にいる人はみんな? 音楽特待生? よ。いくら腕があっても、最低限の知識がなきゃダメってことね。ここら辺は学校の立場として譲れないらしいわ」

なるほど。道理で葉月周辺の温度が3度上昇していると錯覚を起すわけだ。葉月でなくとも強制移動させられるのなら躍起^{やつき}になって勉強する。赤点ひとつで即普通科に更迭^{こうてつ}。音楽に人生を賭ける^{そのみち}葉月のことだ、放っておけば、そのうち、「東大合格」と印刷されたハチマキを巻き付けているに違いない。

葉月は救いようなないバカだが、音楽に対する熱意は、純粹無垢な幼少時代の俺よりも、ひたむきでどこまでも真っ直ぐに進んでいる。これに関しては関心するばかりだ。俺ももう少し環境が違っていれば、立場が違っていれば、？能力？などが無ければ、葉月と同じ舞台に立っていたのだろうか。

過ぎ去りし日々をいくら振り返ろうが、そこに戻れないのが現実。俺の夢の芽は一年前につむがれた。だが、葉月にはまだ未来がある。

「なら、気合い入れて勉強しなきゃな。可能な限り強力してやるよ」
有望な一番弟子が誰もが容易に突破できる小さな壁で、遅れを取るとは師匠である俺がさせない。

問題集をお世辞にも捗ったとは言い難いスローペースで、だが着実にページを消化していき、なんとか一両日中に仕上げさせることができた。どちらかといわずとも文系に属する俺には、さすがに骨が折れる作業で、後半戦はヒエログリフ解読の方が安易に思えてくるほど悩まされたものだ。

「これだけやれば平気だろ。あと三日あるからこまめに復習しとけよ」

「ねえ、仁井哉」

「なんだ？」

「アレ、聴かしてよ」

この台詞に未梨がピクリと反応を示したのを俺は見逃さなかった。葉月のいう「アレ」とは考えるまでもない――

――ハーモニカだ。

心情的には演奏してもいい気分、いや、演奏したい。一年前から自分を抑制してきたタガが外れ掛かっているのか、音楽に対する情念が爆発しそうなほど俄然演奏をしたくなってきた。

しかし、この空間内には、俺の演奏もとい？能力？行使を阻害し

ようとする自称監視委員の未梨がいる。俺が一度ハーモニカを口にすれば、未梨がどんなアクションを取るか解ったものではない。

「……わたしも、聴きたい」

それは予想の範疇を超えた一言。

未梨はこちらに背を向けたまま、抑揚の欠いた声でもう一度呟いた。

「聴きたい」

「ほら、未梨からもリクエスト上がってるんだから、ごちゃごちゃ言い訳しないで演奏しなさい」

理由は解らないが、未梨は演奏を止める気はさらさらないらしい。この際、それが一時的な気紛れだとしても、俺にとってはありがたい。

「……わかったよ」

今日だけは一年間、己に掛けていた戒めを解き放つ。

いいよな？ 未梨？

俺は制服の内ポケットを探り入れ――

「あつれ？」

ない、ハーモニカ、ない。

オーケー、落ち着け、俺。昨晚まではあったはずだ。えーっと、定期検査として分解して、歯磨きを使い部品部品を精緻に磨いて、それから音程が若干狂ってたからリードを削って調整して、組み直してから、そのままベッドに入って――。

「家だ」

「あんた、いつも持ってるんじゃないの？」

葉月は期待を裏切られたと、訝しげに秀眉を寄せる。

「昨日は整備してたんだよ」

久しぶりに火が付いたというのに、これでは示しがつかない。躁状態に近い昂揚感の捌け口はどうすればいいのだ。

「しょうがないわね」

葉月は呟くと、爪先を巧みに使って立ち上がり、天蓋付きベッド

に飛び込んだ。そして枕元から嚴重に包まれた革袋を取り出す。

「これ、使っていいわよ」

投じられた革袋は放物線を描き、寸分の狂いもなく俺の手元へ自由落下をしてきた。中身は予想通りのハーモニカ。まあ、間接キスでぎゃあぎゃあ騒ぐ歳でもないし、このハーモニカは元を辿れば俺の所有物だ。

十年の時を経た^へというのに、その身に宿す銀光は衰えるどころか、より強く逞しく発光を続けている。ここまで状態を維持するには、少なくとも週一の整備は最低限必要で、それを行うにも多大なる執念、愛着が無ければ不可能だ。

「さすが俺の一番弟子。整備の仕方は100点だな」

「誰だって宝物は大事にするもんでしょ？」

ベッドにだらしなく身を投げ出す葉月の表情は、いつになく嬉し^{かお}そうに、可愛らしい笑みを浮かべていた。

「宝物、ね」

「べ、別にあんたのハーモニカだから宝物ってわけじゃないわよ！勘違いしないで！」

軽くからかってやると、葉月は頬を赤らませた。普段はツンツンしているのに、時折みせる純心さが可愛く映るのは、葉月限定仕様であろう。

「そ、そうだわ。未梨もこっち来なさいよ！聴くんだったら座って聴いた方が三割増しで上手く見えるから！」

ツインテールに促されるまま、微動たりしなかった金髪眼鏡っ娘は律動的な歩幅で俺を横切り、ベッド上に腰を下ろす。

葉月は好奇心が疼^{うず}いている様子。

未梨は背筋を伸ばし、慎ましやかに聴く態勢を敷いている。

俺は嘗^{かつ}て無いほどの昂揚感が満ちあふれていた。

一年分の反動、胸が高鳴る、全身が熱い。

今だけは何も気にする必要はない。己の意志が赴^{おもむ}くまま、想いを音に込めればいいんだ。

そうだよな、俺？

「なあ、未梨」

「なに？」

夜のとりも落ちたのはいつのことやら、等間隔で並んでいる外灯が無ければお互いの顔すら確認できないほど夜道を俺たちは歩いていた。

「なんでとめなかった？」

数時間前、俺は葉月の目の前でハーモニカを演奏した。未梨^{みり}曰^いわく俺が楽器を演奏する、すなわち？能力？を行使する事で発生する音波が他者になんらかの影響を与える可能性があるのだという。それを事前に防ぐのが未梨の役目。

「わたしも、聴きたかった。ニィの演奏」

「悪影響を及ぼす可能性があるんじゃないのか？」
その中で演奏した俺も俺だが。

「……」

数秒の沈黙後、

「……なんとなく、へいきだとおもった」

舌足らずのような喋り方で未梨ははっきりと言い切る。

平気だと思った。だからとめなかった。

笑ってしまう。

「楽観的だな」

「そうかも、しれない」

未梨は抑揚のない一定の音程で呟くと、俺の空いている左手を掴みかかってきた。冷たい、体温が感じられない。その行動に俺は感慨を覚えるわけでもなく、拒絶するわけでもなく、ただ握り替えしてやった。沈黙も心苦しくはない。

「テスト明けには、牛丼でも食べにいくか？」

俺は脳裏に過ぎった言葉をありのまま口にした。

「うん」

大食いツインテール、ついでに斉藤も連れてってやるか。龍円寺さんがいれば、牛丼ひとつで盛り上がりそうだな。

「うん」

そういや、葉月と龍円寺さんはお互いに面識があんまないよな。まあ、あのふたりなら和解するまで大した時間は掛からないか。

「うん」

メシ後にはボーリングだ。未梨との勝負はまだ終わってないぞ。再戦だ。次こそは俺の勝利に終わる、いや、終わらせる。覚悟しとけよ。

「うん」

俺の世界は一般人と比べればひどく変わっている。ヘンテコな？能力？が存在してたり、今までの幼馴染みだった奴が実は特務機関という胡散臭い組織に所属していたり、間接的に生命の危機に陥ったときもあった。

そして自分の意志に背を向け、大切な物を失い、俺の世界はあつけなく崩壊をした。最近になって悔恨の念を覚え始めたが、過ぎた時間は二度と戻らない。

もう後悔はしない。

だから――

俺は今の時間を大事にしたいと思う。

5-2 ツインテールとハーモニカ（後書き）

高一最初の数学って確かこんなもんだったような気がする。と作者の私のイメージなので違うかもしれませんが。

登場人物紹介をリクエストされたので、軽くまとめてみました。
かなりテキトーです（笑）

本編登場人物

・結構主要人物たち

仁井哉——本編の主人公。愚痴り屋。意外にロマンチスト。楽器を操る能力を持つ能力者。能力の繊細は不明。

椿未梨——ヒロイン。仁井哉が引越してから幼馴染み。無口、ロリひんぬー。特務機関派遣監視委員。遺伝子レベルをどーのこーのとして人外の身体能力を引き出せる。それ以外は繊細不明。伶俐な頭脳の持ち主だが、変なところで抜けている。

瀬尾葉月——一応ヒロイン。素直になれないツンデレ、ツインテール、救いようのないバカ、ロリではないがひんぬー。音楽推薦で特待生としてやって来た仁井哉の幼馴染み。運動神経が以上に高い。

龍円寺うらら——影のヒロイン。緑校で彼女にしたいランキング

一年部門でナンバー1。はっちゃけてる。思考が読めない、彼女の取る行動は一貫性が無く、いわゆる不思議系。斉藤曰く「普通の存在」ではないらしい。

斉藤——入学して初めて出来た友達？ 普段はただのエロオタクだが、意外にめざとい切れ者。欲望に忠実な子。その実体はIQ150を超える天才児なのだが、周囲からはバカとしか見られていないかわいそうな子。

愛沢さん——童顔なアニメ声の持ち主。妹喫茶では全体の売上に4割以上貢献している。未梨と同居するどこか抜けている使用人。使用人というのは名ばかりで、一日の大半はゲームで過ごしている廃人。年齢は不明。

愛沢あいさわ滋——結構な童顔な、いい男。長身瘦躯、常に笑みを浮かべる気味悪い男。特務機関派遣戦闘委員、精神エネルギー変換系「水素原子操作」。繊細は不明。

・脇役。せいぜいががんばってほしい。

田村——忘れられているかわいそうな子。後々出る予定はある。出来れば存在を消したい。

荒木——中学時代の仁井哉の親友。どこことなく斉藤と類似した点があるが、こちらは本物のバカ。出演は未定。

るり（斉藤の姉、偽名）——話し方がルー大柴を酷似している。時折、沖縄の方言を使う。

以上こんな感じです。番外編の登場人物はまた後日。

あと、お勧めの読本があったら是非是非、情報を提供してください
い（笑）

では、また近いうちに。

5-3 ケ・セラ・セラ

どれほど計画的かつ深謀遠慮しんぼうえんりょの超完璧人間だろうが、何事も計画通りに進むわけではなく、忽然こっぜんと勃発ぼつぱつするトラブルや複雑な人間関係により予定調和が破綻されるパターンもぽつぽつとある。そう、人生なんて必然に身を委ねたほうが、意外にうまく世渡りができるというものだ。

なので、窓一枚を隔てとして、広がる景観を眺めつつ、愛沢滋あいさわしげると繰り広げたとんちんかんな珍問答を忽然と思い浮かべるのも必然かつ必定といえよう。このような前置きをした上で、さっそく回想シーンに入るのであった……

……

……

…

物語は一ヶ月前、殺人未遂の前科一犯を保持する愛沢滋の闖入さかのぼまで話は遡さかのぼる。

奇跡的な現象を顕在化させる？能力？を、惜しむことなく猛然と振るい、指輪という呪いのアイテムを浄化してくれた。胡散臭いが、俺の命を一方的に救ってくれたらしい。だいたい滋は機関かいりから乖離かいりした身の上なんだろ？機関を裏切つて起きながら機関の命令で俺を救護しにきたとは話の辻褄つじつまが合わない。再就職でもしたのか？

しかし俺がもっとも欲する情報は滋の身の上話などではなく、未梨家の使用人、つまり愛沢さんと滋の関連性だ。兄妹とさりと紹介されたが、そんなんじゃないやあ納得いかん。

「愛沢さんとはどんな関係なんだ？」

「兄妹ですよ……」

それが信じられんと言っているのだ。

「もしかして、キミは妹に対して恋心を内に秘めているのかな……」

？ フフ……それは実に喜ばしいことです……キミが妹と結ばれるとなると、僕はキミの義兄だね……。呼称はお義兄さんでいいよ……」

俺は何も答えずに滋を一睨みした。が、無機質な笑顔はある種の重圧を存分に放出しており、直視はできない。くそ……未梨の無表情以上にミステリアスな雰囲気を漂わせている奴だな。取っ付きにくい。

「冗談だよ……」

滋は大仰に肩をすくめる。

「……それで……具体的に妹の何を知りたいんだい……？」

具体的にと訊かれると、漠然と広範囲の疑問しか思い浮かばない。そもそも俺は愛沢さんのフルネームすらを知らないんだ。その段階で深層部分に探りを入れるというのは心情的に不作法、てゆうよりそうでないと俺の気が進まないだけだが。

「……ファーストネームを知らないなんて……昵懇じっこんの間柄と風の噂で訊いたのですが……」

そんなたいそうな名称の付く間柄になった覚えは記憶上に記されていない。俺にとって愛沢さんの関係は、いわゆる頻繁ひんぱんに行動を共にする仲の良い友人の母親的な存在であり、顔を合わせれば他愛もない会話を二言三言交わす程度なものだ。いくら無二の親友だろうが、そいつの母親の名前を訊ねることはそうそう無いだろうね。

「つくづくキミはユニークな思考の持ち主だね……。僕はキミの？能力？よりもキミの人間性に興味をそそられます……」

背筋に悪寒おかんが走るような台詞をさらりと言ったのけた滋は、勉強机に散らばっていたルーズリーフとシャーペンを手にとると、淀みない手付きで何かを書き始めた。その行動に懷疑心かいぎを抱く前に、一連の動作を終えた滋は、巧みな手捌きたくでルーズリーフを放ち、俺の眼前に滑り込んできた。

「あいさわ、こい？」

愛沢恋。

ルーズリーフに記された文字をそのまま音読してみた。これが愛沢さんの本名なのだろうか？ 小学生時代に「恋は恋をしたことある？」と級友たちに冷やかされているシーンがいやおうなく思い浮かんでしまう。

「恋れんですよ。妹の名前は愛沢恋あいさわれん。恋こいと書いて恋れんと読みます」

難訓な漢字だ。間違っておいてなんだが、なかなか良い名前だと思う。そういえば妹喫茶に精を出していた愛沢さんのネームプレートは「れん」だった。間違っても、本名を晒すはずないという普遍的先入観の裏を突いた作戦。なわけがない。

何の気無しにルーズリーフを裏側を覗いてみれば、「れんプロフィール」とでかか記載されて、その下方には愛沢さんの身体的プロフィールらしきものが併記されていた。その中でも脊髄反射の如く、目が行ってしまった項目は、「年齢」だ。

24歳。

いつまでも天然キャラやってないで、そろそろ一生涯を共にする男性でも捜した方がいいんじゃないのか？ 童顔だからといえど、十年後も天然続けていたら收拾がつかなくなるぞ。

「兄としても、妹には幸せでいて貰いたい……」

滋は窓越しにある荘厳のマンションを見詰めている。

「……結局のところ、愛沢さんも人間離れた機関とやらの一員なんだろ？」

「それは違います」

確信が外されたが、内心ちょっと安心した。

「機関れんと恋、双方の関連性は充分にあります、それでも妹は機関の一員ではないよ。今となっては、妹もしがない使用者……その方が妹にとっても平穏で幸せなのでしょう……」

意味深で間接的表現では概ねの事情を把握した者でないと解るわけがない。

「残念ながら僕にはこれ以上深い部分についての情報を提供出来ません。ああ、勘違いしないでください。出し惜しみをしているわけ

じゃありません。『語らない』のではなく、『語れない』んですよ」
なんだ、それは？ 秘密結社特有の外部に漏らしてはならない情報なのか？

「……命を賭けてまで愛沢さんの正体を暴きたいわけじゃない。愛沢さんは愛沢さんであることが変わりないと解っただけで充分だ」

「……キミで良かったよ」

「なんのことだ？」

「フフ……なんでもありません……いや、個人的な依頼いがんなんですけど……聞き入れてくれるかな？」

内容次第だな。

「妹と……恋と……仲良くやって下さい」

それから俺はといえば愛沢さんをお目にしていない。会う暇が無かった訳ではないが、俺は前々から愛沢さんに対して多少なり苦手意識を持っている。しかしその意識も最近になり、ようやく落ち着いてきた。それでもいざ行こうとなると気が引けてしまう。

根本的にチキンなんだな、俺は。

試験終了一週間後。

思い返せば試験は地獄を絵に描いたような日々だった。至極当然しごくとうぜんだが、俺は地獄に旅行をした経験がないのが実情なので、この場合の比喩ひゆは一般的に人間が浮かべる普遍的地獄のイメージを想像して貰いたい。いや、それだと「地獄のような日々」みたいなものを実際に過ごしていたら、一日で過労死をしてしまうことになるな。まあ、そこは言葉の綾あやということで、寛大かんだいに受け止めて欲しい。

まあ、どうでもいいか。

何故俺が試験を地獄と定義させた事情を事細かに説明をすれば、試験前日のホームルームに入学当時から固定されていた席を変える、

要約すれば席替えをする、「まあ、そろそろ夏だし、お前らも席替えしたいだろ！」という担任永田の軽薄な一言が全ての因果だったのだ。だいたいだな、夏Ⅱ席替えの定義がどのように確立したのか、そこに到ったまでを経緯をぜひ補足して貰いたい。

という批判は、席替え後の今現在だから言える事柄であり、その時の俺はツンツンツインテールと、肉眼では確認できぬプレッシャーを発する眼鏡ッ娘とのサンドイッチにならなくて済むと内心ほくそ笑んでいた。結果的には葉月と未梨は、俺と大分離れた位置に属し、更にほくそ笑んだいたのは、今となっては墓場まで持って行きたいトップシークレットである。これもどうでもいいか。

問題視する点は、俺が窓側最後方の席に決定付けられたこと。それが発端だ。はったん

一見、教師からも迫害はくがいされる可能性が少ない絶好の昼寝ポジションで、義務教育段階の学生たちからは羨望の的と思われる。実際、俺もそう思っていた。

しかしその考えは担任永田と同レベル、浅はかだった。

6月に突入した途端、関東地方一帯は太平洋高気圧の惜しみなく活動ぶりが原因で、梅雨の発生原因となる梅雨前線ばいうぜんせんの存在を綺麗さっぱり跡形もなく相殺し合い、もう一週間近く真夏日を記録している。我が校のカーテン生地は限りなく薄く縫製されており、遮光というカーテン本来の責務を果たしておらず、窓際族である俺はこたつヒーターを押し当てられたような暑さのなか、テストに打ち込んだ。集中できるはずがない。穴という穴から汗が噴き出し、よもや答案用紙に染み込み記入した文字がうっすら消えていたなんて事態は珍しくはなく、修正しようにも紙質がとろろ状に変貌しては再びペン入れする学生らしい慎ましやかな行いもできなかった。同じ窓際族先頭を陣取る未梨は発汗機能が備わっていないのか、現代っ子特有のクーラ病なのか知らんが、涼しい無表情をキープ。まさか制服のポケットに保冷剤詰め込んでいるんじゃないだろうな。

そんな青春の1ページのモノローグも終わり、全ての答案用紙

を返されたのが今日である。テスト結果は一夜漬けとは思えぬ健闘
ぶりで、たとえるのなら、曙太郎 あけぼの V S チェ・ホンマン第三戦ほ
どの大健闘ぶりを俺は見せてしまった。ちなみに俺は曙サイドね。

世界史、おれのじだい。
歴史、ぐれーとにすごい。

国語、なかなか。

英語、けっこう。

政治、まあまあ。

数学、せーふ。

理科、かみひとえ。

体感温度40度だったあの最中^{さなか}に、これだけの点数が稼げれば、
俺の知識の豊満さに自己賛美をしても誰かに咎められたりはしない
だろう。俺って頭良い。

「どうだった？」

相変わらずツイインターの葉月が俺の机上に腰を下ろし、テスト
用紙を目の前にちらつかせてきた。この調子だと葉月もセーフなの
だろうが、一応確認ということで訊ねてみたい。

「お前こそ、赤点はないのか」

「あたり前田のクラッカーよ。思ったよりデキが良かったわ」

おめでとさん。あれだけ教えたんだから結果を残してくれないと
こちらも報われない。

「で、アンタはどうだったの？ 総合順位何位よ？」

しよせん順位などは上位者のやる気を煽^{あお}る材料になり、下位の方
々には絶望感を植え付け、容赦ない縦社会の辛辣さを身体に染み込
ませるための教育委員会の裏陰謀で、それほど重要視される要素は
含まれていないのだが、誇れる功績を残した俺は自慢の意を込めて
言ってやりたい。

「101位だ」

一学年に四百近い生徒数が在学する緑校では、それなりに誇れる
順位だと俺は思っている。

「へえ、仁井哉って結構できるのね。意外」

話の流れ的には、ここで俺が「お前は何位だ？」とか訊いてみるべきなのだろうが、その発言は出来るだけ控えたい。赤点ゼロの葉月とはいえ、順位はかなり低い位置に存在しているに違いないからだ。なんせ視界にちらちら入るツイントールの試験結果に50以上のものがないんだから……高校生もときに空気を読むことは必要である。

時は変わってその日の昼休み。

試験結果により統計された平均偏差値トップ100が昇降口の特掲掲示板に張り出された、という情報が転がり込んだのだが、他人の良い成績を見たところで優越感浸れるわけでもなく、むしろ劣等感が鬱積するだけだ。そもそも俺の順位は101位で記載されていない。少ない体力のなか有意義な学校生活を送るためには野次馬の広がる掲示板付近よりも閑散とした教室でお茶するのがいいのだ。そんな俺の人道とまたしても利害が一致したひとは斉藤である。空いた前席に腰を下ろしている斉藤は身体の向きをこちらに固定しつつ、ごましおの掛かった白米を口内へ掻き込んだ。

「やっぱ、お前は俺と似ている。なにもこのくそ暑い中他人のテスト結果を見るためわざわざ出向く必要はないのにな」

なんとか言っていた斉藤だったのだが、放課後、帰宅ついでに未梨と特大掲示板を覗いてみるや、

1位、齊藤祐樹	(偏差値平均	70.9)
2位、椿未梨	(偏差値平均	69.9)
3位、………	(偏差値平均	65.7)

「……」

我関せず、中学時代学年首位の座を死守し続けてきた未梨だが、二位という結果を目撃しても、いつも通りの超然とした無反応。むしろ、俺の方が動揺を隠せていない。

そりゃあ日本も広いし、いくら中学で学年主席をキープし続けた未梨とはいえ、高校に入れば敗北を喫する可能性だって充分にある話だ。しかし未梨に初黒星を付けた相手が斉藤ならば、話は火曜サスペンスと金曜ロードショーの目指している物ぐらい別物である。教師の目をかいくぐり、巧みな工作を行ったに違いない。本来の斉藤の実力では、保健体育以外は平均以下でないと俺のイメージがそぐなわれる。

「……ニイ、帰宅、する」

頭ひとつと半分下からこちらを覗き込む未梨は、この順位について何の感慨も覚えていない様子で、袖口をくいくいと引いてきた。

「悔しくないのか？ 斉藤に負けたこと」

未梨は小さな疑問符を湛え、

「なんで？」

と、摩訶不思議そうに（実際は無表情だが）言った。

「斉藤は、聡明、老獪、伶俐。わたしが勉強で勝利する見込みはない。今回は程度が低い問題、だから、わたしは彼と比較的近い位置に立てた」

その事実を全力で否定したい。絶対的過大評価だ。伊達眼鏡を掛けているから対人認識能力が毫碌しちまうんだよ。たとえ斉藤がマジモンの天才児で、それが認めざるを得ない真実だとしても、俺は認めない、認めたくない。斉藤といえば、放送事故では済まされない猥談を時と場所を弁えず、唐突にふっかけてくる生粋ハレンチ野郎だぞ。このまま解脱をせずに時を過ぎたら、近い将来は確実にR-18な卑猥なデータでハードディスクを埋め尽くしているに違いない。

まあ、斉藤といえど所詮は他人。しったこっちゃねえ。せいぜい斉藤が性犯罪を起こしたときは、「そんな事する人じゃなかったんですけど……」ぐらいの弁護はしてやる。

熱帯夜を超越した熱帯夜。眠れねえ。

そんなときは無理に眠ろうとはせずに、窓を全開に開放し、外部の空気を吸うのが一番効果的なリラックス方法。しかしそれは眠気を誘うものではなく、どちらかといえば眠気を吹き飛ばす手法である。空気を吸って脳内がすっきりと覚醒したのは計算通りだが、目が覚めてそれから行う計画性あるもよしなどは一切ない。

時刻は23時を回っていた。

「……散歩もいいだろ」

夜風に当たりながらほどよい倦怠感けんたいかんを与え、快楽くわいらくを誘う睡魔を喚起する。我ながら完璧で抜かりのない作戦だ。

俺はクローゼットから適当な服を見繕みつくろい、寝静まった我が家を後にした。放置家庭なのだから、手紙を書き留めておく必要性もないし、携帯は一応持ったのだから緊急時にはコールがくるだろう。一週間音沙汰無しでも、警察に届けを出すとは思えないし。

深夜に徘徊。コンビニ以外の店舗が律儀に開店しているとは思えない。まあ、もともと行く当てなどひとつに絞られているんだけどね。

そう淡々とやって来た場所が山の頂上の森林公園である。散歩のつもりだが片道に30分費やしては、もはやメタボリックシンドローム対策のウォーキングである。ウェストが80台に乗った直後から、メタボ予備軍だというのだから、油断できたもんじゃない。

公園の中央に設置されている噴水もお休み中らしい。噴水だって誰もいない公園で深夜営業はしたくないだろう。

俺は自動販売機で冷えたミルクココアを購入し、住宅街全貌を俯瞰かんできるベンチに腰を下ろした。普段は「地上に浮かび上がる星々」とでも名付けたくなる素晴らしい景観も、時間的に寝静まった住宅街では、奈落の谷底でも覗き込んでいる気分、変な恐怖心に駆られてしまう。ここの辺の住民たちは平均就寝時間が早いのか？ 健康的なのは構わないが、ノスタルチックに浸りたい俺の気持ちをもう少しだけ察して欲しかった。いかんせん、傲慢な思考はよろしく

ない。

「仁井哉さまー？」

聞き覚えのあるアニメ調の声に振り向いた。

愛沢さんがいた。

心臓の鼓動が、脈動が、たかなさつおみ高柳光臣に引けを取らないぐらい速くなつた。

「……愛沢さん？」

「やっぱり、仁井哉さまですなー。お久しぶりでーす」

愛沢さんは俺の隣に腰掛け、抱きしめたくなる笑顔を振りまいていた。着衣しているノースリーブの白ワンピース、しかもフリフリフリル。それが物理的な意味で周囲を明るくしているような気がする。

思考を通常状態まで復旧させるのに予想以上の時間を費やしてしまった。

こんな深夜の公園で愛沢さんと邂逅かいこうするとは、裏で何かの陰謀が働いていると疑いたくなる。しかし今日の俺の行動は誰かに仕向けられたものではなく、自発的、なおかつ気紛れにより突如決行した散歩だ。だいたい第三者の陰謀と選択肢が思い浮かぶ俺は、なんたる被害妄想か。

「仁井哉さまはー、どうして公園に来たんですかー？」

「夜風に当たろうと思っただけですよ。愛沢さんこそ、インドア派じゃないんですか？」

愛沢さんは小動物に引けを取らない愛くるしいふくれっ面を上手に作り上げ、俺をぽかぽか叩いてきた。痛みはない。周りに集まる女子たちは今ひとつ女の子らしさに欠けるからな。愛沢さんの女の子らしさが身に染みる。

「わたしはー、引きこもりじゃないです。未梨さまの使用人でーす。毎日毎日、掃除、洗濯、家事、ゲーム、昼寝、ネットサーフィ

ン……えーっ、アルバイト、で大変なんですよー」

全世界の使用人に謝ったほうがいいですよ。とでも反論したいが、ここは最大限譲歩して、愛沢さんの意見に賛同しとくべきだな。

「忙しそうですね。すみませんでした」

言うのと、俺の思惑通りに愛沢さんはすこぶる機嫌が良さそうに微笑んだ。

「えへへー、そうでーす。わたしは多忙^{たばい}極まりないのでーす」

愛沢さんに気を遣うことで、俺の話術スキルが退化していく。

「それで、なにしにきたんですか？」

「なにしにきたんでしょー？ わたしにもわかりませーん」
ちよっと張り倒したくなった。

「ただー、高いところに来なくちゃいけないような気がしたんでーす」

「……神様からお告げでもあったんですか？」

「そんなよーなものでーす」

俺の手の甲が、白皙の手に包み込まれる。それは病人が見せる色白さではなく、一部の選ばれた女性のみ身に付けることのできる健康的な白さ。その手が綺麗な花卉だとしたら、それを伝う腕は茎のように細く、一握りすればよからぬ方向に折れてしまいそうだ。

愛沢さんは俺の手を握っていることなど素知らぬ様子で会話を続ける。

「仁井哉さまはー、学校で彼女とか出来ましたかー？」

貧相な容姿とひん曲がった性格の都合上、残念ながら彼女不在です。

「仁井哉さまの通う高校の女の子は見目がありませーん。わたしから映る仁井哉さまは、とてもカッコいいですよー。性格もー、容姿もー」

赤面するような台詞を平然と言ってのけるその精神を誉めあげたいが、天然たる愛沢さんにとってはなんともない一言なのだろう。
天然の特権だ。

「じゃあー、仁井哉さまから見て、気になる女の子はいましたかー？」

漠然とふたりほど思い浮かんだ。

無意識的に気に掛かるのが葉月。

ミステリアスで謎が多い龍円寺さん。

「そうですね……「気になる」という点に置いては、ふたりほどいますけど、それは決して恋愛対象としてじゃなくて、人間として気に掛かるとゆうか……放っておけないとゆうか……」

「じゃあですねー、女性として気になる女ひとはいますかー？」

さっきから恋愛沙汰についてだな。クラスの女子もそうだが、他人の恋沙汰がそんなにおもしろいのか？

「いませんよ」

とか思いつつ律儀に答えている俺もなんだけど。

「ほんとーですかー？」

「本当です」

「ほんとに、ほんとーですかー？」

「本当に本当です。次からエンドレスで続くのはやめて下さいね。本当にいませんから」

半ば開いていた口を閉じた愛沢さんは、ごまかすように浮かべたはにかんだ微笑みは写真に活写し永久保存をしておきたいところだが、あいにくカメラは持ち合わせていないので、網膜にでも記憶の続く限り焼きつけて起きたいと思う。

「えへへー、仁井哉さまは彼女がいないのですかー。可愛いそうですー」

今世紀を代表する無限大の笑みを湛ながら、俺のモテない経歴を嘲笑っている。いや、嘲笑ではなく、無邪気な笑いだ。またしても天然の特権か。そんなに俺に彼女がいないのが不思議か？ 自虐ではないが、俺は部活に所属していないし、スポーツもイマイチ、黄色い声援を浴びるような容姿もなければ、これといって誇れる特技はない。積極的に女子の目を引こうと行動しているのならばまだし

も、俺のような人間に好き好んで寄って集る物好きな女子などそう
そういないであろう。

……ちよつと憂鬱になった。

「わたしも男性とお付き合いした経験がありません。一緒にいます。
同類です」

愛沢さんほどの容姿なら「キミの身体はヴィーナスより美しく、
キミの双眼はこの世にある全ての鉱石よりも燦然と美しく、キミの
髪一本一本は最高級カシミヤよりも希少価値がある」みたいな台詞
をどっかのナルシーに仄めかされたりされた経験があるのではない
だろうか？

「けど、愛沢さんならいい人が見つかりますよ」

気休めではなく、本心から言っただけ。それだけの才能が愛沢
さんにはある。

しかし俺の言葉に何故か愛沢さんは俯いてしまった。

地雷は……踏んでいないはずだ。

「あ、あのー、折り入ってお願いがあるのでーす」

「……改まって……なんですか？」

こちらを見詰めてくる愛沢さんの瞳は、力強い燐光を纏っていた。
人生の岐路に立たされたような決意表明さがにじみ出ている。

「わたしと、こ、交際してくてくださいーい！」

気休めはいいですよ。真面目に抗鬱剤が欲しくなりますから。

「冗談でこんなこといいませーん！」

声音は脳天気のままだが、手を握る力が強くなった。

「仁井哉さまを想う気持ちならー、誰にも負けないです。未梨さ
まにも、誰にもー。わたしは本気で仁井哉さまが好きですよー。大
好きです」

「本気ですか？」

「すこぶる本気でーす」

声音と表情だけで判断すれば、これはタチの悪い冗談と結論づけたいところだが、冗談にしては真摯の過ぎるし、そもそも愛沢さんは冗談と真面目を複合させたような存在の天然なのだから、これは本気なのだろう。

これは、告白？

年上のお姉さんから。しかも可愛い。可憐、ビューティフォー。

思慕な心意気をしばしば感じていたが、まさか未梨家の使用人をメロメロにさせていたとは、俺も隅に置けない男だ。いやいや、一旦現状を整頓するべきである。愛沢さんはなんと言った？俺のことが大好き。いやー、それは困った。アメーバが俺の腕を捕縛した時以上に困った。

「ダメですかー？」

落ち着け、落ち着くんだ、クールになれ。焦燥に駆られたときの対処法については未梨家の蔵書のひとつにあったはずだ。素数を数えるのではなく、まともな手段を、記憶を呼び覚ませ。

……焦っているときは、呼吸回数が極端に減っている。なので、深呼吸を数回行った後、物事を整理しましょう。

実行する。落ち着いた。

だがどうしようもない。

「俺の……どんなところが好きなんです？」

最悪だ。この質問は男として底辺の位置に属する女性経験無のチエリーボーイの台詞だ。真実だから正のしようがないが、とりあえず最悪な質問を愛沢さんにしてしまった。

「優しくてー、強くてー、あと、たまーに見せてくれる笑顔がわたしは大好きでーす」

そんな汚れない無垢な瞳で凝視されたら、反射的に頷いてしまいうそだ。

「あ、えー、あの、ちょっと待って下さい」

この手の対処法については俺は素人同然だ。愛沢さんを傷つけず、どう断るか――あれ、俺は断る前提で考えているのか？ 愛沢さん

の懇願を拒む理由は皆無。しかし受け入れる理由も、また無い。優柔不断と呼ばれたければ勝手にしろ。実際にそうなのだから。

俺にとって愛沢さんの存在はどの程度のものか？ 考えるまでもない。幼馴染みの家に寄生する居候並の童顔使用人だ。一日をゲーム費やしているわりに上達速度はめっぽう遅い。最近になってバイトをし始めたという。そもそも使用人の役職でバイトというだけで言語道断だが、さらに勤務先が妹喫茶といかがわしい風俗店の延長線上にある店なのだ。

いや、今のは単に愛沢さんのプロフィールであり、決して俺が愛沢さんに対して持っている認識でない。

化粧気のない白皙の顔は少しだけしゅんぼりうつむきがちである。美人というより可愛いに分類される愛沢さんだは、どのような感情を表情に湛え^{かお}ようが、断トツに可愛いのは揺るぎない事実だ。

可愛い、は理由？

「仁井哉さまー……」

ぎゅっと、俺の手を握る力が強まった。

目尻に涙を浮かべてきた愛沢さんは、心の均衡を保つのでさえもう限界に近い。しかし俺は不謹慎ながらもその表情を可愛いと思ってしまった。

最低だ、品性が卑しいなんてもんじゃない。一酸化炭素大量摂取して、今すぐ死にてえ。

「ぐす、わあしなら、ぐす、へいき、ぐす、ええす」

愛沢さんは断続的に鼻吸りながら、呂律の回っていない言葉で必死に想いを伝えてくれた。笑顔を舌つ足らずが特徴であり、チャームポイントとセールスポイントでもある愛沢さんが、その杵を踏み出してまで想いを伝えてくれた。

いい加減、目が覚めてきた。

俺はそれをどう受け取った？ 愛沢さんを傷つけないよう着飾った台詞を必死に思案をしていた。

違う。愛沢さんを傷つけない台詞ではなく、俺が傷つかない台詞

を考えていたんだ。

身の上を案じていた。自己保身。俺は「自分」という枠内で物事を収めようとしていた。

バカか、俺は。

交際経験があつたら、恋愛に関して知識があつたら。そんなもん関係ない。

愛沢さんは俺を「男性」として懸想を掛けている。俺は愛沢さんを「愛沢さん」としてしか見ていなかった。

「俺は……」

俺は今日この時だけ意識的に描いた境界線を踏み出し、愛沢さんを「愛沢さん」とではなく、愛沢恋という「女性」として想いを伝えたい。

「……好きですよ、俺も。女性として愛沢さんのことが」

5-3 ケ・セラ・セラ（後書き）

もう今回の話こそデウスエクスマキナと呼ぶにふさわしい。作者の私でさえ展開が読めない。そもそも先週までは葉月を出そうと思っていた。ここで断っておくが愛沢恋はヒロインではない。だが、私はとても気に入っているので、ヒロイン並の優遇をしよう。加筆修正に一週間の時間は尽くしている。そして投稿した後にも加筆修正をするだろう。ひとつ納得いかない箇所があるが、今日はうまい訂正案が思い浮かばない。思い付いたら修正するでしょう。

私には文才がない。寝違えて首が回らない。首の痛みが頭に遷移し、熱が39度になった。熱は回復したが首の痛みが悪化した。うがいすらできない。I pod を落とした。拾い主がいたら返してほしい。大変なものを盗んできましたがエンドレスリピートになっていると思うと多少心配だ。首以外のことも回らない。

次話は本編ではなく番外編だ。いわゆる愛沢恋の過去物語。こちらのほうはルーズリーフを両面8枚埋め尽くしたプロットがあるの心配はない。プロットというより既に完成した物語である。しかし早速プロットから逸脱しだしている。もともとアリアの初期設定はエリスだった。やはり心配だ。

鬱だ。

NHKによるこそを読んでからどうも鬱気味だ。しかしそこには私が目指す小説スタイルに近いものを感じられ、非常に参考になった。だが、将来の自分がそこにいるようで鬱だ。とりあえず首が回るようになってほしい。

今回のあとがきは総合で一番長い。

ちなみにサブタイトルの意味は「なるようになれ」。

まさに私の人生。

では、また近いうちにお会いしましょう。

次話は元のキャラに戻っていると思われる。

other Episode 03::Fearful Shadow (前書き)

これは本編より十年前のお話。
まだ仁井哉が幼稚園生だった頃。

特務処理機関の構成員 《ガンズリンガー拳銃屋》、愛沢恋の物語。

暑さ寒さも彼岸まで。^{ひがん}

摂氏三十度を超えた日々もようやく終わりを告げ、時は十月の半ば。一年のうちで一番人間が過ごしやすいと感じる秋である。

二ヶ月前、右腕圧迫骨折も回復に向かい順調に邁進し、ギブスも外れたのも丁度この頃である。完全復活——とまでは行かないものの普段の生活に差し障りがない程度に右腕が稼働するようになった。質素なセーラ服に身を包み込んだ愛沢恋は、授業中にも拘わらずうらかな陽気に誘われうつらうつらと首をガクンガクンさせていた。授業などはあくまで学校に付随するいわばおまけのような存在。本来、学生の本分は勉強にあらず、級友との交友を深め合い信頼の地位を確立する事にある。恋はそんな固執的な考えを頑に振興し、将来の自分から目を逸らしていた。全く以て生粋ダメ人間である。

そのような貧相な思考でも、恋が普段の状態ならば「普通」の中学生として忙しくノートに板書はしているはずだ。今現在の恋はノートを板書したくとも出来ない状態。恋は心身ともに憔悴しきっていた。

原因として考えられるのは、先月から急遽同居する事となったアリアの存在が九分九厘を占めている。彼女が来てからは恋の悩み事は跡が立たず、口内炎のように完治したと思えばまた発症、時には治ってもいないのに二個目の口内炎発症、煩悶も矢継ぎ早に発症する。そして同居生活一ヶ月経った今でも消えない悩みが恋にはあった。

生活費だ。

主に食費のみで貯金は宇宙空間にでも吸い込まれるように無くなっていく。一日の学業を終え、帰宅を果たし、居候たるアリアと顔を合わせれば、腹が減った、空腹だ、などの飢餓感を訴える台詞が

ンリーだ。アリアの食物摂取量は常軌を逸していた。一日で米十合の浪費は当然の如く、その他総菜などの副食も含まれるので生活財政は早くも緊急事態。こっそり溜めて置いた貯財で上手くやりくりしても、そろそろ資金残量が底を尽きる。

ただでさえ追い込まれた恋に追い打ちを掛けるように、アリアは食器、壁、挙げ句の果てにドアノブまでを一捻りで破壊してくれた。頭こうべを垂れて大家さんを懐柔することには成功したものの風来坊たるアリアが来てから恋は心休める日は訪れていない。

疲労困憊の恋には授業終了の鐘が鳴っている事態に気付かず、今だ首をガクンガクンさせていた。そこに光輝を身に纏った女子学生が光臨し、恋の比較的矮小な身体を小さく揺すった。

「恋ちゃん。もうお昼ご飯だよ」

ぐらぐらと感じる振動に恋は重い瞼まぶたをゆっくりと開け、セーラ服の袖口で目尻こすを擦る。

「ふわあ……。もうそんな時間でしたか。ご忠告恐れ入ります」

「なんか恋ちゃんって最近疲れてるの？ いつも眠そうだけど……」

女性学生は長い髪を揺らしながら前席の机を反転させ、恋の机にくっつけ、椅子に腰を下ろした。

「さようでございます……わたしは疲労困憊ひろうこんぱいです。エンゲル係数のコンバージェンスが続いている為、家計が火の車に追いやられたり、最近では家具が頻繁に破壊されたり大変なのです……」

「あれ？ 恋ちゃんって一人暮らしじゃなかったっけ？」

「……一ヶ月前ほどから親戚の外国人留学生が住むことになったのです。そのお方は大学生なのですが、一人暮らしをするにも予算面の問題で色々と手厳しいということで、わたしの住まいに居候しているのです」

机上に可愛らしい小さなお弁当箱を広げられたのを見て、恋も椅子下にある鞆からお弁当箱を取り出した。

「へえー、大変そうだねー。まさに骨が折れるって奴？」

「笑い事ではございません！」

恋は上品な笑みを湛える女子学生を一喝し、冷凍食品のミニハンバークを頬張る。

「この歳で、エンゲル係数を気にするなどあってはならない事態なのです！ ああ、一ヶ月前のわたしは校外の飲食店で羽振り良く五百円の日替わりランチAを頼んでいたというのに……通い続けて二年でやっと店長さまに顔を覚えていただきました。それがまるで十年前の出来事のように……無駄な出費を重ねないためにはしょうがないのです……」

「どんとまいんどだよ！ 恋ちゃん！ 頑張って！」

あくまで朗らかな笑みを湛える華凜を、恋はねっちょりした視線を浴びせる。

「……今のわたしは幸せなお方が妬ましく思える性分です」

「なんのこと？」

「……なんでもありません。可憐な美少女の戯言たわごとだと思って下さい」
女子学生は疑問符を頭上に浮かべつつ、持参水筒からふたつのカップに茶を注ぎ、ひとつを恋に差し出した。恋はそれを手に取り一気に口内へと流し込んだ。

「ありがとうございます」

「恋ちゃんって結構豪快だよ。言葉遣いはお嬢様っぽいのに」

「華凜かりんさまのような深窓令嬢に言われてもわたしはちっとも嬉しく思いません」

唐突だがそろそろ恋と対話する女子学生の名を記しておきたいと思う。

彼女の名前は、望月華凜もちづき かりん。恋とは中学入学以来3年近くに渡る付き合いでお互いに親友視しているほどの仲だ。彼女は恋のような偽りのお嬢様ではなく、真正正銘、血統書付きのお嬢様である。日本IT業界の重鎮じゅうしんと流布りゅうふされている父親を持ち、母親に到っては数年前まで国民的アイドルを担っていた存在で、四十を過ぎてもその美貌に衰えはないのだという。その令嬢が華凜である。まさに人間サラブレッドといえよう。華凜は自分が資産家の娘であることを鼻に

掛けたりはせず、クラスメイトからも評判が良い。根本的な構成はお嬢様なのだが、根っこの部分を見せることはほとんどなく、普段から朗らかな女子中学生を演じていた。

一方、お嬢様？らしい？と言う点では恋の方が一枚も二枚も上手だが、実際問題、エンゲル係数を気にするお嬢様などはいないだろう。

「ところで恋ちゃん……最近欠席の人数、増えているの、気付いた？」

「いいえ、わたしは逐一生徒数など数えませんので」

「クラスの状況ぐらい把握しようよ！　ウチのクラスだけで小野君、矢部君、祐理ちゃん、藍ちゃん、岬ちゃん……5人もいないんだよ！」

「どうせ、欠席している方々は夏風邪を拗^{こじ}らせているのでしょう。心配するだけ損です」

「夏風邪かは知らないけど……どうも休んでいる人達は家にも帰っていないらしいんだよ……」

黙々と食事を堪能していた恋は意味深な台詞にピタリと箸を止め、秀眉を寄せた。

「帰っていない、とはどういうことでしょう？」

「……生徒に心配を掛けないように学校は素知らぬ顔しているけど、2学期に突入してからこの学校の生徒、行方不明者が続出しているみたい。けど、もう学校中に噂が広まっちゃってるみたいだし、近いうちに新聞沙汰になるんじゃないかなあ」

「何人ほど行方を眩まされられたのです？」

「うーんとね、一日一人の頻度で、行方不明なのはみんな3年生で、たぶん……30人ぐらい」

学習意欲ゼロの恋だったが、この手の問題については？職業柄？無意識的に聞き入ってしまう。

2学期の始めから、すなわち9月から10月に掛けて行方不明者が30人も勃発した。一度に30人が行方を眩ましたのならそこま

で興味を示さなかっただろう。計画的な誘拐か友達同士で集団サボタージュでも理由はいくらでも考えられる。しかし一日一人、何の法則だ？ 自発的に行方を眩ましたとは考えにくい。身代金目的の誘拐にしても一ヶ月経過した今でも表沙汰に出てこないのを見る限り、特定の目的があつて誘拐したとはこじつけにしても無理がある。だが、恐らく誘拐という線はあながち間違いではないだろう。その延長線上に事件はある。恋には心当たりがあつた。目的も理由も無しに無意味に他人に危害を加える酔狂すいきやうな存在を。

「ま、わたしには関係ありません。心配せずとも時間が全てを解決してくれます」

「う、うん。そうだよ。明日になったらみんなひいって戻ってくるよね！」

思考を最大限に巡らせつつも恋は平静を装い、何事もなかったように食事に戻った。

——一ヶ月で三十人も行方不明……尋常ならざる頻度です。やはり……？能力者？が一枚咬んでいるのでしょうか？能力？

人間……改め、この世に生を受けた者全てが備え持つ才能である。その才能を開花させた者だけが使用可能な人外の力——すなわち？能力？。ある者は空を羽ばたき、またある者は無から有を精製する。？能力？を持たぬ人間が代々培つちかってきた論理、法則を無視した超常現象。その？能力？を知る者は実際に？能力？を開花させた能力者を除いては極少人数に限られている。何故ならば？能力？についての情報は世界共通で箝口令かんこうれいが敷かれており、故意に？能力？を氾濫はんらんさせようとする輩やからは無条件で存在を抹消させられる。

そのような処理を裏で行う組織——それが特務処理機関である。常に二十四時間厳戒態勢で？能力？の無断行使、？能力？開花の経過を監視し、状況に応じた対処策を選出した上、構成員を現場に送り込む。現場に直接出向く構成員を派遣戦闘委員と呼び、それに所属する人間は例外無く？能力者？だ。

そして恋は生まれながらにして？能力？を開花させている先天性の能力者である。機関に選出された「派遣戦闘委員」兼「派遣監視委員」の称号を唯一持っている人材、それが恋だ。

バッドニュースにより変貌した暗澹^{あんたん}たる空気を変えようと華凜は談笑らしき話題を切り出してきた。昨夜のテレビ番組の話、筋肉系お笑いタレントと国民的アイドルグループのリーダーが交際していること、オリコンチャートに波乱が起こったことなどなど。しかし多忙極まる恋にはそのような話題についていける訳もなく、どのみち暇が出来たとしても回転式拳銃の輝きを保つのに専念していることだろう。

恋は適当にあいづちを取りつつも、意識は他の話題に集中していた。

——いや、？能力者？が一枚咬んでいるとしたら、真っ先に機関に気付かれ取り締まられるのがオチです。一般人の手により行方不明者、一日一人……その情報が真実ならば、中途半端な？能力者？よりもよほど切れ者で危険な存在です。今日も級友のひとりが蒸発するのでしょうか？ わたし自信である可能性も否めませんし……華凜さまの可能性だって……。

「恋ちゃーん。訊いてるう？」

機械的に頷くだけの恋に叱責の声が飛んだ。

「……ごめんあそばせ、です」

「……そこまで徹底して、お嬢様言葉を使うのはどうかと思うよ。3年間恋ちゃんと付き合ってきたけど、未だ違和感ありなんだよねえ」

「淑女^{しゅふ}たる条件は、まず何事も形から入ってみることなのです」

「……」

「……」

「……」

「……悪意を感じる沈黙です」

華凜の表情は熟れたトマトのように見る見る内に紅く染まってゆ

く。

「な、なんですか！ 言いたい事がはっきりして下さい！」

「あっはあッひいはひいひいあははは！ 恋ちゃんが淑女だってッ！ あひやははっはあ……ゴホッ……はあはあ……はあ……」

壁と反響するほど笑い声を上げ華凜は動悸息切れを起こしたように呼吸が荒い。

「はあ、はあ……恋ちゃんが淑女ならこの世にいる90パーセントの女性は淑女だよ」

「し、失礼です！ わたしほど容姿端麗、頭脳明晰、才色兼備、深謀遠慮の人間はいません！」

「……う……ん、そ、うだね……」

「そのあからさまに笑いをこらえた返事をするのはやめて下さい！ 非常に不愉快です！」

恋の叱咤に再び吹き出した華凜^{かりん}。

何事もない。ありふれた日常の1ページが記憶に刻み込まれる。そんな日々もいつかは終止符を打たれる日が来る。しかしそれはまだ先の話だ。少なくとも今日で別れではない。たとえ高校に入学し、お互い離ればなれになろうが、会おうとすればいつでも会える。

この時の恋は想像たりしなかった。

近い未来、華凜^{みらいえん}と未来永劫^{いつく}、別離することを。

一日の業務を終えた恋は寄り道はせずに一直線に自宅へ向かっていた。そもそも住まいとするアパートまで徒歩で5分も要しないので、寄り道をしたくとも出来ないのが実情だ。そのアパートの特徴はこれといって目を引くものは無く、それでも特徴を述べるなら貧相、倒壊作業直前、オンボロといった感じである。二階構成のアパートの二階、手前部分にある201号室が恋の拠点。一人暮らしにはやや贅沢な1LKも二人暮らしになると手狭に感じる微妙な構造だ。

「恋、我は嘗て味わったことのない飢餓感と奮闘中だ」

自室を隔たる扉を開き切っていない状態で内側からアルト声が響いた。もはや情性化されたアリアの飢餓感を訴える台詞だ。恋は辟易しながら扉を押し開ける。

「お迎えの言葉ぐらい——って！　ちよっと、何をやっているのです！」

家内に入れば、肌の露出部分が極端に多いアリアが片手倒立の状態、さらに人差し指のみで自重を支えつつ身体を上下させていた。

「鍛錬中だ」

「今すぐやめてください！　アリアさまの体温のみで室内がサウナ化しています！」

「窓なら開けている。問題はない」

「それが更に問題なのです！　ハレンチな格好をした外人女性がよもや人差し指だけで倒立腕立てをしている姿など目撃されたら、二日後にはどこぞのテレビ局が闖入してきます！」

「それは気にするに値する事態なのか？」

倒立腕立てを行うアリアの露出された褐色の肌からは汗が滲み出ており、顎を伝い水滴が滴り落ちる。一滴、また一滴。ぽたぽたと垂れる汗の先には拔群の吸収力を見せたカーペットが、バケツに目一杯湛えた水をぶちかましたように色褪せていた。

「とにかくです！　早急にやめてください！」

「うむ。解った」

アリアは鷹揚に答えると、自重を支える指を力を含めカーペットから突き放し、上体を空中に持ち上げた。そのまま身体を縦に半回転させ、着地をした瞬間、床が軋む良からぬ音が聞こえたのは決して幻聴ではない。一見、官能的パーフェクトプロポーションを備えるアリアだが、その実体は170キログラムを超える超重量級だ。

「……アリアさま」

一瞬、床が開通する幻像が過ぎった恋は、恐る恐るアリアの足下を再確認して心底安心し、溜め息をついた。

「すまぬことをした。次からは部屋を下界から隔離したうえで鍛錬に励むようにする」

「そうではなくて……お願いですので、じっとしていて下さい……」
汗の染み込んだカーペットを目の当たりにした恋は、放心状態のまま靴を脱ぎ捨て、居間に入る。浴場を隔てる扉を開け、バスタオルを手に取り、湿ったカーペットを丹念に拭き取り始めた。

「一体、何時間続ければここまで汗を絞り出すことができるのでしょうか？」

「明確には覚えていないが、おおよそ恋が中学校とやらに向かった直後からだ」

恋が家を出たのは八時。そして現在の時刻は十六時。バカです。

「……呆れを通り越して感心してしまいます」

「ならば、恋。我は今夜の晩餐ばんさんは肉を所望する。米と言うのもなかなかオツな食物だが、やはり性に合わん。なに、我も贅沢は言わん。豚の生肉でよい」

「ダメです」

世俗的民衆なら目を背けざる終えない鋭い剣幕で恋は、アリアの懇願を迷うことなく棄却する。一円たりとも無駄に出来ない財政の中、肉などの高級食材を食卓に乗せるなど言語道断、破滅への一途を辿ることになる。機関の施しを受けたいぐらいだ。

無情な台詞にアリアは理想の曲線を描く頬をフグのようにふくらませた。二十歳程度の秀麗な異国女性がふくれっ面とは、無意識的に男性を引き付ける手立てっしゆてを心得ている。

「我は定期的に肉を摂取しなければならぬ身体なのだ」

「安心してください」

恋は引き締まった表情を緩め、柔和な笑みを浮かべながら、

「死にはしません」

と、満面の笑みでアリアの懇願こんがんを突き放した。

「生肉……」

アリアはどこか遠い目で虚空を見詰め、己の指をいやらしく口内

に突っ込んだ。

「いい年した大人が指をしゃぶらないで下さい！ 意地汚いです！」

「何を言うか！ 少なくとも我は恋より年下だ！」

「アリアさまこそ何を——」

言いかけて、恋は口を紡いだ。同居生活して一ヶ月、頻繁に勃発する家庭トラブルの所為でアリアの本来の正体を脳内から消し去っていた。

アリア・G・アンダーソンと名乗る異国の美女。彼女は人間ではない。

ライオン
獅子だ。

アリアは人間以外の生物で？能力？を開花させた前代未聞の生物。腰まで靡くブロンドヘア、褐色の肌、翡翠色の双眸、官能的なまでに全女性の理想な曲線を描く肢体。どんなに見識の長けた生物でもアリアを獅子と見抜くことは不可能であろう。何故なら、彼女の風貌は二十歳前後の異国の女性としか見えないからだ。アリアは？能力？の開花と同時に肉体までもが変貌を始め、気が付けば人間の姿に成り下がっていた。未知の恐怖——アリアの精神は窮地に追い込まれ——

その時に現れた特務機関の派遣委員こそ恋であった。

「アリアさま……お歳はお幾つでしようか？」

「人間の暦で言えば……我はまだ三歳たらずである」

何もかもが常識を逸脱した存在がアリアなのだから、よわい三歳と訊かされて得に驚く要素などは……ありありだ。外見は二十歳前後の秀麗な大学生、口調は時代劇に感化されたような妙に古風でいかめしい、人間でないにも拘わらず順応力は人並み以上。

わたしが三歳だった頃は……と、恋は一瞬考えたが、思い出す場面は兄の名前を泣き叫ぶ姿。父母がいない恋にとっては兄が唯一の安らぎを与えてくれる人間だった。あの頃は一声兄を呼べば、どこからでも駆けつけてくれる。兄がいなければ何一つ出来ない、それが三歳の恋だ。

——アリアさまは人間ではないのです！ 比較対象外です。

恋は頭を左右にブルンブルン振り、

「……お若いことで」

皮肉のつもりで言葉を吐き出したが、そもそもアリアには皮肉は通じない。もとい伝わらない。

「うむ、我は若く瑞々（みずみず）しい肢体を得ている。それに年下を敬うのは人間の礼儀作法の一種であるのだろうか？ ならばここは礼儀に習い生肉を我に献上すべきではないか？」

「アリアさまに礼儀を尽くす理由などは毛頭ございません」

「……そこまで固執することなからう？ 我の為だと思い譲歩してくれ。一つ屋根の下に住まいを共有する者同士、仲良くやっていくではないか！ 我に肉を謙讓するのだ！」

駄々をこねる子供のように地団駄を踏むアリアを見て、恋は小さく嘆息した。放置してもいいのだが、それだと床に大穴が開通してしまう。

「解りました……お夕食は肉料理にします……ただし！」

恋はビシッと人差し指をアリアに向ける。

「その汗臭い身体をシャワーで流してきて下さい！ 濡れた衣服はそこら辺に脱ぎ捨てて構いません」

「それで我の願いが叶うのであれば、何時間であろうが汗を流して続けて見せよう」

「十分程度で充分です！ 着替えは脱衣所に置いときます。わたしは今晚の食材を購入してきますので、くれぐれも不祥事は起こさぬように用心してください」

そう言ったところで、恋は着替えもせずセーラー服のまま財布だけを持ち、自宅を後にした。

近場の大型スーパーマーケットまでは徒歩20分と少しばかり離れた位置にある。歩いて行くのは少々億劫だが交通手段が徒歩以外に選択肢が無いのだから、嫌でも徒歩になってしまう。

鼻歌交じりに歩を進めて行く内に恋は一組の親子とすれ違った。

小学校低学年ぐらいの子供とまだ若さを残す壮麗な母親らしき人物だ。ふたりは手を繋ぎ合い、子供は無垢な笑顔で、母親は年相応の柔和な笑みでスーパ―の袋を携えていた。

いつまでも、お幸せに――

恋は決して人の境遇を妬んだりはしない。他人の幸せそうな表情を見れば、その分恋も幸せになれたような気がする。親子の愛情を目にした時は心を洗われる。

「今夜は奮発しますか」

留守番を一任したアリアに向かって、恋はひとり呟いた。

今夜は肉を久しく堪能できる。

アリアは常人ならば火傷は確実な熱湯を全身に浴びつつ考えていた。

恋と同居を始めて、もう一ヶ月……肉が食べれない事柄を除けば、獅子時代よりも充実した日々を過ごせている。到底人間の生活に溶け込むなど不可能だと思っていた。しかし人間もそう悪くはない――恋は良い人間の代表例だ。多少可愛げに欠けるが。

恋の言い付け通りに10分が過ぎたところで蛇口を捻り、シャワーを止めた。浴場から脱衣所に戻り、濡れた肢体をバスタオルで拭き取りながら、己を映し出す虚像を見詰める。翡翠色の双眸、褐色の肌、癖がついたブロンドヘア。どう見ても人間である。

居心地良いとはいえ、いつまでも恋に迷惑掛ける訳にはいかない。恋が用意してくれた木製の籠には、下着、クマのイラストがプリントされているノースリーブのカッターシャツ、黒のクォーターパンツ。それらを順に追い、身に付ける。着替えを終え、居間に戻ると寝床として活用しているソファに仰向けに寝る。

――全てが終われば、我はあるべき姿に戻るべきであろう。アリアは虚空に手を伸ばし、己の指先をただただ見詰めていた。

奮発して豚肉を買い占めてしまいました……。

開き直りに精肉屋で豚肉2000グラムを購入した恋は意気揚々と自宅へ帰還を果たした。アリアの飢餓感を訴えてくる台詞を待ち構えつつ扉を引き開けた。

反応は、ない。

「アリアさま？」

玄関を一度開ければ大仏のように身構えているアリアの姿はない。恋は未知な焦燥感に駆られ靴を乱雑に脱ぎ捨て、直通している居間へと駆け込んだ。

ソファに仰臥し、寝息を立てるアリア姿があった。

「……安らかな寝顔なことです」

弛緩されたアリアの表情は愛くるしい幼気を感じさられほど幼い。万事厳然たる物腰を崩さないとはいえ、惰眠を貪る姿は見ているだけで抱きしめたくなくなる。

——アリアさまとの同居生活ももう一ヶ月近く……表情には出でてきませんが、相当な心的ストレスを受けているに相違ないでしょう。

恋はアリアの身体に毛布を被せ、嘆息した。

「今日だけは特別です」

眠るアリアを一瞥し、調達してきた食材を手台所へ向かう。

豚肉料理——買い物の最中、豚肉の調理方法を思案していた。王道ならばトンカツだろうが、あいにく調達した豚肉はバラ肉であり、トンカツを調理するには少々難易度の高い技術が強いられる。恋ほどの自炊経験者であれば、その技術も習得済であるが、無駄な手間は掛けたくないし、そもそも2キロをも肉を逐一手作業で調理するのが面倒以外の何物でもない。手軽に調理可能かつ大量生産かつ腹持ちの良い豚肉料理が求められる。

そう思い恋は手軽で一度で大量調理可能、さらに腹持ちの良い豚肉料理、しょうが焼きを今夜の晚餐と決定づけた。ちなみに恋の豚

肉レシピのレパートリーは30種類にも及ぶ。その中でも店に出しても恥ずかしくない料理はスペアリブ。

と、恋の意外に家庭的な女の子である物語的にはさほど関係ない話を紹介したところで調理風景に戻りたいと思う。

矩形の大タッパウェアに生姜を含めた漬け込みタレに豚肉を二十分浸すところから、恋クッキングの始まりだ。その間の時間も有効活用すべく、キャベツ一玉丸々を千切りにし、大皿の上に見栄え良く盛りつけた。タレが染み込んできた豚肉を菜箸でひとつひとつキッチンペーパーに移動させ、余分な水分は拭き取る。それに小麦粉をまんべんなく附着させてから、あらかじめ熱しておいたフライパンに油を敷き、豚肉を放り込む。肉の焼ける音が室内に反響し、死期の近い換気扇では処理できない量の煙が部屋に充満する。

その芳しい芳香を鋭敏に感じ取ったのはアリアだった。

「……恋」

「あ、起きちゃいましたか。もう少しで出来上がりますのでご辛抱を」

「それより何を調理しておるのだ？ この匂い……肉とは若干異なる。だが、嘗て無いほどの食欲が喚起される匂い……一体なんなのだ？」

「なんなのだと言われましても、アリアさまのリクエストに応え豚肉のしょうが焼きです」

存分に豚肉に火が通った頃合いを見計らい、大皿に一気に移す。あとは最初に余った漬け込みタレを軽く水増した上で、フライパンで一煮立ちして出来たタレをしょうが焼きにかけて完成だ。

およそ二十人前はあるしょうが焼きとキャベツ盛りを足長テーブルに陳列させた。

テーブルから発せられる未知なる芳香にアリアは無意識的に釣られ、陳列されたしょうが焼きを恐る恐る覗き込む。

「恋、確認の意を込め訊ねるが、これは食べられるのであろうな？」

「邪推しないで下さい。真正正銘、人畜無害な豚肉料理です」

「ならば、咀嚼そしゃくさせて貰おう」

アリアは手掴みで肉を一切れつまみ、口内へ放り込んだ。

「む……この味は……なんだ？ 生まれ、現在に到るまでこれほどまで上級な肉を食べたことはないぞ」

「手掴みなど女性あるまじき意地汚い行動はお控え下さい」

恋は片手には一般家庭で使われているノーマルスケールの茶碗、もう片方の手にはどんぶりに山のように盛られた白米を携えて、どんぶりをアリア専用席に置いた。

自席に腰を下ろした恋は、テーブルの裏側に付属されている収納スペースを開き、2膳の箸を取り出した。アリアも自席に腰を下ろし、どんぶり片手に恋お手製のしょうが焼きを貪るように食べ始める。

「毎度ながらことですが、もう少し落ち着きを以てお食べにならないかがでしょう？ ご飯粒を頬に付けるなどは公共の場ではマナー違反です」

と、アリアの行儀の悪さを否定しつつも、恋の表情かおは物静かに微笑んでいた。不作法な食べ方でも、手料理をおいしそうに食べてくれば恋も丹精込めて調理したかいがあるものだ。

「肉の新天地開拓と言っても過言ではないこの旨さ……恋、前々から思っていたが、お前には料理に関して才能がある」

「大げさです……それはアリアさまがわたしの手料理以外食べた試しがございませんから、そんな軽薄な事が言えるのです」

「自信を持て、恋。悲観視する事は自分の腕を鈍らせるきっかけになりうるぞ。我は己の自尊心を死守することで成長してきた。これは料理に関しても言えることではないか？」

くちやくちやと不協和音ふきょうわおんを奏でながら何やら語るアリアを見て、恋は冷たい視線を浴びせつつ反駁はんぱくする。

「そんな口にもものを入れながら説かれても説得力の欠片もありません」

ゆうに二十人前はあつたしょうが焼きとキャベツ盛りは跡形もなくふたりの胃袋に収まり、その内十九人前はアリアが消化したことは言うまでもないだろう。後片づけも済ました恋にとっては今日の業務は終わったようなもので、アリアと女二人でのお茶を嗜んでいた。忙しいが決して嫌悪感を感じない生活。アリアと同居を始めてからそんな毎日の繰り返した。恋の負傷を労^{いたわ}ってか、あれからまだ一度も任務命令は下されて来ていない。それは機関の配慮だろうが、単に能力者が大人しくしているか、どちらにしろ一構成員^{いち}の恋には知る余地のないこと。このまま任務など来ずに惰性^{だせい}のような毎日が続けばいい。

しかし無垢なる願いは誰も聞き届けてはくれなかった。恋はまだ気付いていない。すでに己の身に魔の手が触れていることを。

そして、それは前触れも無くやって来た。

鳴らずの呼び鈴と称されている（恋が勝手にそう思い込んでいる）が猛々しく室内に響いた。電気、水道、ガス代、どれも払い済みの恋には招かざる来訪者に心当たりはない。家賃は機関の経理部が直接口座に振り込んでいるはず……もしや、家賃を未払いなのでしょうか？

「恋、今の音はなんだ？」

音が響いたと同時にアリアは脊髄^{せきずい}反射のように警戒態勢を敷いた。「ただの呼び鈴です。そこでじっとして下さい」

恋はくつろぎのひとつときをやむえなく中断し、扉を押し開ける。

「どちらさま——」

「恋ちゃん！」

腰の入ったタックルが恋の胸腔部分にクリーンヒット。淑女らしからぬ嗚咽を漏らし、一步だけ後退する。

「恋ちゃん！ 恋ちゃん！ 大変なんだよ！」

叫びながら恋の胸に顔を埋没させる少女——望月華凜^{もちづき かりん}は酷く動揺

した様子である。しかし恋には予想以上に華凜の体当たりが身体に衝撃を与え、苦痛に悶えていた。それでも恋は親友の動揺に不安感を覚え、必死に声を絞り出した。

「まず落ち着いて下さい……華凜さま……何がどのように大変なのかを事細かに説明してくれなければ、わたしにはどうしようもありません……あと、離れてくれたら、わたしは嬉しいです」

「ご、ごめん！」

対極した電極のように華凜は後退る。相当慌てていたのか、彼女の身なりは恋と同じセーラー服のままだ。

「そ、それで、恋ちゃん！ 大変なんだよ！」

「だから、落ち着いて下さい！」

恋は喚く華凜の腕を引っ張り、家中に招き入れた。そのまま引きずるように居間に向かいソファに無理やり座らせる。

「む、何やつだ？」

もちろん、居間にはアリアがいる。アリアは華凜の正体を推し量るような、戦慄物の目つきで見据えていた。

「彼女は無害です」

総毛立つアリアを一喝し、華凜と向き直る。

「それで……何があったのです？」

「け、健二が、健二が、まだ帰ってこないの！」

半泣き状態で華凜は動揺気味に叫んだ。

健二とは誰でしょう、と本気で考え、記憶を喚起すべく瞑目した。思い出すのに十秒も要しなかったことが幸甚だ。

望月健二——たしか華凜の双子の弟だ。双子だけあって容姿は類似点が多いが、性格はまるで別物。朗らかな雰囲気でクラスを和ます華凜に比べ、弟の健二は傲岸不遜な態度を崩さない尻軽男子である。容姿端麗の女子に狙いを付けては遊ぶ約束を取り付け女をたぶらかす遊び人。

一度思い出すと健二に対しての記憶が溢れ出しまらない。

思い返せば、恋自身も健二に執拗に迫られた被害者のひとりであ

る。断固として健二の要求を拒み続けたら、「キミの身体はヴィーナスより美しく、キミの双眼はこの世にある全ての鉱石よりも燦然と美しく、キミの髪一本一本は最高級カシミヤよりも希少価値がある」と意図の読めない台詞で愛の告白らしき事柄を伝えられたものだ。

「ああ、健二さまが帰っていないというのですか？　どこかの女性と遊びになられているのでしょうか？」

恋は揶揄の響きを込めて言う。

「違うよ！　いつもなら夕食にも帰ってくるもん！　誘拐されたんだよ……！」

消え去りそうな声で呟いた華凜。

午餐時に華凜の話した行方不明者続出事件……一日一人、生徒が蒸発していく不可思議な現象。その犠牲者に華凜の弟——健二が選ばれた。その可能性も否めないが、やはり恋の脳裏に焼き付いた健二のイメージは最悪なもので、一朝一夕で拭いきれるレベルではない。それに華凜は気さくで朗らかな親友だが、少々、もといかなり弟バカな一面がある。

「誘拐、ですか……たとえそうだとしても、わたしたちには為す術がありません。警察に連絡を取り合うことが一番だと思います」

「も、もう連絡したよ！　だけとお姉ちゃんとしてあたしも今すぐ助けに行かなくちゃ！」

「助けにつて……心当たりがあるのですか？」

「た、たぶんまだ学校にいるんだよ！　さっき連絡があつて、それで、それで——」

「連絡？　詳しくお願いします」

恋は華凜の言葉を遮り、目の端を吊り上げ問いつめる。

「少し前に家に健二から電話があつたんだよ！　ひどく脅えた声で……とぎれとぎれにしか聞き取れなかったけど……「学校、助けてくれ」って言ってたんだよ！　だ、だから助けに行かなくちゃ！」

「……それは何時頃の話です？」

「9時30分頃！ 早く行かなきゃ！」

恋はテーブルに立て掛けた時計を伺う。

9時50分……連絡後約二十分が経過している。

警察に連絡したのならば今頃は校内で捜索が行われているはずだ。健二が校内に逗留していればもう保護されている頃合いである。

「お願い、恋ちゃん！ 一緒に来て欲しいの！」

「そんなことだと思いました……」

話の途中から薄々勘づいていたが、やはりそういうことだった。

要約すると、華凜は警察連絡したが心配が絶えない、姉としての責任感から自ら調査に立ち向かわなければならないと勝手に思い込む、しかし一人は何かと心細い、そこで親友である恋の存在に気づき、同行を求める、ふたりなら万が一の事態にも対処が出来るそう、こんな感じであろう。

華凜さまの心配も杞憂に終わることでしょう——恋は親友の頼みを無下に断れない性格だ。

「解りました……一緒に行きましょう」

「待て、恋」

それまで沈思していたアリアが物憂げに口を開いた。

「……我も同行しよう。学校と言う建造物にも少々興味がある。それになんだ……不届き物と遭遇したときのことを考え、我のような遅い存在が側にいたほうがよいだろう？」

アリアは壁に引っ掻けてある赤バンダナを頭部に巻き付け、ニヤリと微笑んだ。確かにアリアのような？能力？無しに能力者並の実力を発揮できる戦闘能力を持った人物がいれば心強い。拒む理由はなかった。

しかし今のアリアの発言に恋は冷や汗を掻いていた。「学校という建造物に少々興味がある」……アリアの存在を留学生と華凜には伝え済みだ。どう誤魔化すか恋は思案に入る。

「あ、ありがとうございます！」

気が動転している華凜は今の矛盾点に気付いていない。

「……それでは一分だけ外でお待ち下さいますか？ 下準備があるのです」

「う、うん！ なるべく早くお願い！」

華凜は立ち上がりから玄関に向かうまでを俊敏な動きを見せ、数秒で居間から姿を消した。恋は任務時に身に付ける漆黒のロングコートを質素なセーラ服の上に重ね着する。冬になれば機関お手製のコートも恒常性を保つ衣類として一役買ってくれる。

「武装はしないのか？」

そう言ったアリアは何故かカッターシャツを脱ぎ捨て、替わりにタンスから取り出した白のペアトップを身に付けた。

「任務じゃありませんし、一般人ならば素手で充分です。万が一にもわたしはいつでも武器を取り寄せることができます……とゆうよりアリアさまは何故着替えているのです？」

「こちら方が動きやすいからだ。さあ！ 時は一刻を要する！ 早急に現場に赴くのだ！」

妙に上機嫌に玄関に向かうアリアを、恋は引き留める。

「待って下さい」

アリアは一顧した。

「なんだ？」

「何度もいいますがこれは任務ではありません。？能力？の使用及び、人間離れた行動を慎んで下さい。特に華凜さまの前では不意な発言も控えて下さい」

「解っている」

不敵に笑うアリアに釣られ、恋も微笑してしまう。

今頃健二さまは警察に保護され、己の醜態を晒しているに違いありません——名目上は華凜の弟搜索ということになっているが、恋にとっては健二の醜態を観察し、侮辱すべきため同行しているようなものだ。助けを呼ぶ電話も姉を心配させるタチの悪いイタズラに決まっている。

恋は任務専門のブーツではなく、通学用のスニーカーを履き、玄

関を開けた。待ちわびたと言わんばかりの表情かおをした華凛が寒さで
歯をカチカチと鳴らしている。その一方、肌の八割以上を露出して
いるアリアは毅然としていた。
やはり、不安の残るメンバーだ。

「……では、いざ学校へ、です」

と、今回のお話はこんな感じですよ。

久しぶりに自分の成長を自覚できた話でした。すみません。調子に乗りました（笑）。後半かなり飛ばしてて書いたので誤字があるかも……。。

まあ、そんなこんなで二つ目の番外編。通算4話目となりました。5〜7話で終わりますといっしか記しましたが、それはもう不可能です。どうやら私には文章を纏める能力が激しく欠落しているようで、1話1話がとてつもなく長くなってしまいました……。長い目でよろしくおねがいします……。

私はなるべく先の読めないJOJO的な展開を目標としています。が今回の番外編はバレバレですね。と、見せかけて期待を裏切るのが私の流儀。もはやなにを記しているのか解りません。

余談。

そろそろ息拔きに短編作品でもひとつ書いてみようかなと思う今日この頃。短編と思い浮かべるとネタが恋愛しか浮かびません。しかもライトユーザ（男性）向けの。とういことでしたいまはラヴコメ要素無の生真面目な作品を頑張ってます（笑）。完成する可能性は10パーセント。多分一生完成しません（笑）

ちなみに次話は恋以外にも《蒲公英》ダンブライオンたるアリアの視点にもちよくちよく変わる予定。混乱しないように頑張ります（笑）

では、また近い内に。

other Episode 04::Unknown Shadow

恋一行が丁度夜の学校へと騒がしく移動中の時刻。

特務処理機関第二本部にて、尾崎啓一は暗澹たる室内にいた。そこは6畳の小さな部屋。足の踏み場すらままならないほどあらゆる書類が堆積しているの所为で、実質上残されたスペースはほんの一抔である。

ロッキングチェアに腰を下ろす啓一を囲むような配列で設置されている無数のディスプレイは、関東地方の地図が事細かに映し出されていた。

アリアの戦闘委員や恋の監視委員と比べ、啓一は前線から一步引いた補助委員、兼、情報委員の役職を担っている。そのため啓一は月数回の頻度でこうして機関本部に夜通し滞在し、?能力?の不正使用及び新たな能力者の出現の推移を見張っていた。

見張り、といっても、大した労力も技術も必要としない。能力者が?能力?を行使すれば、啓一を取り囲むディスプレイが、?能力?を行使したと思われる座標を自動的に割り出してくれる。反応があれば対処策を検討し、戦闘委員を現場に派遣する。それだけだ。

啓一は幾重にも積み重なった?能力?に関する報告書をディスプレイを照明だより一枚一枚、速読していた。

「……」

啓一は数分に一度、書類から目を離し、ディスプレイを覗き込む。そして異常が無ければまた書類に目を落とす。そのような機械的動作を啓一は丸一日続けている。それでも啓一からは疲労の色は見られない。

「おつとめごくろうさま」

六畳の部屋に突如沸き出た長身痩躯の人影。それは十年來の親友にでも語りかけるように挨拶を投げ掛け、仕事に励む啓一に缶コーヒーを差し出した。

「久しぶりだね、啓一。調子はどうかな……？」

「用件はなんだ？」

啓一は驚く素振りを見せず、書類に視線を落としたまま答える。

「久しぶりなのに、つれないね……。それも啓一らしくていいんだ
けど……」

長身痩軀の男は「フフ」と不気味な笑声を上げた。

「滋^{しげる}」

「……なんですか？」

^{あいさわしげる}

長身痩軀の男——愛沢滋はデフォルトと化した機械的な笑みを湛えていた。

「……その様子だと、キミも相変わらずってところかな……」

「俺が覚えている限り、卿と最後に言葉を交えたのは一ヶ月前だ。感慨深くなれるほどの歳月は経過していない」

「一ヶ月も、です。退屈な任務に明け暮れた僕にとっては長すぎる時間だよ」

書類を黙視する啓一は顔を上げ、初めて滋の全身像を目の当たりにした。鎖骨部分が窺えるほどはだけた純白のYシャツには黒ネクタイがだらしなくゆるめられており、下半身は黒一色だ。肩に掛けられているのは恐らくブレザーだろう。

「喪服はどうした？」

啓一の知る滋の風貌といえ、常時に葬式帰りのような全身黒で統一された喪服像が当たり前の服装。それ以外は見たことがなかった。

「失礼だね……あれは一応背広のつもりなんですよ……。僕も一介の高校生なんでね……制服も着ますよ……」

磨きの掛かった演技で滋は大仰に肩を落とす。

そんな滋には目もくれずに啓一は差し入れの缶コーヒーを啜っている。

「ところで啓一。妹とアリアの組み合わせはどうだと思う？」

「現段階であのふたりの相性を割り出すには情報が少なすぎる」

「僕は『答え』を訊いているんじゃない。啓一の考えを聞かして欲しい。客観的ではなく、啓一個人の意見をね……」

「……《蒲公英》^{ダンデライオン}とチームが可能なのは《拳銃屋》^{ガンスリンガー}だけだ。同様に《拳銃屋》とチームが可能なのも。おそらくは《蒲公英》のみだと俺は踏んでいる。だが、適材適所とは言い難いな。あくまであのふたりならチームとして機能するということだ。単純な戦闘力だけならば、滋、お前にも匹敵するだろう。ただ、それだけだ。任務となると解りかねぬ」

「啓一らしい意見だね……」

「……アリア・G・アンダーソン。《蒲公英》を慰留させ、《拳銃屋》との同棲をさせたのは、滋、お前なのか？」

「知っていたんだ……それとも、勘づいたのかな……？」

「前例のない異能力者をたかだか五級戦闘委員の《拳銃屋》に監視を一任するだけで、俺から言わせれば異常事態だ。アンダーソン本人の希望とは言えど、機関の研究員がその要求を快諾するとは思えない。なら、誰かの差し金と考えたほうがいいだろう」

「それが僕とどう結びつくんだい？」

「機関の上層部を籠絡できる人物を限定すれば数は絞られる。滋、お前は二ヶ月前の『あの日』にアンダーソンと接触したはずだ。上層部を動かせる人物、なおかつアンダーソンの存在を知っている構成員は……滋、お前だけだな」

「ご名答」

表情を変えず、滋は朗らかに答える。

二ヶ月間、恋とアリアの初対面となったあの日。自我を失い暴君と化したアリアに致命傷を負わされた恋に代わり、代理の能力者が派遣された。負傷した恋の救助、および未登録の能力者の捕獲。その任務を担った人物こそ、愛沢滋であった。

そのとき、アリアと啓一の間にごのような遣り取りがあったのかは、啓一の想像の圏外だ。

「何が目的だ？」

「アリアには恋に無い物をたくさん持っている。それを妹に知って貰いたいだけだよ」

啓一には、滋の目論見が垣間見れたような気がした。

恋がアリアから学べること。

もし、啓一の考え通りならば、近い内に恋は『壊れてしまう虞』おそれがある。

「……」

滋はこれ以上語りそうにない。なら、啓一もこれ以上語る必要はない。

啓一と滋。ふたりは既に『壊れている存在』だった。

十月の夜は心身ともに冷える。それは格別に寒い。

「寒いです……」

そう呟いたのは、十月の寒さを甘く見ていた愛沢恋。あいさわれん自宅を後にして五分足らずで、スカートのまま出掛けた失態を忸怩たる思いで後悔していた。防寒具として着衣している機関特製ロングコートも膝頭までしか届かず、すねは寒さ洗礼を直撃している。

「お前ら、だらしがないぞ」

下着と言っても得心できそうなデニムパンツと、綺麗なへそ丸出しのペアトップ。赤バンダナを頭部に巻き付けたアリアは毅然と言った。アリアの恒常性は常軌を逸しているらしく、寒さ暑さともに凌げる耐性を備え持っている。彼女があえて露出の多い衣類を選出しているのは、動きやすいという一点の理由だけだ。いや、もしかすると獅子時代ライオンの慣習が人間となった今でも根強く残っているのかもしれない。

華凛かりんはアリアの異常なまでの寒さ耐性に懐疑的な視線を向けていたが、詮索はせずにただただ歩を進めていた。弟がそれほど心配なのだろうか？ 最悪の事態を予想しているのだろうか？ ならばそれは杞憂に終わることだろう。

——なんだってあの健二けんじさまです。

女の敵、尻軽、夢想家、白昼堂々卑猥な言動を包み隠さず言う下劣人間。恋が抱く望月健二のイメージは限りなく底辺に位置していた。しかし最低な性格を補うことが可能なほど、健二は顔は良い。客観的に見ずとも健二は確実に男前であり、恋心を抱く愚かな女子も何人かはいる。というのが、恋が望月健二に対して持つ一般的な情報だ。

健二が無事と断言できる理由が恋には確かにあった。

恋が知りうる健二は殺されても死にそうにない。入学当初、生意気と先輩に洗礼という名目の暴力を振るわれたときも健二はへらへらと笑いながら顔面で拳を受け止めていたという。抵抗はせずにただ笑みを湛えていた。実際に健二の暴力直後の顔をたまたま見かけた恋は背筋に怖気を覚えたほどだ。目元が腫れ、唇が切れ、それでも笑っていた。

そんな健二が事件に巻き込まれていようが、いつもの如くへらへらと笑っているに違いない。恋はそんな確信を持ってい。電話越しに健二が怯えていたと訊いたが、それこそ華凜がパニック状態になっただけだろう。恋はそんな確信を持っていた

中学校の壁沿いに白黒のパトカー一台が駐車してあった。考えるまでもなく、華凜が事前に連絡を取った警察であろう。パトカーが無人ということは既に校内搜索でも始めているのだろう。

正門の前は異様な静けさに包まれていた。

静謐の空間。異常に思えるほど無音の世界。

通い慣れた正門は別物に見える。姿形こそ同じだが、ただの門に威圧感を感じることはなかったはずだ。日が落ちたなどの理由ではなく、もっと根本的な意味で薄暗く気味が悪い。

そして恐ろしい。

「恋……」

「ええ……」

アリアのぼやきに恋は小さく答える。

恋は肌を焦がすような嫌な感覚を全身に覚えた。アリアも尋常ならざる雰囲気を掠め取ったのだろうか。

経験、とでもいうべきなのだろうか？ 校内にはなにかがいる。おそらくは？能力者？。

しかも相当上位階級だ。確証はない、恋が今まで培ってきた経験が警告を鳴らしていた。どういう仕組みか不明だが、機関の包囲網をかいぐり、？能力？を行使している。

パトカーに誰もいないところを見ると、警察は既に校内に入っているのだろう。平和のなかで墮落してきた日本警察が解決出来る問題ではない。

「華凜さま……一旦、家に戻りましょう。ここで待ち惚けていたら凍死してしまいます」

平静を取り繕う恋。頬には一滴の汗が伝っている。

早急に機関と連絡を取り合う必要がある——今すぐ駆け出したい衝動を抑え込み、華凜に不穏な気配を悟られないように笑顔を取り繕う。

「……あたし、ちょっと中に入ってくる」

華凜の一言に恋は凍り付いた。

呟いた華凜の行動は普段の彼女とは思えぬ軽やかな身のこなしで容易く正門を乗り越えた。無駄な動きがない、一連の動作はまるで何かの突き動かされているようにも見える。

「ここまで付き合ってくれてありがとう！ ここからはあたしひとりで行くよ！」

「ま、待って下さ——」

声を絞り出せたときには、既に華凜の姿は闇に溶け込んでいた。暗闇での戦闘訓練を受けた恋は夜目は利くほうだ。にも拘わらず、恋の視界には華凜の形すら見えていない。

異常だ、何もかもが。

「アリアさま……」

恋は力無くその場にへたり込んだ。

理屈ではなく、本能が『踏み込んではいけない』と警告を鳴らしている。

「冷静になれ、恋。我は彼女を連れ戻すため向かう。恋は機関の連中やらと連絡を取ってくれば良い」

「華凜さまの救助はわたしが向かいます！」

「ダメだ。確かに地形は我よりも恋の方が詳しいだろう。だが、我は鼻が利く。目視はできんが、彼女の匂いはまだ消えていない。それに万が一の場合、恋は彼女を護りつつ相手を牽制することが出来るか？ 恋の？ 能力？ ではそれは不可能だ。彼女の前で発砲するつもりか？ 自分の素性を明かすつもりか？ 今の関係を崩したくなければ我に任せるんだ」

「で、でも！ 華凜さまは……大切な……友達……なのです」

恋の懇願に、何故かアリアは罰悪そうな表情をする。

「……あのだな……我は、その、なんだ？ 機関への連絡する手立てを知らんのだ……すまぬ、我はまだ人間社会について勉強不足のばかりに……」

自嘲気味にアリアは言う。

確かに、まだ機関の構成員となり日の浅いアリアは連絡先を知らないのも無理はない。恋が連絡、アリアが華凜救助。互いの能力を鑑みれば、その方が円滑に問題进行处理できる。

頭で解っていても納得は出来ない。

恋は彷彿と浮かび上がる感情を押し殺す。

「解りました……そう、しましろう」

踵を返そうとした、刹那――

――異様な感触が恋の身体全体を覆い尽くした。

寒気、怖気、足下から頭部に掛けて全身を駆けめぐる。

そして、

「お相手さまは全てを掌握しているらしいです……」

気がつけば恋とアリアは正門の？ 内側？ にいた。

自らの足で正門を乗り越えた記憶はない。

間違いない、相手は？能力者？。しかもこちらの動きは全て読まれている。

「予想はしていたが、脱出できそうにないな」

手探りで正門を調べようとしたアリアだが、門に触れる前に見えぬ障害物に立ち塞がれた。虚空には透過した鋼でも配置してあるかのように覆われていた。

閉じこめられた。

「絶対領域精製可能な？能力？です。下手をすれば、一級指定、最低でも二級指定が掛かるほど強大な力を持っています」

「上等だ」

「ですね」

背水の陣。結果的には追い詰められたことになるが、選択肢をひとつにしてくれたことで恋は開き直れた。文字通り、もう後戻りは出来ない。なら、前に進むしかない。

残された選択肢——校内に潜む能力者を潰し、華凜を救出する。

華凜を無傷で保護するには、素性を隠してはいられない。

「《拳銃屋》ガンズリンカーに挑戦状を出したことを後悔させてあげます」

ここ、恋の通う中学の敷地面積は広くもなければ、狭くもない。灯りさえあれば一目でグラウンドを見渡せるほどの面積はそれなりにある。

莊厳の闇。通常之夜よりも遥かに視界が悪く、気味が悪い。

隣にいるアリアでさえかろうじて視認出来る程度。

しかし出入り口たる昇降口は迷い子を誘い込むように皓々と明かりが灯っていた。

誘い込まれているのは明白だ。

「まず、この異質な空間の創造者は能力者と見て間違いないでしょう」

昇降口前で恋は厳戒態勢を敷きつつ、話を切り出した。

「この校舎を包み込む？能力？ですが、先程におっしゃいました通り、二級指定以上の実力を持っていることは確定です。？能力？は『空間創造』、もしくは『結界』。『空間創造』の場合、ここはわたしたちの住む世界とは根本的に違う世界になります。その名の通り能力者自らが地球上に存在しない世界を創り出すのです。『結界』の場合、既存の空間――すなわち学校（こく）を外部から隔離するよう壁を巡らせます。もし、学校で多発する行方不明者とわたしたちを誘い込んだ能力者が同一人物なら、この学校は『空間創造』で作り上げられた異空間でしょう。ここなら能力者の思うがままに人を問わず監禁できますし、助けを呼ぶことも逃げることもできません」

「……要約すれば、ここは校内に潜む異端者が作り出した異次元なのだろう？ その程度の？能力？ならば相手を直接叩けばいいではないか」

「はたして、そう易々と相手が白旗を挙げてくれるでしょうか？空間を創造する以外、常人と変わらない人間なら、それこそわたしたちが出る幕も無く他の誰かが片を付けてくれると思います。相手の能力者は空間を創造することで付随する攻撃性のあるオプションかなにかあるのでしょうか。それがどのような物となりますと憶測の域になりますが、それでも強いて言うなら………やっぱり解りません」

空間創造――その手の？能力？は聞き覚えがあった、どうにも思いつかない。過去の能力文献に空間創造能力についてを判読した覚えは確かにあるのだが、記憶に靄が掛かっているようであろ覚えの状態だ。

いや、ひとつだけ覚えている。

『空間を創造した者こそ、その世界のルールとなる』

追憶から掘り出した記憶に恋は嘆息した。

まるで神様そのものです。

「相手は何を企てているのだろうか？」

「不明です。ただ、一連の行方不明事件に關与している可能性が非常に高いです。すなわち、校内に生徒たちが隔離されているかも知れません」

生きていることを前提としてですけど――恋は心中で付け足す。

「とりあえずです。わたしたちが相手の絶対領域に踏み込んでしまった以上、完全にこちらの動きが掌握されていると考えた方がいいです。おそらく会話も、筒抜けでしょう」

目配せで合図をし、ふたり同時に昇降口に滑り込む。

アリアは眉間にしわを寄せた。

「腐臭がひどい……鼻が曲がりそうだ……」

怪訝そうに渋面を作るアリアだが、恋には腐った臭いなど感知出来なかった。嗅ぎ慣れた学校特有の匂いが、鼻を突っついてくる。

「華凜さまの匂いは解ります？」

「判別不可能だ。腐臭がひどすぎて、他の匂いが完全に掻き消されている」

どうする？ とアリアは訊ねる。

中学といえど全教室をしらみつぶしに捜すのにはかなりの時間を要するに違いない。それに相手の陰謀が解らない以上、どのような障害が立ち塞がるか不明だ。しかし一刻も速く華凜と合流しなければならぬ。ただ、その気持ちが恋の焦燥感を駆り立てていた。

望ましい展開としては空間の創造主たる能力者を直接潰し、その後ゆっくり華凜を搜索したいところだが、そう都合良く絶対領域の支配者と相見えることもないだろう。なにしろ今回の相手は桁が違う。

沈黙考をする恋。

「……誰か来る……左から……数はひとりだな……」

かろうじて聞こえる程度にアリアは声を殺し、言った。

状況を把握する前に恋は手を引かれ、下駄箱の死角に誘導される。

「来るぞ……！」

アリアに促されようやく足音が近付いていることに気付いた。接近してくる人物は足音はすり足気味に極力音を立てないようにしているらしい。だが、閑散としたこの空間ではその行為は無駄に等しい。衣擦れのような微細な音が明晰に鼓膜に伝わってくる。

緊迫した空気が昇降口を梱包した。

殺した足音が明確に聞き取れるのだ。転じて、相手が？恋とアリアの会話？を訊いていた可能性が極めて高い。

足音は昇降口でピタリと止んだ。

——やはり、気付かれています。

限界まで張り詰められた緊張感。

敵か、それとも無害な一般人か、もしかすると華凜が呼び出しという警官だろうか？

「誰かいるのか？」

静寂を破ったのは聞き覚えのある胴間声。

同時に動いたのがアリアだ。人間とは思えぬ俊敏な動きで物陰から飛び出し、声が響いた方向へと姿を消した。

「アリアさま！　ダメです！」

身を投げ出し、恋は声を荒げた。

声を訊いた瞬間、恋はその人物の全てを悟ったのだ。

望月健二——恋がここに至ることになった因果人物だ。華凜の失踪で忘れかけていたが、本来の目的は健二の救助。その健二が今、目の前にいる。

そして健二を知らぬアリアは愚行に走った。

「なんだ、知り合いか」

場にそぐわぬ頓狂の声が上がった瞬間、アリアは姿を現した。

まるで重力の向きが逆転したようにアリアはブロンドヘアを逆立て、二本足で天井に張り付いていた。そしてコンマ数秒の間にアリアは健二の背後へ音もなく降り立つ。

淡い紺色の詰襟、学校指定の制服を着ている健二は恋に気付くやいな、軽はずみな様子で駆け寄ってきた。

「なんだ、恋じゃん。こんなところで散歩か？」

「それはこちらの台詞です、健二さま。あなたこそこんな夜の学校でなにをしているのです？　どこかの麗しゅうご令嬢と逢い引きでもしているのですか？」

「そうだといいんだけど、残念ながら違うのだなー」

恋と健二。皮肉の応酬で双方険悪ムードを漂わせているが、その表情は弛緩されていた。

現在の状況を忘れてるように罵り合うふたり。蚊帳の外に置かれたアリアは意味深に秀眉を寄せていた。

「俺は見えての通りお化け屋敷やなんやにはかなり強い。富士急の四十分のあれも何が恐いのか説明されても理解できないな」

「何を呑気なことを……大体、健二さまの所為で華凛さまが無茶な行動を……！」

「いいから、訊けて。とにかく、ここは普通じゃない。校内から出れないんだ。なにかが狂っている。おかしい。電話だって訳が解らんうちに遮断されたし……どういうわけだろうなあ？　そういやー、姉貴ヒステリー気味だったけど大丈夫かな？」

なるほど、顔は類似しているが、性格が別物だな——アリアは健二の振るまいから概ね性格を割り出していた。献身的な華凛とは違い、健二は自己本位で物事を見ているらしい。だが、その佇まいは落ち着いているように見える。何一つ状況の理解出来ない人間が闇に満ちた学校に閉じこめられ、平静を保てるほど健二は頑強な精神の持ち主なのだろうか？

恋が必要以上に忌避する理由も茫漠^{ぼうぼく}と解るような気がする。確かに恋とは馬が合いそうにない人柄だ。

健二は客観的に分析しても、軽薄な男に違いないだろう。

しかしアリアの中でなにかが引つかかっていた。

自己本位の下劣な男など警戒するに値しない人物、のはずだ。

先程、健二を拘束しようと接近した瞬間、アリアは戦慄してしまった。あと一步で間合いに入る――刹那に放たれた圧倒的な威圧感が動きに制限を掛けてきた。やむを得なく天井に跳躍をし、背後から奇襲を仕掛けようとした時、恋の制止を促す声が響いたのだ。

もし、あのまま背後を奇襲をしていればどうなっていただろうか？

「アリアさま、どうかしました？」

「ん……何でもない」

どうやら、無意識のうちに拳を握りしめていたらしい。汗ばんだ手のひらが深いワンシーンを彷彿とさせる。

あの時の威圧感は忘れられない。脳裏に焼き付いている。

アリアは心中で舌打ちをした。

望月健二という男の素性。華凜の行方。空間創造主の魂胆。通常では気付けない臭いまで感知してします嗅覚。これらの事柄からアリアの不満と苛立ちが鬱積していた。

それでもアリアは厳粛とした態度は崩さずに、低次元な争いを繰り広げるふたりの一步後ろに歩いていた。今は、校舎二階、一年生らの教室を探索中だ。健二に罵倒を浴びせつつも、恋は着実に華凜探索にも思案を巡らしているらしい。現に一階の探索は既に終了済みである。

アリアの主観からみた校舎は少々入り組みすぎていた。

天井からは蛍光灯の弱々しい明かりが廊下を照らしていた。ひとつひとつの部屋はどれも類似点が多く、短い間隔で連なっており、アリアは教室の違いを見分ける術が解らなかった。

健二の証言によれば、女子の筆跡による呼び出し文書たる手紙が知らぬうちに鞆の中に紛れ込んでいたのだという。内容は愛の告白ではない。いや、もしかすると見る者によっては恋文にも見えなくはないかもしれない。

『親愛なる望月健二さま

わたしはあなたを必要としています。あなたがいなければわたしはおそらく生きていけません。今日の放課後、屋上で待っています。あなたを必要とする者より』

手紙とはこのご時世に随分古典的な手法ですね、と恋は毒づいていた。

健二はこの恋文（らしき物）に懐疑心を抱かず、ひたすら屋上で待ちぼうけ、やがて日も暮れたところでようやくタチの悪いイタズラだと悟り、結果、校内に閉じこめられた。健二はたまたま巻き込まれた被害者なのか、それとも故意的に誘い込まれた罠なのか。

解ることはこの空間を作り上げた人物は生徒による内部犯行ということだ。

アリアがそう結論付いた。恋も同じ結論に到っているはずだ。

「ところでさ……赤バンダナの外人さんは何者よ？」

「武芸十八般を極める旅途中にたまたま家に逗留している風来坊さまです。彼女が成す武術には感嘆を覚えます。コンクリートさえも豆腐のように砕いてくれる頼れる存在です」

健二の疑問に恋はいけしゃあしゃあと嘘を並べて答える。よくもそう一瞬でまことしやかな嘘を作れる恋のほう后感嘆を覚える人物に相応しい。

恋の言動にアリアは肯定も否定もせず口を開いた。

「アリア・ガーネット・アンダーソン。アリアで良い」

「日本語上手っすね。良かったら今度アリアさんの武術とやらをお披露目してくださいよ。俺、強い女の人って憧れるんですよ。いいっすよねー」

喋りながら近付いてくる健二。気配も表情もなにもかも、奇を衒ったところはない。ただ、恋が嫌悪感を剥き出し、半ば呆れ気味な様子で虫でも放逐するように手を動かした。おそらくは適当にあしらえという暗黙の合図なのだろう。

——言われなくとも承知している。

「アリアさんはマジでコンクリートとか砕けるんすか？」

「ああ。多少指先が痺れるが、可能ではある」

「うお、すっげ。その強さの秘訣はなんっすか？」

「……自分を否定しないことだ」

言って、アリアは苦笑いをした。我は一体なにを考えているのだろうか？

日を重ねる度に霧散していく獅子時代の記憶。我ひとりが消えたところで非情集団のあいづらが、気に留めるとは思っていない。むしろ食事の配分が多くなった事柄をささやかに喜んでいるのではないだろうか？

——ノスタルジックになっている場合ではないな。

失われていく記憶の代用品が『アリア』としての記憶。恋との生活。

獅子に戻ったところでアリアが帰趨するべき場所は無いかも知れない。いや、無いに違いない。いっそのこと一生を人間として過ごすほうが充実した毎日を送れるような気がする。それだけ恋と過ごす日々は愉悦に浸ることに等しい。

それでもアリアは獅子としての自覚を失ってはならないと思っていた。自己意義を見出す唯一の手段がそれである。自分を『人間』と認めてしまったときに今の『アリア』は『アリア』ではいられないような気がした。

「アリアさま？」

「アリアさん？」

恋と健二は不思議そうな表情でアリアを窺っている。
知らぬ間にアリアは歩をとめていた。

「……すまん」

「どうかしましたか？」

恋は華凛の安否を懸念しつつも、アリアの容態も気に掛けてくれている。

「いや、問題ない。腐臭で感覚が鈍っているだけだ」

嘘ではない。ここに来て一層に腐臭が強まっている。それがアリアの思考を鈍らしている間接的原因というのも嘘ではない。

「臭いの源は、近い」

階段を上り、三階へ向かう。

上り切った直後、強烈な腐臭がアリアの鼻腔を刺激した。

予想以上の腐臭にアリアは吐き気が催し、膝が地に着いた。熱く、酸味の強い流動物が下から上へ、喉に流れ込んでくる。喉が焼けるように熱い。それでもアリアは逆流してきた流動物を全て嚥下し、胃の中へ戻した。

「大丈夫だ……」

アリアは極力鼻腔を刺激しないように口から空気を吸入する呼吸法に変え、ゆっくりと立ち上がる。

不安げに見詰めてくる恋の視線が機微な部分に突き刺さった。健二ですらアリアの体調に不安を覚え始めている様子だ。

——これでは足手まといではないか。

「腐臭は……そこに立ち込めている」

「……ん、そこって愛沢のクラスだよな？」

アリアが指で促したクラスに健二が答えた。

「それより、腐臭ってなんっすか？ 臭いなんてなんもしないっすよ？」

「健二さま、半永久的に黙っていて下さい」

恋は軽いステップで教室に歩み寄った。後を追うようにアリア、健二が扉の前に立ち塞がる。神経を扉の向こう側に集中するが、不穏な気配は感じられない。

扉の奥は腐臭の巣窟だ。アリアは全ての臭いを感知しないよう呼吸法を変え、腐臭への対策を敷いた。多少の息苦しさを考慮すれば、思考に差し障りがない程度には動ける。

開けます、と恋のアイコンタクトにひとつ頷く。

接着音を殺しつつ人ひとりのスペースを開け、恋は滑り込んだ。

続く健二は疑問符を湛えつつ、粗雑に扉を全開にした。煩わしいとも思ったのだろうか？ その行いについて、恋は糾弾をせずに嫌悪感をあらわにして秀眉を寄せた。

「うっ……なんです……この臭いは……」

「うお……くっせえな……」

恋と健二は双方同じように鼻を押さえた。健二はすぐさま音を上げ、教室から退出した。

嗅覚を遮断しているアリアに、腐臭を感知不可能だが普遍的な嗅覚の持ち主でさえこの有様だ。アリアには想像を絶する臭いに違いない。

「……あそこだ」

アリアは呟き、闇に満たされた教室を臆することなく進む。

「……これは……なんだ？」

おそらくは衣服と思われる上に、土塊つちくれのような茶褐色の粉末状の物体が満遍なく堆積していた。注視して窺うと土塊に埋没している中には制帽、ポーチなどがある。

しゃがみ込んだまま思案を巡らせていると天井の蛍光灯が数度点滅し、部屋全体を照らし出した。恋が点灯スイッチを入れたのだろう。

「それは……警察官の制服でしょうか？」

警察官。その職はアリアにも聞き覚えがあった。

「世の秩序を保つ聖職、だったな？」

「そうです。問題は何故、警官の制服がこのようなところにあるのでしょうか？ これを着ていた本人はどこへ消えたのでしょうか？ 服を脱ぎ捨てなければならぬ状況に陥ったとは想像しかねますし……それにこの土塊が不可解です」

恋は足で土塊を漁っている。

「やはり、これは華凛さまが呼び出した警察のようですね」

？それ？を見たアリアは不快感を煽られた。

黒と銀で縁取られた？拳銃？が恋の足下にある。

「……スミス&ウェッソン。警察官標準装備の自動拳銃です。数刻前まで警察官はここにいた。しかし予想足りしない？何か？に襲われ、姿を眩ました。まるで神隠しです。もしかすると、この土塊が人の残骸なのかもしれません。そうならばまるで養分を吸い取られた人間の成れの果てのようです……」

恋は不気味な仮説を壊れた笑みで説く。まるでそう確信しているように。

「どうすればこのような姿に人間はなれるのでしょうか？ 蚊のように鋭いくちばしで生気を吸い尽くすのでしょうか？ 崩れ落ちる瞬間はどのような気持ちなのでしょう？ 苦しい？ 悲しい？ 走馬燈は見えるのでしょうか？」

語るたび恋の表情は壊れていった。唇の端は嘲笑するように吊り上がり、眼球が飛び出しそうなほど目を見開いている。強く握り閉められた両拳から、赤い液体がポタポタと滴り落ちる。もはやその佇まいは愛沢恋という人間とは思えないほど異形なモノに変貌していた。

「恋！」

アリアの咆哮に近い叱咤に恋は身を震わせた。壊れた笑みは消え去り、呆然と血塗れの両手を直視していた。

「……なんでもありません」

「嘘をつけ。恋、今のお前は錯乱状態にあった」

「……そうです。けど、もう平気です」

「本当だろうか？」

「はい……。とりあえず、ここから出ましょう。これ以上の手掛かりを望めそうにありません」

「……解った」

得心は出来ない、出来るわけがない。しかしこのような状況下で無駄な諍いは起こしたくない。恋も華凜の安否を懸念するあまり、錯乱状態になったただけだろう。そうでなくとも移動しつつ、事情を訊ねれば良い。

アリアは一足先に廊下へ出ると、廊下でへたり込んでいる健二と目が合った。

「なんか、すごい叫んでいたっすね。どうかしたんっすか？」

「さしたる問題ではない」

「そうっすか」

「……妙に落ち着いているな。お前」

「そういうアリアさんも充分落ち着いてるっすよ」

「我とお前では比較対象にはならん」

「うわ、辛い言葉っす。俺は俺で色々と考えているんっすよ。女の子が一番喜ぶ接し方とか、女の子が一番喜ぶ言葉とか、その他色々、毎日を楽しく過ごせるようにしていまっす。そういや、明日亜紀ちゃんとデート予定だったんだけどなあ」

「……ふん」

返す言葉が見つからずアリアは鼻を鳴らす。そのまま健二の隣に移動し、背中を壁に預けた。開け放たれた扉の向こう側では今だ恋が土塊を覗き込んでいた。

声を掛けようにも恋の背中中は全てを拒むように見える。

「恋。そろそろ行くぞ」

「おーい、愛沢。さっさと行こうぜ」

健二が呼び掛けても恋は一顧足りしない。

「おい、恋。いい加減に――」

言いながら教室に入り込もうとしたアリアはそれは叶わなかった。教室内に踏み込もうとした際、まるで意志を持つ引き戸がアリアの存在を拒むように綴じられた。

「……っ！」

隠すことなくアリアは舌打ちをした。完全に相手の思惑通りにやられた。

悔恨の念を覚えている暇はない！

扉をこじ開けようにもピクリとも動かない。

無我夢中でアリアは扉に拳を突き出した。アリアの一撃は人間の

内部を粉碎し、岩盤さえも容易く貫く威力を秘めている。

一発、校舎全体が地響きを起こした。

手加減はしていない。にも拘わらず、ただ数センチの厚みしかない木製の扉は傷一つない。

拳を突き出した体勢のまま、アリアは身じろぎした。まさか相手の？能力？がこれほどまで強力のものだとは思ひもなかった。ただ一枚の扉に全身全霊で放った拳を受け止められたのだ。

「アリアさん。これは、やばいっすよー」

驚くこともなく淡々とした健二の言葉に、アリアは猜疑心しか沸かない。一連のアリアの行いを目の当たりにしてなおかつ平静でいられるその精神は異常だ。もしや健二の中でのアリアは校舎を揺るがす破壊力を秘めた一撃を繰り出すのが普通となっているのだろうか？

しかし、それを問い詰めようにも状況が許してくれないらしい。

アリアと健二を除き無人だった廊下が《影》で埋め尽くされていた。人の影がそのまま這い出てきたように《影》は人間の輪郭を酷似している。頑健な《影》、髪が長く女の子の印象を与える《影》、矮小な《影》。ひとつひとつの《影》は人間その物を再現しているかの如く、個性を持っていた。

明確な敵意を放つ《影》たちは両サイドに概ね十体ずつと言ったところだろう。

本来ならば逡巡することなく《影》たちを颯爽と駆逐し、恋の救援に向かいたいのだが、その前にどうしても確認しておきたいことがアリアにはあった。

畏怖の象徴とも言える《影》を目の前にしても、健二の態度は変わらないのだ。

「何故、お前は驚かない？」

「アリアさんだって驚いていないじゃないっすか？」

健二はへらへらと楽天家の笑みを湛え、言葉を続けた。

「なんつうんすかね……世界は広いんだし、こんな摩訶不思議アド

ベンチャー的イベントが発生してもおかしくないんじゃないっすかねえ。もしかしてここから俺の物語が始まる可能性だってあるわけじゃないっすか。たまたま巻き込まれそこから俺は主人公とか。差詰め愛沢は秘密組織の一員。この事件をきっかけに愛沢は俺を組織に引き入れて、悪の結社と戦う戦士となるとか。それに……」

黒の集団が徐々に距離を狭めてくる。

アリアは後退り、健二はようやくその重い腰を上げた。

「俺は普通じゃないっすから」

次の瞬間、突風とも言える強風がアリアの髪を逆立てた。

アリアの視界には《影》の間を縫う健二の姿が視認できた。その健二を《影》とすれ違う都度、銀光を閃かせ、攻撃しているようだ。そして、片サイドの《影》たちは同時にその身を縦に切り裂かれ、黒い煙を噴出しつつ跡形もなく消失した。

立ち止まった健二が携えていた物は一本の短刀のようなナイフ。

アリアは驚愕のあまり絶句した。ただ者ではないと薄々勘づいては、それは可能性の一旦として考慮してただけで、まさか『本物』だとは予想外だ。

たるみきった表情で健二は再び地を蹴った。アリアの真横をすり抜け、《影》たちに向かっていく。その姿はあまりにも場にそぐわぬ光景だ。

逆手に携えるナイフを《影》の胸腔部分に突き刺し、そのまま頭蓋まで引き上げる。一拍遅れてその《影》は黒い煙を切り裂かれた箇所から噴出させ、消失した。縦に切り裂き、横に切り裂き、首を切り裂き……《影》たちは例外なく血飛沫を連想させる煙を噴出した後、その身を闇に霧散させる。そして、健二も例外なく全ての《影》を一閃で仕留めていた。

数十体はいた《影》たちはまるで最初から存在しないかのように、痕跡を残さず消え失せた。ただ存在していたと証明するように健二が携えるナイフの刀身に黒いモノが付着している。これ以上ないほどにアリアは意表を突かれた。

健二の動きは確実にアリアを圧倒している。《影》の間をぬうスペースを瞬時に見分ける判断力、即決力。未曾有の生物を一撃で仕留める殺傷力には感銘さえ受ける。

「お前、何者だ？」

アリアは問う。理屈では説明出来ないアリアの第六感が健二を危険人物と促している。敵愾心を燃やす《影》を倒したところを見る限りではこの空間の創造主とは繋がりが無いのだろうが、それでも多大な影響力を持つイレギュラー分子を野放しには出来ない。いや、健二の行いはアリアを油断させるデモンストレーションの可能性もある。

答え次第では措置もやむを得ない。

アリアは神経を研ぎ澄ませ、臨戦態勢を敷く。単純な力比べならいざ知らず、根本的な疾さでは歯が立たない。

張り詰められた空気。それに対し、健二はへらへら笑いを崩さず、言った。

「ただの正義のヒーロー志望っす」

なんと言えればよろしいでしょう。

もう、めちやくちやです。具体的に何がめちやくちやなのだろうと私の精神状態とか。誤字やら何かあれば、文句の一言備え付けで報告していただければ幸甚です。

とりあえず、いつしかキャラ紹介のリクエストがあつたので纏めておきますシリーズその二。

番外編登場人物

愛沢恋——番外編ヒロイン。特務機関派遣戦闘委員、兼、派遣監視委員のふたつの役職を持つ機関屈指の苦勞人、通称《拳銃屋》ガンスリンガー。物質を範囲内にある限り転移可能な、第五級指定『物体転移』能力を生まれながらして使える能力者。

その実体は今をゆく15歳の女子中学生。機関最年少であるにも拘わらず、総合的な戦闘力は群を抜いている。

アリア・ガーネット・アンダーソン——特務機関派遣戦闘委員、通称《蒲公英》ダンデライオン。有機物、無機物関係なく、生命が宿るもの以外の物体の形状、性質を変化させることが可能な、第三級指定『性質変化』能力。アリアは能力覚醒と同時に人間へと姿を変貌させた獅子_{ライオン}である。そのためなのか身体能力は非凡極まる。

人間へと変貌した姿は腰まで届くブロンドヘア、翡翠色の双眼、褐色の肌、蠱惑的官能的なラインを描く女性にしては長身の二十歳前後の異国の女性。実年齢は三歳。現在は恋と同居中。派遣戦闘委

員とはアリアにとっては仮初めの役職であり、恋に恩を返せた時点で元に戻る手立てを模索するつもり。

尾崎啓一——特務機関内で肉体労働以外の全ての役職を担う頭脳派役員。主軸としては任務遂行中の派遣戦闘委員のサポート。その中でも恋のサポートを中心としている。啓一の手腕は機関内で紛れもなくトップであるが、恋やアリアのような能力は保持していない一般人。国立大学に通うまだ将来を嘱望される得難い人材。

望月華凜——恋のクラスメイト。現在行方知らず。

望月健二——華凜の双子の弟。脳天気な生粋の女好き。アリアを圧倒する戦闘能力を持っている。

愛沢滋——特務機関派遣戦闘委員、通称《狂詩曲》。恋の実の兄。水素原子を操作する能力。階級などの繊細は不明。ただ、その実力は機関随一の強者である。

椿未梨——本編のヒロイン。未登場である。

以上、こんな感じです。相当即席です（笑）

今回のお話は文章自体はうまく書けたかも。内容は無視して（笑）
どうも原稿用紙45枚分らしいです。

ある更新遅れてすみません。忙しかったわけでもなく、最近は無
ノベを読む方に時間を費やしていただけです（笑）

余談

ラノベ以外にも私は一応本を読みます。文学はほぼ読みません。
著者極論のエッセイなどをちらちらと読んでいます。そういうもの
を読み続け、辞書を引き続けているうちに私は思いました。

漢字検定取れるのでは、みたいな。

というわけで、社会人が持っておきたい2級を勉強中。

読み書きはともかく、四字熟語が書けません（笑）

考えが甘かったです。だが、諦めません。

そんなわけで次話は、あれです。番外編二回目終了です。アリア
さんを活躍させなければ可哀想なので、多分、長くなります。

では、また近い内に。

蛍光灯から降り注ぐ光は狭い教室を照らしている。

その教室で、愛沢恋は腐臭を放つ土塊の前にへたり込んでいた。恋は焦点の定まらない双眸で呆然と土塊を眺めている。

思考を止め、ただ土塊を見詰めていた。思索を続け、最悪の結論に辿り着くことを恋は恐れている――いや、結論はもう出ている。ただ、今は、何も考えたくはない。

先程、背後で扉が閉じる音を鼓膜が捉えたが、恋は振り向きもせず土塊に視線を固定させている。おそらくは空間創造主が意図的に恋を閉じこめたのだろう。その程度のことは思考を止めている恋にも把握できていた。

能力者の目的も目当てがついてきた。

だが、恋は動こうとはしない。動けば、否応なく脳が働く。それにより余計な感情が溢れ出すことを恋は危惧していた。

「ねえ、恋ちゃん」

背後に気配が降り立った。聞き慣れた声も今の恋には拷問の他ならない。

望月華凜もちづきかりんが後ろにいる。

「華凜さま……ご無事でなによりです」

振り向きもせず恋は答える。その表情は少なくとも華凜の無事を喜んでいるようには見えない。

「やっぱり、恋ちゃんは追い掛けてきてくれたんだね。危険を承知であたしを助けに来てくれた。あたし、本当に嬉しいよ。十五年間生きてきて、色々な人達と会って、友達になったけど、恋ちゃん以上に優しい人はいないと思う。恋ちゃんは優しい女の子。恋ちゃんのことはあたしが一番よく知っている。あたしの最高の親友、愛沢恋ちゃん。だけど、気付いちゃったんだ」

恋は答えず、一顧した。

蛍光灯に照らし出された華凜表情はどこまでも幸せそうに微笑んでいる。

「恋ちゃん……うんうん、人間は汚いんだよ。どこまでも都合のいい生物。なんで人間が食物連鎖の頂にいるのかあたしには解らないよ。恋ちゃんがどんなに優しくても、それは一時的な物、感情の迷いなんだよ。あたしはそれに気付いちちゃった」

「……」

「だから、恋ちゃんはあたしと一緒に頑張って貰う。優しいままの恋ちゃんですとずっと、どこまでも一緒にいよう」

朗らかに語る華凜の周りに、数体の《影》が沸き出た。ヒトの形をした黒い《影》は不気味に身体を痙攣させている。恋には、その《影》たちの反応が悲痛の呻きにも聞こえた。助けてくれと泣いているようにも見える。

恋は異形の《影》に驚愕も焦燥も、路傍に転がる石を見るような無感動の表情でそれを見据えていた。

土塊に埋没した警察の制服を目撃したときから恋は全てを悟っていた。

一連の事件は全て『華凜』仕業と。

ここに恋を呼び出したのは？ 行方不明者が学校で多発していると恋に促したのは？

恋が正式に華凜を疑い始めたのは、健二の手紙が華凜の筆記体に非常に類似しているのを目にしてからだ。それも可能性の一旦として頭の隅に置いていただけで深くは考えずにいた。だが、土塊に埋もれる拳銃を発見したとき、恋の危惧は確信になった。

銃身に刻まれた小さな文字の羅列。

『親愛なる恋ちゃんへ』

恋は無造作に銘打たれた拳銃を標準を華凜に合わせた。

「けど、恋ちゃんは簡単にあたしと一緒にしてくれるそうにないよね。あたしの力のことも知っているみたいだし……ガンスリンガー《拳銃屋……だっけ？ 敵に回したことを後悔させてくれるの？」

緩慢な動きで数体の《影》たちは近付いてくる。

「……警察官と行方不明の生徒はどこです？」

「小野君」

華凜は巨漢の《影》を指差した。

「矢部君」

輪郭の細い《影》

「祐理ちゃん」

小柄で矮小な《影》

「藍ちゃん」

女性らしい曲線を描く《影》

「岬ちゃん」

頭ひとつ飛び出ている《影》

そして新たな《影》が華凜の横手に沸き出た。

「警察の人」

どの《影》よりも頑健そうでたくましい《影》

「みんな目の前にいるよ。みんなあたしの力になってくれたんだ」

訊かされた名前はどれも聞き覚えがある物だった。

先月まで何事もないように会話は交わした級友たちだ。

「……その人達は自主的にそのような姿になったのですか？」

「うんうん、違うよ。みんな怖がっていたし、嫌がっていた。最初
はここに呼び出したあたしを貶していたくせに、力を使えばみんな
怖がって、泣いていたよ。助けて、みんなそう言った。あたしのこ
とを化け物って言ってた。みんなヒドイよね。岬ちゃんなんて3年
間同じクラスなのに、一皮剥がせば平気で殴りかかってきた。小野
君なんかには強姦されかけたよ。みんな汚い。だから、器を消して、
魂を顕在化させた。こうすればみんなにも言わない」

「……わたしもそうするつもりですか？」

「恋ちゃんはこんな「できそこない」にさせないよ。恋ちゃんは恋
ちゃんのままでいてほしいから。だから……じっとしててよ」

華凜が言い終わるのを合図に6体の《影》が一斉に飛び掛かる。

刹那、6度の銃声が響いた。

恋は携える拳銃を《影》に定め、引き金を引く。神業的速度で五発放たれた銃弾は五体の《影》の頭蓋を打ち抜いた。頭部を穿たれた《影》たちは空中に制止したまま、傷口から黒い煙を噴出させ、その身を闇に霧散させた。

恋は無機質な表情で煙越しにいる華凜に銃を構える。

「……すごい、すごいよ！ 恋ちゃん！」

あまりに無邪気で純粋な賞賛の言葉。

「恋ちゃん……うんうんッ！ 《拳銃屋^{ガンスリンガー}》さん。あなたもあたしと同じなの？」

「……同じです」

構える拳銃を投げ捨て、恋は虚空に諸手を捧げた。淡い燐光をまとい恋の手元に現れたのは二丁の機関拳銃^{マシンピストル}。それを手に取り、恋は身構えた。

「今なら華凜さまの弁護ができます。白旗を挙げてください」
そう言った恋の態度は弱々しく、要求というよりは懇願に近かった。

「……なんで？ なんであたしが降参しなくちゃならないの？ ねえ、恋ちゃん。教えてよ。交渉っていうのは、相手より強い立場にあって初めて成立するんだよ？ 恋ちゃんはあたしより強いのか？ そんなわけないよね？ さっき恋ちゃん、自分で言ってたじゃん。あたしの？ 能力？ は強い、厄介だ、って……弱い癖に……調子に乗らないでよ」

「……そう、ですか」

恋はうつむき、小さく、悲痛に呟いた。

とりとめもなく湧き出る負の感情を押し殺し、うつむいた顔を上げる。その表情に迷いはない。今の恋は『愛沢恋』ではなく、戦闘

委員《拳銃屋^{ガンスリンガー}》だ。

「《拳銃屋^{ガンスリンガー}》……行きます」

「多分、俺らを閉じ込めている人は姉貴っすよ」

「……肉親を疑うとなると、何か確信があるのであろうな？」

「いや、なんもないっす。直感っすよ。姉貴ならこんな悪趣味ないベントやりかねないし、最近妙に上機嫌だったから何か悪巧みでもしてんのかなー、って思っていただけっす。それに手紙の筆記体なんて姉貴その物——っつか……こいつらしい加減にウザイんっすけど」

悪態をつき、健二は《影》の胸元に潜り込んだ。

「ハロー、そしてグッバイ」

銀光が煌めきは不可解な気圧変化を起こした。健二が繰り出すナイフは五月雨のように《影》を切り刻み、更にその後ろに構える《影》たちも切り刻まれてゆく。肉眼では確認出来ない斬撃が大気までも切り裂き、急激な気圧変化により真空刃を生んでいるのだろう。文字通り見えない斬撃。健二であるが故に可能である産物だ。だが、その人間離れた動きが更にアリアにわだかまる謎を一層と深くした。

なんらかの？能力？が健二に働き、超人的動きが可能としても説明出来ない部分がある。

健二は明らかに戦い慣れていた。

それを証明するように健二が《影》に繰り出す攻撃は、全て人間という急所を寸分なく穿ち、または切り裂いている。まるで数多の人間をそのように駆逐していたかのように。

「アリアさーん。手伝いましょうか？」

「無用だ」

アリアは眼前に迫る《影》の頭部を掴み、そのまま握り潰した。

「これで、一応全部か」

「そうっすね。また出てきそうっすけど……」

アリア同様、息一つ切らしていない健二だが、もう動けないと言わんばかりのボディランゲージでその場に大の字にへたり込んだ。

確かに何体の《影》を駆逐したことかアリアは覚えていない。一度全滅させたと思った《影》は再び沸き上がり、それを倒してもまた沸き上がり、また沸き上がりまた倒し……それを繰り返していき、ようやく一段落がついたところだ。とは言っても《影》を八割方始末したのは健二であり、アリアは仕留めぞこないのおこぼれを頂戴しただけだ。

「それで、さっきの続きだが……お前の姉がこの発端の因果人物だというのか？」

「ほぼ、間違いないっすね。そこに愛沢を閉じ込めたのも多分、姉貴。今頃はふたりで何かやってるんじゃないっすかね？　そうなると……マジでやばいじゃないっすか！」

弛んだ顔を厳粛引き締めた健二が天井にぶつかりくらいまで高く飛び上がった。

「やはり、恋は窮地に立たされているのか……」

「そうっす。このままじゃあ愛沢の貞操が危ない！　くそお、姉貴の奴、抜け駆けとは卑怯な手段使いやがって。せめて鑑賞ぐらいさせろよなあ……」

見当違いなことをこの世が破滅するかのような悲愴に呟き、健二は壁を殴りつけた。

健二という男がアリアには解らない。どこまで本気でどこまでが冗談か、その境界線さえも埋もれている。

「今は一刻をようする。だが、ひとつだけ確認しておきたい」

「……なんっすかあ？」

「お前は敵か？」

「あっは。んな訳ないじゃないっすか。俺は可愛い女の子を救う為にいる正義のヒーローっすよ。よってアリアさんには手を出さない！　よって愛沢にも手は出せない！　あいつは傲慢だが顔は良い。

俺が目をつけているだけあって、最上級でビードウーイング。そうだ、吊り橋効果って奴っすよ！　今ここで愛沢をさっそうと救い出せば、きつと愛沢は俺に恋心を芽生えさせるは可能性も……！」

正義の味方、健二が持つ正義の水準は低いらしい。

敵ではない。それを鵜呑みする訳はないが、確かに健二が敵愾心を燃やしているようには見えない。完全とは言いつれないが、場合が場合だ。健二が助力してくれるとなれば、敵からの滞りを最小限に抑制できる。事実、《影》をアリアひとりで相手にしてたとなれば相当な疲弊を伴い、最悪のケース、《影》に飲み尽くされていたかも知れない。

それだけ、健二の動き常軌を逸している。

ぶるんぶるんとナイフを握る手を回し、健二は意気込んだ。

「よっし、まずはー……この壁をぶち破らないと」

「可能なのか？」

教室内には薄い壁を隔たりに恋が閉じ込められている。

アリアはあらゆる手を尽くし、教室内への侵入を現在進行形で試みていた。扉から壁まで破壊可能な箇所を全身全霊で殴りつけたが、そこには傷一つつかずに終わっている。今ではアリアの右拳からは赤い液体が指先を伝い地面に滴り落ちている。

それを目の当たりにしていたにも拘わらず、健二はおちゃらけな笑みを崩さず言った。

「愛の力に不可能はない。この程度の憚りは一瞬で開通――」

ノーモーションで繰り出されたナイフは鼓膜に残る甲高い音を発し、あえなく壁に拒まれた。

拍子抜けだ。心のどこかで期待していた分、アリアの落胆ぶりは大きかった。

「お前でも無理か」

「予想以上に硬いんすよ……よっしや、本気だしちゃる」

そう言った瞬間、健二の纏う空気が一変した。

表情は相変わらずふざけた笑みを湛えている。

ただ、周囲の空気が震えていた。

殺気では無い。形容し難い空気が空間を満たしていく。

健二の傍らにいたアリアは、その変貌ぶりに意識とは無関係にた

じろいだ。一步、また一步、距離置こうと後退る。

静寂が満ちるこの空間では心音さえも明確に聞こえる。

頬から脂汗が浮き出る。心臓の鼓動が速まっている。

健二は微動さえせず、壁を見据え、いや、壁の奥を見据えている。おちゃらけの笑みが場を満たす空気と対極なためか不気味に映る。

アリアは頬に伝う汗を腕で拭う。強烈なプレッシャーに当たり過ぎたのかと、アリアは思ったが、すぐにそれは違うと気付いた。

熱い。

健二を中心とし、急激な温度上昇が起こっている。

何も言わず、ただ笑みを浮かべたまま、健二は構えた。左足を主軸とし、ナイフと共に腰を引き、右足を引きずりながら後ろに下げる。

注意深く見ると、ナイフは薄く、見過ごしそうなほどだが、赤く燐光している。ナイフに何を付与したのかアリアには解りかねない事だが、おそらくあれが温度上昇の原因だろう。それがどのような効果をもたらすのかは想像の範囲外だ。

考えずとも答えは目の前にある。

健二は、唐突に動いた。

赤の軌跡が走った。人外の動体視力を備えるアリアでさえ健二が繰り出す攻撃をその目で視認することが出来ない。ナイフの銀沢とは無関係な赤の軌跡が無数に走っている。金属と金属が衝突しあうような音が廊下の壁と反響する。音が音と認知する前に矢継ぎ早に音が響く。鼓膜に残るその音にアリアは眉間にしわを刻み、凌いでいる。

完全なる鉄壁に一筋の亀裂が走った。

そして、

「ムリ」

健二は腕をとめ、降参と言わんばかりにその場に倒れ込んだ。激しい息づかいをしているところ、疲弊に満ちた表情は演技ではないのだろう。

「……もう少しであろう」

「いやあ、あとちょっとどころか後3時間は掛かりそうっすよ。アリアさんは動体視力が良すぎるからそう見えるだけで……ほら、壁見て下さいよ」

仰向けの状態で健二は言う。

促され、アリアは視線を壁に移した。

そこには健二の努力により刻み込まれた亀裂が……ない。

亀裂が消えている。

「そういうことか」

「そういうことっす」

亀裂の消失。

この壁は強力な保護力を備え、更に甚だしい修復機能までついている。

その事態に、いち早く気付いた健二は壁への抵抗を放棄した。そういうことだろう。

「ちまちま壊そうとしても、壁の修復スピードが早すぎっす。あんなだけ頑張って亀裂一本とかふざけてるなー。一撃で大穴開けないとダメっぽいっすね」

「一撃、でか」

「アリアさん、何か方法持っていないんすか？ 隠された力とかあったら出し惜しみしないで見せて下さいよ」

「出し惜しみなど――」

隠された力？

その言葉がアリアにあることを気付かせた。

アリア自身、自分が？能力者？であることを忘れていた。使いどころが今の今まで無かったので、無理もないといえは無理もない。

「そこをどけ」

健二を足蹴にして、なるべく多くのスペースを確保できるようする。

アリアは自身の？能力？については把握仕切れていない。むしろ

解らないことだらけだ。暴走時のエリアは？能力？を滞りなく行使していたらしいが、現在正気を保っているエリアは？能力？を発動させることさえ至難の業と思える。応用以前の問題で、エリアは？能力？を発動させる能力者なら当然とやってのける基本すら漠然と理解しているだけだ。

日常では使う機会はない。あつたとしても恋と機関に？能力？行使を嚴重に止められていたので、どのみち日常の世界に能力が及ぶことはなかっただろう。

エリアの？能力？——第三級指定『性質変化』

生命の宿らないモノなら、有機物無機物問わず、形状や性質を組み替えられる使い勝手が良い？能力？。そう機関の研究員に訊かされたが、人事のようにしかエリアには思えなかった。

壁に両手を当て、エリアは瞑目した。

イメージ。まず、この壁をどうしたいのかを思い浮かべる。

開け。開け。開け。開け。開け。開け。開け………

少しずつ、小さな穴が生まれ、やがてその穴が拡大していくイメージ。やがてそれは扉大にまで領域を広げ——

「いらっしやい、健二。あと、エリアさんだっけ？」

明るい印象を根強く残っている——望月華凜の玲瓏な声にエリアは開眼した。

イメージ通り、本来壁のある場所は関取さえも通れるほどの入口が形成されていた。その奥には華凜が黒い瘴気を羽衣のように纏い、朗らかな笑みを浮かべている。蛍光灯に照らされたその表情は見る者を戦慄させるだけの要素は充分にあった。赤い液体を制服一杯に付着させ、長い黒髪も赤く染まっている。

エリアの傍らをすり抜けた健二は変わり果てた華凜の姿を見て、率直な感想を漏らした。

「やっぱり、姉貴か。地味な癖にずるがしこいやり方は姉貴の専売特許だもんな」

「そうかな？」

どこにでもありそうな姉弟の軽い皮肉の応酬。

血塗れの姉とそれを見てなお態度を変えることのない弟。

完璧に狂っている。

「愛沢をどこだ？」

「ふふ、どこでしょう？」

華凜の視線をアリアの真横に定められている。釣られてアリアも視線を横に移動させた。

そこには、ずたぼろの漆喰のロングコートに身にまとい、壁にもたれ掛かる恋の姿があった。

「恋！」

「わたしなら大丈夫です」

物怖じしない態度で、恋は血塗れのコートを脱ぎ捨てた。所々怪我を負っているが、どれも見過ごせる程度で命に関わるようなものはない。恋は諸所こびり付く血痕を振り払い、華凜を肉薄した。両手に携える機関拳銃を華凜に標準を合わせる。爛々と輝くその双眸はまだ勝負が終わっていないと言いたいのであろうか？

「もうやめときなって、恋ちゃん」

「それを聞き入れることは、わたしには出来そうにありません」

「じゃあ、どうしてほしい？」

一瞬、表情を曇らした恋の代わりに健二が言葉を引き継いだ。

「答える必要なんてないぜ、愛沢」

健二は恋をなだめるように言う。

「姉貴はやっちゃいかん事をやりすぎたんだろ？　なら、それ相應の罰を受けるべきであって、それは絶対甘やかしちゃいけない。それに愛沢、お前、怪我がないからって調子乗って動けば、それこそ姉貴の思うつぼだぜ？　あとは、俺がやる。肉親の不始末ぐらい俺が掃除しなきゃなんか示しがつかないからなあ。つと、今の俺ヒーローっぽいかも……」

呆然する恋に健二は満足そうに鼻を鳴らし、どうも獰猛なナイフの柄をあたかもペン回しのようにもてあそびつつ、華凜と向き直る。数秒

前まで朗らかな笑みの浮かべていた華凜の表情は一変し、怒りが浮き彫りに出ていた。

「なんで……なんで健二は恋ちゃんを庇うの？ 好きだから？ 可愛いから？ なんてあたしの味方にはなってくれないの？ あんだけ……あんなに可愛がってあげたのに……ひどいよ……」

「前々から思ってたけどさ……姉貴、俺の正体、知ってたよな？ 姉貴が俺に対する愛情は姉弟愛から来るモノじゃなくて……なんだろうな、もっとギスギスとして、猛獣を餌付けしようとしているみたいな、そんな感じだった。あの手紙も姉貴の差し金で、どうせ見返りは俺の助力とかだろ？ いかにも悪者がやることだよな。はつきり言って、ダサイぜ」

「……じゃあ、いいよ。せめて邪魔しないで。恋ちゃんはあたしのモノになるんだから」

「それはムリな相談だなー。ここで、はいそうですかと引くほど俺は落ちたつもりはないし、久しぶりにカチンと来ちゃってる。ここは正義のヒーローとして諸悪の姉貴に天誅しなくちゃね」

「お姉ちゃんにそんな物騒なモノ向けるの？」

「おう」

「なんで？」

「この場合、姉貴に同情の余地がないからである」

「あたしは、健二を傷つけないよ」

「俺も」

「じゃあ、やめようよ」

「姉貴が降りるなら、やめてもいいぜ」

「……引く気はないんだ？」

「少しはある」

「じゃあ、引いて」

「どうしょっかなー？」

健二の視線がちらりとこちらを見詰めてきたのがアリアには解った。その視線はアリアだけが気付き、恋は健二の不可解な言動に戸

惑いを隠しきれずとも機関拳銃を真っ直ぐ華凜へと向けているので、
気付いているとは思えない。

健二の視線が動く。アリアから開通した大穴に移る。

逃げろ、ということだろうか？

「逃がさないよ。恋ちゃんも健二も、アリアさんも」

「あっちゃ、バレた」

バレるバレない以前の問題に、アリアは健二がなにを促していたのか解らなかった。たかだか数十分時間を共有した相手とアイコンタクトを交えたところでそれが何を促し示す合図なのか理解出来やしないだろう。軽率な男を装った深謀遠慮の男と健二を値踏みしていたアリアにとってはその見識を改める必要がありそうだが、そのような猶予が残されていない。どんなに軽率な人物でもそれくらいは解る。

華凜が謡い始めた。

それは訊く者を恍惚とさせる魔性の声。謡う華凜は天井、いや、その隔たりを超えた大空を仰ぎ見据えている。

これはまずい――野生の本能がアリアに危険を訴えかけていた。今すぐ、謡を止めさせなければならぬ。そう思うほど全身が脱力する。華凜の声に耳を傾けていると意識だけが安寧の地へ飛びそうだった。

墜ちる者は異端者。謡う者こそ全てを司る者なり。

異端は墜ち、謡い手は滅びぬ。

赤は封印。

緑は隔絶。

黄は謡い手に滅ぼされん。

色は連なり、我が道に導く。

謡い手は異端へと断罪をなさん。

上げていた両手を下ろすと同時に華凜は謡うことをやめた。

同時に静寂が訪れた。

結局、華凜が歌い終わるまで誰一人動けず終^{しま}いだ。

恋は啞然と、健二は腹が読めぬ、しかしどこかいらついている様子でもある。

そしてアリアは自分の不甲斐なさに腹を立てていた。この場に来てからというもの、足を引っ張ることはあっても決定的な活躍は皆無だ。そして今も、打破出来る状況であつたのにアリアは動けなかった。甘い誘惑に打ち勝てなかった。

現実味が無くなりつつある空間に、銃声が鳴り響いた。

無数の銃弾がアリアの横手を通り過ぎ、華凜へと飛翔する。

意表を突いた銃撃、華凜の視線は迫り来る銃弾をあたかも見えているよう焦点を定めている。いや、見えているのだろう。しかし、銃弾を視認出来ようが、それを捌くにはそれ相応の反射神経と身体能力が必要だ。アリアはそう思っていた。

華凜の身体が黒い霧に包み込み、それは襲い来る銃弾をも包み込み、闇へと消化した。

「……恋ちゃん、あとで遊んであげるから」

闇と化した華凜の声は凜と響くようだ。

「今すぐで結構です」

マシンピストル

恋は機関拳銃に新たな弾倉を装填し、再び華凜——闇に照準を合わせる。

「待てよ、愛沢。ここは俺に任してくださいな」

「健二さま、あなたが何者か把握出来ない以上、助力は入りません」

「信用されてないなあ、俺。だけどこればっかは愛沢といえど譲れないぞ」

「足手まといです」

「あ、そりゃNGワードだぞ。知ってるか？ このシュチュエーシ

ョンは銃よりも刀剣なんかのほうが有利と相場が決まってるんだ」

「邪魔をしないで下さい」

「引き際を知らない女はイジメの対象になんぞこら」

状況を忘れてるように罵り合う恋と健二。

「恋ちゃん、健二。ふたりは退場だよ」

華凜を包み込む闇が弾けた。人間の可聴域を超えた爆発音とともに黒の個体が教室中に散乱し、周囲を黒一色に染め上げられ――恋と健二の姿が消失した。ふたりは一瞬にして黒の霧に包み込まれ、教室上から姿を消したのだ。黒い斑点が点々と烙印された教室にアリアだけが取り残された。それとも『取り残された』のか？

どうということだ？ アリアは先行する気持ちを抑制し、冷静に辺りを見渡した。やはり恋と健二の姿はどこにも視認できず、アリアの真正面で華凜が作り物と解る笑みを静かに湛えている。

「恋をどこにやった？」

「安心して、移動させただけ」

「我を残してか……。お前の目的は恋ではなかったのか？ それともお前の目的には我も含まれていたのか？」

「違うよ」

華凜は押し殺した声で、言う。

「本当のことをいうと、アリアさんは元々ここに連れてくる予定は無かったんだよ。けど、連れてきても大したことは出来ないと思って連れてきた。別にあたしの邪魔になるとは思わなかったから……。けど、アリアさんは今のあたしにとってすぐ邪魔なんだよ」

「……なるほど、我はお前に過大評価しているというわけか」

「うん、そうだよ。健二でさえ壊せなかった壁をアリアさんは軽く開通させてきた……。すぐく邪魔なんだよね。あたしがいくら恋ちゃんを隔離してもアリアさんの？ 力？ なら追ってこられる」

「我を先に消し、後々恋の元に向かう。ふむ、なかなか賢い方法だ。お前は頭が切れるようだな。だが、ひとつだけ誤算がある……。頭の良いお前なら言わずとも解るな？」

アリアは残骸と化した机を無造作に持ち上げ、容赦なく華凜に投げつける。華凜は、それを受け止めるように細い腕を前方に突き出し、そこに黒い霞が集う。そして黒い霞に机が触れた瞬間、爆音が

鳴り響いた。ガラスのように机の残骸は粉末状に砕け散り、アリアの身体にそれが降り注ぐ。砕いた、というよりは机そのものを消失させたのだろ。

驚異的な恒常性を備え持つアリアでも一撃で対象物を消失させる攻撃を受ければ、そこで終わりだ。

「あたしの誤算？ 教えてよ、アリアさん。あたしのどこに誤算があるの？」

だだをこねる子供のように華凜は問い詰めてくる。自分に誤算などひとつもない、そんな華凜の心中が手に取るようにアリアには解った。

確かに華凜は強い。黒い羽衣は鉄壁を誇り、膨大なエネルギーを秘める黒い霞は攻撃を無効化させると同時に対象物を跡形もなく消失させる冗談ではすまされない破壊力だ。さらに人型の《影》も召喚可能だとくれば勝算は無いに等しい。極めつけには戦いの地が華凜の絶対領域とも言える教室だということだ。恋と健二をこの場から消したように、アリアを闇に葬り去されたらひとたまりもない。が、それを実行してこないのを見ると、それは出来ない事柄か、それともなんらかの前条件が必須なのだろう。それはおそらく、後者だ。そして前条件とは華凜の詠唱に近い「唄」だろう。

つまり、華凜に謳わせなければ良い。

しかしそれは、華凜を「倒す」条件ではなくアリアが「倒されない」最低限の条件だ。たとえ唄を封じたにしても、華凜はまだまだ強力な武器を保持している。

それに対してアリアの手持ち武器は、人間離れた身体能力と操作のままならぬ『性質変化能力』ぐらいだ。？能力？は実戦に持ち込めるほど使いこなせない。そして、自慢の身体能力も、華凜の黒の羽衣に阻まれる、もしくは黒い霞かすみにより攻撃を試みた箇所が粉碎されるのだろう。

「解らぬか？ なら、教えてやろう」

アリアはバンダナを締め直し、一歩前へ出た。あくまで泰然を装

いながら、華凜との距離を狭める。

華凜に誤算などは無い。

全てはアリアのブラフだ。

「我がお前より強いということだ」

アリアは不敵に笑い、地を思い切り蹴りつけた。

ただっぴろい体育館で恋は健二とふたりきりでいた。

「あちゃー、姉貴にしているようにやられたな。これはお手上げだ」
健二の言葉も耳には入ってこない。

恋は重厚な鉄扉に背中を預け、小さく体育座りをしていた。

「愛沢あー。なんか打開策ないの？」

「……」

「姉貴に何吹き込まれたか知らんけど、あんま深く考えようとすんな」

「……」

「ああ、もう！ 女々しいな！ 悲劇のヒロイン気取っても王子様はこないんだぞ！」

「……」

「そんなはしたない座り方じゃスカートの内部が見えちゃうぞー」

「……」

「……あれだ、愛沢。俺はお前のことが好きだ」

「……意味が解りません」

恋は小さく吹き出し、ゆっくりと立ち上がった。下劣尻軽男だと思っていた健二、やはりそれは揺るぎない事実だ。しかし女好きもここまで極めれば笑ってしまう。恋は少し、ほんの少しだけ健二に好感を持つことが出来た。

「わたしは、自暴自棄になってました」

華凜は強大な能力者。いつ開花させたか解らないが、自分の？能力？を隅々まで把握している限り、そういう年季が入っているのだ

ろう。しかし恋には華凜の？能力？などどうでも良かった。問題は
何故今となり、このような非行に走ったのか、だ。

理由はともあれ、親友の嗜虐的行為をとめなければならぬ。

「ところで……健二さま。あなたは何者ですか？」

「ただの正義のヒーロー希望だ」

「今時のヒーロー希望はどのような危険極まりないナイフを携行しているのですか？」

「武器がなきゃ悪と対等に戦えないの。愛沢なんか俺より物騒なもん持ってるじゃんか」

ナイフを携える健二に対し、恋は今だ硝煙の匂いを発する機関拳銃を二丁携えている。ナイフと拳銃、比べるまでもなく拳銃を携行する女子中学生の方が奇異だ。

「わたしはいいのです」

「じゃあ、俺も良いのです」

健二の子供じみた発言に恋は頭を抱える。

——これ以上の言及は時間を無為にするだけです。

恋は健二の素性は後で詰問すると心中誓い、現状分析に取りかかった。

体育館滞留しているのは紛れもなく恋と健二のふたり。人間や、人間以外の異質な気配は微塵に感じられず、無駄に広い体育館はふたりの貸し切り状態になっている。出入り口に当たる鉄扉は物理的力以外の何かで閉鎖されているらしく開けようにも壊そうにも出来ない。

「アリアさまがこの場にいないとなると、華凜さまと同室している
と考えるのが妥当です」

「だな。なるべく速く行かなきゃ、ヤバイぜ。手遅れになんぞ」

健二は靴の裏で鉄扉を蹴り飛ばしたが、そこに傷は付かずに鐘のような重々しい音が木霊した。

「そうですね……アリアさまなら多少持ち堪えてくれるでしょうが
——」

「逆だ」

「はい？」

「姉貴が殺されないために急ぐんだよ」

今回、一般的に出回っている文庫本サイズにページ数を換算すれば24ページと17行ほどの長さです。今回の番外編を統計すると100ページほど。

それはおいといて、この回で終わると前話で宣言しましたが、ちよっとムリでした（笑）

今度で絶対終わります。終わらせます。

では、失礼しました。

other Episode 05::Dande Lion(前書き)

人によってはグロテスクと感じる表現が含まれています。

other Episode 05::Dande Lion

五感を研ぎ澄ませば、全ての動きがスローモーションに映る。

華凜が絶対無比の？能力？を備えていようが、身体は中学生そのもの……生身の肉体に一撃を浴びせれば華凜も悶絶するに違いない。勝機があるとすればそこだ。

つむじ風と化したアリアはあらゆる障害物を蹴散らしつつ華凜に一直線へと驀進した。はくしん

華凜は動かず、アリアを間合いに引き寄せる。

黒い霧が華凜の身体を羽衣はごろものように包み込んだ。だが、そんなことは関係ない。アリアは停止することなく華凜へ突進し、腹部目掛けて拳を突き出した。

全身全霊で繰り出した拳は、本来の力を開放せずにあえなく羽衣に憚れ、無力化された。はばか逡巡せずアリアは立て続けに身体を旋回させて回し蹴りを放つ。脊髓損傷は免れない蹴りを華凜は目の前にしても感情の揺らめきはなく、黒の羽衣で受け止める。わずかに体勢を崩したアリアの右手首に華凜はそっと手を伸ばした。その腕自体がひとつの生き物ようにアリアの手首をつかみ取り、一気に引き寄せて抱きついた。

「アリアさん……」

その眩きはアリアを戦慄させるに充分だった。全身が震え、まるで自分の身体ではないように硬直してしまっている。

「あたしの仲間になって」

得体の知れない恐怖。それが身体の内側で激しく暴れている。

言葉を発しようとしても口を開く動作さえ今のアリアには困難だ。ましてや華凜を突き飛ばす気力など身体中から捻出しても足りそうにない。

「恋ちゃんとどんな関係か知らないけど、そこまで献身的にならなくていいと思うよ」

黒い霧が華凛の全身から吹き出し、アリアの身体を包み込んだ。何か溶ける音と立ち込める白煙とともに強烈な痛みが襲い掛かった。消え去りそうな意識でアリアは視線を落とすと、自分の腕がじわじわと変色し始めている。指先からは爪が茶褐色……丁度土のような色合いに変色し、地に落下した。

身体が腐敗している。

この状況は打破しなければならないという焦りと思考を完全に停止したいというふたつの気持ちが錯綜するなか、アリアの視界に？土塊？に埋没する警察服がよぎった。それは抵抗せずに地獄へ身を委ねた末路なのだろう。このままでは数分も経たないうちにアリアも警察官と同じ運命を辿ることになる。

しかし、華奢な腕を引き剥がす力すら湧いてこない。

徐々に意識が朦朧となり、視界がぼやけてきた。アリアは残りある意識を総動員させて自我を保っているが、もはやそれも時間の問題だ。

——我は……ここで散るのか？

「アリアさんだって、恋ちゃんとどんなに親密でも……いつかは裏切られるんだから……」

「……………いつかは裏切られるだど？」

アリアは拳を強く握り閉めた。爪が肉に食い込み、その痛みで失いつつある現実味が、生命が、胸の中に溢れはじめた。

——我は何を諦めようとしている！

アリアにはまだ使命がある。恋に恩を返さなければならぬ。獅子に戻る方法を模索しなければならぬ。人間文化なども興味深い。なにより——もう少しだけ恋と笑い合い、助け合い、時には罵り合い……恋と幸せを共有したい。果たさなければならぬ使命を果たすまで死ぬわけにはいかない。

「お前が恋とともにどれほどの年を経て、どのように過ごしてきたかなど、我は知らない……だがな、恋は誰であろうが裏切らない人間だ！　優しい人間だ！　たとえば、本気で殺しかかってこられよう

が、他人から苛まれようが、恋は全てを受け入れる強い人間だ!」

握りしめた右拳を振り上げ、華凜目掛けて打ち下ろす。

呆気を取られた華凜はその一撃に反応することが出来なかった。

振り下ろされた拳は左肩に直撃し、左半身の組織は一瞬で死滅する。なおも勢いを失わない拳は小柄な身体を地面に叩きつけた。その余波で周りにある机の残骸は吹き飛ばされ、砂埃が捲き上がった。

仰臥する華凜は身体を小刻みに痙攣けいれんさせている。戦闘はおろか立ち上がることもすら今の華凜には不可能であろう。それだけの手応えがアリアは拳に感じ取っていた。

「恋が裏切ったのではない。お前が裏切ったのだ。恋の好意を無下にした弱いお前が裏切ったのだ」

「……違うよ」

赤く染まった髪の間隙から覗かせる瞳は恍惚な光が灯っていた。

「違う、違う、違う、違う! あたしは悪くない!」

狂乱する華凜の身体が、まるで見えない糸で引っ張られているように起き上がった。

「みんなお前が悪いんだ!」

華凜が叫びに釣られ、黒い《影》が一斉に沸きだした。地面に黒い頭部が生え、草木が生長するように頭部から上半身、上半身から下半身、そうして教室全体を埋め尽くすほどの《影》があらわれた。

「邪魔だッ!」

アリアは舌打ちし、型無しの無造作な攻撃を《影》に繰り出した。腕をひと振るいすれば《影》は数体消滅し、蹴りを繰り出せば十体近く霧散する。だが、仕留めるペースよりも圧倒的に《影》が沸き出るほうが速い。《影》個々の身体能力は大したものでもなくとも、際限なく沸き出るとなれば長期戦になるほど状況が悪化するだけだ。全ては《影》の禍根を倒せば終わる。

しかし華凜の姿は《影》たちが視界を阻み、視認することが出来ない。身を潜める作戦だろうか。

「……消えちゃえ!」

華凜のけたたましい咆哮とともに黒い衝撃波が巻き起こった。それは机の残骸はおろか味方である《影》までも飲み込み続ける。アリアの眼前にいる《影》は風化するように消滅した刹那、巨大なハンマーで殴り付けられたような衝撃が全身に襲い掛かった。170キログラム、超重量級のアリアは軽々と後方に吹っ飛ばされる。そのまま廊下を隔てる壁面に背中から叩きつけられ、アリアは血塊を吐き出した。

「お前が悪いんだあああッ！」

倒れそうになったアリアの身体は、瞬くまに襲い掛くる衝撃波に飲み込まれ壁面に叩きつけられた。

「消えちゃえッ！」

三度目の衝撃波がアリアを襲う。赤いバンダナが外れ、ヒラヒラと地に落ちた。

四度目。圧力に耐えられなくなった身体から鮮血を吹き出した。

五度目……

六度目……………

永遠とも思える衝撃波の強襲が収まり、アリアは前のめりに地面に倒れ込んだ。衣服は引き裂かれ、身体の内から破られたような傷が全身に刻まれている。それでもアリアの意識は繋ぎ止められている。必死で立ち上がろうとするが、身体が命令を無視する。

「まだ生きてるんだ。見かけによらずタフだね」

「……」

悪態のひとつでもついてやろうかとするが、それすらもままならない。アリアは口をぱくぱくさせ、血塗れの形相で華凜を睨み付けた。

——我は終わりか。

見下ろす華凜、這い蹲り瀕死の怪我を負っているアリア。そんな絶望的な状況にアリアは死を実感していた。ここでさっそうと正義の味方が登場してくれるなどという希望的観測はアリアの思考には存在しない。一瞬、恋と健二のデコボココンビが脳裏によぎったが、

それはふたりの身を案じてのことだ。

「あたしはあなたが一番キライ」

遅かれ早かれ、生ある者は平等にその命を費やす。
自分の悲観的考えにアリアは口元をほころばせた。

「じゃあね」

——すまない、恋。

最大級の衝撃とともにアリアの意識は途切れた。

無駄に広い体育館。

健二は少ない脳要領で脱出策を練っているのか、険しい表情で唸っている。

「脱出します」

セーラー服に二丁の機関拳銃姿の愛沢恋は泰然とした様子できっぱりと言った。自慢の黒髪ショートヘアも土まみれである。

「そうしたいのは山々なんだがね。出来ないのが現状なの。だいたい——」

言いかけて、健二は言葉を呑み込んだ。

恋は自分の親指を噛み千切った。ぶちりと耳障りな音を立て、瞬く間に親指は血塗れになる。その血痕を絶句する健二の顔面に問答無用で押し付けた。

健二のかわいそうな子を見るような視線が実に腹ただしいが、説明するのもおっくうもとい時間が無い。

「一応、確認です。健二さま、体重はおいくつでしょうか？」

「……ごじゅうご？」

「許容範囲内です」

恋は意識を扉の向こう側に集中させる。たとえ核爆弾に耐えられる鉄扉であろうが、恋の？能力？の前では無意味に等しい。

能力——発動。

次の瞬間、恋はコンクリートを踏んでいた。

校舎と体育館を繋ぐ渡り廊下。校舎の侵入経路である入口には重厚な鉄扉で封鎖されている。ダメもとで開けてみようと試みたが、がちがち騒がしい音を立てるだけで開きそうにはない。

しかし思った通りだ。構造は通常の学校となんら変わりもないらしい。ここは昇降口の真逆に位置する校舎裏である。

「ふう……」

とりあえず無事に扉をすり抜けられたようだ。恋は額の汗を拭い、大きく肩を落とした。自分を転移させたためかなりの体力を浪費してしまった。だが、今度は健二を引き寄せなければならぬ。

手のひらを扉にかざし、意識を再び集中させる。

能力――発動。

「アイテッ！」

音もなく空中にあらわれた健二はそのまま自由落下。尻餅をついて女々しい悲鳴を上げた。

「いてえよお……いてえよお」

「急ぎますよ」

眼前の鉄扉を乗り越えるためだけに、再び？能力？を使用するとすると戦う体力さえ尽きてしまう。恋は遠回りながらも正面昇降口を目指すことにした。

「あ………追いてくなよお！」

走り去る恋の背中を見て、健二はすぐさま立ち上がり追従する。

「落ちて着けて！ 急がば回れと言うだろ？」

「回っている猶予はありません！ それに急げとは健二さまが言ったのです」

「確かに急がなきゃならん状況だけど、姉貴がどんなこそくな罍を仕掛けているか解ったもんじゃないのも事実なんだよ。焦って俺たちが再起不能になったら元も子もないだろ？」

「ですけど――きやッ」

疾走する恋の襟首を健二は唐突に掴み我が身へと引き寄せた。

「な、なななあ！」

反論しようとした瞬間、数瞬前まで恋がいた位置に巨大な熱線が降り注いだ。闇に満ちたグラウンドは一瞬、真昼のような明るさになったが、すぐさまもとの暗闇に戻った。そして……恋が先程までいた位置に巨大なクレーターが穿たれていた。

もしわたしが健二さまに引張られていなかったら——考えるだけで戦慄してしまう。

「愛沢も女の子らしく『きゃッ』なんて言うのか……俺の好感度がぐいぐい上昇中だぜ」

「ありがとうございます……ですが、さりげなく胸に手を寄せないで下さい」

恋は機関拳銃の銃身で健二の顔面を軽く殴り付けた。軽くと言ってもその威力はあなどれない。小気味よい金属音と女々しい悲鳴が夜空に響き渡った。

「……痛いじゃないかあ」

「それより、健二さま。今の攻撃地点は補足できましたか？」

「それは——ほら、お出ました」

穿たれたクレーター。そこから這いずり出てくるように純白な手が伸びてきた。

「貞子と遊んでいる暇はないのです」

恋は別段驚きもせず淡泊に銃口をクレーターに向けた。狙いは『手』ではなくその『モノ』だ。正体不明だが華凛が差し出した罠にあることは違いない。『モノ』が顔をひよっこり出した瞬間を狙い撃ちで仕留め、手遅れになる前に全てを終わらせなければ……。

それは緩慢な動きでその身をさらけ出した。

同時に恋は機関拳銃を全自動で引き金を絞る。マシンピストルフルオート

銃声が鳴り響いた直後、緩慢だった『モノ』の動きは俊敏になり、クレーターから跳ね上がった。馬鹿げた跳躍力、『モノ』は四階作りの校舎の屋上まで浮き上がる。恋も人間離れした反射神経で目標を補足し、頭上に銃口を向けた。9ミリのゴム弾は『モノ』の至るところに当たるが、怯むことなく恋に突進してくる。

そして『モノ』が燐光し始め、落下速度が劇的に増した。

回避動作を取る猶予は……ない。だが、ここで？能力？を使えばこれからの体力は——コンマ数秒の間に恋は様々なパターンを予測した。

——出し惜しみして終われば、それこそ元も子ありません！

能力——発——

「おっと、危ない」

またしても健二がセーラー服の襟首を引っ張った。恋の眼前に光源が降り注ぎ、辺り一面を照らし出す。やがてその光も収まると、光源が落下した位置には二つ目の巨大クレータが出来上がっていた。呆然と恋はクレーターに目をやり、ひとりごちに呟いた。

「……あれはなんでしょう？」

予期せぬ事態に恋の集中力はぷつりと途切れ？能力？発動は失敗に終わっていた。

「姉貴の差し金だろうな」

「それはわかっています……それと、どさくさに紛れてお尻に手を伸ばさないで下さい」

恋は振り返り健二の両頬を銃身で挟み撃ちにした。

「一応、命の恩人なんだし、少しぐらい考慮するもんだろ。『ああ、健二さま……あなたはわたしの恩人です……未熟な身体ですが好きにしてください』までは期待してないけど、せめてワンタッチぐらいの見返りは欲しい……いや、冗談だ。気にするな。だから銃口を突きつけるのをやめんか」

「……急ぎますよ。くだらない諍いをしている暇はありません」

「……………だけど、そうもいかないらしいぜ」

健二の声音が変わったことに恋はめざとく気付いた。右手にしっかりとナイフの柄を握りしめている健二の視線にはすでに恋など眼中に含まれていない。

恋は背後に殺気を掠め取り振り向くと、巨大なクレーターの前に不思議なモノが佇んでいた。それは形こそ華凛の創り出した《影》

よりも遥かに人間の形を酷似していた。肌質も日本人らしい黄褐色、背丈は恋よりも少し高くところどころ切り裂かれた薄汚れたカーテン生地のような布だけで身体を覆っている。すらりと伸びた手足は女性的雰囲気醸し出しているが、それは人間ではなかった。

顔がない。顔も、頭髮さえ一本たりとも生えていない。

「B級ホラー映画に出てきそうな風貌です」

「とっつかまえば懸賞金でそうだな」

じり、と『モノ』はすり足で一步、近付いてきた。

「愛沢、先に行け」

「アレは……きっと冗談のような力を秘めています」

「知ってるよ。だから、先行けって」

「ですけど――」

「俺なら平気。急がないと、アリアさん、きっと今ごろ大ピンチだぜ。加えて姉貴も大ピンチ。だけど俺は目的の教室に侵入できる手段を不保持。ところがどっこい、お前はそれを持っている。オーケー？」

健二は気取った笑みを浮かべ、恋の肩を数回叩いた。

「安心せえ。3分で追いつく」

確かに健二の言い分には一理ある。ここでふたりで留まり交戦をしていればアリアと華凜が手遅れになるかもしれない。だからと言って恋がここに留まり、健二が向かうとしても鉄壁に囲まれた教室の前で立ち往生するだけだ。

ちなみに恋が危惧しているのは健二の安否ではなく、曲がりなりにも一般人の健二にこの場を一任して平気だろうかということだった。

「……わかりました」

恋は生唾を飲み込み、勢いよく走り出した。モノの横を通り抜けようとした瞬間、モノは恋を進路を阻もうと鋭敏な動きで回り込もうとするが――

「こっちだ、236Cの必殺技を喰らえ」

モノの速さを凌駕する動きで健二はモノの前に立ち塞がった。健二は寧猛な切っ先をモノの頭部に突き刺し、腹部を手加減無用で蹴りつける。

モノは数歩後退り、立ち止まった。

「ダメージ無しか、この野郎」

悪態を吐き捨て、健二は身構える。すでに恋は校舎の角を曲がり、その姿を消していた。

「来いよ、変態が」

それを合図に健二とモノが衝突した。

身体が思うように動かない。身体の内から張り裂けたような傷から溢れる血はとくに致死量に達していた。視界に入る右腕も本来なら曲がらない奇怪な方向に向いている。たとえ現代医学の粋^{すい}を集めた治療でもこの怪我には諸手を挙げるしかないだろう。

だが、瀕死の負傷を負ったアリアは不思議と悪い気分ではなかった。

身体の内から溢れる昂揚感。血の海に浸っていると感情が不思議なまでに高まってきた。

裂けた傷口から白煙が昇り、全身が異常な熱を帯びる。麻痺した三半規管も徐々に感覚を取り戻してきた。

のっそりとアリアは立ち上がる。あれだけ深い傷口は完治しており、今では傷跡の判別すらできそうにない。

「……人間じゃないの？」

アリアの眼前には痛々しく肩を押さえる少女が信じられないという表情だ。

これは誰だ？ アリアはその少女を見てふと思った。少女の表情は友好的なないところから分析すると少女と我は敵対しているのだろう。だが、どのような経緯があってこの状況に発展したのだろうか？ いや、そもそも『我』は誰だ？

思い出せない。

「粉々にしないとダメなのかな？」

苛ついた口調で呟いた少女は虚空に片手を差し出した。そうすると空中に黒い球体が構成されていく。

その球体に膨大な破壊エネルギーをアリアはひしひしと感じ取っていた。見たところによると眼前にいる少女はアリアを殺すつもりらしい。

「身体をはんぶんこすれば、さすがに立てないよね？」

少女はバレーボールほどの大きさまで膨らんだ球体をアリアの胸部に押し付ける要領で手を突き出し――

「えっ？」

当たる目前で黒い球体は文字通り霧のように霧散し、少女の糸まともな素手がアリアの胸部に触れた。

ただ、それだけだ。

「なんで……なんでよ……」

激しく狼狽する少女にアリアは無感動に蹴りつけた。今までのアリアからでは比較にならない速さの蹴りは霧の障壁を軽々と破り、少女の肝臓部位にねじ込まれる。少女は重力を失ったかのように横手の黒板に背中を叩きつけた。

蹴りつけた衝撃の余韻が足に響き渡る。少女が吹っ飛び、壊れていく姿はアリアに異様な興奮感をもたらしてくれた。少女の苦しむ表情がとても心地よい。記憶は曖昧だが、お互いに『この感覚』を求めて殺し合っているのだろう。

きつと少女を殺せば格別に気持ちいいに違いない。

アリアは『紅い』瞳で少女が悶絶する姿を見据えた。

「あっはははははははあッ！」

最高だ。少女の恐怖に満ちた表情は心の空洞を満たしてくれる。

「こないでッ！」

少女の叫びに喚びだされたのは三十前後の《影》だ。地面から生えて出たようにたちまち《影》の軍団がアリアの視界を覆い尽くし

た。

おもしろい力だ。しかしアリアにとって数など問題ではなかった。アリアは指を鳴らすと同時に三十体前後の《影》たちは頭部から蒸発するように消え去り、完全に霧散した。広がった視界が捉えたのは絶望を孕んだ少女。だが、彼女の瞳はまだ死んでいない。

「死んじゃえッ！」

少女が左腕を振るうと空気圧の変化と『未知な力』が生じ、黒い衝撃波が発生した。残骸を巻き上げ襲い来る衝撃波を不気味な笑いで見据えるアリア。今のアリアには衝撃波発生システムから少女の不思議な力まで、戦いにおける全ての仕組みを掌握していた。この衝撃波は軽い気圧の変化に少女自身が『未知な力』に一味加えたものに過ぎない。『未知な力』がなければ消しゴムすら倒せない微風で収まる。

衝撃波に飲み込まれる目前でアリアは？能力？を発動させた。

不可解な力だがあくまでそのシステムはこの世の原理に乗っ取った法則。たとえ目に見えぬ衝撃波だろうが元を辿れば原子分子で構成されている。なら、全てを単独の存在に『分解』させれば良い。先程の球体を『分解』したように。

アリアまで数センチのところで黒の衝撃波は消滅し、わずかに残った微風がブロンドヘアを靡かせた。

「……あ、ああ」

今度こそ少女の表情は絶望に歪んだ。

それはアリアにとって甘美で至福の時であった。

調理は完了した。あとは絶望したまま少女を引きちぎるだけだ。一体それはどれだけ気持ちいいことだろうか？抵抗するだけした挙げ句、それが無意味と悟った者をいたぶりつつ、じわじわと食べるのは一体どれだけ――

「き、来て！ ケンジ！」

叫びとともに空中から重々しいモノが落下してきた。そのモノは人間でもなければ生物でもなさそうだ。黄褐色の肌は日本人を彷彿

とさせるが、なにより形があまりにも不完全すぎる。両手、両足は身体から完全に分離しているうえに首もとは半分以上切り裂かれている。文字通り存在しない顔は刃物類で抉られたような傷跡があった。

そのモノは動く気配がない。生命活動は途絶えられているようだ。「……なんで……誰にやられたの……？」

アリアは涙ぐむ少女の頬を握り潰す勢いで掴み、空中に持ち上げた。アリアの片腕に少女は両手掛かりで抵抗を試みるが、十五歳たらずの少女の臂力では抵抗は無意味に等しい。

「やつ……」

一瞬、黒い霞が少女の周囲に漂ったが、すぐに霧散してしまった。「……………」

アリアは少女の頭を握り潰そうと片手に力を込める。

ぎしぎしと頭蓋骨が軋む音、少女の苦痛に嘆く声。

少女は必死に手足をばたつかせるが――木材がへし折れたような音とともに少女の抵抗がピタリと止んだ。

その瞬間、残骸だらけの教室が点滅し始めた。それは明かりの具合ではなく、空間その物が点滅し、歪んできている。残骸だらけの教室とは違った情景が、点滅するつど入れ替わりに映りだし数秒後、残骸や血など皆無の古びた教室になった。等間隔に机が配置されており、アリアの真正面にある黒板には筆記体の英語が綴られていた。不可解な状況にアリアが懊悩していると、引き戸が勢いよく開放された。

また少女だ。着衣しているセーラー服はところどころ裂けているうえ、ショートヘアまでも土まみれである。それ以上に両手に携える二丁の機関拳銃が少女の存在感を顕著にしていた。

その少女はま表情を引き締め、声を張り上げた。

「アリアさま！　そこまです！」

「……」

少女の叫びはアリアに謎の感情が呼び起こされた。郷愁を感じる

……とても心が癒される……人間をいたぶることよりも幸せに思える……不思議な感情。

しかし目の前にいる少女のことは覚えがない。いや、忘れているのだろうか。

考えれば考えるほど、答えは遠ざかっていく。頭が割れるような痛みが、心臓が裂けるような痛みが、目の前にいる少女を考えると意識が途切れそうになる。

「……ああ……ああああ……」

アリアは持ち上げていた少女を地上に落とし、両手で頭を抱え始めた。

まるで理解できない感情の起伏。

「あ………あああああああああああッ！」

アリアは咆哮を挙げた。鼓膜が破れそうな轟音が轟く。

そして、その瞳が『紅』から『緑』に遷移し、アリアの意識は闇に途切れた。

「みんなのヒーロー、望月健二の登場だい。いや、遅くなってすまん。思ったよりあのヘンタイくんがすばしっこくて、手間取っちゃまった。だが、俺の華麗なる剣舞でしゅしゅしゅと痛めつけたら見事に蒸発して全速力で駆けつけてきたんだけど……って、もう終わっちゃったか」

アリアが気を失い数分後、飄々とした健二が教室に踏み込んできた。

教室には腐臭や残骸など一切無い、普段から慣れたんでいる外装と雰囲気を取り戻していた。華凜が気を失ったことで？能力？の効果が切れたのだろうか。ここは華凜の能力下から離れた現実世界に違いない。

「健二さま………」

瞑目し、脂汗を浮かべている華凜は苦しそうに唸っている。隣に

はアリアが死んだように眠っていた。

その傍らに体育座りをする恋は裏返り気味の声で呟いた。

「ごめんなさい……華凜さまが……」

「お前の所為じゃないし、姉貴はまだ生きてるだろう。息してるし。そんな心配するな」

「……頭蓋^{ずがい}陥没^{かんぼつ}、肋骨も数本折れています。脊髓^{せきずい}損傷している可能性もあります」

「それでも生きてる」

「……」

「それより、アリアさんは——まあ、この調子だと平気なんだろうな。良かった良かった」

健二は唸る華凜の身体をお姫様のように持ち上げた。それが身体に響いたのか、華凜は大きめな声を漏らす。健二は「大丈夫だ」と耳元で優しく呟き窓側に近寄っていく。

「どちらへ行くのです？」

「……愛沢、お前が何者かなんとなく想像は出来る。だから、これから姉貴がどうなるのかもなんとなく想像出来る。こんな姉貴だけどさ、一応、大事な……姉ちゃんだからな」

「……そうです、か」

恋は顔を伏せた。

「今日起こったことは全てわたしの夢です。華凜さまの暴走も、健二さまも。わたしは夢の中まで仕事をこなすつもりは毛頭ございません。なので、わたしは今日の出来事は自分の胸の内に秘めときたいと思います。夢の戦いを上の人達に報告するほど、わたしはバカではありません。どうぞご自由に健二さま。あなたがどこに蒸発しようが、あなたの勝手です」

「そうだな……じゃあ、夢ついでにひとつ。明日っからしばらく望月姉弟は旅に出る。学校にも来なくなると思うけど、心配すんな。どこかで元気にやってるさ。あと……姉貴のこと、あんま恨まないでくれ」

顔を伏せる恋の視界に銀光が煌めくナイフが滑り込んできた。

恋は顔を上げると窓に足をかける健二が不敵に笑っていた。

「せんべつ餞別だ」

「……餞別を送る立場が逆です」

ふたりは無言で見つめ合いはにかむような笑顔を浮かべた。

「またな」

「ええ」

挨拶を交わし、健二は窓から飛び降りた。

ここは三階だが、重傷な華凜を背負って飛び降りて平気だろうかという心配はなかった。それよりあの姉弟に寄る辺があるのだろうか？ いや、それ以前に華凜を治療するには、それなりの施設があった病院で療養する必要がある。

「なるようになります。健二さまもバカではありません……たぶん、きつと……」

翌日、学校はいつもの賑わいを取り戻していた。行方不明の生徒達全員が『自宅』で発見され、学校に顔を出していた。行方不明期間の記憶は不明瞭で「目が覚めたらベッドで寝ていた」という証言がほとんどだ。

しかし生徒の大部分が喜んでいる最中、愛沢恋だけが沈鬱な気分浸っていた。三十人近くの生徒の代償に素の自分をぶつけられる親友——華凜が消えてしまった。

華凜暴動の真相は結局、闇のベールに閉じられたままだ。暴動に到った理由、？能力？の繊細。何が華凜の琴線に触れ、あのような事件が起こったのだろうか？ 恋には想像がつかなかった。

そしてもうひとり——望月健二という存在。

健二もまた華凜と一緒に蒸発してしまったひとりだ。意味深な言動、ある意味では泰然自若とした佇まい、そして素人とは思えぬ戦闘能力。まるで全てを見過ごしている傍観者のような存在だった。

結局、何も解決していない。いや、始まってもない。今回の事件は特務機関には報告せずに、胸の内だけに秘めている。稀有けうで第

二級近くの空間創造能力者——望月華凜、能力者すら定かではないが常人を遥かに超える身体能力を備えている望月健二。そして……華凜をねじ伏せたアリアの力。所属期間だけならベテランにも勝る経歴を持つ恋だが、機関を揺るがしかねない事件を報告しないなど自分自身を信じられなかった。

まるで白昼夢を見てたようだ。

ただ、健二が残してくれたナイフだけがあの事件を彷彿とさせてくれた。

そしてアリアだが、自分が華凜を撃退したことを覚えていないらしい。

替えのセーラー服に身を包む恋は帰宅後にアリアと自宅で話し合いをしていた。

「……我が華凜^{あやつ}を倒しただと？ 不甲斐ない話だが……我はあやつに意識を途切れるまでなぶられたのだ……。確かに気を失う前に一撃を負わせたが……致命傷ではなかった。気を失った我にはあやつに引導を渡すことはできん……」

そう証言するアリアに恋は曖昧に相づちを打つことではぐらかしたのだ。

見間違えるはずがない。あの時のアリアの瞳は翡翠色ではなく『紅』だった。紅玉色はアリアが自我を失い破壊者になる間の双眸だ。何かの反動で暴走状態に切り替わったアリアが、華凜をねじ伏せた——しかし、いくら暴走状態とはいえど、あの華凜を追い詰めることが可能だろうか？ それに紅い瞳になる原因は獅子から人間に変化するときにだけに見られる限定の症状ではないのか？

様々の謎が恋ひとりの中で渦巻いていた。

「それにしても……恋。お前は平気なのか？」

「……えっ？ なんのことです？」

恋は回^{リボルバー}転式拳銃の弾倉を専用ブラシで磨いている。悩みがあるときは銃器の整備をする習性がついていた。

「いや……あやつ——望月華凜は親友……なのだろう」

「そのことです、か。大丈夫……と言えちよつとした強がりになりますけど……華凜さまにもきつと事情があつたのでしよう」

「……恨んではないのか？」

「罪を憎んで人を憎まず——異国の偉人さんが言った言葉です。わたしが華凜さまを恨んだり憎むようなことはありません。それに……今回の華凜さまの暴動はわたしを決別したわけではなさそうです。ですが……今度、華凜さまと相見えるときは——」

整備が終わった回転式拳銃を恋は構え、「バーン」とイタズラっぽく言った。

「そのときは……笑顔で一発、撃たせて頂きます」

other Episode 05::Dande Lion(後書き)

番外編2回目、やっと終わりました……。疲れしました。毎回言っていると思いますが、もうめっちゃくちゃです。シリアスは半年ぐらい遠慮したいです(笑) 早く本編書きたいですよ。

というわけで本来なら次話から本編のコメディィー?なのですが……あれです。しばらく小説更新を休止したいと想います。すみません、という言葉は便宜上のため書いただけです(笑)

諸事情より、次の更新は十月ゝ辺りだと。それともちみちみ更新はやめて一気に最終話まで投稿するとか……とりあえず休載します(笑) この「ぼーかーふえいす」を気に掛けている方がいるとは思えませんが、一応、この場を借りて宣言しときます(笑)

では、失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0076b/>

ぽーかーふえいす

2010年10月9日13時25分発行